



# 目次

はじめに

來住翔太、寺田守

.....

1

## 1 小学校編

一 こんぎつね (新美南吉)

市川奈央子、片岡文、田中麻佑子、辻友葵

.....

4

二 注文の多い料理店 (宮沢賢治)

日下部真依、口石梨絵、児玉萌、清水愛美

.....

15

三 カレーライス (重松清)

井上小夜、加藤修治、中山莉麻、野田奏恵

.....

34

四 ブラツキーの話 (梨木香歩)

小山明里

.....

43

五 紅鯉 (丘修三)

寺田守

.....

52

## 2 中学校編

六 星の花が降るころに (安東みきえ)

日下部真依、口石梨絵、児玉萌、清水愛美

.....

62

七 少年の日の思い出 (ヘルマン・ヘッセ)

井上小夜、加藤修治、中山莉麻、野田奏恵

.....

73

八 タオル (重松清)

寺田守

.....

92

九 卒業ホームラン (重松清)

來住翔太、千葉大暉、溝口智大、柳井光一

.....

102

一〇 盆土産 (三浦哲郎)

梶原悠平、川村亮介、中寫一貴、村井隆人  
.....

119

一一 走れメロス (太宰治)

梶原悠平、川村亮介、中寫一貴、村井隆人  
.....

135

一二 終わりのない散歩 (石田衣良)

石田光、笹原愛、中島大輔、宮川沙和、邊見唯  
.....

145

一三 高瀬舟 (森鷗外)

小山明里  
.....

156

一四 故郷 (魯迅)

市川奈央子、片岡文、田中麻佑子、辻友葵  
.....

169

### 3 高等学校編

一五 夢十夜 (夏目漱石)

岸美位、小山明里、前原陽一、山本舞  
.....

176

一六 婪り (辻邦生)

來住翔太、千葉大暉、溝口智大、柳井光一  
.....

187

一七 城の崎にて (志賀直哉)

田中大樹、谷口唯、安福佳奈、水上志織  
.....

200

一八 舞姫 (森鷗外)

河邊建、小林大希、永安聡子、帆足憲和  
.....

208

おわりに

石田光  
.....

219

# はじめに

來住 翔太、寺田 守



『文学教材の解釈 二〇一二』は、文学教材の研究資料集の第二集である。対象とする学年は小学校から高等学校まで、全十八編の教材研究をまとめた。教材の本文から、文の意味、言葉の意味をまとめ、授業づくりの資料となることを目的とした。教材研究をするにあたり、次のような構成で作業を行った。

- 1 作者と作品について：作者の経歴、作品の背景について調べ、まとめた。
- 2 叙述：作品の叙述を、一文単位で引用し、読み取れる意味を記述した。
- 3 考察：担当者が解釈する中で抱いた主題、疑問点、人物像などを考察した。

本書の作成に当たり、重点が置かれたのが、②叙述である。一文単位で本文を引用し、その一文から読み取れる意味を抽出した。叙述の意味は、担当グループの議論を経た解釈であるが、まだ議論の余地を残すものもある。

「卒業ホームラン」（重松清）の中の一文を解釈した例をあげる。強調部分が引用である。

**打席できよとんとする智に、ダイヤモンドを一周しろとあごで伝えた。**

「一周しろ」と声に出さず「あごで伝えた」というのは、指示・指図という性格を持つ行動である。「智」のためを思っているのではなく、「ホームラン！」と言って「智」を励まそうとする「佳枝」の気持ちを気遣ったことではないか。

一方、「佳枝」の気持ちを気遣うというよりは、「佳枝」が「智」を気遣ったように、「徹夫」にもその「智」への気遣いがあったと考えることもできる。

この部分において、担当グループでは、「佳枝」を気遣う「徹夫」の発言だという考えだった。しかし、他のグループとの議論の中で、後者の意見も出され、納得したため、双方記載した。この議論において、読者による解釈の多様性を認識し、さらに、ここでの解釈はあくまで「客観性を

意識した主観的内容」であるということも確認した。その他の文の解釈についても、記載した解釈以外の可能性も残すものとなっている。

とはいえ、担当者が詳細に考察した各章は、授業を展開するうえで読み落としてしまいかねない内容について熟考されている。冒頭にも述べたように、授業をつくるに当たり、本書を用いることにより、よりタフな読解を児童・生徒と行っていくことができる。

言葉を指差し、そこから意味を紡ぎ出すことで解釈は豊かになっていく。そうした言葉の意味を紡ぎ出すために、四つの解釈のコツを本書では用いた。

**a. 言葉の削除による意味の変化（この言葉があるのとないのでは、意味がどのように変わりますか。）**

言葉を削除してみても、その言葉があるのとないのでは一文の意味がどのように変化するかを考える。また、その言葉を使った例文を考えてみて意味を考える。例えば「ごんぎつね」の末尾に「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」という文がある。ここで「まだ」という言葉に注目したい。「まだ」「もう」「なんか」「だろう」「ね」といった言葉は、話者の判断や心的態度が現れる表現である。青いけむりが「まだ」出ていたのだから、話者はけむりがもう出ていないと思っていた。それくらい長い時間がたったように思われた。ところが見てみると、「まだ」けむりが出ていた。長い時間がたったように思われたが、実際にはわずかな時間しか流れていないことに気がついた、という意味が「まだ」という言葉からわかる。「まだ」とか「もう」といった副詞などの言葉には、言葉の削除は有効である。が、助詞や動詞など、削除してしまうと構文が壊れてしまう言葉まで削除することはできない。そこで第二のコツが必要となる。

**b. 類義語への置き換えによる意味の変化（AとBとでは意味がどのように変わりますか。）**

類義語を読者が持ち込み、言葉を置き換えて比較することで、二つの文の意味の違いを考える。文の意味が違うということは、置き換えた言葉の意味が違うということである。例えば、「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」と「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ました。」のように、「出ていました」と「出ました」とを比較する。「出ました」だと、たまたま目をやった時に青いけむりが出たということになるが、「出ていました」だと、見ていない間にもけむりは絶えず立ち上っていたことがわかる。辞書作りなどで用いられる意味論の方法である。

解釈には想像力が働くし、また必要でもある。想像とは状況を補って理解するということである。読むという行為は、言葉を正確に読み取ることに加えて、積極的に読者が想像力を働かせて参与する営みだと言える。そこで第三のコツが必要となってくる。

**c. 動作化・映像化による意味理解（今ここでしてみたらん。どういう光景か思い浮かべてもらん。）**

例えば、「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。」とある所で、私たちは、ごんと兵十、加助との距離は何メートルだろうか、と想像する。

時間にもよるが、二、三メートルくらいだろうか。想像してみることで、月のいい晩だから、影もくつきりと映っていたらう、踏んでいる影は、きつと兵十の頭の部分だろう、加助の影ではなくて、兵十の影を踏んでいるのだから、兵十にとっても関心があるのだろう、といったことがわかる。こういった解釈法は、演劇的手法を用いて解釈する方法や、〈見え〉先行方略として知られている。

動作化・映像化は読者の経験に依存する。本文と似た状況の経験を想起することで、書かれていない情報を補うことができる。そこで最後のコツが必要となる。

**d. 自分の経験との関連づけによる意味づけ（これと似た経験はありますか。）**

「いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。」という一文がある。実際にうなぎをつかんだ経験を思い出してみると、うなぎの表面がぬるぬるしている上に、うなぎも逃げようとうねうねと暴れるので、掴みにくい。力を入れればいれるほど、うなぎがすりりと抜けていく、という状況が思い出される。思い出す経験は、直接体験だけでなく似たような物語を知っている、といった間接体験でもよい。こうした経験との関連づけは、間テクスト性を発見する原動力となる。

本書は、京都教育大学教育学部の平成二十三年度・二十四年度演習科目「国語科教育演習c」受講者の成果をまとめたものである。明らかな誤りは寺田が修正したが、不備も多く、既述のように誤謬や不確かな解釈も残されている。御批正を仰いで、改善していきたい。本書が、国語科教育の糧となれば幸いである。

なお、第一集は左記のホームページでも公開している。こちらも参照して頂ければ幸いである。

<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/terada/bungaku.pdf>

# 「ごんぎつね」(新美南吉)

市川 奈央子、片岡 文、田中 麻佑子、辻 友葵



## 一 作者と作品について

新美南吉(一九一三―一九四三年)は半田町(現・愛知県半田市)が生んだ童話作家である。本名は渡邊正八といい、四歳で母りゑを亡くし、八歳のときに母の実家に養子に出された。新美の姓は母方の姓である。ペンネームに「新美」を用いたことは若くして逝った母親への気持ちの表れではないか、と考えられる。

半田中学の頃から文学に興味を持ち、地元で代用教員をしながら童話や詩の創作を続け、雑誌『赤い鳥』に投稿した。その後東京外国語学校に進み、北原白秋や巽聖歌などに師事して文学修行に励んだ。卒業後、喀血の為帰郷し、女学校教師を勤めながら童話の他たくさんの詩や小説も書いた。しかしこの間にも病氣(結核)は進み、昭和一八年二九歳七ヶ月の若さで世を去った。新美南吉が東京外国語学校を卒業したころは戦時下であり、当時南吉は児童文学に関わるごく限られた人々に認められていたにすぎなかった。彼が再評価されるようになったのは、彼の死後十五年を経た一九六〇年代に入ってからのことである。

代表作として、教科書に掲載されている「ごんぎつね」「手袋を買いに」「おぢいさんのランプ」などがある。

短編童話である「ごんぎつね」は、作者の初期の代表作で、一九三

二年(昭和七年)の『赤い鳥』一月号に掲載された。作者の出身地である愛知県の地名が使われていて、権現山を舞台に書かれたと言われている。筆者が村の老人から聞いた話という体裁をとっている物語である。「城」「お殿様」「お歯黒」という言葉が出てくることから、江戸時代から明治ごろが舞台となっている。

「ごんぎつね」は小学校国語科教科書教材の定番とも言える作品である。もともとは一九五六年大日本図書国語科教科書に採用されたのが最初である。その後、次々と各社の国語科教育の教材として掲載されるようになる。多くの教科書に掲載されているため、「ごんぎつね」を知らない人はいないと言っても過言ではない。長年読み語られ続けている名作であると言える。

## 二 叙述について

これは、わたしが小さい時に、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。



「わたし」が「小さい時」に、「おじいさん」から聞いた話であるので、かなり昔の話であると想像できる。また、この「ごん」と「兵十」の話は様々なところで語り継がれている話であるとも考えられる。

ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。

「ひとりぼっち」とあることから家族がないことがわかる。ごんは、寂しい思いをしながら暮らしているのではないか。「小ぎつね」とあるが、どのくらいの大きさ、幼さか。「手袋を買いに」に出てくる子ぎつねよりは、成長しているきつねのようにも感じられる。

そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

「夜でも昼でも辺りの村へ出てきて」いるということから、穴に一日中もっていることはない。ひとりぼっちの「ごん」がいたずらをするのは、誰かに構ってほしいからだと思像できる。さみしがりやだということがわかる。

二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。

「座っていました」ではなく「しゃがんでいました」とあることで、ごんは、平然としていたわけではなく、ちぢこまって孤独に耐えていたのではないか。

雨が上がると、ごんは、ほっとしてあなからはい出ました。

「ごん」が「ほっと」したのは、雨が止んで、やっと外に出られる

という安心感のためである。しかし、私たちは、「ごん」はやっといたずらができる、ということに対する安心感から「ほっと」したのではないか、とも考える。なぜなら、「ごん」はひとりぼっちであるがゆえに、何か(いたずら)をしていないと不安な気持ちになるのではないかと想像されるためである。「ごん」にとって、いたずらは自己表現の手段であり、いたずらをする事で、自分の存在を確認しているのではないだろうか。

また、「はい出ました」とあることから穴の出入り口はそれ程広いわけではない。

空はからっと晴れていて、もずの声がきんきんひびいていました。

「からっと」とあるので、乾燥していて、天気の良い秋晴れ。もず(百舌鳥)のギチギチという声突きぬけるように響き渡っている。

ごんは、見つからないように、そうと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとぞいてみました。

「そっと」ではなく、「そうと」となっている。「そうと」のほうが、ごんが周りに注意を払い、警戒しながらのぞいている感じが伝わる。

「兵十だな。」と、ごんは思いました。

一目見ただけで、その人物が「兵十」であることわかることから、「ごん」はこの村のことを良く知っている。村の人間のこととも名前まで把握しており、かなり詳しいことがわかる。



兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。

「ごみといっしょにぶちこみました。」という表現から、売り物にするために魚を取っている可能性は低いと考えられる。

兵十がいなくなると、ごんはびよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。

「びよい」という表現から、「ごん」が小さく跳ねるようにして草陰から出てくる様子が想像できる。

ちよいと、いたずらがしたくなったのです。

「ごん」はいたずらばかりするきつねである。雨が降り続けたため二、三日穴から出られなかった「ごん」はいたずらがしたくてしようがなかった。「ちよいと」から、「ごん」の軽いつたずら心が読み取れる。

ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぼんぼん投げこみました。

「びくの中の魚をつかみ出しては」の「は」があることで、「ごん」が魚をつかみ出して川に投げ込むという動作を繰り返したことが分かる。

「ごん」は、決して魚を食べたいわけではなく、単に川に投げ込み、「兵十」の努力をむだにしたいだけである。「ごん」は、軽く



いたずらしようとだけ考えている。

「ぼんぼん」という表現から、びくの中には魚がたくさんいたことがわかる。また、「ぼんぼん」という軽快な擬態語から、「ごん」には「兵十」がとった魚たちを逃がしてしまうことに全く罪悪感を感じておらず、ためらいがないことが分かる。

どの魚も、「とぼん」と音をたてながら、にごった水の中へもぐりこみました。

「とぼん」よりも「とぼん」の方が、軽く聞こえる。文中には、「太いうなぎ」や「大きなきす」という描写があるが、魚が着水する音からは、それほど魚は大きくないようだ。

ごんは、そのまま、横とびにとび出して、一生けんめいに、にげてきました。

村でよくいたずらをする「ごん」だが、兵十から必死に逃げていることから、人間に捕まったらいけないということを分かっている。「横とびに」とあるので、「ごん」は体勢を整える暇もない程、大急ぎで慌てふためいて逃げたことが想像できる。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、あなの外の、草の上に載せておきました。

逃げている途中、うなぎを外す余裕がないほど必死だった。うなぎを「すてる」のではなくて「のせておいた」のはなぜだろうか。

なぜ、「ごん」はそのうなぎを食べないのか。「兵十」から逃げてほらあなの近くまで行くことができたなら、落ち着いてそのうなぎを食

べることも可能ではないか。

こんなことを考えながらやってきましたと、いつのまにか、表の赤い顔のある、兵十のうちの前へ来ました。

「いつのまにか」とあることから、兵十の家の前に来たのは偶然で、「ごん」は兵十の家に行くつもりなどはなかったのではないか。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

「兵十のうちのだれか死んだんだろう。」ではない。「か」ではなく、「が」であることで、「ごん」が兵十に対して、興味を持っていることが強調されている。

ごんはのび上がって見ました。

葬式での「兵十」の様子が気になっている。

いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ごん」は「兵十」のいつもの顔を知っているということが分かる。普段は、さつまいもみたいな元気のある顔をしているが、今日は赤黒い表情で元気のない様子が読み取れる。また、「なんだか」という表現から、なぜ「兵十」の顔がしおれているのかは、ごんには分からない。

「ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

「ちよっ」や「あんな」ということから、自分のいたずらが、くだらないことだったと心底後悔している。「兵十」の母親が亡くなったと

分かった瞬間に後悔の念が押し寄せている。冒頭に「ひとりぼっちの小ぎつね」とあるので、自分の母親に対する思いと重ね合わせているのかもしれない。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

「兵十」と「ごん」は母親がいない、という点で同じ境遇にある。「ごん」に母親がいない理由は、本文には書かれていないが、母親がいないことで「ごん」が寂しい思いをしていることは読み取れる。

また、「ごん」の一人称が「わし」から「おれ」に変わっている。人間にとっては場面によって一人称を変えることはあるが、きつねである「ごん」が一人称を変えるところはあまりないと思われる。なぜ一人称が変わったのだろうか。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしました。

「ごん」がいたずら以外で、快感、達成感を覚えた場面ではないだろうか。「まず一つ」ということは、これでうなぎのつぐないを終わらせるつもりではなく、まだ何かしようと思っている。しかし、ここでは「兵十」の反応を見ておらず、自己満足で終わってしまった。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいたんだろう。おかげで、おれは、ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどいめにあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。

「いわしなんか」「ぶつぶつ」から不平・不満といった、ネガティブな気持ちがよく表れている。

「ごんは、「これはしまった。」と思いました。

いわし売りからいわしを取ったのは、「兵十」への申し訳ない気持ちゆえの行動だった。いたずらする時のように、悪意があったのではない。「兵十」の独り言を聞き、この時初めて自分の行動が逆に「兵十」に迷惑をかけるものであったことに気付く。

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに、くりや松たけなんかを、毎日毎日、くれるんだよ。」

不思議に思っている。しかし、いわしの時と違って「くれる」という表現から嫌な気持ちではないことがわかる。

また、「いわしなんか」と「くりや松たけなんか」では意味が違う。「なんか」には様々な意味があると、私たちは考える。「なんか」を使った例文をいくつか挙げる。

① ヴイトンの財布なんかいただけません。

② ヴイトンの財布なんかいらぬ。

③ 私なんかにはもつたない。

④ ヴイトンやエルメスなんかの鞆がほしい。

「いわしなんか」の「なんか」は例文②に似た、ネガティブな意味を持つ。「くりや松たけなんか」の「なんか」については、議論となったが、私たちは例文④に似た、「くなど」という意味を持つのではないかと考える。

「ぶうん、だれが?」

「兵十」が相談しているのに対して「加助」はあまり関心がなさそ

うである。前の兵十のセリフに「だれだか知らんが」といつているのに「だれが?」と言っているの、あまり話を聞いていなかったこともわかる。

ごんは、「お念仏があるんだな。」と思いながら、いどのそばにしゃがんでいました。

「兵十」と「加助」の会話が気になって、二人が出てくるのを待っている。他の箇所にも「しゃがんで」という描写があるが、ここでの「しゃがんで」からは、「ごん」の心細さではなく、単に身を潜めている「ごん」の様子が想像できる。

兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

かげぼうしとは、光が当たって、障子や地上などに映る人の影のこと。今は夜なので、かなり月の光が明ることがわかる。「ごん」は、「兵十」の影をふんでいるのだから、ずいぶんと「兵十」たちと距離が近いと思われる。今までは物置や草や六地藏に隠れていたが、この場面では、「ごん」は何にも隠れていない。「兵十」にくりなどを毎日あげることによって「兵十」に対して親近感がわき、警戒心がとかれたのか。

「ふみふみ」と書いてあることから、「ごん」は二人の会話に興味はあるものの、少し退屈しながら、後をつけているとも考えられる。

「さっきの話は、きつと、そりやあ、神様のしわざだぞ。」

さきほどあまり関心を持っていなさそうだったのに、実はずっと考えていて、しかもだいたい時間がたってから唐突に切り出すという、「加

助」の個性的なキャラが出ている。「しわざだぞ。」と断言しているのも面白い。

「ごんは、へえ、ごんはつまらないな。」と思いました。

「兵十」に対する申し訳なさから、毎日栗やまつたけを捨てているが、それと同時に、栗をあげているのは自分だと知ってほしいという気持ちも強くなる。誰かにかまってほしい、自分の存在に気付いてほしい、という「ごん」の気持ちがよく現れている。

「おれが、くりや松たけをもつて行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃないか、おれは、ひきあわれないなあ。」

「持っていくってやる」という表現から「ごん」が「兵十」に「やってあげている」という思いを少なからず持っていると思われる。また、「ごん」はばれないようにくりや松たけを届けているわけだから、本当にお礼が欲しいとは思っていない。ただ、自分がやっていることなのに、他人（この場合、神様）に感謝しているということが腑に落ちていない。「ごん」は心のどこかで、「兵十」に、自分の存在に気付いてほしいと思っているのではないだろうか。「ごん」にとっては、くりや松たけを兵十に届けることは、すでにお詫びやつくぐないではなく、親近感の湧いた「兵十」に届けるという習慣になっているのではないか。

それで、ごんは、うちの裏口から、こっそり中へ入りました。

「兵十」に見つからないように、足音を立てずに「こっそり」裏口を使っている。前の部分で、「おれにはお礼を言わないで、神様に…」と思っているが、やはり自分があげているということを知られたくない。

い、知られてはいけないと思っている。

こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつめが、またいたずらをして来たな。

「兵十」は「ごん」に対してごんぎつね「め」と思っている。「め」は憎らしい相手につけるものである。つまり、「兵十」は「ごん」のことを覚えており、憎いと思っている。

どうして、「ごん」の中にはないのか。「ごん」から出ていることで、とっさの感情を表しているのか。

「ようし。」

「ようし。」には、これからの行動に対する意気込みや、「やってやるよ。」という気持ちが込められる。

ここでは、魚を盗られたことに対する復讐の気持ちや、こらしめてやるよという気持ちが含まれている。

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

物語のクライマックスでの「兵十」のこのことばはとても印象に残る。倒置法であることも、印象を強くさせる。「ごん」が栗をくれた、という事実を驚いている「兵十」の様子が読み取れる。

今まで「兵十」は「ごん」を「ぬすとぎつね」や「ごんぎつね」など「ぎつね」としかとらえていなかったが、ここでは「ごん」という名前ですんでいる。また、なぜ「兵十」は、「ごん」の名前を知っているのか。もしかすると、この村ではよくいたずらをする「ごん」をみんな知っていて、村の人たちが「ごん」と呼んでいたのかもしれない。

それで、「兵十」は「ごん」に対して憎いという気持ちが消え去った今「ごん」と呼んだのだろうか。

兵十は、火なわじゆうをばたりと、とり落としました。

「そっと」などではなく「ばたりと」から、驚きが表れている。

青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。

細く出ている青い煙が、「ごん」の命を表現しているように感じられる。つつ口から出ている煙がいずれは消えるように、かろうじて細く繋がっている「ごん」の命も、間もなく消えてしまうであろうことが想像できる描写になっている。また、「ごん」を撃ってしまったことを後悔する、力ない「兵十」の様子が分かる。

### 三 考察

#### (一) 物語の語り手・視点の変化

物語は、「これは、わたしが小さい時に、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。」という一文から始まっている。ここでの物語の語り手は「わたし」であり、作品の中だけに存在する人物である。この「わたし」は、「わたしが小さい時に」とあることから、今は、ある一定の年齢に達していて、この物語の語り手としての役割を果たすものとして南吉が設定した人物でもある。

では、「わたし」は一体誰に向かってこの物語を語っているのだろうか。語りの構造を図式化したものが図1である。まず、「ごんぎつね」という悲劇の物語は、かつて茂平という老人によって語られていたも

のであり、かつての「わたし」は多くの聞き手のうちの一人として存在していた。その「わたし」が成長し、今度は物語の語り手となり、それに対する聞き手も存在する。その様子を私たち読者が、読んでいくことになる。

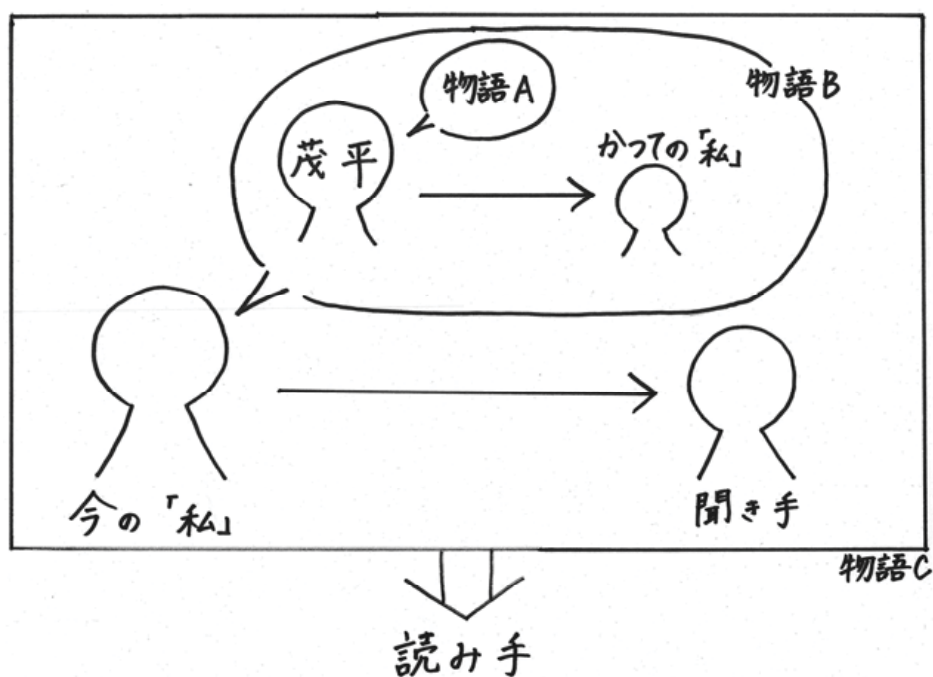


図1 「ごんぎつね」の語りの構造

では、なぜ南吉はこのような複雑な構造を物語に組み込んだのか。別段、このような構造がなくとも、話の内容を理解するのに困ることはない。それに加え、一文目が出てきた「わたし」は、この作品から早々に退いてしまっていて、その後作品に直接登場することはない。初めは「わたし」の語る内容が作品を構成しているが、作品の三段落目以降からは、「ごんぎつね」の話は、茂平によって語られた物語Aによってだけで、いわば自立的に展開しているのである。そう考えると、まずまず、なぜ物語の最初の一文が必要だったのか、と疑問に感じられる。この一文があることで、読者にどのような影響が及ぶのであるか。この一文があり、複雑な構造が物語に組み込まれていることで、読み手を作品の深い所まで引き込むねらいがあるのではないかと考えられる。読者は「ごんぎつね」の物語Aに達するまでに、「わたし」の話を書く「聞き手」になり、さらに茂平の話を書いた「かつての私」の立場になる必要がある。読者は、語り手に導かれるようにして物語に入り込んでいくことになるのである。また、『「ごんぎつね」をめぐる謎』（府川源一郎）の文中で、府川氏は「自らを作品世界の入り口に立たせてみるところに、虚構体験としての文学体験へと読み手が踏み出す第一段階がある。」と述べている。

読み手が他者の視点に立って物語に入り込んでいくことで、物語に疑似的に参加することが可能となる。このような複雑な構造が組み敷かれていたのは、読み手を深く物語に引き込むねらいがあるのではないかと考えられる。

また、物語の視点の変化にも気になることがいくつもある。「ごんぎつね」は基本的に三人称の視点から描かれている。第一場面から第五場面が「ごん」の視点で書かれており、主に「ごん」の心情が描写さ

れている。しかし、第六場面の「その時、兵十は、ふと顔を上げました。」からは、兵十の視点で書かれている部分が出てくる。この視点の変化から、「ごん」の兵十に対する思いや、「ごん」の行動の真意を知って変化する兵十の気持ちを描写されるようになるのである。しかし、その後に出てくる、「兵十はかけよってきました。」という描写は、「ごん」の視点から書かれたものである。なぜ、「兵十はかけよりました。」ではないのか。なぜこの部分だけ、物語の視点が兵十の視点から「ごん」の視点へ転換したのか。「兵十に撃たれてしまったけれど、これで自分の気持ち兵十に伝わる。」という「ごん」の気持ちを表現するという効果があるかもしれない。しかし、依然疑問が残る点であり、「ごんぎつね」を指導する上で、文がどの視点から書かれているのかを教師が考え、理解しておくことの大切さを感じた。

## (二)「ごん」がいたずらをする理由

「ごん」がなぜいたずらをするのか疑問に感じたのは、兵十の獲ったうなぎを「ごん」が食べなかったことに違和感を覚えたためである。キツネは肉食に近い雑食性であり、鳥やウナギ、小動物や昆虫を主に食べる。とすると、「ごん」がうなぎを食べることは十分に考えられることであり、逆に、なぜうなぎを食べないのか、という疑問が生じる。兵十がうなぎを獲るのは、単なる暇つぶしではなく、生活をかけた行動である。しかし、それに反して「ごん」はそのうなぎを食べようとしなない。つまり、「ごん」にとつては、ちよつとしたきまぐれやいたずらなのである。そのことは、うなぎを食べないこと、そして、首に巻き付いたうなぎを、自分の生活空間である「あな」に持ち込まず、「あな」の外の草の葉の上のせておいたことから分かる。

「ごん」はいたずらを、肉体的・生理的欲求を満たすためのものは考えていないことが分かる。そうすると、いたずらは何の欲求を満たすためのものなのであろうか。「ごん」は村人の生活に関わりたい願望を強く抱いているのではないかと考えられる。ひとりぼっちの寂しさを紛らわしたいという精神的欲求を満たすためにいたずらをしていのではないか。

「あな」は「ごん」にとって安全な生活空間であると言える。しかし、「ごん」は食欲などの生理的欲求以外で頻繁に「あな」から出る。つまり、肉体的・生理的欲求よりも、寂しいという精神的欲求が勝っていると考えられる。

「ごん」がいたずらする理由を、仮に、寂しさを紛らわし、精神的欲求を満たすためのものであると考えたと、なぜ、「ごん」はひとりぼっちなのか、なぜ母親が存在しないのか、という疑問を抱くようになった。その点については、(三)で考察をする。

### (三) 南吉の作品における母親の存在

「ごん」がいたずらをする理由を考えると、なぜ「ごん」に母親がないのか、疑問に思うようになった。また、南吉の他の作品を見ても、母親が大きく関わっているものが沢山ある。その代表的なものが、同じく教科書教材となっている「手袋を買いに」である。ここでは、南吉の作品における母親の存在について考えてみたい。

南吉は、四歳の時に生母と死別し、孤独な幼少期を過ごしている。生母と死別した後は、生母方の実家へ養子に出されるが、結局は生まれた家に戻ってくる、という波乱に満ちた人生を送っている。この南吉の経験から、南吉の作品を北吉郎氏は『新美南吉童話の本質と世界』

において次のように述べている。

生来の性向もあつてか、(他者との結びつき)における極度の「障害」——対話により共感を育み、交流することが困難である——が形成される。そうした対人関係における深刻な「障壁」を、既に幼少年時代において抱え、思春期や青年期を生きていくことになる。幼少年期からの、未だ満たされずにきた、(他者との結びつき)における最大の空白(すなわち飢餓感)——(失われた母の愛)のむくもりや安らぎ感——は、生存自体さえ危機に陥れるほどの欠落感(「寂しさ」として(絶えず無意識層から噴き出してきて)南吉を遅い、空想世界での(母恋い)童話として文学作品上に実現されていった。

このことから分かるように、南吉は母親からの愛情に満たされない幼少期を過ごし、その経験が、作品に色濃く反映されている。南吉の作品の多くに、悲劇性が含まれるのもその為ではないかと考えられる。

「ごん」に母親がおらず一人ぼっちだったという状況は、南吉自身の経験と一致する部分が多い。「ごん」のいたずらを、寂しさを紛らわしたいという精神的欲求を満たすためのものであると考えたならば、南吉自身の気持ちを想像するのも難くない。

また「ごんぎつね」においては「ごん」だけではなく、兵十も母親を亡くし、一人ぼっちになっている。この作品には「一人ぼっち」である登場人物が二人(一人と一匹)も登場する。南吉が彼自身を照らし合わせているのは、「ごん」であるかもしれないし、兵十であるかもしれない。「ごん」と兵十のどちらにも彼自身を照らし合わせていると

も考えられる。

「ごんぎつね」において、「ごん」の母親に対する感情が最も現れているのは、「兵十のおっかあは、どこについていてくちよつ、あんないたずらをしなけりやよかった。」という部分ではないか、と考える。しかし、ここで、「本当に兵十は母親に食べさせるために、うなぎを獲っていたのか。」という疑問が生じる。本文中のどこにも、兵十が何の為にうなぎを獲っていたのか書かれていないし、ましてや、兵十の母親が亡くなるまで、「母親」ということばは作品中では大きな意味を持っていない。傍線部はあくまで「ごん」の想像にすぎず、事実であるかどうかは分からない。つまり「曖昧」であると言える。(「ごんぎつね」における曖昧さについては(四)でも述べる。)また「ごん」のいたずらが直接的に兵十の母親の死に関係したという証拠はないにも関わらず「ごん」は「うなぎのつぐない」を自発的に始める。何気なく読めば、流れていく部分ではあるかもしれないが、じっくり読めば、不自然な部分があることはよく分かる。ここにも、南吉の母親に対する想いが濃く反映されているのではないだろうか。傍線部が読者にとって不自然である話の展開であるということに、南吉が気付いていないとするならば、なおさらである。

こうした南吉における母親の問題を北吉郎氏は、南吉の初期・中期・後期の各期を代表するきつねの物語である「ごんぎつね」↓「手袋を買いに」↓「狐」で考えている。「ごんぎつね」では、生身の母親は登場せず、一人ぼっちの主人公の心理や行動に記憶の中の母親が深く関わっている。これは、南吉自身の体験に最も近い形で、南吉の心理が作品に反映されているとも考えられる。次に、「手袋を買いに」では、生身の母親が子と共に登場するが、生きている母親を描いた時に、南

吉の中で限界が生じている、と北氏は述べている。そして、南吉が死を目前にして書いた「狐」では、生身の母親が登場し、理想的な母親を具現化させている。

このように、南吉の作品における母親の像は、変化してはいるものの、共通して作者自身の経験や想い、願望が作品に反映されていることが分かる。

#### (四) 「ごんぎつね」における曖昧さ

「ごんぎつね」の話の展開のなかで、曖昧であると感じる部分がいくつかある。(三)で述べた、ごんが考えるように、兵十は母親のためうなぎを獲っていたのか、という点もいくつかある曖昧さのうちの一つである。

他にも、「小ぎつね」とあるが、どのくらいの大きさ、幼さか、ということや、兵十のごんへの憎しみの程度はどれほどか、最後は本当にごんの気持ち兵十に伝わったのか、ごんは最後に死んでしまったのかなど、本文に直接書かれていないことが沢山ある。

「小ぎつね」については、①幼い子どものきつねであるという解釈もあるが、②小さい大人のきつねであるとも解釈できる。どちらの解釈をするかによって、作品自体に対する印象も変わるのではないか。つまり、作品に込められた、南吉が抱く母親に対する想いの受け取り方も変わってくるかもしれない。また、①で解釈するとして、幼いといってもどのくらい幼いのか、と考えることもできる。「手袋を買いに」に出てくる子ぎつねと比べてどうだろうか。「手袋を買いに」にでてくる子ぎつねより「ごん」の方が成長しているのではないかと考えられるが、読み手によってその解釈やイメージも変わるだろう。ただ、「手



袋を買いに」では、「子どものきつね」とあるので、「ごんぎつね」では②の解釈の方が適当ではないか、とも考えられる。

このように、「ごんぎつね」には曖昧さが多く含まれていること分かる。曖昧が多いために、解釈のバリエーションも増え、作品から感じることも読み手によって異なるのではないだろうか。

### (五)なぜ「ごん」は兵十に撃たれなければいけなかったのか。

小学生だった時に、私(担当者)は「ごんぎつね」を読み、とても悲しい物語だと感じたことを今でも鮮明に覚えている。他の小学校国語教科書の教材を見てみると、動物が出てくる作品の多くは、人間と動物が心を通わず、といったような心温まる話が多いように感じられる。しかし、この「ごんぎつね」では、「ごん」が兵十に誤解され、撃たれてしまう。所謂ハッピーエンドではない。

府川源一郎氏は、南吉を「人と人とのかわりの問題とその亀裂を見つめ続けた作家でもある。」としている。対人関係における障害を抱えていた南吉は、人間観察の結果、人間背信とも言わなければならない作品を多く残したというのである。南吉の作品の登場人物の多くは、人と人との強いつながりを求めるが、最終的にはその願望が叶わない。

「ごん」は兵十とのつながりを求め、接近するが、最終的には兵十に撃たれてしまう。「ごん」は自らを犠牲にし、想いは兵十に伝わったように思われるが、決してハッピーエンドではないのである。南吉の作品には、人間懐疑のメッセージが含まれているように思えてならない。『手袋を買いに』でも、無事に帰ってきた子ぎつねを前にして、母ぎつねは「本当に人間はいいものかしら」とつぶやいている。

南吉は作品に人間懐疑のメッセージを含ませることで、他者と心を

通わすことの難しさを伝えたかったのかもしれない。

### 参考文献

北吉郎、『新美南吉童話の本質と世界』、双文社、二〇〇二年  
府川源一郎、『「ごんぎつね」をめぐる謎』、教育出版、二〇〇〇年



# 注文の多い料理店 (宮沢賢治)

日下部 真依、口石 梨絵、児玉 萌、清水 愛美



## 一 作者と作品について

宮沢賢治は一八九六年八月二十七日(戸籍上は八月一日)に岩手県に生まれた。父政次郎と母イチとの間に長男として生まれ、四人の弟妹と育った。一九〇三年尋常高等小学校に進学し、一九〇九年には、旧制盛岡中学校に進学した。家庭の方針としてこれ以上の進学は難しかったが、親の許しをもらい盛岡高等農林学校に進学した。二十歳の時に妙法蓮華経と出会った賢治は、強く感銘を受け、篤く信仰するようになり、後の彼の思想や行動に大きな影響を与えた。卒業後、上京したが、妹トシの発病のため、岩手に帰り、看病をしながら花巻農学校で教師として働いた。一九二二年にトシが病氣のため亡くなる。「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」と呼びかけており、賢治にとつて一番の理解者であったトシの死は、賢治に大きな悲しみを与えた。一九二四年四月、詩集『春と修羅』を自費出版し、一月に『注文の多い料理店』を出版した。しかし当時は、一部の人々が、世紀を抜いた詩人と称賛した他は、死後に至るまでほとんど世間から顧みられなかった。一九二六年に農学校を退職後、農業指導に奔走するが過労から病氣になり、療養生活を送る。その後一旦は回復に向かったが、再び病に倒れる。手帳に「雨ニモマケズ」を書きとめたのはこの年の一月であった。一九三三年急性肺炎で死去。享年三七歳だった。

宮沢賢治の童話としては、「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」、「どんぐりと山猫」、「よだかの星」などがある。「注文多い料理店」は童話集『注文の多い料理店』におさめられている短編の一つである。

## 『注文の多い料理店』

発行者 近森善一  
 刊行者 及川四郎(光原社主)  
 発行日 大正一三年一二月一日

## 目次

どんぐりと山猫	一九二一・九・一九
狼森と笹森、盗森	一九二一・一一・〇
注文の多い料理店	一九二一・一一・一〇
鳥の北斗七星	一九二一・一二・二一
水仙月の四日	一九二二・一・一九
山男の四月	一九二二・四・七
かしはばやしの子	一九二二・八・二五
月夜のでんしんばしら	一九二二・九・一四
鹿踊りにはじまり	一九二二・九・一五

定価 一円六十銭

この童話集には「序」がつけられており、これらの童話は宮沢が日

常の中で「どうしてもこんなことがあるやうでしかたない」ように感じたことをありのままに書いたものであるとしている。

宮沢は『注文の多い料理店』の解説においても同じようなことを述べており、彼の故郷である岩手県を舞台に描いているということ、「卑怯な成人たち」ではなく、「純真な心意の所有者たち」に向けた物語であるということを加えている。

さらに童話「注文の多い料理店」の解説においては、

二人の青年紳士が猟に出て道を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却って注文されてゐたはなし。糧に乏しい村の子どもが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感で

と書いている。命を代用品のように扱う紳士が、却って山の化け物に食われようとしてしまうという物語から考えても、宮沢の都会、または階級に対する幼いころからの思いを読み取ることができるのではないだろうか。

#### 参考文献

宮沢賢治、『宮沢賢治全集』、第八巻、筑摩書房、昭和四三年

東光敬、『宮沢賢治の生涯と作品』、百華苑、昭和二四年

#### 二 叙述について

二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうを担いで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山お

の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「しんし」や「イギリスの兵隊」という言葉から、西洋の雰囲気を感じられ、世界観を複雑にしている。しかし、「すっかり」や「形をして」とあるので、見た目だけ整えたということが分かる。さらに「ぴかぴかする鉄ぼう」とあるので、新しい鉄砲であり、この二人は狩りに関して素人で、遊びに来たと考えられる。季節は「木の葉のかさかさ」とあるので、葉っぱが落ちている秋〜冬の初めである。



鳥もけものも一ぴきもいやがらん。

一ぴきもないくらいだから、凶暴な山猫の縄張りである。後から起こることの伏線でもある。

「いやがらん」という言葉にはじまりこれ以降にも動物を見下した言動が多く、後に食べられそうになることで、自然軽視を風刺している。

何でも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。

「やってみたい」という記述から、二人は猟師ではなく、娯楽として狩りを楽しむに来た。

しかの黄色な横つばらなんぞに、二、三発おみまいもうしたら、ずいぶ

ん痛快だろうねえ。

狩られる動物たちのことを少しも考えない残酷さが感じられる。「おみまいもうしたら」とあるのは、皮肉が込められた敬語である。また「黄色な」というのは、文法的にあまり用いない表現だと思われるが、くだけた表現になっている。

案内してきた専門の鉄ぼううちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまったくらいの山おくでした。

専門の人がまごついたということは、何か知っていたということだと考えると、後から起こることの伏線だと考えられる。

しんし二人の目線からであるため、逆にふたりが勝手に迷い込んでしまったということも考えられる。

それに、あんまり山がものすごいので、その白くまのような犬が、二ひきいっしょにめまいを起こして、しばらくうなだれて、それからあわをはいて死んでしまいました。

動物が人よりもただならぬ心配を敏感に感じ取った。

二匹が一緒にめまいを起こすという不思議な状況や、最後に犬が助けにきたことを考えると、犬が邪魔だと考えた山猫たちの仕業とも考えられる。

実にぼくは、二千四百円の損害だ。

命Ⅱ金の考え方がうかがえる。

ぼくは二千八百円の損害だ。

現代の金額に直すと、二百万から三百万で犬を飼うということになる。二人は金持ちである。

もう一人のしんしよりも高い金額であり、二人の間で張り合っている。

と、も一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

「くやしそうに」頭を曲げるといふのはどういう状態なのか。おそらく、うなだれているということだろう。

初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じつと、も一人のしんしの、顔つきを見ながら言いました。

ただならない雰囲気をやつと感じ取った。あるいは、前に発言したしんしが、後に発言したしんしの犬のほうが高価だったことに腹をたてているという可能性も考えられる。

さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろろと思う。

怖いと言わずに、帰りたい理由を必死に言い訳しているところから、意地っ張りな性格である。

なあと、もどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。

食料でもないのに、どうして買って帰るのか。とつて帰れなかったら格好悪いという世間体を気にしているのだろう。なあとというのは、たいしたことではないという思いを表しており、そこにはもう一人の同意が得られて、うれしくて、安心したしんしの気持ちが出ている。

風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

不思議な空間との境界を踏み越えたきっかけの一文。

木は「ゴトンゴトン」と普通は鳴らないので、何の音をあらわしているのだろうか。おどろおどろしい雰囲気を出すための擬態語なのかもしれない。

そのとき、ふと後ろを見ますと、りっぱな一軒の西洋造りのうちがありました。

二人の声に反応したように突然現れた。「後ろ」となっており、通ってきたはずのところに店があるということで、不思議さが増している。

君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。

明らかに奇妙な状況を勝手に前向きにとらえて、都合のいいように受け入れている。単純な性格である。

おや、こんなところにおかしいね。

少し疑っているところから、一人目のしんしよりは、考えている。

こいつはどつだ。

驚き、喜んでいる。



やっぱり世の中はうまくできてるねえ。

「やっぱり」ということから、何か食べられる機会があること、世の中悪いことばかりではないということを考えていた。

今日一日なんぎしたけれど、今度はこんないいこともある。

「なんぎ」とは、猟師とはぐれ、犬に死なれ、獲物を見つかることが出来ずに腹をすかせて苦勞していること。「こんないいこと」とは、山奥で腹が減ったときにタイミング良く、料理店がそばにあったこと。

このうちは料理店だけでも、ただでぐちそうするんだぜ。

どうもそうらしい。決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。

二人とも、「ご遠慮ありません」の表記から、ただで料理が食べられると思っている。思い込みが激しいしんしの性格を表している。

二人は戸をおして中へ入りました。

押し戸だということが分かる。

そこはすぐろうかになっていました。

土間がなく、レストランのように土足で入る。

そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

ここでの文字は金。色によって何を変えようとしているのか。裏側をきちんと見ているのは、硝子戸で透けて文字があることが見えていたからだろう。

【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】

山猫にとっては、鮮度があつて油が乗っているおいしそうな人を待っている。

君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。

つまり二人は若いだけでなく、太っている。これらの記述で、紳士二人は食えることが好きで意地っ張りであり、疑うことを知らない性格だということが分かる。

ずんずんろうかを進んで行きますと、今度は水色のペンキぬりの戸がありました。

「ずんずん」とあるので、次の扉まで距離がある事や、紳士二人の勢いがある事が分かる。

どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。

これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。

このように一人が提起した疑問をもう一人が打ち消す形で料理店の戸をくぐっていく。

そして二人はその戸を開けようとしみますと、上に黄色な字でこう書いてありました。

水色の戸に黄色な文字。

【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

山猫にとっては、注文が多いというのは、お客に対しての注文である。

なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。

「こんな」と田舎を見下している。注文が多いというのを、紳士たちは客からの注文が多くて時間がかかるという意味で理解している。

見たまえ、東京の大きな料理店だつて大通りには少ないだろう。

「見たまえ」とは、考えてみたまえの意味。「東京」と言っているので、紳士二人は東京をよく知っている。

【注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。】

先の扉にも同じような文章が書かれていることから、紳士二人は店側に丁寧な印象を持っただろう。

そうだろう。

疑問を抱いていたにも関わらず、もう一人の紳士の発言に簡単に同意し、先に進むようとしている。ここに、二人の紳士の関係性がうかがえる。たがいに対抗心があり、臆病と思われたくないという思いが垣間見える。

早くどこか部屋に入りたいもんだな。そしてテーブルにすわりたいもんだな。

「部屋に入」とは、食事の席に着くことを意味するだろうが、あえて「テーブルにすわ」と付け加え、丁寧さを増している。

ところが、どうもうるさいことは、また戸が一つありました。

「うるさい」とは、面倒くさい、煩わしいという意味。紳士は扉がたくさんある事に対して、面倒くささを感じだしている。

そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長いえの付いたブラシが置いてあったのです。

「あつたのです」とすることで、意外な思いが分かる。ここでは紳士の驚きを表している。

【お客様がた、ここにかみをきちんとして、それからはき物のどろを落としてください。】

「お客様がた」としていることから、客が複数であることに気づいている。

ぼくもさつきげんかんで、山の中だと思つて見くびつたんだよ。

「も」とあるので、紳士が二人とも山猫軒を見くびっていたことが分かる。彼らが見栄を張っていたことが分かる。

そこで二人は、きれいにかみをけずつて、くつのどろを落としました。

「けずつて」とあるが、けずるというのは梳る(櫛で髪をすく)という意味。

そしたら、どうです。

「どうです」とは読者に向けた語りかけである。読者をひきつけ、

次に起こる事が常識から外れている驚くべきことであると予告している。

ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうつとかすんでなくなって、風がどうつと部屋の中に入ってきました。

「板」とはブラシが置いてあつた飾棚の事。「そいつ」とはブラシの事。「置くやいなや」「なくなつて」と起こつた出来事を一文にまとめることで、短時間で起こつたこと、驚きとともに観察していたことが読み取れる。風が吹くということは前の部屋はすでに消えているのか。何度か登場する風は何かを消す、またはごまかすことを目的としているのかもしれない。不気味さも演出している。

二人はびっくりして、たがいに寄りそつて、戸をガタンと開けて、次の部屋へ入っていきました。

今までにない扉を開ける擬音語を「ガタン」と書きくわえることで、二人の動揺を表している。この扉をあけるかどうかが大きな分かれ目である。普通の人だったら、櫛が消えた時点で引き返すだろう。

早く何か温かいものでも食べて、元気をつけておかないと、もうとほうもないことになってしまうと、二人とも思つたのです。

「何か温かいもの」とあるので今は寒い。動揺しているため、台詞ではなく、地の文が二人の思いを述べている。「もうとほうもないこと」とは、二人とも具体的に理解してはいないが、先の出来事で焦っている様子が分かる。しかし、恐怖よりも食欲が優っている。

戸の内側に、また変なことが書いてありました。

「変なこと」とは、紳士の思いであると同時に語り手の思いでもある。読者が山猫軒への懐疑を深めることになる。

【鉄ぼうとたまをここへ置いてください。】

二人が鉄砲を持っていることが分かっている。

見ると、すぐ横に黒い台がありました。

「すぐ」とすることで、とても近くにあった。切迫感がある。

なるほど、鉄ぼうを持ってものを食うという法はない。

「法」とは作法のこと。なぜかここでもう一度落ち着きを取り戻している。

いや、よほどえらい人がしじゅう来ているんだ。

不思議な出来事が起こる前に考えていたことを、もう一度口にすることで、出来事をなかったことにしようとしているのだろうか。「たびたび」を「しじゅう」と言い改めることで、この考えを強調している。

二人は鉄ぼうを外し、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

この後鉄ぼうがなくなったかどうかはわからない。山猫軒にもともとあったもの以外は消せないのかもしれない。

また、黒い戸がありました。

文字の色はわからない。

【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

一度綺麗にさせた靴を脱がせる意味は何だろうか。

どうだ、とるか。

紳士の中で疑いが募り、初めて相手に相談をしている。

しかたない、とろう。確かによっぽどえらい人なんだ。おくに來ているのは。

単文を重ね、倒置させている。

二人はぼうしとオーバコートをくぎにかけ、くつをぬいでペタペタ歩いて戸の中に入りました。

「くつをぬいで」とあるが、このくつは先ほどどろを落としたものであり、せつかく綺麗にしたくつをここで脱がせている。

また、「コツコツ」ではなく、「ペタペタ」という音により、くつを脱いだ後の足音を表している。

ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。

紳士二人が身につけているものを細かに指定して外すように書いている。主人は二人の様子を見ていたのか。

金物類を外させたのは、食べることが出来ないからである。また、とがったものは、食べるときにのどに刺さってしまうからである。「ここに」「みんな」と書き、注意を再三促している。



戸のすぐ横には、黒ぬりのりっぱな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。

「黒ぬりの高級車」というように、黒塗りという言葉からは高級感が伝わってくる。黒ぬりとりっぱは対応している。また、黒ぬりの金庫に金属を入れるという所から、無機質なイメージも浮かぶ。

「ちゃんと」とあるので、貴重品を入れられるように用意周到だった。

ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。

「ははあ」とあるのは、何かに納得して感嘆の気持ちを漏らしたものである。客が電気の影響を受けるぐらいの距離で電気を使った調理をする、というのは一体どんな料理なのだろうか。

してみると、かんじようは帰りにここではらうのだろうか。

入店するとき、ただでごちそうする店だと言っているのに、かんじようを気にしている。

つぼの中のクリームを顔や手足にすつかりぬってください。

「すつかり」というのは一つ残らず、ということなので、顔や手足に、余すところなくクリームを塗るように指示が出ている。とはいえ、二人は服は着たままであるので、体の全てに塗るわけではない。

見ると確かにつぼの中のもののは牛乳のクリームでした。

「確かに」とは戸に書いてある通りに、ということであろう。保湿

用のクリームなどではなく、牛乳のクリームだった。

クリームをぬれというのはどういうんだ。

「どういうんだ」というのはどういうことだ、ということ。手足にクリームを塗ることに疑問を感じている。

どうもおくには、よほどえらい人が来ている。

「来ている」とあるので、おくにえらい人が来ているということを確認している。二人は、えらい人がひび切れしないようにという店側の配慮だと思っている。

こんなとこで、案外ぼくらは、貴族と近づきになるかもしれないよ。

「こんなとこ」というのはこんな山奥のうちで、ということである。「貴族」はよほどえらい人の例であり、この二人は狩猟をして遊ぶような人物ではあるが、貴族ほどえらい人ではないということが分かる。「貴族に近づきになる」という言葉からは貴族への尊敬の念が感じられ、身分が重視されていることも垣間見える。

それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へぬるふりをしながら食べました。

「それでも」というのは、顔や手足に十分にぬり終わっても、ということ。「めいめい」というのはそれぞれ、という意味であり、「ぬるふりをしながら」とあるので、自分が空腹により意地汚く食べているということがもう一人にばれないように、それぞれこっそりと食べていた様子がうかがえる。

それから大急ぎで戸を開けますと、そのうら側には、「クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。」

「大急ぎ」とあるが、何故だろうか。お腹が減っていたから、クリームが気持ち悪かったから、つまみ食いがバレないようになどの理由が考えられる。「大急ぎ」で開けたのにもかかわらず、そのうら側まで丁寧に見ている。

「クリームをよくぬりましたか」とあるが、耳にぬったか否かなど、少しの差でしかないのにもかかわらず、二度に渡って注意をしている。主人はクリームが好物なのであろうか。先にも書いたが、塗ったのは露出している部分で、体の大半は塗っていない。耳への塗り忘れを指摘するということは、過去にもこの畏にかかって塗り忘れた人がいたとも考えられる。

ここの主人は実に用意しゅうどうだね。

しつこさを気にすることもなく、むしろ気づいて用意しておいてくれたことに対して感謝に近い感情まで感じている。

ところで、ぼくは早く何か食べたいたんだが、どうも、こう、どこまでもろうかじゃしかたないね。

「しかたないね」と、様々な注文をつけられて延々とうるかを歩かされていることに何の違和感も覚え、流している。また、食べられないことへの諦めも感じられる。

すぐ食べられます。

普通に読めば可能の意味であるが、深読みすれば受け身ともとれる。

早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。

「早く」と店側も二人を急かしている。主人が我慢できなくなってきたのか。この文はいつ書かれたのだろうか。自分が一つ先の部屋で様子を見て主人に報告しては文字を書いているのかもしれない。そうだとすると主人には、二人の紳士の様子がお見通しである。

下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。

前後でもここを店ではなく、「うち」と言っていることも併せて、あくまでも従業員ではなく召使という発想をしている。また、自然と「下女」という言葉が出てきたことから、彼らは下女がいることが自然な生活（裕福な生活）を送っているのだろう。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

「大きな字」とあるので、この文を強調している。

お気の毒でした。

上から目線で客をいたわる皮肉言葉を投げかけている。しかし、実際に「お気の毒」なのはこれからである。

もうこれだけです。

「これだけ」とあるので、これで最後ということが分かる。

どうか、体じゅうに、つぼの中の塩をたくさんよくみこんでください。

「体じゆうに」の前後を読点で区切って、この部分を強調している。「たくさん」と「よく」を重ねて使うことで、たくさんもみこむではなく、よくもみこむでもなく、もみこみ具合が増していると思われる。また、クリームの上から酢に塩という変な味覚を持っている主人であることもわかる。

なるほどりっぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今度という今度は、二人ともぎよつとして、おたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました。

「なるほど」というのは先ほどの「確かに」と一緒の意味であると考えられる。「瀬戸の塩つぼ」とあるが、げんかんも瀬戸のれんがで出来ていたことから、瀬戸物がお気に入りなのかもしれない。

「今度という今度は」とあるが、紳士目線と言うと、今までも多少は気にしていたが、今度はさすがに許容しきれなかったことを表している。作者及び読者目線で言うのと、やっと気づいたか、という思いを表している。「ぎよつとして」とは驚いてということである。

「クリームをたくさんぬった顔」と敢えて書くのは、作者のユーモアである。

どうもおかしいぜ。

ついに一人がおかしいということに気づく。

ぼくもおかしいと思う。

それに続いて、もう一人もおかしいということに気づく。

たくさんさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。

一人は「くんだよ」、とまるで知っていたという口調で話している。だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べやううちと、こういうことなんだ。

それに対抗するようにもう一人の紳士も、「だからさ」と自分も知っていたという口調で話し始め、「ぼくの考えるところでは」と付けることによつて、あくまでも自分が思いついたんだ、ということを強調している。「こういうことなんだ」と説明を言い聞かせている。お互いに意地っ張りである。「うち」とあるのは、先ほど下女といったことからわかるように、あくまでもうちと思っている。また、読点が多いことで、紳士が焦っている様子も表現している。

これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。

自分が食べられるという事実気づき、恐ろしさで上手く話せなくなっている。

がたがたしながら、一人のしんしは後ろの戸をおそうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

「どうです」は読者に向けた語りかけである。読者をひきつける効果がある。

パニックになつていて気付かなかつたが、もしかしたら引いたら開いたのではないか。最初の戸をおして入っていることから、他の戸もおして来たと考えると、戻るならば引くのが普通ではないだろうか。

もちろん、どちらにも開く戸もあるし、ここでは山猫によって開かないようになっていたということも考えられる。

おくの方にはまだ一枚戸があつて、大きなかぎあなが二つ付き、銀色のホークとナイフの形が切り出してあつて、

「まだ」とあることで、これまでも多かつた戸がさらに加えてあるということが強調されている。しかし、今までにない大きなカギ穴があつたり、銀色のホークとナイフが切りだされていることから、「最後であること」「食べられてしまうこと」が確実になる。

さあさあ、おなかにお入りください。」

「おなか」とは、「(部屋の)中」と「お腹」が掛つており、食べられるという意味である。「さあさあ」というのは、せかしている気持ちの表れ。

おまけに、かぎあなからは、きよろきよろ二つの青い目玉がこつちをのぞいています。

何かが戸の奥にすることがわかる。そして、ただでさえ食べられるという恐怖があるのにもかかわらず、日本人の一般的な目玉(黒、茶色)からかけ離れた「青い目玉」が見えていることで、さらに恐怖が増している。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

この二文は、二人の「しんし」がほとんど同時に言ったものと考えられる。「がたがたがたがた」は前にもあるように、怖くて震えているととらえるのが良いだろう。

二人は泣きだしました。

「しんし」という大人が泣いてしまうほどの恐怖。また、二人が金持ちの家の息子だとすると、甘やかされて育つたため、根性がなくすぐに泣いてしまったと読むこともできる。

すると、戸の中では、こそこそこんなことを言っています。

戸の奥にいる何かが、話をしている。独り言であれば「こそこそ」よりも「ぼそぼそ」や「ぶつぶつ」となる。戸の奥には何かが二人(二匹)以上いる。

親分の書きようがまずいんだ。

親分がおり、今までの注文は親分が書いているということが分かる。これらの注文はどれも、しんし二人の状況にびつたり注文であり、親分には二人の様子が見えていたのだろう。

どうせぼくらには、ほねも分けてくれやしないんだ。

骨さえも分けてもらえない、いわゆる「下っぱ」である。「ぼくら」とあることから、やはり二人以上であることがわかる。

けれども、もしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。

二人のしんしが入ってこなければ、親分から何らかの罰があることがうかがえる。

おい、お客さんがた、早くいらっしゃい。いらっしゃい。いらっしゃい。

仮にも「お客さん」に「おい」と荒い言葉づかいをしている。やはり普通ではない。「いらっしゃい」を三回も繰り返していることから、焦りや必死さが分かる。

それともサラダはおきらいですか。

「サラダ」はサラダのこと。サラダにされる予定だった。

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

「くしゃくしゃの紙くずのような顔」とは、しわだらけということだろうか。「心をいためた」というのは、心配したという意味だが、ここでは食べられることを心配したということだろう。「声もなく」とあるので、怖すぎて声も出なかったのだろう。

中では、フツフツと笑って、またさげんでいます。

怖がっている様子を楽しんでいる。親分を恐れながらもいたずらを楽しんでいる雰囲気が出ている。

親方がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、舌なめずりして、お客様がたを待っていられます。

しんしたちを食べる準備が万端であることがよくわかる。「舌なめずりして」という表現から、とてもおなかをすかせていて、今か今かと待っているということが分かる。

二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

恐ろしさが「泣いて」を繰り返すことで強調されている。

という声がして、あの白くまのような犬が二ひき、戸をつき破って部屋の中にとびこんできました。

白くまのような犬は生きていた。また、「あの」という指示語があることから、最初にしんしが連れていた犬と同じ犬である。後ろの部屋が消えていたのであれば、一枚だけ突き破ってきたことになり、全部残っていたならば、今までの扉のすべてを押し破ってきたということになる。

と高くほえて、いきなり次の戸にとびつきました。

戸の奥にいるものが犬たちには敵とみなされている。「いきなり」という表現は突然やってきた勢いそのままとびついた。「とびつく」と

いう表現から、犬の勢いの激しさがわかる。

戸はガタリと開き、犬どもはすいこまれるようにとんでいきました。

戸は勝手に開いていると考えられる。一度戸にぶつかっているのであれば、「すいこまれるように」というスムーズな表現はできないのではないか。

前の文と同様に犬の勢いの激しさがわかる。また、「すいこまれるようにとんでいきました」という記述から、扉の向こう側が暗闇であり、犬の着地地点が見えなかったということも分かる。

「ニャアオ、クワア、ゴロゴロ。」

鳴き声から戸の奥にいたのは、猫（山猫）だと分かる。

という声が出て、それからガサガサ鳴りました。

「ガサガサ」が何の音であるかは不明であるが、もし、これが葉っぱの上を逃げていく音だとするならば、すでに外であり、しんしたちが次に外に放り出されることの伏線と考えることもできる。

部屋はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるさえて、草の中に立っていました。

震える理由が「怖さ」ではなく「寒さ」になっている。あえて「寒さ」に「ふるえて」としているのは、さっきまでの恐怖体験がまるでなかつたかのようにする効果をねらっているのだろうか。

見ると、上着やくつやさいふやネクタイピンは、あっちの枝にぶら下がったり、こっちの根元に散らばったりしています。

起きたことがまるでなかつたかのようになっている。上着などが散らばっていることから幻から現実に戻ってきたことが分かる。

風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

初めにも全く同じ一文があり、この一文はヤマネコが作り出した幻想の世界の終りの合図だと考えられる。

犬はフーとうなつてもどつてきました。

犬はとても興奮している。何かを威嚇しているが、これは猫に対してであると考える。

二人はにわかになんか気がついて、「おうい、おうい、ここぞ、早く来い。」

「元気がついて」とあるが、「元気になる」というよりも、「呆然としている様子から、意識がはっきりする・はっとする」ととらえる方が良いと考える。

みのぼうしをかぶった専門のりょう師が、草をザワザワ分けてやってきました。

初めて出てきた「専門の鉄っぽううち」と同一人物だろう。猟師

が二人を捜していたと考えると、最初の猟師がまごついてどつかにいつってしまったというよりも、しんし二人が猟師とはぐれてしまったと考えるほうが妥当ではないか。

しかし、さつきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元のとおりにはなおなりませんでした。「紙くずのようになった二人の顔」は、恐怖がすさまじかったことを表わすと同時に、幻のようなできごとが本当にあったのだという唯一の消えないしるしとなっている。

### 三 考察

#### (一) 紳士二人の性格について

この作品には「二人のしんし」が登場するが、どちらがどの台詞を言っているのかは描かれていない。そこで紳士をAとBに分け、口癖、話し方などから性格を推測し、どちらが話しているのかを考えてみた。まずAとBの分け方であるが、それは二人の犬が死んでしまった場面から推測する。

：しばらくうなって、それからあわをはいて死んでしまいました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよっと返してみてもいいました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、も一人が、くやしそうに頭を曲げて言いました。

初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じっと、も一人のしんしの、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもうもどろうと思う。」

「さあ、ぼくもちよほど寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろうと思う。」

「実にぼくは：」と話している「初めのしんし」に対し、二人目のしんしは「ぼくは二千八百円の：」と対抗している。「初めのしんし」をAとしたときに、必然的に「ぼくはもうもどろうと思う」と顔色をうかがいつつ話すのがA、「さあ、ぼくもちよほど：」と意地を張りつつ同意するのがBとなってくる。

次に、二人の紳士の性格であるが、それは次の場面から特に推測できる。

RESTAURANT  
西洋料理店  
WILDCAT HOUSE  
やまねこけん  
山猫軒

という札が出ていました。

A「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。」

B 「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができらんだらう。」

A 「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

B 「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくてたおれそうなんだ。」

二人はげんかんに立ちました。げんかんは白い瀬戸のれんがで組んで、実にりっぱなものです。

そしてガラスの開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

【どなたもどうかお入りください。決してごえんりよはありません。】

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

A 「こいつはどうだ。(中略) このうちは料理店だけれども、ただでこちそうするんだぜ。」

B 「どうもそうらしい。決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。」

他の場面からもみてとれるように、初めに話し始めることが多いのは、「しんしA」であると考えられる。そして「しんしB」はそれに同意し、流されることが多い。

まず、Aの口癖は「君」である。ここから、Aの若干相手を見下したような性格がうかがえる。そして、目の前で起きていることに一切疑いの目を向けていない。それに加え、Aは戸に書かれている「ごえんりよはありません」という言葉に対し、「ただでこちそうしてもらえら」ととんでもない勘違いをしている。このことからAは早とちりしやす、疑うことを知らない単純な性格であることがわかる。

逆にBは、看板を目の前にして、「おや、こんなところにおかしいね」

と少し疑っていることがわかる。しかし、結局Aに流されて同意しているためBの性格は、Aよりは少し疑うということ分かっているが、流されやすく、相手の意見に同意しやすい性格であることがわかる。もうひとつ、二人の性格がわかりやすい場面がある。

B 「このこう水は変にすくさい。どうしたんだらう。」

A 「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。」

二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

【いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。(中略) つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。】

なるほどりっぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今度という今度は、二人ともぎょっとして、おたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました。

A 「どうもおかしいぜ。」

B 「ぼくもおかしいと思う。」

A 「たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。」

B 「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を料理にして、食べてやるうちと、こういうことなんだ。…」

香水のにおいを疑うあたりがBらしい。そして、Aは「下女がかぜをひいて…」と突拍子もないことを言い出している。このことから前述にもある通り、二人の性格は手に取るようにわかる。後半の台詞



も、Aがやつと疑い始めたのに対し、Bは前々から疑っていて、それに同意する形になっている。そして、Aの「向こうがこっちへ注文してるんだよ」の台詞にもわざわざ同じようなことを詳しく説明し、対抗しつつも結局同意している。

このように、注文の多い料理店に出てくる二人の紳士のうち、一人は単純で、疑うことを知らない人間であり、少し人を上からみる癖がある。口癖は「君」もしくは「〜だぜ。(〜ぜ)」である。もう一人の紳士は、疑うということはしてみるものの、結局は人に流されやすく、そのわりには意地を張りやすい、対抗心をもった人間であるということがわかる。

(二) 山猫からの注文の真意とそれに対する紳士たちの思いこみの差について

※「山猫軒 見取り図」参照

○山猫の考えと紳士の考えの違い

**A**【どなたもどうかお入りください。決してごえんりよはありません。】

山猫：ご遠慮なくお入りください。

紳士：ご遠慮なくご注文ください。全て無料で提供します。

**B**【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】

山猫：太っていて若い奴の方が美味しい。

紳士：ちように自分で当てはまり、大歓迎されていると思い、喜ぶ。

**C**【軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

山猫：店から客への注文の多い料理店

紳士：客から店への注文の多い料理店

**D**【注文は**ずいぶん多い**でしょうが、どうかいちいち承知してください。】

山猫：念押し。

紳士：注文が多いということは客も多く、繁盛している。

**E**【お客様がた、ここをかみをきちんとして、それから**はき物のどろを落としてください。**】

山猫：どうせ食べるなら綺麗な方がよい。

紳士：えらい人が来るような作法の厳しいレストランだからきちんとしなければ。

**F**【鉄ぼうとたまをここへ置いてください。】

山猫：もし正体がばれた時に撃たれたら困る。

紳士：鉄砲を持って食べるというのも良くない。また、えらい人の前で鉄砲を持つというのも悪い。

**G**【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

山猫：食べるときに余計な物は外して欲しい。

紳士：えらい人の前でぼうしや外とう、くつは失礼である。

**H**【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことごとがったものは、みんなここに置いてください。】

山猫…食べるときにのどに詰まってしまおうから外して欲しい。  
 紳士…料理に電気を使うから、感電しないように。

I【つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。】  
 山猫…美味しいクリームで味付け。

紳士…顔や手足のひび切れ予防。お店は手足が切れないように気を使  
 ってください。

J【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。】

山猫…より美味しく食べるため。  
 紳士…危なく耳にひびを切らさないように細かいところまで気を使っ  
 てくれた。

K【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ  
 食べられます。早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてく  
 ださい。】

山猫…すぐに食べてやる。こう水（酢）で味を調べておくれ。  
 紳士…すぐに食べることが出来る。こう水は中身を酢と間違えたのだ。

L【いろいろな注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。も  
 うこれだけです。どうか、体じゆうに、つぼの中の塩をたくさんよくも  
 みこんでください。】

山猫…塩をもみ込んだら出来上がり。最後の注文も聞いてほしい。  
 紳士…注文というのは、店から客への注文のことで、自分たちが食べ  
 られるのだということに気づく。

M【いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこうにできました。さあ  
 さあ、おなかにお入りください。】

山猫…もう隠すつもりもない。おなかへお腹。（※【つぼの中の塩】の  
 「なか」は漢字）

紳士…騙された（勘違いをした）ことに気付き、恐怖に震える。

#### ○違いが生じた要因

・紳士二人のお腹が空いていたこと。

そもそも、こんな山奥にある（怪しい）お店に足を踏み入れた  
 のは、お腹が空いていたからであった。早く何かを食べたいとい  
 う思いに急かされた結果、食べ物にあり付けるように、自分たち  
 に都合の良い解釈を繰り返した。その結果、勘違いが生じた。

・店側の注文が曖昧であったこと。

店側は、【当軒は注文の多い料理店ですから】「注文はざいぶん  
 多いでしょうから」などの文において、大切な部分を省略してい  
 る。右の文で言うと、大切なのは（店からの）という部分である。  
 他の注文においても、なぜ髪をきちんとするのか、鉄砲を置くの  
 か、クリームを塗るのかなどの説明が全くないため、紳士たちは  
 勝手な解釈に走ってしまう。その結果、普通では考えられないよ  
 うな考えにたどり着いてしまった。

・不思議に思ったことを気にしなかったこと。

一人の紳士（Bの紳士）は、「おかしいね」「どうしたんだろう」  
 など、注文に対して何度か違和感を持っている。しかし、それを  
 特に気にすることもなく、もう一人の紳士（Aの紳士）が説明を

加えてBを納得させている。そうして違和感を取り除いて進んだことにより、二人は勘違いに勘違いを重ねて最後まで来てしまったのである。





## カレライス（重松清）

井上 小夜、加藤 修治、中山 莉麻、野田 奏惠



## 一 作者と作品について

重松清は、一九六三年に岡山県久米郡久米町（現・津山市）に生まれた。中学、高校時代は山口県で過ごし、早稲田大学教育学部国語国文学科を卒業した。角川書店で編集者として務めた後に、フリーライターとして独立した。作家となつてからは、父親の転勤で家族で九回の引っ越しをした少年時の実体験などをふまえ、いじめや親子の断絶、夫婦の齟齬といったシリアスな問題を描き続けてきた。一九九一年に『ピフォア・ラン』で作家デビューを果たし、その後『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、『ビタミンF』で直木賞を受賞した。『ビタミンF』はNHKでドラマ化もされている。少年の頃から吃音症であり、カ行の発音がうまくなかった。そのため、話すときはカ行から始まる言葉をできるだけ避けていたという。清という自分の名前についても、発音するのに苦労していたようである。

「カレライス」は、教科書のために書き下ろされたもので、後に、書籍として、『はじめての文学／重松清』に掲載された。子どもと親という親子の心情や思春期の子どもの微妙な心情を読み取り、考えることのできる教材である。

## 二 叙述について

ぼくは悪くない。

自分の主張を前面に押し出している。自分に非が無いことを心底信じている。

言うもんか、お父さんなんか。

「言うもんか」という子どもっぽい言葉づかいで僕の幼さが表現されている。「なんかに」とあるので、お父さんを嫌がる気持ちが分かる。僕とお父さん、という対峙している関係性が表れている。

「いいかげんに意地を張るのはやめなさいよ。」

周囲から見ればこのけんかの原因はつまらない内容である。しかし、そんなつまらない内容であってもぼくにとっては大きな問題である。

お母さんはあきれ顔で言うけど、あやまる気はない。先にあやまるのはお父さんのほうあだ。

「先に」とあるので、前文で謝る気はないと言っていた僕だが、内心は謝らないといけないと思っていることが分かる。

確かに、一日三十分の約束を破って、夕食が終わった後もゲームをして

いたのは、よくなかった、だけど、セーブもさせないで、いきなりゲーム機のコードをぬいて電源を切っちゃうのは、いくらなんでもひどいやないか。

「確かに」という前置きがあることで、僕も自分の非を理解し、認めていることがわかる。しかし、「いくらなんでも」とあり、それ以上にお父さんのことを責めたい気持ちが強いことが読み取れる。

「何度いっても聞かなかったんだから、しょうがないでしょ。今夜お父さんが帰ってきたら、ちゃんとあやまりなさいよ。いいわね。」

「何度いっても」とあり、僕に自分も悪かったのだということを感じさせようとしている。念押し「いいわね」からは、母のあきれが伝わる。

お母さんはいつもお父さんのみかたにつく。

「いつも」という言い回しから普段から僕が母と父が連携していることにすねているような印象を受ける。実際は常に母が父の味方についていることはないだろうから、思春期の少年らしい感情なのだろう（自分は悪くない、という気持ち）。

丸一日たっても「ごめんなさい。」を言わなかったのは新記録だった。

今までとはちがって長期間口をきいていない状況を表現して、「お父さんウィーク」へと導入していく。

「いい。今夜のうちにあやまって、仲直りしときなさいよ。あしたから『お父さんウィーク』なんだから、けんかしたままだとつまらないでし

よ、ひろしだつて。」

「今夜のうちに」という時間制限を与えることによって、早く仲直りしないとどんどん謝りにくくなっていくよ、と母は言外に急かしている。また、その時間制限により「お父さんウィーク」がしんどくなるということが強調されている。それによって、読者に「お父さんウィーク」に対する興味を持たせることもできる。

毎月半ばの一週間ほど、お母さんは仕事がいそがしくて、帰りがうんとおそくなる。その代わり、お父さんが夕食に合わせて早めに帰ってくる。それが「お父さんウィーク」だ。

「お父さんウィーク」の説明。父母が協力して家庭生活を運営していることが読み取れる一文である。

「お父さん、ひろしがよくないことをしたらしかるけど、ひろしのごとが大好きなのよ。分かるでしょう。今朝も、『ひろしは、まだすねてるのか。』って、落ち込んだのよ。」

けんかの当事者ではなく第三者の母から与えられる情報には父も反省しているとある。母がぼくを納得させようとしている様子が感じられる。

ほら、そういうところがいやなんだ。ぼくはすねてるんじゃない。お父さんと口をききたくないのは、そんな子どもっぽいことじゃなくて、もっと、こう、なんていうか、もっと――。

子ども扱いを嫌がる僕の様子を示すことで、よりいっそう僕の子どもっぽさが表れている。後半部分では思いを言葉で言い表せない感覚

が伝わってくる。怒っている理由がゲームに関することだけではないのでは？と読み手に思わせる一文。

『特製カレーを食べれば、きげんも直るさ。』って張り切ってたから、晩ご飯の前におかし食べたりしないですよ。」

父が息子の様子をとても気にしていることがわかる。

六年生になったのに、遊んでばかりで家のことちつともしないんだから、まったく、もう——。

普段ぼくは遊びまわって手伝いをあまりしない。いわゆる普通の小学六年生の男の子のイメージを受ける。

お母さんはいつだって、お父さんのみかただ。

同じ文章を繰り返すことで強調している。

それがくやしかったから、何があっても絶対にあやまるもんか、と心に決めた。

父が正しいから母が味方している、と考えるのではなく母は無条件に父の味方をすると感じて悔しく思っている。「心に決めた」ということは、これまでの母とのやり取りなどで謝ろうかと心が揺らいでいたことも示している。

「お父さんウィーク」の初日、お父さんは、さっそく特製カレーライスを作った。

「ほら食べろ、お代わりたくさんあるぞ。」

と、ご機嫌な顔で大盛りのカレーをばくつく。

父が仲直りしたがっているのがとても良く伝わってくる。僕が不機嫌だから余計に明るく振舞っているだろう父の様子が描かれている。

でも、お父さんは料理が下手だ。じゃがいもやにんじんの切り方はたためだし、しんが残っているし、何よりカレーのルウが、あまつたるくてしかたない。

後にキーワードとなるカレーの辛さについての記述が出てきている。後半部への伏線ととらえることができる。

カレー皿に顔をつっこむようにしてスプーンを動かしていたら、お父さんが、「またおこってるのか。」と、笑いながら言った。

「顔をつっこむようにして」とあるので、父の顔を見ないようにして食べている。気まずさを感じているのだろう。父が笑っているのは自分はもう怒っていないと伝えるためではないか。

「ひろしもけっこう根気あるんだなあ。」

根気とは、ちよつとちがうと思う。どっちにしても、返事なんか、しないけど。

父の解釈とぼくの中での怒りの解釈とが異なっていることから、ぼくは父が僕を理解してくれていないと感じている。

最初の予定では、これでぼくもあやまれば仲直り完了。——のはずだったけど、ぼくはだまっただけだった。

ぼくの中での「予定」はいつごろから考えられていたのか？一度心

が揺らいだと考えられる母との会話の中だろうか。ぼくが考えていた「予定」とは違う感じで父が謝ってきたのかもしれない。

「でもな、一日三十分の約束を守らなかったのは、もっと悪いよな。」

説教したいところだが、説教っぽくならないよう軽い言い回しを心がけている感じがする。

でも、分かっていることを言われるのがいちばんいやなんだってことを、お父さんは分かってない。

自分が悪かったことをすでに認めている。父と子の間で微妙な感覚のズレが生じていて、理解してもらえていないと思っている。

「で、どうだ。学校、最近おもしろいか。」

父は、話題を変えて、どんな内容でもいいからぼくと会話をしようとして努力している。

ああ、もう、そんなのどうだつていいじゃん。言葉がもやもやとしたけむりみたいになって、むねの中にとまる。

単純な怒りよりもやもやとして消化しきれない感情が胸の中にかきあがる感じをぼくの年齢らしい言葉で説明している。

知らん顔してカレーを食べ続けたら、お父さんもさすがにあきらめたみたいで、そこからはもう話しかけてこなかった。

「もう」とあるので、それ以上は話しかけてこなかった。

「お父さんウィーク」の初日は、そんなふうにおしゃべりすることなく終わった。

初日が終わって「しまった」という感じを受ける。

ふつうのカレーだと、一晚おくとこくが出ておいしくなるけど、特製カレーのあまったるさは変わらない。

カレーの甘さに不満が募っているように書かれている。父の作った特製カレーへの不満ということから、父への不満も消えていない。

「なあ、ひろし、いいかげんにきげん直せよ。しつこすぎないか。」

お父さんは、夕食のとちゅう、ちよつとこわい顔になっていった。

「ちよつと」とあるので、本気でこわい顔になったわけではない。父ももどかしい思いを感じて、じれったく思っていることが分かる。

ここであやまると、いかにもお父さんにまたしかられそうになったから——みたいで、そんなのいやだ。

本当に反省しているならば謝れるはずだが、悪かった、という感情よりも自分の意地や怖がって謝ったと誤解されたくないという思春期ならではの思考回路がぼく自身の言葉で描かれている。「みたいで」や「いやだ」といった子どもっぽい言葉を用いていることで余計に思春期の葛藤が伝わってくる。

お父さんはのひらをメガホンの形にして言ったけど、ぼくがだまったままなので、今度はまたおっかない顔にもどって、

「いいかげんにしろ。」



とにらんできた。

さきほどは「ちょっとこわい」顔だったけれど、今度は本気で怒っている。それにぼくも気付いている。

おいしくないのに、ぱくぱく、ぱくぱく、休まずに食べ続ける。

「のに」とあるので、美味しいか美味しくないかが問題なのではなくて、父と会話したくない、というぼくの気持ちが行動に表れている。

自分でもこまってる。なんでだろう、と思ってる。今までなら、あっさり「ごめんなさい。」が言えたのに。もつとすなおに話せてたのに。特製カレーだって、三年生のころまでは、すごくおいしかったのに。

怒っている父を目の前にして、自分の非を認めているが、自分の気持ちの変化に自分自身がついていけずに混乱している。

二人でだまってお皿を片付けているとき、お父さんは、

「頭が痛いなあ。」

とつぶやいて、大きくくしゃみをした。

かぜ、ひいたんじゃないのー。

薬を飲んで、早くねたほうがいいんじゃないー。

言いたかったけど、言えなかった。

父の言葉から父の体調を心配している、つまり、父のことが気がかりである。だが、意地を張ってしまっているので素直に言い出せない。

翌朝、自分の部屋から起き出したぼくといれかわるように、お父さんは、

「悪いけど、先行くからな。」

と、朝食も食べずに家を出て行った。「お父さんウィーク」では、よくあることだ。

会社から早く帰ってくる分、朝は一番乗りして、ゆうべできなかった仕事を片づけるのだ。

お母さんはまだねている。これも、「お父さんウィーク」のいつものパターン。

仕事がいそがしい一週間のうち、特にいそがしい何日かは、家に帰るのが真夜中の二時や三時になる。その代わり、次の日はふだんより少しだけゆっくり出勤すればいいのだという。

父と母とぼく、この三人の普段の関係性なども読み取れるようになってきた中盤になって、「お父さんウィーク」に関する詳しい記述が出てくる。両親の支えあう姿や、忙しい中からもぼくのことを二人がどれほど大切にしているかということも読み手の目線からは考えることができる。

黄身がくずれているから、お父さんが作ってくれたのだろう。

「朝食も食わずに」出て行った父がわざわざ僕のために作ってくれている。黄身がくずれているのにそれに対する文句がなかったり、作って「くれている」という表記がなされているところから、父への怒りはもう残っていないことが分かる。

それがいつもくやくやくして、でも、お父さんがねむい目をこすりながら、ぼくのために目玉焼きを作ってくれたんだと思うとうれしくて、でもやつぱりくやくしくて、そうはいつでもうれしくてー。

「自分の行動を振り返り反省できるほどの時間の経過があったことを示している。また、それだけ長期間父と口をきいていないことがここでもう一度表面に浮かぶ。」

絵の得意なお母さんは、しょんぼりするお父さんの似顔絵を手紙にそえていた。

今回のけんかでは第三者である母が二人の仲を心配していることが改めて感じられるので多くの反省はより深まる。上手な絵によって、しょんぼりしている父の姿がよりいっそう想像しやすくなる。

言える言える、だいじょうぶだいじょうぶ、と自分を元気づけた。

自分で自分を元気づけないとならないほど、謝ることに対して不安を持っている。(予定どおり謝れなかったから?)

お父さんがそう言ったとき、思わず、ぼくは答えていた。

「思わず」とあるので無意識に、とっさに答えた。意地や怒りよりも父のことを心配する気持ちのほうが大きい。

「何か作るよ。ぼく、作れるから。」

「えっ。」

「だいじょうぶ、作れるもん。」

繰り返していることで自分に言い聞かせている感じもある。子どもっぽい言葉でのやり取りなので、意地などを忘れて心底から父を心配していることがわかる。

お父さんは、きよんとんとしていた。でも、いちばんおどろいているのは、ぼく自身だ。

口をきくことすらままならなかったのに思いがけない言葉が息子の口から出てきたことに父はきよんとんとしている。その姿を見て、自身自身の言動を自覚したぼくはもつと驚いている。

「いや、でも——。」

といいかけたお父さんは、少し考えてから、まあいいか、と笑った。

息子からの思いがけない申し出に思わず笑顔になった。

「でもカレーなの。いいからカレーなの。絶対にカレーなの。」

子どもみたいに大きな声で言い張った。

父との思い出がカレーと結びついている。思わず一気に畳み掛けるように言ってしまった自分が恥ずかしい。

戸だなから取り出したのは——甘口。お子さま向けの、うんとあまいやつ。

ついさきほどまでの父とぼくとの確執をここでもう一度思い出すきっかけとなる。しかし、あのときはぼくにとって苛立ちのひとつの原因でもあった甘口を今は穏やかな気持ちで見ることができている。

お母さんが、

「ひろしはこっちなね。」

と、ぼくのみだけ別のなべでカレーを作っていた低学年のころは、ルウはいつもこれだった。

低学年の幼かった自分を振り返るべく、ぼくがだんだんと内面的にも成長してきていることを示しているのではないだろうか。

「だめだよ、こんなのじゃ。」

ぼくは戸だな別の場所から、お母さんが買い置きしているルーを出した。

ぼくにとつては甘口ではものたりない。ただの味覚の変化だけではなくて精神的な変化も暗に表している。

「だって、ひろし、それ『中辛』だぞ。からいんだぞ。口の中ひひひしちゃうぞ。」

父の中ではまだぼくは甘口が似合う子どものままである。

「何言ってるの、お母さんと二人のときは、いつもこれだよ。」

父は何もわかっていなかったことを改めて感じていたが今はそれに対して怒りを感じたりはしていない。

お父さんは、またきよとんとした顔になった。

「きよとん」とあるので、父にとつてぼくが中から食べられるほど“大人”になっていたということは衝撃の事実だった。

でも、

「そうかあ、ひろしも『中辛』なのかあ、そうかそうか。」

と、うれしそうに何度もうなずくお父さんを見てると、なんだかこっ

ちまでうれしくなってきた。

先ほどまでは苛立ちやあきれられる気持ちばかりを父に抱いていたが、嬉しそうにしている父の姿を目にするとそんな気持ちを忘れて穏やかな気分になっている。

野菜担当のお父さんが切ったじゃがいもやにんじんは、やっぱり不恰好だったけど、しんが残らないようにしっかりとこんだ。

初めて父と二人で作った料理。その過程を説明することで二人の仲の良い姿が浮かびやすくなっている。

「いやあ、まいったなあ。ひろしももう『中辛』だったんだなあ。そうだよなあ、来年から中学生なんでもんなあ。」

と、一人でしゃべって、

「かぜも治っちゃったよ。」

と笑って、思いつ切り大盛りにご飯をよそった。

「お父さんウィーク」初日の大盛りのご飯とはぼくにとつて意味合いの違う大盛りのご飯。

食卓に向き合ってすわった。

「お父さんウィーク」の初日、二日目では全く意識していなかった「向き合って」という感覚をぼくが感じていることで二人の間の空気が変わっていることが改めて感じられる。

口を大きく開けてカレーをほお張った。

遠慮や気後れすることなく食事をしている。ぱくぱく食べていたと

きとは満足感がちがう。

ぼくたちの特製カレーは、ぴりっとからくて、でも、ほんのりあまかった。

思春期の心情を表すイメージのある味の表現。甘口は子ども、辛口は大人、という感じなので中辛⇨大人と子どもの中間にいるひろし、のイメージ。「お父さんウィーク」もはじめはぴりぴりとしていたが今はほんのりした空気感であることも表現されている。

### 三 考察

#### (一) ぼくと家族

この物語にはぼく、父、母の三人しか出てこない。そんなに分量もないこの物語の中でメインとして描かれているぼくと父のかかわりに関する記述はかなりの割合を占めている。

ぼくと父は普段仲が悪いわけではないことは、風邪ぎみのような父の姿を見てすぐに心配しているぼくの様子や、ぼくがなかなか口をきいてくれないからとしよんぼりしている父の様子から容易に想像がつく。また、お父さんウィークの説明の中からもわかるように一家三人は協力し合って生活していることもわかる。

この物語からは思春期にさしかかったぼくとそのぼくの様子に一喜一憂しながら親子の関わりあいを大切にしようとしている父、そしてその二人の姿を第三者的立場から見守っている母の姿を読み解くことができる。核家族化が進む昨今、三人家族も増えていることだろう。小学校高学年の児童たちも共働きの家庭で育った割合は決して低くない

いだろう。朝ごはんが作ってある嬉しさや母からの直筆の手紙の内容が胸にせまってくる感覚などは共感しやすいものではないだろうか。

六年生の教科書の冒頭に掲載されている「カレーライス」はぼくと家族のかかわりを通して自分自身の家族とのふれあいや自分自身の意地っ張りな部分、うまく言葉にできない複雑な心情などにも目を向けさせる機会となる作品でもある。

#### (二) ぼくとカレー

ぼくが風邪をひいている父のために作ろうと思いついたのはカレーであった。病人に適した料理とは思えないが、無意識のうちに思いついたということはカレーが、ぼくの中で父との思い出と深くかかわっているといえるだろう。

これもお父さんウィークではよくあることだ、などといった言葉が文中に出てくるようにぼくはお父さんウィークを何度も経験していることがわかる。また、特製カレーは小学校三年生以前から食べていることもわかる。つまり、ぼくと父の時間の中にはカレーが結構な割合で登場しているわけである。

そのカレーの辛さを父は甘口にして作ってくれている。しかし、ぼくにとつてそれではもう物足りなくなっている。その事実を父は知らない。これは、ぼくのことを父は何もわかってくれていないと感じている「ぼく」の成長を父が感じるきっかけへと繋がっていく。

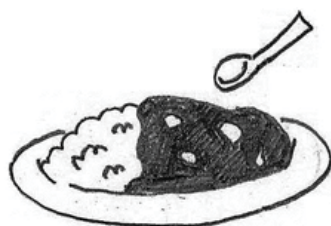
甘口から中辛へと好みが変わるのはぼくが成長している証であろう。父はそれを知って自分が思っていたよりもぼくはもう子どもではないとわかる。初めはけんかをしていて気まずかったお父さんウィークも、終盤ではほのぼのした雰囲気となっている。この二人の間の空気もカ

レーの「ぴりつとからくて」でも「ほんのり甘い」という記述と重ねて読み解くことができるだろう。

### (三) ぼくと生徒

カレーライスの主人公であるひろしは小学校六年生。この教材で学ぶ児童たちと同じ年齢である。それだけでも児童たちは感情移入しながら物語を読むことができるのではないだろうか。ましてや、主題は親に対する子ども、小さなもやもやとした気持ちである。何だかきにくわいけれどうまく言葉にできない。その感覚を日常生活の中で小学校六年生の児童たちも多く感じているのではないだろうか。

自分の家族構成とは異なっている登場人物の家族構成であったとしても、共感しながら読みやすいテーマであることはまちがいないだろう。感情移入しやすい題材であると同時に家族間におけるこじれなどを解決させるヒントもちりばめられている作品である。



mnty

## ブラツキーの話（梨木香歩）

小山 明里



### 一 作者と作品について

梨木香歩は一九五九年鹿児島生まれの小説家。英国に留学し、児童文学者のベティ・モーガン・ポーエンに師事した。『西の魔女が死んだ』で日本児童文学者協会新人賞、新美南吉児童文学賞、小学館文学賞を、『裏庭』で児童文学ファンタジー大賞を受賞した。その他の作品として『りかさん』『家守綺譚』などがある。

この作品は、教科書のための書き下ろし作品である。『ひろがる言葉 小学国語 6上』（教育出版、二〇一一年）に掲載された。

「ブラツキーの話」は『西の魔女が死んだ』へ続く作品となっている。『西の魔女が死んだ』では、まいは中学二年生になっており、不登校になっている。

### 二 叙述について

夏だからということもあるだろうけれど、ぞくぞくつとする怪談話は、今いる現実の世界とはちがう場所に入っていくような感覚を与えてくれる。

「入っていくような感覚」とあり、実際に現実とちがう世界に行くのではなく、あくまで擬似的な感覚である。これから物語が始まると

いう場面設定。「与えてくれる」とあり、受身形であるので、怪談話（ママの話）によって主人公のまいは違う場所（過去？）に入っていく感覚を覚えている。「夏だからということもあるだろうけれど」から、夏だから、という言葉で怪談話をはやっている状況を自然なものにする。しかし、「夏だからということもあり」という形で言い切ってはいない。夏だけが理由で怪談話をはやっているわけではない。「夏だから」とあるので、実家に帰る、お盆休み・夏休み、というイメージを喚起させる。「ぞくぞくつ」とあるので、背筋が寒くなる。ブラツキーの話は、怪談話とは違う「ぞくぞく」を感じさせる。「入っていく」とあり、足を踏み入れる動作。後にまいもママの話に入っていく感覚を覚える。「与えてくれる」を「感じさせる」と比較すると、「与えてくれる」と表現されたほうが、こちらが受け身的であることがわかる。

ママは紅茶を入れながら、しばらく考えていた。

食後に紅茶を飲む優雅なファミリイであることが分かる。「ママ」という呼称からも西洋風のファミリイであることが推測される。魔女の家系という特異さを出す工夫だろうか。

死んだ時のこと以外は。

死んだ時とはブラツキーが死んだ時のこと。「は」とあり、そのこと

以外はよく知らない。裏を返せば、その死んだ時の事はよく覚えている。つまり、ママの記憶の中に死んだ時の事が強く残っていて、だからまいにブラッキーの事を話す時も、つい死んだ時の事を話してしまう。その結果としてまいも死んだ時のことを強く印象に残している。

ママは、口をわざときつと結んだ。

口を「きつと結んだ」とあるので、真剣な緊張している表情。直前の「それでおしまい」という、今までの緊張した雰囲気とはちがう、拍子抜けしてしまうような（場の雰囲気をもたやわらしてしまおうような）言葉とは正反対の行動を取っている。「わざと」とあり、意図的に「怪談話はこれでおわり」ということを表情でも示している。

でも、そうじゃないよって、おじいちゃんが言ったの。

「でも」は逆接の接続詞であるから、その下に続くことばは話し手の最もいいところである。ブラッキーをかわいがることで、前に飼っていた犬であるチェリーの思い出が消えていくような気がしているママにとって、おじいちゃんの言ったことばが印象的であったのであろう。また、倒置法が使われていることによって、「そうじゃないよ」という一言がより強調される。さらに、おじいちゃんは、ママの長い悩みに対して一言で返している。そこから、一種の自信が感じられる。おそらくおじいちゃんは、以前にも犬を飼っていて、ママと同じ気持ちを感じていたのではないのだろうか。

ママは、あれ、学校で何かあったのかな、というような顔をしたが、すぐにもとの話題にもどった。

「ママ」のふとした表情に気付く「わたし」の成長をあらわしていると同時に、学校での話を聞いてほしいけれど、ふれられたくないような、戸惑いが見え隠れしている一文。「ママ」の表情の変化と話題のつながりという客観的に見てわかることだけにふれられていて、「わたし」や「ママ」の気持ちや学校で起きたことなど主観的なことには言及されていないので、余計に作中人物の心情が気になる。「ママ」は「わたし」が「ママ」の表情の変化に気付いていることに気付いていない。

ママは、学校のことには、あまり深入りしたがりからね、とまいは心の中で思った。

親が子どものことを気にかけていけないわけがない。この物語のまいとママの関係も特殊な例ではないだろう。今回は「学校のことには」と限定されているが、深入りしないのにはそれなりの理由があるのだろう。「したがらないからね」といったことから、それは今回だけでなく今までもそのようであったと考えられる。そして、深いうなずきというややオーバーなリアクションをまいは行っているのに、ママが何もリアクションを起さないことにより、まいは少しあきらめている感じがある。

「あまり」とあるので、ある程度は関わってくる。「したがらない」と「しようとな」とを比べると、意思がない、意欲がないという意味があることがわかる。「からね」とあり、「から」の後ろには「話さない」などが続くようにとらえられる。まいは実はママに話を聞いてほしいのだろうか。「心の中で思った」とあるが、単に「思った」のではなく「心の中で思った」とある。前述の「ママは、学校のことには、あまり深入りしたがりからね」が発話のように聞こえるからだ。

考えられる。声に出して言わないつもりであることが読みとれる。

気にしつつも聞かないスタンスのママ。都会っぽい。何かがきつかけ（ブラッキー）にかかわりすぎて、おせっかいで死なせてしまったこと）で、その反省から深入りしなくなったのだろうか。

まいは、ママについて分析できるぐらいの年齢であり、またママの心理を読みとる、観察力のある子どもであることが分かる。

「学校のこと、あまり深入りしたくない」とあるので、普段から二人は話しているが、ママの方から学校のことについてまいに尋ねたりはしなかった。ただ「したがらない」ということまでまいに伝えるほど、ママがまいの学校でのことに気にはしつつもあえて聞かないというスタンスをとっているように感じられる。

ママは、そうそう、と今まで何度もくり返した話を、うれしそうにまた語りはじめた。

「今まで何度もくり返した話を」とあるので、まいはこれから母が話すことを何度も聞いている。「うれしそうに」とあり、ママは、話す事に対して全く飽きていない。「また」とあるので、ママが嬉しそうにこの話をするのは一度目ではない。

よちよち歩きのまいの横を、つかずはなれず歩いてた。

「よちよち」とあり、まいの足取りのおぼつかない様子が分かる。それに対して「つかずはなれず」とあるので、ブラッキーがそのまいの足取りを邪魔しないように、ペースを合わせて歩いていた様子が分かる。

まいは、その「小さな女の子」がまるで自分と関係ない子のように言った。

よく脱走する子であった「わたし」であるが、今の自分からは、そんなことをしていた様子が想像できない。手間のかかる子であったという事実を、認めたくないのかもしれない。わざと関係のないように言ったのか。もしくは、単純に記憶が無いだけか。

「小さな女の子」と書かれているが、前の文を見ると、「小さな子」と「小さな女の子」の二つの表現が使われていた。この前の文を比較してみると、「小さな女の子」としているのは、母が慌てて外を見えずっと先、つまり遠くにいる子供を見つけたときである。遠くにいるので性別まではわからないため、「小さな子」としているのだと思う。

次に、「小さな女の子」としている前文は、視点が近いため、性別が識別できているのだと思う。ここでの「小さな女の子」は「歩いている」と書かれていて、動作をしている。この一文は、遠くにいて見つけられるまいのことではなく、自分から歩くという行為をしているまいを指しているのではないかと思う。「小さな女の子」より、より具体的にまいを指していると思う。

まいにとってこの話は何度も聞いたことのある話ではあるが、自分の記憶にはないため、「自分」と「小さな女の子」を結びつけていない。

まいはこの話を何度もママから聞き、自分の頭の中にすでに絵として存在している。しかし、実際自分自身の体験としての記憶はないため、その絵の中に自分をあてはめることができている。他の一文から、まいは初めての話なら共感、自分を重ねることができていることがわかる。聞けば聞くほど、自分のことと切り離してしまいう子なのだろう。



それは、たぶん、おばあちゃんの作戦がちだ、とまいはひそかに思った。

この一文から、まいの性格が分かる。この部分は、まいの心の中で思ったことだが、同じような文があり、「ママは、学校のこと、あまり深入りしたがるからね、とまいは心の中で思った。」という文もまいの心の声である。ママとの会話の間によく入るこういう文から、まいはいろいろなことをすぐ考えてしまう。そして、そのことをあまり口には出さない性格だということが分かる。

まいは、ようやくその子が、自分と関係があるように思えてきた。

記憶の片隅にあった、おばあちゃんの言葉などが思い出されて、昔の自分と、今の自分のつながりを認識し始めた。前文に「このところは、初めて聞く話だ」とあるが、なぜ、初めて聞いたのに関係があるように思えるのだろうか。

「思えてきた。」とあり、完全に「思った。」わけではない。最初の部分は、よく聞かされていたため、客観的に、自分とは離れた存在として話ができるようになったが、このところは、初めて聞く話であるので、より一層興味が湧き、自分と関係のある話として聞くようになった。

「わたしの知らない頃の話」であることは変わっていないが、自分、とその子のつながりを感じ始めている。「初めて聞く話」の中にはまいのよく知るおばあちゃんやママが登場し、まいにその女の子とのつながりを感じさせたのか。

「ようやく」や「思えてきた」とあるので、まいは今までは、ママのエピソードの中で登場したその子が自分と関係があるように思え

ていなかった。また、「ようやく」には、長い期間、その状態が続いていた印象を受ける。まいはその日の話の中だけでなく、今までママが話してくれたいたブラッキーとのエピソードの中でも「小さな女の子」と自分自身を結びつけることができているのではないか。

まいがママの話に引き込まれている変化の様子がわかる。「その子」とは話の中に登場するまい自身のこと。何度も聞いた話なので客観視できてきたが、知らない話で自分の身体感覚や感情を結びつけている話を聞くことで、自分のこととして身近に感じるようになってきている。

「自分と関係があるように思えてきた」とあるので、「自分だと思えた」と違って、徐々に関係がある人物であると認められるようになってきた。

ママは、わざとコホンとせきばらいをした。

ママの言うことは聞かなかった、という少し自分にとって恥ずかしいような話をしたため少しばつの悪さを感じている。また、ママが話を転換させようとしているのも分かる。まいは、おばあちゃんがニヤリと笑ったことに対して笑ったのだが、ママは自分のことを笑われたと思ったため、ばつが悪かったのか。

次の日からは、それが生き物じゃないってわかったみたいで、ブラッキーが知らん顔するので、ブラッキーこれは何？昨日あんなにほえてたのに、つてからかったら、あら、わたし、そんな物にほえました？つてすました顔をして通り過ぎてたわ。

「次の日からは」ということから、次の日には克服できて、それ

降「迎え」という行為も継続されていた。

「それが生き物じゃないってわかったみたいで」とあるので、昨日精いっぱいママを守るためにほえ続けていたが、ドラム缶が何もアクションを起さないということをブラッキーが理解したと推測している。ブラッキーは賢く、理解力と順応力の高さがうかがえる。

「ブラッキーこれは何？昨日あんなにほえてたのに、つてからかったら」とあり、落差からついついじめてしまうとい心理がママに働き、記述されていないが、ママがニヤニヤしながら言っているということが容易に想像できる。

「あら、わたし、そんな物にほえました？」は、ママが想像で言っているにしろブラッキーのセリフである。「わたし」ということからブラッキーがメスであったことがわかり、「そんな物にほえました」からは、少しお高くとまっていたことが伺える。

「つてすました顔をして通り過ぎてたわ」からはスルーというより、気にはしつつも、これとは関係がなかったという感じがする。

**おばあちゃんは、一人になったからつてこたえるような人には思えなかったが、ブラッキーがどんなふうにも死んだか、まいは知っている。**

接続助詞「が」を境に、この文は二つに分けることができる。まず前半部を見てみる。ここには、「まいは」という主語が隠されており、重文であるといえる。おばあちゃんは一人になったからつてこたえるような人には、まいは思えなかった、となる。なぜまいは、そのように思ったのか。おばあちゃんは、ブラッキーを信頼していたり、よくものごとを考えていたりするということがある。一人で生活することになっても、大丈夫だとまいも感じたのだ。

後半部はブラッキーの死に方を説明する導入となっている。だが、ここで注目するのは、前半と後半の対応についてだ。接続助詞「が」は逆説の働きであるはずだが、ここでの対比はどこだろうか。まいの「思えない」と「知っている」なのか、「おばあちゃん」と「ブラッキー」なのか。この文章は少し不自然なように感じてしまう。ここでの対比は、副助詞「は」と格助詞「が」があるので、後者の「おばあちゃん」と「ブラッキー」の対比であると考えられる。

おばあちゃんは、一人になったからつてこたえるような人には思えなかったが、ブラッキーがどんなふうにも死んだか、まいは知っている（だから、おばあちゃんはこたえたのではないかとまいは想像した）と補うと、これ以降の「センターでもう少しは長く生きてだろう。」という箇所がより詳しく説明していることになる。

**ママをなぐさめようとしたのか、一生懸命しつぽをふろうとし、首をのばしてママの手をなめようとしたが、もうその力がなく、最後はしつぽがパタンと落ちて、ブラッキーは死んだ。**

「一生懸命しつぽをふろうとし」、「首をのばしてママの手をなめようとした」とあるので、どちらも行動しようとしたが、実際にはできなかった。「もうその力がなく」とあるので、二つの行動のどちらをも行う力がなくなつた。

この描写は、ママの語りの描写である。まいの記憶のなかでこの部分だけがスポットライトを浴びたように浮かび上がっている。毎回話をするたびにママが泣くという強烈な印象からも、強く記憶に残っているのではないだろうか。

そういう死に方だったから、ブラッキーがママにうらみをもっていると考えられなくなかったが、まいにはそうは思えなかった。

ママの主観の入ったストーリーを聞いていながらも、ブラッキーとママの心のふれあいについて、まいは考えを巡らせることができていく。

ママはブラッキーの死に対して引け目のようなものを感じているが、第三者的立場にあるまいが、そうではない、と自らの考えで感じていると示すことで、読み手にもブラッキーとママの絆の深さを伝えることができる。

それから「よし」と大声で言った。

この一文は『ママの言うことをきくとき』の話と合わせて初めて意味を得る。「待て」と「よし」だけは、言うことを聞いていた。だから、「よし」といったのだろう。

『ママは小さな声で「待て」とつぶやいた。』

⇔ 対応している

『「よし」と大声で言った。』

なぜ「大きな声」で言ったのか。これまでのブラッキーに対する甘え（守ってくれていること）や、早く死なせてしまったことに対する辛い気持ちを振り切り、ブラッキーと別れる決心をしたことが、声に現れているのではないか。気持ちに整理がついたことで、声が大きくなった。

パパの方が「冷静な大人の受け止め方」なんだろうけれど。

冷静な大人の受け止め方に「」がついている。このことから、ま

いはこれを強調したい。そして、「けれど。」で終わっていることから心残りが見受けられる。つまり、「冷静な大人の受け止め方」は「冷静」「大人」という点では正しいと感じてはいるが、「けれど。」とあり、何か違う、と感じている。思春期の曖昧さを表現している。

パパの言う「事実」と、心の中で動く「物語」は全然別のものなんだってことにも、まいは気がつきはじめた。

「全然別のものなんだってことにも」という表現は、語り手の言葉というよりは、まいの立場から書かれているようであり、まいが発見したというニュアンスが文中に表れている。また、「も」とあることから、まいが気がつきはじめたことはこのことだけではないことが分かる。

「心の中で動く」から、まいがママの話聞いて心を動かされたということが読みとれる。

パパは黒いかげのことを、ブラッキーの死のことで罪悪感を持っているママの気のせいだと思っている。それが「事実」。人の心の中で動く「物語」とは、黒いかげをママがブラッキーだと思っていること。

まいは「なんと、自分に都合のいい考え方、とまいは一瞬あつげにとられたが」とあるように、ブラッキーが成仏できずに今も駅まで迎えに来ていると言うママに、一瞬あつげに取られているが、ここではそんなママの考えを「物語」として受け入れている。

ママ、パパを違う考えを持つ存在として捉え、どちらかを選ぶのではなく両方の考えを認めるような、広い視野を持ち始めた。

二つを混同してはいけなけれど、どちらが自分にとっての「真実」か

は、きっとそのときどき、ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう。

「真実」とあり、嘘偽りのない本当のこと。偽りのない物と認識されてきた事柄（事実↓本当にあった事柄）。「きっとそのときどき」とあるので、毎回ではない。「ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう」とあり、他人がどのように感じるか、事実がどうであるかは別にして、自分の心の中だけに留めて信じるものは自分で決めることができる。

「事実」と「物語」を混同してはいけない。でも、その二つは、どちらかを「真実」にしてもいいのである。それを決めるのは自分自身であるし、「物語」を真実だと受け入れてもいいのである。

「真実」とは、この場合生き方、とも言い換えられるのではないだろうか。自分の人生で選択を迫られる時、生き方を決めるのは、ひそかに自分で決めるということである。「なんだろう」というあいまいな表現から、まだまい自身は自分の立場に悩んでいるということが読みとれる。

### 三 考察

#### (一) 解釈が分かれる原因

##### 1 家族の捕らえ方の違いの現われ

個人の家庭において「母」の役割はそれぞれである。この物語で、母、父はまいの目を通して描写されている。しかし、読者は無意識に自分自身の家族と照らし合わせながら読んでいる。

まいのママの本心を、ブラッキーの話を嬉しそうにする、やや潔癖症である、などの本文の情報を手がかりにして考えてみると、解釈が

分かれるかもしれない。

##### 2 物語の仕掛け

この物語は三人称の語りである。しかし、まいの心情に寄り添った視点から描写をしている。よって、この物語上で語られることの真偽は読者にはわからない。まいが体験を語る上で、自分で物語る際に、過去の情報があいまいになっていること、反発や共感すること、あえて詳細に語らなかったこと、などが物語に影響を与えている可能性もある。読者は、読む行為の中で語り手によって騙されているかもしれない。

ブラッキーの話については、ママの語る話を、まいに寄り添った視点で物語る形式をとっている。どこまでが何度も聞いた話なのか、どこからがはじめて聞いた話なのか、解釈が分かれる。

まいは母の話を聞きながら「ああ、これは自分の話に思えてくる」と思い、徐々にお話に感情移入していく。結果的に、まいはどこからが聴いた話か、自分で見たことか、分からなくなっている。よって、読者もどこまでがまいは何度も聞いた話なのか、どこからがはじめて聞いた話なのか分からなくなり、解釈が分かれる。

#### (二) 物語の一文読みで解釈が集中する箇所

まいは、ママによって語られるブラッキーの話を、自分と関係がない話のように聞き始めた。しかし、途中から自分と関係があるように思い始める。ママを通じて語られる自分の過去の話では、まいがよちよちと歩き回り脱走することをママはクツクツと笑いながらおかしそうにしている。一方まいはそれを聞いて、自分がブラッキーよりも人間扱いされていないみたいだと、ママの自分への対応に反発している。

その後、話の中におばあちゃんが出てきて、「まいは知らない景色の中を自分の足で歩いてみたかったんだ、しかつちやいけないうって言った」ことやブラッキーがまいを守ってくれたであろうことに対して、ママは苦笑しているが、まいは自分と関係があるように思い始めるのである。このように、このママとまいの反応の違い、対比が見られる。

このような、まいの心境の動きが見受けられる文に読者の目が集まるのは、この反応の差に違和感を覚えるからだと考えられる。なぜ、まいの反応は変化したのか、というところに読者は興味を持つ。

この二箇所以外に解釈が集中するところは、まいのママへの発言、ママとパパへの言及である。

まいは、初めは自分とは無関係であるような態度であったが、ママとパパに対して、「二つを混同してはいけなけれど、どちらかが自分にとつての「真実」かは、きつとそのときどき、ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう。」と述べ、自分と家族との関係をじぶんなりに消化しようとしている様子がうかがえる。

注目の集まる箇所は、家族関係に対するまいの心境を表す箇所であるといえるだろう。

### (三) この物語が語られた理由

#### 1 ママが語った理由

ママは、語り初めは怪談話を求められて語り始める。しかし、黒い影がブラッキーだと思いつつも気味が悪いわけでない、ただ「思い出してしまふ」と述べている。ブラッキーが死んだ場面を話すときにも泣いてしまふが、まいに何度も話しているのはなぜか。辛いことを話す、という行為は、相手に聞いてもらってつらさを共有すること

に意味があるといえるかもしれない。ママはまいに辛い思い出話やまいの可愛かった頃の話聞いて欲しかったのだろう。死んだ話を何度もしたことに付け加え、今回は今まで話さなかった、おばあちゃんがまいの味方に付いたというエピソードも話していることは、ママが今回話す際にはより詳しく情報を追加していることがわかる。今回まいに話すことで、最終的にママはブラッキーの霊に「好きなところに行きなさい。」と言って、ブラッキーに対する辛い気持ちを消化できた。ママは物語ることで、自分の問題を解決できた。

#### 2 まいが語った理由

まいはなぜこの「ブラッキーの話」を語りだしたのか。手がかりとして、物語の流れを確認してみる。

冒頭では、ママとの二人きりの夕食を終えてティータイムを過ごしている。まいは、つい、ぞくぞくとする怪談話をママに求める。ママはすぐ話を終えるが、まいはおばあちゃんの家でみたブラッキーの昔の写真を思い出し、ブラッキーの続きの話を聞こうとする。ここで、おそらくまいはおばあちゃんとの接点やおばあちゃんの話聞き出したという気持ちがあったのではないかと予想される。ママは自分の話を一方的に話しはじめ、学校の話には深入りしない。うれしそうにまいの幼いときの活発な様子、ブラッキーの様子を話す、まいは、客観的に聞いている。

ママはブラッキーが死んだ場面を話すときにいつも泣いてしまふことにも、ママがブラッキーの霊を相手に命令をすることにも動じない。しかし「ぞくぞくつ」とする感覚を覚える。パパにその話しをするが、本気にしない様子から、「冷静な大人の受け止め方」を知る。「この世

のものではない」ことに興味を持ち、ぞくぞくとした話を求めていた  
まいは、このブラツキーの話から「おごそかなもの」を感じ取った。  
そして、自分にとっての真実を「ひそかに自分で決めてもいい」のだ  
と思うようになる、この発見を語ることは、まいの今後に影響を与え  
ていくのだろう。ここに語りの理由があると考えられる。

## 紅鯉（丘修三）

寺田守



### 一 作者と作品について

丘修三（一九四一〜）は、熊本県生まれの児童文学者。東京学芸大学および東京教育大学（現・筑波大学）で障害児教育を専攻し、卒業後は東京教育大学附属桐が丘養護学校など、養護学校教員として二五年勤務した。一九九二年三月に病氣退職後、執筆に専念するようになる。一九八七年『ぼくのお姉さん』で日本児童文学者協会新人賞、坪田譲治文学賞、新美南吉文学賞を受賞した。一九九三年『少年の日々』で小学館文学賞を受賞。二〇〇一年『口で歩く』で産経児童出版文化賞を受賞した。

「紅鯉」は、作者の郷里熊本を舞台とした短編集『少年の日々』（一九九二年刊）の中の一編である。『少年の日々』には、他に「女郎グモ」「ユキ彦」「メジロ」が載せられている。それぞれ子ども遊びを素材にとり、「ぼく（修ちゃん）」の目から見た人間の姿が描かれている。

教科書には「紅鯉」が平成八年から一一年まで、東京書籍五年生教科書に掲載された。また同じく「紅鯉」が平成二三年から三省堂六年生教科書に掲載されている。出典では登場人物の会話はすべて熊本方言で書かれているが、教科書に掲載されるにあたり、共通語に変えられている。

### 二 叙述について

町中を南北に流れる川は、せきがしまると、たちまち二、三十センチの浅せに変わってしまい、しばらくは町じゅうの子どもも大人も、手に手にあみやもりを持って、魚とりに夢中になる。

「たちまち」とあるので、すぐに。用水路から川に流れ込む水が大量であったことがわかる。「二、三十センチの浅せ」なのだから、水路からのせきがしまっても、上流からの水の流れはある。「しばらくは」とあるので、せきをとめてから数日程度だろう。「町じゅうの子どもも大人も」、「夢中になる」のだから、大勢の人間の心をとらえていた遊びだった。ただし、年齢は幅広いが、男性のみ。女性は魚とりに夢中になっていない。

ぼくは麦わらぼうしにゴムぞうり、半ズボンにランニングシャツといういでたちで、えの短いあみをかた手に、魚を求めて川の中を歩き回った。「麦わらぼうし」は強い日差しを避けるため。「ゴムぞうり」は川の中に入るのに、濡れても大丈夫な履き物。「半ズボン」も川の中に入るため。半ズボンが濡れない程度の深さにしかならない。「ランニングシャツ」はタンクトップの形をした白い下着。水の中に手を深く突っ込んでも袖が濡れないような格好をしている。「えの短いあみ」はすばや

く動かして魚を捕らえるためにえが短い。

それでもときに、浅い水たまりににげおくれたやつが残っていることもあって、三十センチ以上もあるコイをとったという友達の話の話を聞いたりする、いつか自分にもそういう幸運がまいこんでくるような気がして、しつこく川の中を歩き回った。

「ときに」とあるので、たまには浅瀬にコイやウナギがいる。「幸運がまいこんでくる」とあり、力量でなくて運で大物のコイが手に入るとぼくは考えている。「しつこく」歩き回っており、簡単にあきらめることなく何度も同じ場所を確認していることがわかる。

そちらには人がかげがなく、なんとなく幸運が待っているような気がして、ぼくはその支流の方へ入っていった。

「なんとなく」なので、特に根拠があったわけではない。直感的に人がいないところに大きな獲物があるような気がした。「幸運が待っている」とあり、幸運がぼくに見つけられるのを待っていると、ぼくは考えている。

ぼくはそつと音をたてないように土手に上がり、注意深く川もの下に目をやりながら、岸辺のくさむらをふみしめて歩いた。

「そつと音をたてないように」上がったのは、獲物であるコイやウナギに気づかれて逃げられないようにするため。「注意深く」「目をやりながら」なので、移動しながらも変化を見逃すまいと、川の支流を見つめ続けた。「ふみしめて」とあるので、力をいれてしつかりと踏みながら。獲物を見つけたらすぐに行動できるようにするためののか、

それとも無造作に歩くことで大きな音をたてないようにするためなのか、いずれにしても視線だけでなく歩き方も注意深くなっている。

胸がきゅつときん張し、ぼくは立ち止まってじっと目をこらした。

「きゅつときん張し」とあり、胸が高鳴り、鼓動を感じるような様子。「じっと目をこらした」のだから、波紋のあたりに視線を固定して、今まで以上に注意深く見つめた。

ぼくはしのび足に歩いて、そつと水に足を下ろし、あみを川下に構えると、左手をぐいっともの下につっこんだ。

「しのび足」「そつと」とあるので、振動や音をたててコイに気づかれないように近寄った。逆に手を突っ込む時は、そろそろとではなく「ぐいっと」。あみのほうへコイを追い出すために、わざと気づかれるようにした。

とたんに、何かを激しく手をはじいた。

「とたんに」とあるので、すぐに。「何か」とあり、目にはコイの姿は見えていない。「激しく」「はじいた」ので、手がコイのすぐそばにあり、コイが尾を左右に振ってあたったのだろう。

ぼくはあわててあみをあげた。

コイをあみに追い出すつもりではいたが、思っていたよりもすぐに反応があったことと、思っていた以上に手の近くにコイがいたことであわててしまった。



と、そのとき、だれかがぼくの背中に声をかけた。

「そのとき」というのは、手あたりしだいに周囲をあみですくっていた時。ぼくの急いでいる様子を見て、おじさんは話しかけてきたのだろう。「だれかが」とあるので、誰が話しかけてきたのか最初はわからなかった。

ぼくは、となりのうちのシャモを思い出した。

おじさんの顔がシャモに似ていると、ぼくは思った。会話の内容よりも、おじさんの顔に意識が向いていることがわかる。初対面なのだろう。「故郷」でヤンお婆さんの登場する場面では、「わたし」はヤンお婆さんをコンパスに喩えていた。

「コイみたいな……。」

「みたいな……。」と、断言せずに、ぼかして言っている。コイみたいな何か大きな物、という言い指し表現。はっきりとコイを見たわけではないので、自信がない。

おじさんは鼻の横を人さし指でこすりながら、細い目でぼくを見た。

「人さし指でこすりながら」とあるのは、おじさんの癖なのだろう。「細い目で」とあるので、目を細めたのではなく、おじさんはもともと細い目をしている。

それから、やおら右手であみを構えると、ぼくよりはるかにしんちょうに手早く、もの下をさぐった。

「やおら」とあるので、落ち着いてゆっくりとあみを構え始めた。

急に、いきおいよく構えたのではない。「ぼくよりはるかに」とあり、ぼくも注意深く藻の下に手をつっこんでいたが、それよりもさらにしんちょうに手早く動作を行った。

「……………」。

おじさんの問いにぼくは返事をしなかった。本当にコイがいた、と断言することためらいがあったためだが、返事をしないことで、かえっておじさんに不快感をあたえることになった。

ぼくはしだいに自信がなくなっていた。

「しだいに」とあるので、本当にコイがいたのか、振り返ってみればみるほど、だんだんと自信がなくなった。

確かに、何か大きな物がゆらりと動いたように思えたし、あの手にふれた感じよきは、直感的にコイだと思っただけで、今ではそれがコイだったかどうか、もう自信がなかった。

「確かに」とあるので、大きな何かが動いたことは間違いないと思っっている。「見えたし」とあり、見えたことと触れた感觸の二段階の根拠がある。「今ではもう」とあるので、最初は自信があったが、だんだんと時間がたつにつれて自信がなくなっていた。

それから、横目でぼくをにらむと、ゆっくりと川下の方へ歩いていった。

「それから」とあるのは、あみのごみをはたき落とした後。「横目で」にらんでいるので、ぼくに向き合っただけではなく、別の方を向きながらにらんだ。「ゆっくりと」なので、あわてたり、急いだりす

ることなく歩いて行った。

けれども、期待はむなしかった。

「むなしかった」とあるので、期待にこたえる成果はなく、無駄におわった。

それから、ぼくはその小川を下って行って、再び本流の方へもどった。支流から本流に舞台が移った。

そして、何気なく上流の浅せに目をやったとき、ぼくは自分の目をうたぐった。

「何気なく」とあるので、コイをさがして注意深く目をむけたわけではない。たまたま目に入った。「目をうたぐった」とあり、見えたものが本当かどうか、にわかには信じられなかった。幸運が舞い込んできた。

ぼくは幸運に舌なめずりしながら、さりげないふうをよそおい、コイに気づかれないように静かに川に下りた。

「幸運に舌なめずり」とあり、紅色のコイの発見を幸運だと考えている。ペコちゃんのように本当に舌なめずりをしているのでなく、心の中でしめしめと思っている。「さりげないふうをよそおい」とあるが、よそおっているので、意図的に演じている。さりげなさを演じたのは、上流や下流にいる人に気づかれてコイを横取りされないため。視線を固定したり、身をかがめたりしてコイを見つけたとばれないように気をつけた。さりげなさは、コイに気づかれないためではない。コイに

対しては、あわてたり急いだりせずに、ゆっくりと、音を立てないように注意しながら川に下りた。獲物をつかまえる瞬間の動作とは異なった様子で近づいている。

とつさにぼくはあみを出した。

「とつさに」とあるので、瞬間的に、すぐに。支流の時はあわててあみをあげたが、今回は素早くあみを出した。

しかし、そのあみをかいくぐって、赤いかたまりが矢のように後ろの方へ飛んでいくのが見えた。

「かいくぐって」とあるので、あみをすり抜けて。まっすぐ泳いだのではなく、機敏に小刻みな変化をつけながら泳いだ。「赤いかたまり」なので、はつきりと姿形をとらえたわけではなく、色だけが確認できた。「矢のように飛んでいく」とあり、泳いでいる様子を矢が飛ぶようにと喩えている。それくらい素早い速度だった。

ぼくは身をひるがえして、ばしやばしやと浅せを追いかけて走った。

「ひるがえして」なので、振り向いて。「ばしやばしやと」走ったのだから、もう静かにコイに気づかれないように動こうとは思っていない。激しい音と波を立てながら走った。同様に周りの人に気づかれないうようにという意識もなくなっている。

まったく、いっしゅんの出来事だった。

「まったく」というのは、完全にや全然といった意味ではなく、本当に、実にという意味。「いっしゅんの出来事」だったのは、コイがぼ

くに気づいて逃げるまでの出来事。

ぼくはぼう然として、深みをながめていた。

「ぼう然」は気が抜けて、ぼんやりしている様子。神経を集中させてコイに迫っていたが、逃げられた今となっては、ぼんやりしている。

ぼくの胸に、じわっと口おしさが広がっていった。

「じわっと」なので、捉え損ねてすぐにくやしなかったわけではない。徐々に、少しずつ残念な気持ち膨らんでいった。

やがて、ぼくのただならぬ様子に気がついて、川上と川下にいた者たちが走ってきた。

周りの人たちに気づかれた。「ただならぬ様子」とは、ぼう然としている様子だけでなく、その前のぼしやばしやと走ったことも含まれているだろう。「走ってきた」のだから、周囲の人たちも、ぼくの動作から大物を予感したのかもしれない。

「ベンゴイ(紅鯉)。」

ぼくはぶっきらぼうに答えた。

「ベンゴイ」とカタカナ表記なのはなぜだろうか。地の文では紅鯉と漢字表記になっている。このときのぼくは、ベンゴイが紅色のコイを指す名前だと知ってはいるが、名前の意味は知らなかったのかも知れない。「ぶっきらぼうに」とあるので、返事の仕方に愛想がない。ふてくされたような言い方だったのかもしれない。顔見知りの中学生にばれたのがくやしかったというよりも、捉えられなかったくやしさが

原因だろう。

それは、ぼくがさつき示したのよりいくぶん大きいような気がした。

「それ」は、中学生が両手で示したベンゴイの大きさ。「いくぶん」とあるので、少し、ちよっとだけ大きい気がした。

「ほんとにいたのかい、修ちゃん。」

同級生のひろしは、ぼくのことを「修ちゃん」と呼んでいる。おそらく作者の修三の名前をもじったもの。「修ちゃん」という呼び方は、家族や親しい間柄の年上の者が、年下の者に使うような呼び方である。だがひろしがぼくのことを「修ちゃん」と呼ぶのは、年下や目下のような存在と思っているからではなくて、距離の近さや親しみを表しているからだろう。

大人たちの間で、コイはしだいに大きくなっていった。

「大人たちの間」なので、子どもではない。大人同士のやりとりの中で起こった。「しだいに」とあるので、だんだんと、伝言を重ねるにつれて、コイのサイズが大きくなった。

ぼくが最初示したときのコイとは、まるで別のコイほどの大きさになっている。

「示した」のは見せたのではなく、手でコイの大きさを示したということ。「まるで」とあるが、まるで別のコイのようだ、といった喩えと、まったく別のコイだ、といった意味と二つとれる。ここでは後者の意味だと考えたい。

もう一人の中学生が首をひねった。

「首をひねった」とあるので、首をかしげた。疑問に思っている。

ひとしきり深みをのぞいて、おじさんはふり返って言った。

「ひとしきり」なので、しばらくの間熱心に。「ふり返って言った」とあるので、のぞきながら言ったのではなくて、のぞく動作を終えて、他の人たちのほうに向けてから言った。

おじさんはぼくを見ると、なんだといった顔をして、足下にぺっとつばをはいた。

「なんだといった顔」は、ちえつといったがっかりした表情。なんだお前か、という思い。つばをはくのもおじさんの癖なのだろうか。

ひろしがあわれむような目で、ぼくを見た。

「あわれむような目」なので、ひろしがぼくのことをかわいそうに、気の毒に思っている、ぼくが感じた。少し目を細めたような表情。ひろしは、ぼくが中学生にばかにしたように見下ろされたり、周りの人たちが次々と立ち去っていく状態をあわれんだ。

ぼくはあわてた。

「あわてた」とあるので、ぼくは思いがけない展開に、驚き、落ち着きを失った。それまではぼう然としていたり、ぶつきらぼうに答えていたが、のんびりしている場合ではなくなってきた。

ぼくはくちびるをかんで、おじさんをにらみつけるよりほかなかった。

「くちびるをかんで」とあるので、くやしさをこらえている。「にらみつける」とあり、信じてくれないおじさんへの怒りを目で表している。激しいくやしさと同時に、「よりほかなかった」とあるので、紅鯉がたしかにいる(いた)という証拠がなく、ぼく一人しか見ていないので、何を言っても信じてもらえないだろうというあきらめがある。ぼくはいつも言葉で説明することをあきらめてしまっている。

畑帰りなのか、しよいかごを背負っている。

ぼくを信じてくれるおばさんが登場する。「しよいかごを背負っている」ところから、おばさんはこの日も畑仕事をしている。町じゅうの子どもも大人も、男たちは皆魚とりに夢中になって遊んでいる中で、おばさんは日常の労働を行っている。魚とりコミュニティの外側のおばさんだけがぼくを信じてくれている。

ぼくは、みんなをうらめしく思った。

「みんなを」とあり、シャモに似たおじさんだけでなく、信じてくれない全員をうらめしく思っている。「うらめしく」なので、憎らしい。「腹立たしく思った」と「うらめしく思った」を比べてみると、うらめしい気持ちは、激しい勢いこそないが、思は一過性のものでなく、暗く静かに強い。

青年のあみに何もかからなかったのを見て、ぼくを取り巻く人の輪がくずれかけたときのことである。

「くずれかけた」とあるので、まだ完全にくずれたわけではない。

何人が興味を失って去っていきこうと動作を取り始めた。「ときのことである」という言い方は、ものものしく、語り手がこれから起こる出来事を強調して述べようとしていることがわかる。

川下からこしまであるゴム長をいたひげづらのおじさんが、じゃぶじゃぶと水をはじき飛ばしながら上ったきた。

「こしまであるゴム長」なので、誰よりも深いところに入っていき「じゃぶじゃぶと」とあり、気配を殺してコイなどに近づこうとはしていない様子がわかる。

手にとあみをかかえていた。

「とあみ」は投網であり、おもりのついた網を投げて魚を丸ごととらえてしまう道具。ぼくの「えの短いあみ」や、シヤモに似たおじさんや青年の「ひとまわり大きなあみ」、他の人たちの「もり」などと比べて、遙かに高性能の道具を持ったおじさんが登場する。「かかえて」歩かなければならないほどかさばる。

おじさんは陽気な声で聞いた。

「陽気な声」なので、ぎすぎすした場の雰囲気にとぐわなない声。いわゆる空気を読まない人人ではなくて、強力な装備で身を固めたひげづらのおじさんには余裕があるのだろう。

ひろしが目を丸くして、ぼくの顔を見た。

「目を丸くして」とあるので、驚いて目を大きく見開いている。紅鯉がいたことに驚いているのか、それともぼくが本当のことを言って

いたことに驚いたのか。「ぼくの顔を見た」とあるので、ひろしは紅鯉を見ながら次のセリフをいったのではなくて、わざわざぼくの顔に向かって言った。

「修ちゃん、ほんとに、いたんだ。」

「ほんとに」とあり、ひろしは紅鯉は本当はいないと思っていた。つまりぼくを疑っていた。「いた」でなく「いたんだ」なので、紅鯉の発見に驚いているのではなく、ぼくの証言が本当だったことに驚いている。

ぼくはひろしをにらみつけてやった。

「にらみつけて」とあるので、強くにらんだ。鋭い視線でひろしを見た。「やった」とあり、わざわざ鋭くにらむ表情をひろしに向けた。うらみに思っている対象の中にひろしも含まれていた。最もぼくに近い存在であったひろしにも疑われていたことに腹を立てている。

でも、そのときはもう、そんなことはどうでもよかった。

「そのとき」は、みんなに疑われて、ひげづらのおじさんのおかげで疑いははれた今。「もう」とあるので、疑われる前は紅鯉がとれずにくやしかったが、今になってみれば、くやしい気持ちはどこかにいつてしまった。「そんなこと」とは、紅鯉はぼくが手に入れるべきだったということ。「どうでもよかった」とあるので、紅鯉を手に入れることよりも、疑いが晴れたことのほうが、今のぼくの心の中では大きな出来事だった。

ぼくは胸を張って、例のわし鼻のおじさんをにらんだ。

「胸を張って」とあるので、胸をそらせて、自信たっぷりな様子。初めからうそをついていなかったのだ、と得意になっている。「例の」という言い方から、わし鼻のおじさんへの軽蔑の思いが、ぼくにはあったことがわかる。「にらんだ」とあり、ぼくはひろしに対してにらみつけたように、おじさんをにらんだ。おじさんをにらむのは二回目。紅鯉がいないと疑われたことへのうらみと、支流で疑われたことへのうらみとが重なっているのだろう。

ぼくはなんだか気がぬけてしまっ、深みのふちにぼんやりたらずんできた。

「なんだか」とあるので、わけははっきりとしない。なんとなく。「気がぬけてしまっ」とあり、気持ちの張りがなくなつた。気を抜こうとしたのではなく、自然と緊張感がほぐれてしまつた。「ぼんやり」とあるので、ぼうつとしている。頭がぐるぐる回転しているというよりも、今までに起こつたことを反芻している。「たらずんできた」とあり、しばらくじつとして、その場に立ち止まっている。

うそつきにならなくてよかつたという満足感の後から、じわじわと、あの美しいベンゴイを自分の手に入れることができなかつたくやしさが、また頭をもたげてくる。

「満足感」は、ひげづらのおじさんの強力な道具という「幸運」によつてもたらされた。一方の「くやしさ」は、自分の力で紅鯉を捕ることができなかつたという残念な思い。「じわじわ」とあるので、徐々に、少しずつくやしくなつてきた。「また」とあり、先ほど、疑われる

前のくやしさが蘇つてきた。「頭をもたげてくる」とあるので、疑われたことで、一時それどころではないと隠れていた気持ちが表に出てくる。

ぼくは急に胸がいつぱいになつて、あやうく泣きだしそうだった。

「急に」とあるので、くやしさがじわじわと蘇つたのとは対照的に、勢いよく、わずかな時間で。「胸がいつぱい」は、感情が高ぶつていく様子。おばさんの一言が、紅鯉がとれなかつたくやしさがじわじわ高まってきたぼくの心に、別の感情を急激に高ぶらせた。みんなが疑い、誰も信じてくれなかつたときのぼくの心細さ、かなしさが急によみがえつてきた。「あやうく」とあるので、もう少しのところ。急に感情が大きくなつたため、泣くのを我慢することが困難だった。「泣き出しそうだった」とあり、泣きそうだったが、実際は泣かずにすんだ。おばさんだけは、ぼくの気持ちを理解してくれていた。

### 三 考察

ぼくの経験した出来事とはいったい何だったのだろうか？ぼくは紅鯉の存在を信じてもらえず、確かな証拠を示すことができないまま、みんなに信じてもらえなかつた。とくにわし鼻のおじさんには、二回疑われた。どうすることもできないまま「うそつき」の烙印をおされそうになつた。何の非もないぼくは、しかし、何を言うこともできず、うらめしい思いを抱えて、黙つてにらみつけることしかできなかった。わかつてもらえないもどかしさに打ちのめされたぼくの経験は、不幸な出来事だった。

ぼくのまわりの人間を、ぼくとの距離で関係を図示すると次のようになる。年齢の違いだけでなく、持っている道具も子どもたちと大人とは異なっている。魚とりコミュニティのヒエラルキーといってもよいかもしれない。

わし鼻のおじさん

大人たち

青年

中学生

ひろし

ぼく

もつとも距離のあるわし鼻のおじさんに疑われたことをきっかけに、大人たちやついにはひろしにまで疑われたぼくは、まったく孤立してしまう。ひとりぼっちになってしまふ状況は、心細かっただろう。

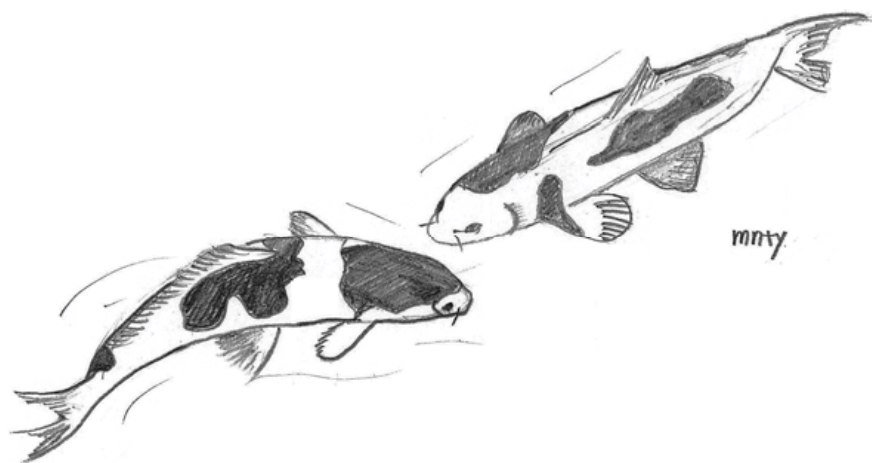
窮地に追い込まれたそんなぼくを救ったのは、とあみをかかえたひげづらのおじさんと、手ぬぐいをかぶったおばさんとの二人の人物だった。ひげづらのおじさんは、魚とりコミュニティの住人である。しかしほかの大人たちとは異なり、こしまであるゴム長と、とあみという強力な道具を持つおじさんは、魚とりにおいてはもつとも力をもった存在である。そしておじさんの道具によって、ぼくの疑いは晴れ、紅鯉は持つて行かれた。ぼくを救ったのは、たまたまやってきたおじさんと、彼がたまたま持つていた道具によってであった。

一方の手ぬぐいをかぶったおばさんは、男たちの魚とりコミュニティの外に位置する存在である。昼間から魚とりに興じる男たちを尻目に、おばさんは労働を終え、ぼくたちの元にやってくる。ひげづらのおじさんは、ぼくを窮地から救ってくれたが、ぼくの気持ちには無関心である。それにはたいしておばさんは、うそつきの疑いをかけられ、みんなに信じてもらえないぼくを慮っている。つまり、ぼくの経験は、

たまたま強力な道具をもっていたおじさんに救われ、魚とりコミュニティの外にいたおばさんがたまたまやって来たことで理解される、という経験だった。疑われたことが不幸な出来事であったとすれば、救われ、理解されたこともたまたまの幸運な出来事であった。もしひげづらのおじさんやおばさんがこなければ、ぼくはうそつきの烙印をおされていただろう。実はぼくの葛藤は何も解決されていない。

それではぼくの窮地をぼく自身の手で解決することはできたのだろうか？ 確かな証拠がない状況で、ぼくは「だって、いたんだもの！」とさげびたかったが、それはなんの証拠にもならないことを理解し、にらみつけるといふ抵抗の印を表しながらも沈黙していた。確かに、ぼくが丁寧に状況を説明したとしても、まわりの人たちは信じてくれなかったかもしれない。巧妙なうそだと、疑ったままという結果に至ったかもしれない。しかし、重要なことは、ぼくは、説明をして、それでも信じてもらえなかったのではなく、何を言っても無駄だとあきらめていた、という点である。ぼくの会話を抜き出してみると、そのことが顕著にわかる。ぼくは具体的な問いには返事をするが、詳しい説明を求められるところでは、沈黙している。信じてもらえないという結果だけをとれば、説明の努力をしても、沈黙を貫いても同じかもしれない。しかし、コミュニケーションの形としては全く意味が異なってくる。ぼくは信じてもらうための努力を放棄している。ぼくが陥った状況は不幸な出来事だったかもしれないが、解決のための労を自ら放棄して、成り行きにまかせたのがぼくのコミュニケーションの態度である。詳しく説明していれば、あるいは何人かは信じてくれたかもしれない。ぼくの気持ちも理解してくれたかもしれない。ひろしや青年は、ぼくの言葉に耳を傾けたかもしれない。だが、ぼくはそ

うせず、全てが幸運にも解決したあとで、ひろしをにらみつけること  
しかできなかった。こうしたコミュニケーションの形が紅鯉には鋭く  
描かれている。





## 星の花が降るころに（安東みきえ）

日下部 真依、口石 梨絵、児玉 萌、清水 愛美



### 一 作者と作品について

安東みきえは、一九五三年山梨県甲府市生まれの児童文学作家・絵本作家である。一九九四年毎日新聞社主催の小さな童話大賞で大賞を受賞、二〇〇一年に『天のシーソー』で第十一回椋鳩十児童文学賞を受賞した。

その他の作品としては、『どこまでいってもはんぶんこ』や『おじいちゃんのゴーストフレンド』、『頭のうちどころが悪かった熊の話』などがある。

「星の花が降るころに」は、光村図書の中学校国語教科書（一年）に掲載されており、教科書のために書き下ろされた作品である。教科書において、「つながりを読む」という単元の最初に設定されており、現代小説風に書かれているため、子どもたちも親しみやすく、場面展開や登場人物の心情の変化を読み取りやすい作品となっている。

### 二 叙述について

銀木犀の花は甘い香りで、白く小さな星の形をしている。

銀木犀の説明。冒頭にあることで、物語の重要なポイントであることを感じさせる。

そして雪が降るように音もなく落ちてくる。

「雪」とすることで銀木犀の白を喩えている。

去年の秋、夏実と二人で木の真下に立ち、花が散るのを長いこと見上げていた。

「長いこと」とは長い間という意味。

気がつくど、地面が白い星形でいっぱいになっていた。

「気がつくど」とあるので、散るのを見上げている間、地面は見えていなかった。長い間見ていたため、たくさんの花が散っている。

これじゃ踏めない、これじゃ もう動けない、と夏実は幹に体を寄せ、二人で木に閉じ込められた、そう言って笑った。

夏実は花を踏みたくないと考えている。木が二人を閉じ込めるため、わざと花をたくさん散らせたという考えをしている。

—ガタン！

—をつけることで、過去形の回想から現実に戻る事を表しているのか。「！」があることで、聞こえたのが大きい音であることを表す。

びっくりした。

主人公の感情であるが、地の文であることから、声に出していない。

去年の秋のことをぼんやり思い出していたら、机にいきなり戸部君がぶつかってきた。

「ガタン！」という音の原因が説明される。「ぼんやり」とあるので、なんとなく思い出していた。目的があつて思い出していたわけではない。「いきなり」とあるので、前触れもなく、突然ぶつかってきた。

戸部君は振り返ると、後ろの男子に向かってどなった。

ぶつかってきたはずの戸部君が怒っている。

「やめるよ。押すなよなあ。おれがわざとぶつかったみたいだろ。」

「わざと」とあり、意図的にぶつかろうとして行動したということ。

戸部君はわざとぶつかったのではないと主張している。

自習時間が終わり、昼休みに入った教室はがやがやしていた。

「がやがや」とは大勢が勝手にうるさく話し合うさま。

わたしは戸部君をにらんだ。

わざとでなかったとしても、「わたし」は「戸部君」を不快だと感じていることが分かる。「にらんだ」とあるので、むっとした表情で、じろつと眉間にしわをよせる様子で戸部君を見た。

「なんか用？」

挨拶もなく、要件をせかしていることから「わたし」の苛立ちが読み取れる。

「宿題をきこうと思って来たんだよ。そしたらあいづらがいきなり押してきた。」

「そしたら」と、聞かれてもいないぶつかった理由を加えて説明している。「戸部君」は「わたし」の不機嫌を感じて言い訳をしている。わたしだつてわからない。

「だって」は同様の意味。

いっしょだった小学生のころからわからないままだ。

「小学生のころから」とすることで、「わたし」が考えているのは「あたかも」の意味ではないことが分かる。

なんで戸部君はいつもわたしにからんでくるのか。

「わたし」が考えているのは、「あたかも」を用いた問題ではなく、戸部君の不可解な行動についてである。「いつも」とあるので、二度や三度の出来事ではない。

なんでサッカー部なのに先輩のように恰好よくないのか。

「わたし」の頭の中には恰好よいサッカー部の先輩が思い浮かべられている。

「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」

「そんなの」と問題を取るに足らないものとしている。

隣の教室の授業も終わったらしく、いすを引く音がガタガタと聞こえてきた。

初めて隣の教室の様子が分かる。

わたしは戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。

椅子を引く音が隣の教室から聞こえてきたすぐ後に立ちあがっていることから、立ち上がったことと隣の教室の状況が関係していると分かる。「押しつけるように」とあるので、立ち上がるのに戸部君が邪魔だった。

戸部君にかかり合っている暇はない。

「暇」とすることで、時間がないこと、「わたし」が焦っていることが分かる。

今日こそは仲直りをすると決めてきたのだ。

「わたし」が誰かと喧嘩をしていることが分かる。「今日こそ」としているため、何度か仲直りに失敗している。

はられたポスターや掲示を眺めるふりをしながら、廊下で夏実が出てくるのを待った。

「ふりをしながら」なので、本当は眺めていない。「夏実」を待っているの、喧嘩をしている相手は「夏実」であることが分かる。

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。

これまで二人は親友だった。「約束していた」と過去形であることから、今では違うのかという想像をさせる。「とは」とあるので、夏実とだけ約束した。他の友人とは違う特別な関係であることがわかる。

それなのに、何度か小さなすれ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。

「何度か小さなすれ違いや誤解」ということから、思春期の難しさゆえに、理由はないがなんとなく二人が離れていったのではないかと考える。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそっとなでた。

「お守りみたいな」や「そっとなでた」などの表現から、「わたし」はこの小さなビニール袋をとても大切にしていることがわかる。「みたいな」というのは、ビニール袋がお守りの形や大きさと似ているという意味なのか、それともビニール袋をお守り代わりに大切にしているという意味なのか。ここでは後者だと考えたい。

もう香りはなくなっているけれどかまわない。

「かまわない」とあるので、銀木犀の香りではなく、その花に込められている「何か」を大切にしていることがうかがえる。その「お守りみたいな」ビニール袋自体を大切に思っているのではなく、夏実とわたしの間の架け橋になることを信じているのではないか。

香水はもう無理でも試しにせっけんを作ってみよう、そして秋になったら新しい花を拾って、それでポプリなんかも作ってみよう……そう誘ってみるつもりだった。

挑戦できなかったことに誘うことで、前のような二人に戻ることができるのではないかと考えている。

夏実だって、わたしから言い出すのをきっと待っているはずだ。

お互いが相手から言い出すのを待っているのであれば、私から言うという決意の表れであり、自分を勇気付けている。「きっと」とあり、確信しているが、特に根拠があるわけではない。夏実も仲直りしたいと思っっているということを、自分に言い聞かせている。

そのとたん、わたしは自分の心臓がどこにあるのかがはっきりわかった。

心臓の場所がわかるほど、胸が高鳴っているということ。「はっきり」とあるので、心臓の位置を意識した。それくらい緊張している。

夏実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながらわたしからずっと顔を背けた。

「わたし」が話しかけたことに「夏実」は気がついたものの、なんとなくの気まずさゆえに「隣のクラスの子」を優先してしまった。夏実は「わたし」ほど「わたしとの関係」を元に戻したいとは思っていないのかもしれない。「とまどったような」とあるので、どう振る舞ったらよいか分からず困った様子。「ずっと」とあり、自然な様子で顔を背けた。

そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。

結局「夏実」は「わたし」に気付いていないふりをしてしまった。

音のないコマ送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

「夏実」に無視をされたショックから長く感じている。「変に」とあるので、普段は感じないような長さだった。コマ送りというのは非常にゆっくりとしたことの例えである。

騒々しさがやつと耳に戻ったとき、教室の中の戸部君がこちらを見ていることに気づいた。

「やつと」とあるので、しばらく呆然としていた。「耳に戻った」とあり、耳に騒音が聞こえるようになった。はっとした。戸部君に今の出来事の一部始終を見られていたのではないかと思っっている。

唇がふるえているし、目の縁が熱い。

今にも「わたし」は泣きそうになっている。戸部君に見られていたという恥ずかしさもあると考えられる。

きまりが悪くてはじかれたようにその場を離れると、窓に駆け寄って下をのぞいた。

戸部君に見られていたということを気にしており、恥ずかしさのためその場から離れた。「はじかれたように」というのは、おはじきのように飛ばされるイメージである。誰とも顔を合わせたくなかったのではないか。

どこも強い日差しので、色が飛んでしまったみたい。

「色が飛んでしまった」とあり、太陽に照らされ、色がわからないほどまぶしい状態。

貧血を起こしたときに見える白々とした光景によく似ている。

「わたし」は貧血を経験したことがある。夏実とのやりとりがそれほどショックだったということを強調している。外の明るさと廊下の暗さの差が強調されている。

わたしは外にいる友達を探しているふうに熱心に下を眺めた。

「探しているふうに」とあることから、実際は探していない。端から見て、わたしがなぜ窓の外を眺めているのがわかりやすいように、あえて「友達を探している芝居」をしているのではないか。

本当は友達なんていないのに。

これは二通りの考え方がある。

一つは、前文の「わたしは外にいる」にかかり、「本当は『外には』友達なんていない」という意味である。

もう一つは、後ろの文にかかり、「本当は夏実以外の友達がいない」という意味である。こちらで考えると、「わたし」は友達付き合いが苦手、もしくは夏実に依存していたのではないかと考えられる。

夏実のほかには友達とよびたい人なんてだれもないのに。

「夏実」を大切に思っているというプラスの面がある一方で、夏実に依存しているということもうかがえる。「なんて」とあるので、わた

しは夏実の他に友達を作ろうとは思っていないことがわかる。

もう九月というのに、昨日も真夏日だった。

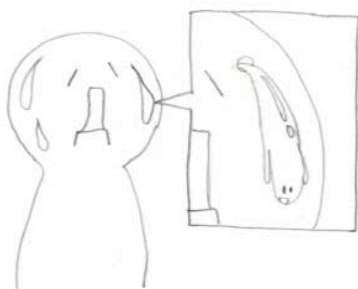
「もう」とあることから、暑いということへの嫌悪感がみられる。また、昨日も、とあるので昨日に引き続き今日も、暑い日であることが分かる。

真夏日とは、最高気温が三十度以上の日を言う。

校庭に出ると、毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそうに暑かった。

どれほど暑いかというのを、「毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいそう」という比喻を使って説明している。頭がボーっとして気持ちしがやきっとしない、どうしようもないくらいの暑さが想像出来る。

「ぬるぬる」という言葉には、「さらさら」にあるような清涼感はなく、また「どろどろ」というような粘り気、また汚さというイメージもなく、液体が流れ出てまわりつくようなイメージがある。



運動部のみんなはサバンの動物みたいで、入れ替わり立ち替わり水を飲みにやって来る。

次々と水場へやってくる運動部の部員たちを、サバンの動物に例

えている。

「やって来る」とあるので、「わたし」は水飲み場の近くにいることが分かる。

夏実とこのことを見られたのが気がかりだった。

昼休みの夏実とのすれ違いを見られたことを気にしている。

繊細さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言いだすか知れたものじゃない。

「みんなの前で」とあるので、他のクラスメイト達に、夏実との仲が上手くいっていないのを知られることを気にしている。

「知れたものじゃない」とあるので、予想もつかない。戸部君のことを信用していない事が分かる。

どこまでわかっているのか探っておきたかった。

実際に夏実との様子を見られてしまった以上、隠すことも出来ない。次に気になるのは、彼がどこまでを察して知っているのか、ということであった。

だいたいなんであんな場面をのんびりと眺めていたのだろう。

「あんな場面」とは、昼休みに夏実を待ち伏せしたものの、すれ違ってしまった場面である。

「のんびりと眺めて」といって感じたのは「わたし」であり、戸部君の心境は分からない。

それを考えると弱みを握られた気分になり、八つ当たりとわかってもらいにくくてしかたがなかった。

夏実との仲が上手くいっていないことは、「わたし」にとっては弱みであることが分かる。

また、「八つ当たりと分かっても」とあるので、実際戸部君には何の関係も無いのだが、他に苛立ちを向けようが無く、彼に対して八つ当たりをすることによってごまかしている。「にくらしくて」とは、憎悪という意味の憎いではなく、しゃくにさわる、腹が立つ、という意味である。

戸部君の姿がやっと見つかった。

「やっと」とあるので、しばらくの間校庭を見渡して戸部君を探していたことが分かる。

サッカーボールは縫い目が弱い。

友情もサッカーボールと同じようにほころびやすいものだ暗示しているようにも感じられる。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、黙々とボールみがきをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがひどく小さく、くだらないことに思えてきた。

「黙々と」とあるので、おしゃべりをしたり、怠けたりせずに取り組んでいる。真夏の炎天下で他の人がサッカーの練習をしている中、黙々とボールをみがく戸部君は、人が嫌がることに進んで取り組み、また物を大切にする真面目な人物だと捉えることができる。そんな戸

部君を見て、「わたし」の戸部君に対する見方が変わった。「なんだか」とあるので、「わたし」にも理由は分からない。「急に」とあるので、前触れもなく突然思えた。「思えてきた」と「思えた」とを比べると、「思えてきた」には、段々と思うことができるようになった、という意味がある。しかし「急に」なので、ゆっくりとはなくてどんどん思えてきた。

「自分の考えていたこと」とは、繊細さのかけらもない戸部君がみんなの前で何を言うか気が気でないということである。丁寧にボールをみがく彼を見て、彼はそんな人ではないと分かった瞬間、自分の考えが間違っていると気付いた。あるいは、夏実との関係のことを指していると考えられることもできる。しかし、この段階では夏実のことは未解決であり、くだらないことだとは思っていないはずである。

溶け出していた魂がもう一度引つ込み、やっと顔の輪郭が戻ってきたように気がした。

溶け出していた魂とは、暑さで、毛穴という毛穴からぬるぬると溶け出していた魂である。顔の輪郭が戻るとは、冷たい水に触れることにより、空気と自分の体との境界がぼんやりとしていた感覚がはっきりしたことの喩えだと考えられる。

ずっと耳になじんできた声だからすぐわかる。

「ずっと」とあるので、長い間、いつも。小学生から一緒の学校で、塾も同じなので、戸部君とはずっと一緒にいる。そのため、顔を見なくても声で彼だと分かった。

ハンドタオルから目だけを出して戸部君を見つめた。

目だけを出すという記述は夏実に無視された場面を見られたという気まずさと、どんなことを言われるのかという不安とから、しっかりと戸部君と向き合えないことを表している。

「ほら、『あたかも』という言葉を使って文を作りなさいってやつ。」

わたしが心配していたことは全く無関係の話題である。おそらく戸部君がわたしに気を遣ってあえて夏実の話題を避けて、この話題で話しかけてきたのだと考えられる。

にやりと笑った。

間をとることで、ギャグをより効果的にしようとしている。また、自信を表していることとすることもできる。「にやり」とあるので、声を出さず、表情だけで笑った。口元の口角を上げるような笑い方。

「あたかもじゃない。」

あえてギャグを言ってわたしをリラックスさせようとする戸部君の不器用な優しさが読みとれる。

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

こんな時にくだらないギャグを言ってきた戸部君にあきれている。同時に、戸部君の優しさに気付いて、普段との違いに困惑している。「わけがわからない」とあり、こんなことを言う理由が「わたし」には分からない。しかしプラスの意味をふくんでおり、これを境に戸部君に対する私の印象が「いいやつ」に変わっている。

中学生になってちゃんと向き合ったことがなかったから気づかなかつたけれど、わたしより低かったはずの戸部君の背はいつのまにかわたしよりずっと高くなっている。

「中学生になって」ということは、小学生のときは仲が良くきちんとして向き合っていたということか。もしくは、中学生になって異性として意識し始めたため、中学生独特の男女の隔たりがあったとも考えられる。「ちゃんと」とあり、相手に関心を持って向き合うということ。中学生になっても向き合っていたが、戸部君に関心をもって向き合っていないなかった。

わたしを気遣って声を掛けてくれた戸部君の成長を感じ、男らしく頼もしく感じている。

わたしはタオルを当てて笑っていた。

涙もしくは顔の表情を見られないようにするためだと考えられる。

涙がにじんできたのはあまり笑すぎたせいだ、たぶん。

戸部君の優しさに触れてあふれてきた涙を笑いのせいだと納得させることで、自分の気持ちをごまかそうとしていると考えられる。「たぶん」とあるので、本当にそうだとはいえない。「わたし」は思っていない。しかし涙の理由をつきつめようとも思っていない。

学校からの帰り、少し回り道をして銀木犀のある公園に立ち寄った。

二人の思い出の場所に行くことで、気持ちを切り替えようとしている。

銀木犀は常緑樹だから一年中葉っぱがしげっている。

わたしにとって、いつも葉っぱが変わらず茂っている銀木犀はずっと変わらない存在であると考えられる。

それをきれいに丸く刈り込むので、木の下に入れば丸屋根の部屋のようにだ。

「部屋のよう」とあるので、わたしにとって落ち着く空間だということがわかる。

夏実とわたしはここが大好きで、二人だけの秘密基地と決めていた。

二人の信頼関係の象徴である。

ここにいれば大丈夫、どんなことから木が守ってくれる。

実際は守ってくれなかったし、時間は流れ、わたしと夏実の関係は壊れてしまった。

そう信じていられた。

小学生の時の純粹だったころを思い出して、あの頃のほうがよかったと思っている。「いられた」と「いた」とを比べると、「いられた」には、自然と信じたのでなく、信じようと思った結果、信じることでできたという意味が分かる。今は信じようと思っても信じることができない。

木の下は陰になって涼しかった。



わたしを癒してくれる存在。

掃除をしているおばさんが、草むしりの手を休めて話しかけてきた。

おばさんが話しかけたくなるほど、わたしは真剣に銀木犀の木を眺めていたということだろうか。

どんどん古い葉っぱを落つこととして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。

わたしにとって変わらない存在であった銀木犀も変化していたということを知った。「どんどん」とあるので、次々と葉っぱを落とすとした。

でなきやあんた、いくら木だつて生きていけないよ。

木だつて生きていけないということは、人間はもつと生きていけないということを類推させる。

わたしは真下に立つて銀木犀の木を見上げた。

「見上げた」とあるが、わたしの銀木犀の見方が、変わらないものから変化するものへと変わっている。

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

わたしの視点が変わったことにより、今までと同じ景色なのに美しく新鮮に見えた。

ポケットからビニール袋を取り出した。

夏実との思い出と向き合おうとしている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にはらばらと落とした。

過去の思い出との決別を表している。

ここでいつかまた夏実と花を拾える日がくるかもしれない。

新しい二人の関係が始められるかも知れないと信じている。

あるいはそんなことはもうしないかもしれない。

未来はどうなるかわからない。

だいじょうぶ、きつと何とかやっつけていける。

わたしと夏実の関係について悩んでいたことからふっきれている。「きつと」とあるので確信している。

わたしは銀木犀の木の下の下をぐぐって出た。

過去のことは思い出として、新しい未来へ向かって生きる決意が表れている。

### 三 考察

(一) 戸部君に対するわたしの心情の変化した場面とその理由

わたしだつてわからない。いっしょだった小学生のころからわからないままだ。なんで戸部君はいつもわたしにからんでくるのか。なんで同じ塾に入ってくるのか。なんでサッカー部なのに先輩のように恰好

よくないのか。

↓わたしにとって、戸部君は理解できなくて、ただただうっとうしい存在である。

繊細さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言い出すか知れたものじゃない。どこまでわかっているのか探っておきたかった。

↓デリカシーのかけらもなく、信用できない性格である、というのが戸部君へのわたしの印象である。

だいたいなんであんな場面をのんびりと眺めていたのだろう。それを考えると弱みを握られた気分になり、八つ当たりとわかってにもにくらしくてしかたがなかった。

↓戸部君の行動が無性に腹立たしい。

なかなか探せないはずだ。サッカーの練習をしているみんなとは離れた所で、一人ボールをみがいていた。

サッカーボールは縫い目が弱い。そこからほころびる。だからグリスをぬってやらないとだめなんだ。いつか戸部君がそう言っていたのを思い出した。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、ボールみがきをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがくだらないことに思えてきた。

ずっと耳になじんでいた声だからすぐわかる。

↓戸部君の耳慣れた声に、親しみを感じている。

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

↓不器用な戸部君の優しさに気付き、今までとの違いに困惑している。

二人で顔を見合わせてふき出した。

↓心が通じ合った

わたしより低かったはずの戸部君の背はいつのまにかわたしよりずっと高くなっている。

↓私の目に、戸部君が頼れる男の子として映った。

☆戸部君に対するわたしの気持は、夏実のことで頭がいっぱいだったこともあり、最初は戸部君の行動が理解できず、うっとうしく目ざわりな存在であった。しかし、戸部君が一生懸命サッカーボールを磨いている姿を見て、彼の普段は見せないひたむきな姿に気づいたことがきっかけで、戸部君としっかり向き合えるようになったと考える。

(二) 夏実との関係についてのわたしの心情の変化した場面とその理由  
わたしは戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。戸部君にかかわり合っている暇はない。

↓夏実と仲直りしたくて、必死でそのことしか見えていない。

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。

↓二人の特別な関係をずっと続けると約束し合っていた。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそっとなでた。

↓二人の思い出の品を大切に持っている。

音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

↓夏実は無視されたことによりかなり動揺している。

本当は友達なんていないのに。夏実のほかには友達と呼びたい人なんてだれもないのに。

↓「夏実を大切に思っている」という非常に強いわたしの思い。

「え、葉っぱはずっと落ちないんじゃないんですか。」

「まさか。どんだん古い葉っぱを落っことして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。そりゃそうさ。でなきゃあんた、いくら木だって生きていけないよ。」

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

↓新しい発見に世界の見え方が変わって、輝いて見えている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にはらばらと落とす。

↓過去の決別

ここでいつかまた夏実と花を拾える日が来るかもしれない。それとも

違うだけかと捨てるかもしれない。あるいはそんなことはもうしないかもしれない。どちらだっていい。大丈夫、きっとなんとかやっていく。

↓夏実との関係にこだわることをやめ、未来が何の約束もない不確かな変化に富んだものであるということを受け入れ、希望を見出そうとしている。

わたしは銀木犀の下をくぐって出た。

↓過去のことは思い出として、新しい未来に向かって歩き出した。

☆最初は、わたしは夏実との友情に執着し、必死で仲直りしようとしている。しかし、ずっと変わらないと思っていた銀木犀の葉っぱも毎年の生え換わっているのだと知ったことにより、わたしを支配していた、夏実との友情の形が変化してしまふことを恐れていた気持ちがふっきたように思う。



## 少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）

井上 小夜、加藤 修治、中山 莉麻、野田 奏恵



### 一 作者と作品について

ヘルマン・ヘッセ（一八七七～一九六二年）はドイツ文学を代表する作家である。一九四六年に『ガラス玉演戯』などの作品でノーベル文学賞を受賞した。

ヘッセは一八七七年ドイツ南部のバーデン＝ヴュルテンベルク州のカルフに生まれた。十四歳でヴュルテンベルク州試験に合格し、マウルブロン神学校に入学するが半年で脱走する。悪魔祓いや自殺未遂の後シュテッテン神経科病院に入院した。このころの経験が『車輪の下』の元になっているといわれる。

一九〇四年にマリア・ベルニリと結婚し、三人の子供をもうける。この頃のヘッセの作品はノスタルジックで牧歌的な作品が多い。

『デミアン』執筆後、ヘッセは精神的危機を経験し、その後の作品には現代文明への強い批判と洞察が多く書かれた。

ナチス政権下ではヘッセの作品は「時代に好ましくない」とされたが、一九四六年にはノーベル文学賞とゲーテ賞を受賞した。

主な作品として『車輪の下』『春の嵐』『デミアン』『郷愁』『荒野の狼』『ガラス玉演戯』などがある。

訳者の高橋健二（一九〇二年～一九九八年）は、ドイツ文学研究者である。東京帝国大学ドイツ文学科卒業後、一九三一年にドイツへ留

学する。ヘルマン・ヘッセなどの作品の翻訳・紹介につとめた。一九五七年には、ドイツ文学を紹介した業績で読売文学賞を受賞した。一九六一年『ヘッセ研究』で東京大学文学博士となる。一九六三年、『ケストナー少年文学全集』により産経児童出版文化賞受賞、一九六八年には『グリム兄弟』で芸術選奨文部大臣賞を受賞する。一九六九年に日本芸術院賞を受賞、一九八五年には文化功労者とされた。

「少年の日の思い出」は一九三一年にヘルマン・ヘッセが発表した短編小説である。日本では一九三二年に高橋健二の翻訳が出版され、「少年の日の思い出」と邦題が付けられている。「少年の日の思い出」は現在日本でしか読むことは出来ない。この作品は日本で多く読まれているにも関わらず、ドイツでは殆ど知られていない。この作品の初稿は一九一一年に発表された「クジヤクヤママユ」であり、ドイツで収録されているのは全てこの初稿である。

教科書には一九四七年に国定教科書に掲載され、その後現在に至るまで六五年間以上、中学校国語科教科書に掲載され続けている。

### 二 叙述について

客は、夕方の散歩から帰って、わたしの書齋でわたしのそばに腰かけていた。

「わたしのそば」から客とわたしは親しげである。「夕方」という表現は、薄暗く、しんみりとした雰囲気を持っている。これから起こることは、決して明るいことではない、ということが予測される。「夕方の散歩から帰ってきて」というところから、客は夕方に訪ねてきたわけではなく、夕方以前に訪ねてきた。「わたし」の重複から、文的に客が主体ではあるが、「わたし」も強調している。

昼間の明るさは消えようとしていた。

前文の「夕方」とこの文の「昼間の明るさ」とから、明暗の対比が読み取れる。これからの場面が「夜」に変化していくことを際立たせると同時に、雰囲気も静かで暗くなっていくことが読み取れるような表現である。

窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。

一見穏やかな情景描写であるが、「鋭い」という言葉により、穏やかな中にも何か穏やかでないことがあるのではないかということが考えられる。つまりこの場合、良い思い出の中に、ふと隠れていたエーミールの思い出のことである。

ちょうど、わたしの末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、わたしたちは、子供や幼い日の思い出について話し合った。

幼い日の思い出という表現は本編への導きである。時間は、子供が寝る時間であるため、夜九時ごろだろうか。

「子供ができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとが、またよみがえってきたよ。」

「幼年時代の」というところは、子供のころの自分へと気持ちに戻っていく様子を示しており、幼年期の話をする前置きとなっている。

それどころか、一年前から、僕はまた、ちよう集めをやっているよ。

「ちよう集め」が不意に出てきた、というところからキーワードであることが推測できる。気になるところか、またやりたくなったり、幼帰りしている気分である。また、本来大人のすることじゃないと思っていることも読み取ることができる。「一年前」ということから、子どもが産まれてから一年以上たっていることが分かる。おやすみを言っているところから三歳以上だと推測できる。

お目にかけてようか。」と、わたしは言った。

「わたし」は「客」に見せたい。少し興奮気味でわくわく感が伝わってくる。

彼が見せてほしいと言ったので、わたしは、収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。

「見せてほしい」という表現から、「わたし」が見せたいだけではなく、彼が言ったから見せた、ということがわかる。後の、「結構」というセリフの矛盾につながり、その矛盾を強調している。

最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、わたしは、ランプを取ってマッチをすった。

「最初」は二つ目の箱が存在することを示しており、相当ちよう集めに没頭していることがわかる。「箱を開けてみて」から、明かりが少なく、箱の中が見にくかったことが伺える。それに気付かないほど、今までの話に「わたし」が夢中であった。周りの暗さとマッチの灯り（対比）が、少し怪しげで不安定な様子を表現している。

すると、たちまち外の景色はやみに沈んでしまい、窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。

「たちまち」とあるので、すぐに、あつという間に。マッチをすったことで、あつという間に外の景色はやみにしずんでしまった。「窓全体が不透明な青い」という色は、これからの話の内容を暗示しているかのようなのである。

わたしのちようは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。

「明るい」「きらびやかに」は、華やかさを出しており、ちようの持つ魅力を示している。わたしがちようを大切にしていることがよくわかる。ちようはわたしにとってキラキラした存在なのだろう。また、「きらびやかに」は、ランプの光だけではなく、自分の宝物という意味の輝きを表現している。

わたしたちは、その上に体をかがめて、美しい形や、濃い見事な色を眺め、ちようの名前を言った。

大人二人が箱の中のちようの「上に体をかがめて」いる姿は、不自然である。二人の幼い行動から、二人がとてもちように心を奪われて

いることが分かる。

「これは、ワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。ここらではごく珍しいやつだ。」と、わたしは言った。

「珍しい」という表現が、物語の本題への伏線となっていると考えられる。「わたし」の珍しいものを少し自慢したいという気持ちが表現されている。

友人は、一つのちようを、ピンの付いたまま箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

ちようのもろさを表す一文。「用心深く」から、「客」も幼少期にちよう集めをやっていたことが分かる。ちようを慎重に取り出し、羽の裏側を見ることは普通しない。なぜ、ちようの裏側を見たのか。ちようを見たのではなく、そのちようを通して昔のものを見ていたのではないか。

「妙なものだ。ちようを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない。

「妙な」とあり、幼少期の思い出なら他にもあるだろうに、ちように反応してしまう自分を不思議に思っている。

僕は、小さい少年のころ、熱情的な収集家だったものだ。」

「だったものだ」とあるので、「わたし」と違って客は今では収集していない。

そして、ちようをまた元の場所に刺し、箱のふたを閉じて、「もう、結構。」と言った。

ふたを閉じるということは、もう見たくないということ。急に不機嫌になっている感じを受ける。何があった？と読み手に思わせる一文。もう満足……というより目を背けた様子を思い浮かべる表現である。ふとある事を思い出してそれを払いのけるような感じ。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。

「不愉快」から、はきすてるように言ったことが表現されている。「あるかのように」は八割方そのようであるという意味であり、したがって、間違いなく不愉快である。

その直後、わたしが箱をしまつて戻つてくると、彼は微笑して、巻きたばこをわたしに求めた。

自分の嫌な態度を反省し、取り繕うように「わたし」に頼みごとをしている。「微笑」とあるので、取り繕うような様子と、冷静な客の様子が分かる。「たばこ」からは、落ち着いている様子を受ける。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。

悪く思われることをしたと思つている。人の自慢話の腰を折つたことに対しての謝罪。

「君の収集をよく見なかったけれど。」

「わたし」が見せたがった気持ちに気付いている。「よく見なかった」ということから、上の空で、回想しながらちようをぼんやり見ていた

ことが分かる。

僕も子供るとき、むろん収集していたのだが、残念ながら自分でその思い出をけがしてしまった。

「思い出をけがしてしまった」から、彼の中で思い出が美しくよみがえるのではなく、汚れを感じた出来事であることが分かる。「むろん」とあるので、子供の中ではちよう集めが当たり前であったことが読み取れる。

実際、話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

恥ずかしいが、言ってしまうと不思議とすつきりした気持ちになると思つたため、勢いで言おうとしている。

彼は、ランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。

光により、暗さを強調している。再び灯りの不安定さから、物語が沈んでいくことを示す。ゆっくり話をするため、雰囲気作り、準備をしているのだろう。「たばこ」は長い時間、ゆっくりのイメージ。

すると、わたしたちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。

明るい話ではない。「わたしたちの顔」から、改めて二人でいるという感じを感じる。「快い」とあるので、適度な暗さで心地よい。昔の思い出話という快い時間の中の、けがしてしまった思い出の部分が強調されている。

彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外のやみからほとんど見分けがつかなかった。

今の「彼」が見えないことで、昔の話をすることが強調されている。「やみ」という表現から、やはり明るい話ではないということが分かる。

わたしは葉巻を吸った。

「わたし」は「客」の話をゆっくり聞くつもりである。

外では、かえるが、遠くから甲高く、やみ一面に鳴いていた。

甲高いかえるの声と静かで暗い部屋。その対比が不穏さを表している。聴覚を入れることにより、これから語りに入るということ暗示している。

初めは特別熱心でもなく、ただ、やはりだったのでやってきたまだけだった。

「はやりだったから」から「とりこになる」そこには何かきっかけがあったのか。後に述べられる、ちょうについて細かな記述がとりこになるきっかけなのではないか。

ところが、十歳ぐらいになった二度目の夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため、ほかのことはすっかりすっぱかしてしまったので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければならぬまい、と考えたほどだった。

当時の彼にとって、「ちょう集め」の大切さがひしひしと伝わってく

る。どれだけ熱中していたかが伺える。

ちょうをとりに出かけると、学校の時間だろうが、お昼御飯だろうが、もう、塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。

時間についての記述ばかりであることから、時間を忘れるほど、また、時間が無限に感じるほど、没頭していたことが分かる。

休憩になると、パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

前文の、時間についての記述の具体例となる一文である。

今でも、美しいちょうを見ると、おりおり、あの感情が身にしみて感じられる。

今となつては思い出はよみがえってくるものの、当時の情熱は取り戻すことも感じることもできない。「身にしみて」とあるので、大人になつて思っているというよりは、子供のころの感覚が戻ってきている様子。

そういう場合、僕はしばしの間、子供だけが感じることでできる、あのなんともいえない、むさぼるような、うっとりした感じに襲われる。

「なんともいえない」とあり、やめられない、やみつきになるあの感覚は、人にわからないでも、自分の中ですべてを占めるほどのワクワク、ドキドキ感のことである。

少年のころ、初めてキアゲハにしるび寄った、あのとき味わった気持ち



だ。

昔は何度も「なんともいえないうつとりした」瞬間を感じていた。「あのとき」で、今と昔の対比をしている。その気持ちを「わたし」と共有するための例としての話である。

また、そういう場合、僕は、すぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。

「すぐに」とあるので、すぐ頭に出てくる位、今もあざやかな思い出である。無数と言えるほど、ちよりの思い出があるということはいかに長い期間ちよりに熱中していたのかが分かる。

強くにおう、乾いた荒野の、焼けつくような昼下がりに、庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕は、まるで宝を探す人のように、網を持って待ちぶせていたものだ。

句点が多く、記述が細かであり、いきいきとした思い出として表現されている。美しい思い出であったことが読み取れる。「宝を探す人」という表現から、ちよりを切望していることが分かる。

そして、美しいちよりを見つけると、特別に珍しいのでなくたってかまわない、ひなたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、とらえる喜びに息もつまりそうになり、次第にしのび寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透き通った羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたらなかった。

つかまえる時間が「僕」にとってどれほど大切な時間であったかが

分かる。細やかな所作の一つ一つ詳しい描写により、緊迫感やそれに伴うワクワクした思い、胸の高まりを味わえる。「ひなたの花」に止まっているちよりは、「僕」にとって手に入れたものである。「ひなた」という言葉により、ちよりが明るく浮かび上がっている様子が思い浮かぶ。

そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。

「そうたびたび」とあるので、たまに感じることはある。幼い「僕」は感じられたが、今は滅多に感じられない日々である。大人になるまでの人生でも、ちよりの収集に勝るものはあまりなかった。幼少期の特別感を表している。

僕の両親は、立派な道具なんかくれなかったから、僕は、自分の収集を、古いつぶれたボール紙の箱にしまっておかなければならなかった。

親に対する不満感を示している。客にとってのちよりの宝。「おかなければならなかった」とあるので、それをみすぼらしい箱に入れられないといけないという辛さがよく表されている。

瓶の栓から切り抜いた、丸いコルクを底にはり付け、ピンをそれに留めた。

よい道具なんて全く使わなかったことが分かる。

こうした箱のつぶれた縁の間に、僕は、自分の宝物をしまっていた。

みすぼらしくても、宝物をしまっていたということから、自分で作

った収集箱なので、より一層愛着がわいていることを表している。質素ではあるが、その質素さから、中にある宝物というものを引き立てている。宝と箱の対比。

初めのうち、僕は、自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、ほかの者は、ガラスのふたのある木箱や、緑色のガーゼをはった飼育箱や、そのほかぜいたくなものをもっていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。

他の子の収集の箱に対する劣等感をかなり感じており、自分なんか…と少しずつひねくれていく。自分の作った箱を恥ずかしく思っている。

ここで、みすばらしい設備と言わずに「幼稚な設備」と言っているのはなぜか。幼い子どもは、しっかりとしたものをプラスにとらえるため、手作りの設備というものが恥ずかしく、その恥ずかしいと思う気持ちが込められているため、幼稚という表現をしたのではないか。

それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。

自分の手作りの箱を見せないどころか、自慢できるはずの発見したちようもみせなかった。その見せないようにしていたことが、秘密という甘美な感覚に結びつけられている。「自分だけの宝」という感じ。「習慣になった」とあるので、一度や二度ではなく、常にそう振る舞うようになった。

それを展翅し、乾いたときに、得意のあまり、せめて隣の子供にだけは

見せよう、という気になった。

今まで見せないできた。でも「得意のあまり」見せようとする。ということから、本当は自慢してまわりたいという子供の素直な気持ちが読み取れる。今まで見せてきていないのに、「見せよう」と僕が思ったということは、よほどそのちようが珍しくて、自慢したかったのかということを表している。「せめて」とあるので、他の友達にはみせないにしても、という意味。

それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。

「先生の息子」ということで、真面目そう。

この少年は、非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。

「非の打ちどころがない」のは、良い点なはずなのに、「悪徳」というのはどうしてだろうか。「完璧」は子供にとって憎むものであるからだろうか。

それは、子供としては二倍も気味悪い性質だった。

その子供をひがむ気持ちが入っている。ねたみ、敗北感、何をしても勝てない、というきもちの表れ。

彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で、一つの宝石のようなものになっていた。

几帳面な性格。褒めているようではあるが、「小さく貧弱」というマイナス要素も取り入れている、ということから、やはり、その子供を好きになれない「僕」の気持ちが表われている。

彼は、そのうえ、傷んだり壊れたりしたちよりの羽を、にかわでつぎ合わすという、非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。

彼は繊細で、器用な子供であるが、少し神経質な面を読み取ることができる。「非常に難しい、珍しい技術」を心得ている「彼」に珍しいちよりを見せることで、ぎやふんと言わせようと思っている。

とにかく、あらゆる点で模範少年だった。

「あらゆる点で模範」とは、プラスになるはずなのだが、素直にそう受け止められていない。「とにかく」は、まとめの表現。褒めるべきところが多くありすぎて、挙げ切ることができないという意味が込められており、嫌味な感じが読み取れる。

そのため、僕はねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。

今は思っていない。過去の自分を語っており、今は思っていないようである。だから当時は、言えなかったが今、素直に言えるのだろう。

この少年に、コムラサキを見せた。

あまり好きではない少年に見せたということは、よっぽど見せたかったのだろう。

彼は、専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。

この時点では、僕は鼻高々である。彼を説明している「専門家」は、子供らしさがない。ちよりに詳しい。

しかし、それから、彼は難癖をつけ始め、展翅のしかたが悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もつともな欠陥を発見した。

「もつともな」とあるので、僕もそれが欠陥であることは分かっていた。「もつともな」欠陥を発見されたことで、「僕」の得意げな気持ちは打ち碎かれる。彼も彼なりの自分の方が上にいる、というこだわりとプライドがあるため、対抗心を燃やし、欠点を挙げることでの優越感を味わいたかったのだろう。

僕は、その欠点をたいしたものとは考えなかったが、こつぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。

「こつぴどい」とあるので、「非の打ちどころのない」少年にこれでもかというくらい、鋭い指摘を受けた。それにより、当初の「ぎやふん」と言わせる計画が崩れ、打ちひしがれている。

それで、僕は、二度と彼に獲物を見せなかった。

褒めてほしかったのに、彼はそうしてくれなかった。そのうちひしがれた感じは、一層妬みや憎らしさを増大させた。

二年たつて、僕たちは、もう大きな少年になっていたが、僕の熱情はまだ絶頂にあった。

二年後でも趣味は変わらない。いかにはまっていたか、いかに大きな存在だったかが示されている。

そのころ、あのエーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたといううわさが広まった。

「あのエーミール」というところから、「あの」とつけることでエーミールに対して何らかの特別な思いを抱いていることが読み取れる。ここで隣人の名前が初めて明らかになる。

今、僕の知人の一人が百万マルクを受けついでとか、歴史家リビウスのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、そのときほど、僕は興奮しないだろう。

大人になった今でも、今までの人生の中で最も興奮したことだとしている。どれだけ深い興奮かを表している。

僕たちの仲間でクジャクヤママユをとらえた者はまだなかった。

そのあたりでは、そのちようは幻の存在であることが読み取れる。

僕は、自分のもっていた古いちようの本の挿絵で見たことがあるだけだった。

「本」、しかも写真ではなく挿絵であることから、このちようが遠い存在であることを示している。

名前を知っていながら自分の箱にまだないちようの中で、クジャクヤママユほど僕が熱烈に欲しがっていたものはない。

僕が非常に欲していたものを「あの」エーミールがとらえたことに對する興奮と悔しさが表されている。僕の中にいろいろな思いが浮かんでいるだろうことを感じることができる。「今、僕の」興

奮しないだろう。」の文の興奮の説明をしている。

幾度となく、僕は、本の中のその挿絵を眺めた。

「幾度となく」とあるので、何度も何度も眺めた。望んでやまないちようであることがわかる。

「とび色のこのちようが、木の幹や岩に止まっているところを、鳥やほかの敵が攻撃しようとする」と、ちようは、たたんでいる黒みがかつた前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は、非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。

「僕」は、友人が語ったことをしっかりと覚えている。それほど僕がクジャクヤママユに対して大きな思いを持っていることがわかる。それは、語った側の友人も同じである。「僕」以外にとてもそのちようは特別であり、このちようがどれだけすごいのか、ということがわかる。

エーミールがこの不思議なちようをもっているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまつて、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。

「すっかり」とあるので、完全に興奮した。憎いはずのエーミールだが、クジャクヤママユを見ることの方が「僕」の脳内の大半を占めているため、憎いにもかかわらず、エーミールに見せてもらえらうことを信じ切っている。昔から好きだったちようが、今すぐ隣にある。遠い存在から近い存在への変化が読み取れる。

食後、外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。

食後、「すぐ」ということから、待ち切れない思いが分かる。「四階」とあるので、値段が高い家か、もしくは少し豪邸かということが予想される。

そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋をもっていた。

「エーミール」と言わず、あえて「例の先生の息子」と言っているのはなぜだろうか。恐らく「小さいながら自分だけの部屋」を持っているエーミールへのねたみの感情によるものだろう。

それが、僕にはどのくらいうらやましかったかわからない。

「どのくらいかわからない」とあるので、とてもうらやましかった。ここでもエーミールへの妬みを感じられる。自分の部屋を持っていることも、ちよりの収集についても、僕にとって彼は、憧れの存在である。

途中で、僕は、だれにも会わなかった。

誰も「僕」がエーミールの部屋に入ったことを知らない。

上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。

エーミールはいない。「のだ」とあり、一人であるということ強調している。

ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

「回してみると」とあり、試みにハンドルを回した。一人で部屋に入るができる。少しの罪悪感があったかもしれないが、それに勝るほどの欲望が「僕」の中にある。

せめて例のちよを見たいと、僕は中に入った。

「せめて」とあるので、エーミールに会えなくてもちようだけは見たかった。エーミールがいないと分かっているにも関わらず、部屋に入った。家に忍び込むくらいそのちよを求めていた。

そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手にとった。

「すぐに」とあるので、ためらいがなく、好奇心だけで行動している。普段見せつけられているから、どの箱か分かったのだろう。

どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのちよはまだ展翅に載っているかもしれないと思いついた。

「やがて」とあるので、しばらくしてから思いついた。どこにあるのだろうと頭を働かせた。箱に見つからなくてもまだ他の所を勝手に探し始める。見たいという気持ちしか読み取れない。

はたしてそこにあった。

「はたして」とあるので、思った通り。

僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。

「果てしなく微妙な色」は比喻表現であり、際限がないくらい色が絶妙で繊細だった。それくらいちようが美しく、「僕」が興奮していることが分かる。「残らず」とあるので、隅から隅まで眺めた。エーミールへの感情を忘れて、ただちようの美しさに夢中になっている。

あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。

「あいにく」とあるので、残念ながら。前文での細やかな表現でどれだけ観察していたかをよく表しているが、その観察が「全てを見ないときがすまない」という欲望に変化した。

細長い紙きれの下になっていたのだ。

紙さえ取り除けば、すぐあの有名な斑点を見ることができる。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、留め針を抜いた。

「誘惑に負けて」とあるので、一度は誘惑と戦おうとした。ここで、留め金を抜いたことよって、後に僕の行動が、盗みにつながる確率が上がった。この「どきどき」は、悪いことをして感じる「どきどき」ではなく、「見たい」という思いからくる、ワクワク感を表す「どきどき」である。

すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ず

っとすばらしく、僕を見つめた。

「挿絵のよりは」とあり、挿絵の斑点よりもすばらしかった。本で見ても美しかったが、実物はやはりもっと美しかった。特徴である大きな斑点が目となって、「僕」を見つめているという擬人法である。

それを見ると、この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生れて初めて盗みを犯した。

「逆らいがたい欲望」とあるので、理性ではおしとどめられないほどの欲望だった。この時初めて盗みたいと思ったような記述。しかし、部屋をごそごそ探していたときから、少しはその思いもあったはずである。言葉にできない衝動により、自分でも分からないまま盗みを犯した。

僕は、ピンをそつと引っぱった。

「見つかってはいけない」という緊迫した中で、ちようを「そつと」扱っている。盗みを犯しているという自覚がない。

ちようは、もう乾いていたので、形は崩れなかった。

僕はちようが崩れやすいことをよく知っている。後に、形が崩れることの暗示。

僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。

ちようをてのひらに載せている。この時点では、盗みを犯したというより、好きなものを得た感覚であるため、にぎってはいいない。大切に扱っている。

そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

「さしずめ」とあるので、当面、さしあたって。その時には、自分が心の底から欲していた、ちようを手に入れたことに対する、満足感、喜びだけを感じている。まだ罪の意識がない。

そのときだ。

場面転換。この語の前後で「僕」の気持ちは変化する。

下の方からだれか僕の方に上がってくるのが聞こえた。

一人きりであるという状況からの変化。罪を意識するきっかけとなる一文である。「聞こえた」とあるので、階段の下のドアを開ける音や階段を上る音が聞こえたのだろう。

その瞬間に、僕の良心は目覚めた。

我に返った。

僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。

「突然」とあるので、急に、前触れもなく悟った。それまでは、本当に自分が盗みを犯していると、思っていなかった。

同時に、見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していた手を上着のポケットに突っこんだ。

犯した罪の大きさに気付くも、怯えが先立ってしまい、素直に謝るといふ選択肢はなかった。「本能的に」とあり、反射的に悪いことはと

つさに隠してしまおうと考えた。この時点で、自分の好きなものを得たというより、盗みを犯したことで頭がいっぱいになり、ちようを大切に扱えなくなっている。

ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。

「大それた」とあるので、常識からはずれたとんでもないこと。落ち着こう、冷静になろうとゆっくり歩いてしたが、罪の大きさに耐えられなくなっている。

上がってきた女中と、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

「びくびくしながら」とあるので、全身から自分が犯した罪の大きさ、そしてその罪を犯した自分に対する恐怖が表われている。動作がびくびくしていたというよりも、心がびくびくしていたのだろう。今回の「どきどき」は、ワクワク感からくるものではなく、見つかることを恐れ、おびえている、「どきどき」である。

すぐに僕は、このちようをもっていることはできない、もってはいけない、元に反して、できるなら、何事もなかったようにしておかなければならない、と悟った。

「すぐに」とあるが、「すぐに」ではない。罪を自覚してから、一度ちようを隠し、逃げようとしている。「僕」の中で、善と悪が戦っていることが分かる。頭では分かっているのに、体に伝わらない、という

ような感じである。

そこで、人に出くわして見つかりはしないかということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後には、またエーミールの部屋の中に立っていた。

さっきまでの「ゆっくり」歩き、「びくびく」すれ違っていた様子とは大きく違い、思ったらすぐ行動に移し、「急いで」「駆け上がって」から分かるように、行動にスピードがある。元に戻さなくては、と思っただけから、一刻も早くちようを手放したくなっている。長い記述であるが、「一分の後には」ということから、一分という短い時間での出来事であることが分かる。

僕は、ポケットから手を出し、ちようを机の上に置いた。

ずっと握っていた。

それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起こったかということを知った。

ずっと盗みを犯したことがかりに気持ちが悪く傾いていたが、ちようをポケットから出したことにより、再び意識がちようへも向いた。「もう」とあり、自分がちようをにぎっていたことを認識し、全てを理解した。

そして、泣かんばかりだった。

泣かんばかりとは、泣きたくなるくらいという意味である。泣きたくなるほど悲しかったが、しかし泣いてはいない。

誰が、泣かんばかりだったのか。ここでは、つぶされてしまったち

よう、または、美しいちようをつぶしてしまった僕であろう。後々このちようの姿を見たエーミールも泣かんばかりだったはずである。

前羽が一つと触角が一本、なくなっていた。

詳しい描写。ショックの大きさが伝わる。

ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、縫うことなんかもう思いもよらなかった。

ちようを意識したことにより、再びちようを大切に扱おうとしている。しかし、一瞬の過ちで、取り返しのつかないことになっている。「もう」とあり、僕は、すでに繕うことを思うこともできないほどばらばらになっていると判断している。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちようを見ているほうが、僕の心を苦しめた。

自分にとって特別なちようをつぶしてしまったことが心を苦しめた。悪人ではなく、ちようの収集家としての気持ちである。まだ罪の重さより、ちようの方が「僕」の心を占めている。

微妙なとび色がかかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを見た。

「指にくっついているのを見た」とあり、自分の指が犯したことを示している。指に残った粉が罪の意識をより一層深めている。

また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。

模様が特徴の羽なのに、ばらばらになっているのは、良さが全くない。



それをすっかり元どおりにすることができたら、僕は、どんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

こわしてしまったちやうをどれほど元に戻したいと考えているか、その思いの強さが伝わる。「喜んで」とあるので、何よりも優先している。

悲しい気持ちで、僕は家に帰り、夕方まで、うちの小さい庭の中で腰かけていたが、ついに、一切を母に打ち明ける勇気を起した。

「ついに」とあり、打ち明けようかどうか迷っていた結果、最終的に打ち明けることに決めた。母には素直に打ち明けていることから、「僕」の幼さや素朴さがでている。自分の中で抱えきれなかった。

母は驚き悲しんだが、すでに、この告白が、どんな罰をしのぶことより、僕にとってつらいことだったというのを感じたらしかった。

母は怒り、責めはしなかった。「僕」が十分反省したこと、正直に話しただけでも相当なつらさであろうことを、感じたからである。しかし、「僕」の頭の中は珍しいちやうを台無しにしたつらさが占めているだろう。

「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえのもっているものうちから、どれかをうめ合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして、許してもらおうように頼まなければなりません。」

「僕」は、母の言葉をしっかりと覚えていて、それほど身にしみた

言葉だったのだろう。母は、物事を理解するのが早く、道理の正しい人物である。この言葉で「僕」に少しは罪の意識が生まれたのだろうか。

あの模範少年でなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれたらう。

どうしてエーミールにはそうする気になれないのか。もともと劣等感とねたみを持っていた。「模範少年」と呼ぶことで、また、ねたむ気持ちを表している。

彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もってはつきり感じていた。

あのエーミールが、「僕」のしたことを許してくれるはずがない。「僕」がエーミールを嫌がっていることは、記述から分かるが、エーミールが「僕」を嫌っている記述はない。なのみなぜ、「はつきり」と「僕」は言い切れるのだろうか。「僕」がエーミールをねたむ気持ちから、「どうせ許してもらえない」と思ってしまった。

母は、僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい。」と、小声で言った。

責めすぎるといけないと思い、「小声」で言った。あるいは、母は、隣に聞こえないように「小声」で言ったのかもしれない。

彼は出てきて、すぐに、だれかがクジャクヤママユをだいなしにしてしまった、悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、

と語った。

冷静なエーミールが口を開いて一番に話したことがクジヤクヤママユの話であった。冷静なエーミールがそのような行動を取るといふことは、それほどまでにこの出来事が彼を取り乱させたのであろう。エーミールにとってそれだけショックな出来事であったことを表している。エーミールにとつてもちようが大切であるということがわかる。だが、この段階ではエーミールは僕が犯人だと決めつけた言い方をしていない。

僕は、そのちようを見せてくれ、と頼んだ。

まず告白せずに、確認しようとしている。エーミールの力量でクジヤクヤママユが修復されているかもしれないと考えたのだろうか。クジヤクヤママユを台無しにしてしまったのは自分だと、言い出すタイミングが見つからない。

彼はろうそくをつけた。

二人きりで、ろうそくの光が灯る部屋にいる。妙な雰囲気、良いことは起こらないことが予測できる。

エーミールがそれを縫うために努力した跡が認められた。

エーミールの努力が、自分のせいであるという実感が持っていない。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。エーミールの努力がうかがえて、より一層悪いことをした感じになるはずだが、やはりまだ客観的である。

しかし、それは直すよしもなかった。

「よし」とあるので、直す方法。もうどうにもならないほど、ばらばらに壊れている。

触覚もやはりなくなっていた。

「やはり」とあり、自分でポケットから出したときにすでに気付いているはずであるが、ここで再確認している。

そこで、それは僕がやったのだ、と言ひ、くわしく話し、説明しようを試みた。

自分がやってしまったことを、全て確認し、やっと話そうとし始めた。「説明しようを試みた」とあるので、説明したわけではない。説明しようとしただけである。

すると、エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちえつ。」と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから、「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

エーミールは「僕」が予想していた通り、「どなりついたりなど」はしないという大変冷たい大人な対応だった。ここでの大人な対応とは、実際の大人な対応ではなく、あくまで「僕」が考える大人な対応である。「しばらくじっと」とあり、すぐに言ったわけではなく、間に時間があった。僕が続けて何を言うか待っていたのかもしれないし、僕に何を言うべきか考えていたのかもしれない。

僕は、彼に、僕のおもちやをみんなやる、と言った。

予想はしていたが、実際に冷たい対応でゆるされないとすると、「僕」は為すすべがなく、母に言われた通りの方法しか思いつかなかった。しかし、まずは「おもちや」ですまそうとしている

それでも、彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は、自分のちよりの収集を全部やる、と言った。

エーミールの冷淡さと僕の必死さの対比。しかし逆にそれによってエーミールの心中も気になる。償えるようなことではないとエーミールは思っている。「依然」とあり、あいかわらず同じ態度だった。そこでぼくは「ちよう」をやつと差し出そうとする。

しかし、彼は、「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がちようをどんなに取りあつかっているか、というところを見ることができたさ。」と言った。

馬鹿にしているような態度。怒鳴りはしないが、エーミールの静かな怒りが伝わってくる。

その瞬間、僕は、すんでのところであいつのどぶえに飛びかかるところだった。

「すんでのところで」とあるので、もう少しで。なんとか押しとどまった。なぜ、飛びかかろうとしたのだろうか。それは、自分のしたことを冷静にエーミールが痛いところばかりをついてきたからである。

僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのようになり、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。

「僕」対「エーミール」イコール「悪」対「正義」と読み取ることができる。自分を悪と置いていることで、エーミールに怒りをおぼえることは間違いだと「僕」自身も分かっている。

彼はののしりさえしなかった。

「さえ」とあるので、ののしることはもちろん何もなかった。エーミールは立っているだけで、やはり怒ったり、怒鳴ったりしなかった。

ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

エーミールは冷たい目で「僕」を見つめていた。そして、自分の「正義」が絶対であるという自信から、「僕」を認めようとせず、軽蔑の目で見続けた。

そのとき、初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。

「僕」がこの一連の出来事で学び、言いたかったこと。エーミールの軽蔑の目は二度と戻らないと分かった。

母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。

母は「僕」の様子を見て、全てを悟った。「僕」が反省していること

も、よく分かっていたため、かまわないようにした。

僕は、「床にお入り。」と言われた。

何も話したくないという「僕」の雰囲気をも母が感じて言った一言。

だが、その前に、僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、やみの中で開いた。

「僕」にとつておそい時間であるのに、今やつてしまおうとしている。それほどすぐに忘れてしまいたい出来事なのだろう。もしくは、結局エーミールに何の償いもできなかったことが引っかけり、いてもたつてもいられなくなったのだろう。「そつと」とあり、母に見られないうちに行つた。

そして、ちやうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまつた。

「一つ一つ」とあり、いっぺんにすべてをつぶしたわけではない。時間をかけて一つずつつぶした。「指で」とあるので、手のひらでなく、指先ですりつぶすようにつぶした。「粉々に」とあるので、壊すだけでなく、すべてがつぶれるまで入念に押しつぶした。僕の心の中のぐちゃぐちゃ感が示されている。罪悪感。償いができず、もやもやした感情が「僕」にこうさせた。申し訳ないというより、どうしようもない、もう見たくないという思い。

### 三 考察

#### (一)「僕」の役割

「少年の日の思い出」において「僕」は、解釈の難しい人物として描かれているところが多い。特に人が関係すると、「僕」の性格における謎が強調されている。「僕」にとつてちやうは、簡単に言葉で言い表すことができないくらいかけがえのない存在のはずである。それなのに、大好きなちやうのことでも「僕」は人に関わると、苦しめられていると言つても過言ではないほど、人と関わる場面ですらい思ひをししている。なぜ、「僕」はこのように描かれているのだろうか。

客観的に見て「僕」は、一つのことにかなり熱中できる熱い純粋な心の持ち主であり、子供らしい子供であるということが読み取れる。ここには、マイナス要素は見受けられない。しかし、人が関わると、自分の箱と他の子の箱を比べ、自分の発見物は妹にしか見せなくなつたり、やけにエーミールのことを嫌つていて、彼の説明をするときに使っている言葉がマイナス表現ばかりであつたりする。特にエーミールに対しては、自分のちやうに難癖をつけられたことによつて、絶対にもう二度と見せないと意地を張つたり、子供らしさが裏目に出てしまい、妬みや憎しみばかりを抱いているような印象を受けてしまう。

ここで、エーミールとの対立を見てみる。「僕」にこのような妬みや憎しみの印象がなければ、純粋な少年と、子供らしくない少し変わった少年の対立となり、とても単純で分かりやすい。しかし、これに「僕」のマイナスイメージが加わるため、エーミールの気持ちも分かるが、「僕」の気持ちも分かる……一体どつちが悪いのか分からない、という状況になつてしまい、大変解釈が難しい。

ここまでの「僕」だけでも解釈が難しいのだが、さらに、最後には大好きだったはずのちやうを全てつぶしてしまう、という驚きの行動を起こし、さらに「僕」の人間性について理解が苦しくなっていく。

作者は一体「僕」を通して何を伝えたいのだろうか。

素直に「僕」だけを見て読むと、自分の好きなことばかりに没頭し、人間関係やその他様々なことをあいまいにした結果、自分の好きなことでさえ苦しみの要素となってしまうと、と解釈できる。つまり、「自分のことばかりでなく、相手の気持ちも考えよう」という教訓が、「僕」の中に隠されているのである。中学生で思春期真っ只中の生徒にとつて、友達との関わり方を考えることができるという点に、「僕」のこのような性格の特徴がある。

## (二) エーミールの役割

エーミールは最後の最後まで、子供らしくない子供の姿で描かれていた。その部分で見ると、「僕」とは対照的な少年である。本文中の「僕」とのやり取りの中で、その子供らしくない性格は十分と言ってよいほど一目瞭然である。本文でも示されていたように、エーミールは一般的な「良い子」であった。それにも関わらず、「模範少年」「非の打ちどころがない」というような言葉を使って、「僕」はエーミールをマイナス評価を伴って説明している。それは、「僕」がエーミールに対して、ねたみや憎しみを持っているためであるが、そもそもなぜ、一般的に「良い子」とされるエーミールに「僕」は、そのような感情を抱いたのだろうか。

この感情は、多くの人が中学生の時代に感じたことのある感情なのかもしれない。「なんであの子ばかり褒められて、自分は怒られてばかりなんだろう」という、この気持ちを最大限に表現するために、エーミールは存在している。だから、この「少年の日の思い出」においてエーミールは、徹底的に「模範少年」として描かれているのである。

そして、そのエーミールに対する「僕」の感情から、読み手である中学生は、ここでもまた友達との関わり方を考えることができる。

## (三) ちようの役割

この作品のタイトルである「少年の日の思い出」とは、つまりちようの思い出のことである。作品の最初から最後までほとんど登場していたちようは、各場面でそれぞれの役割を持っている。

まず、最初の大人二人がちようについて話している場面では、これからの回想へと導くための手段であることが分かる。ここでちようが登場することによって、「わたし」と「客」の二人ともが幼い日の思い出として、ちようの思い出を持っていることが明らかになっている。

次は、「僕」のちよう集めの思い出の入り口となったところの回想シーンである。ここでちようは、大変美しく描かれており、いかに「僕」がちように対する熱い思いを持っていたか、ということを表現している。ここでのちようは、「僕」にとつてちようが不可欠であり、かけがえないものであることを読み手に読み取らせるための役割を担っている。

そして、初めて隣の家の少年との思い出が語られている場面では、ちようは「コムラサキ」として登場している。「僕」と少年の間にちようを挟むことによつて、二人の関係が良くないこと、「僕」は少年に対して憎しみを持っていることが明確になっている。

次に登場した、問題の「クジヤクヤママユ」は、一番重要な役割を果たしたちようである。ちようをめぐる、少年二人の感情は大変深く、解釈が難しい。しかし、このちようが登場したことにより、二人の感情がどんどん浮かび上がり、最終的には、(一)(二)で述べたように、

読み手である中学生の生徒が、友達との関わり方を考えることができる。

ここまで、大まかな場面でのちよりの役割を考えたが、この作品全体を通して見ても、ちよりの役割は各場面で果たされている。「ちより」、「獲物」、「宝」といったように、様々な表現で登場するちよりは、時には美しく、読み手までもが魅了される存在である。また、時にはマインスイメージを持ち、「僕」を苦しめる存在である。また、時には「僕」の手に入れたいという欲望をあらわにさせ、「僕」やエーミールにとつてちよりがどれだけ大切なものであるか、ということ表現する存在でもあった。

(一)(二)で述べた「僕」とエーミール、二人の性格や特徴はちよりという存在がなければ、明確に表現されなかっただろう。つまりそれは、この作品で伝えたかった「友達との関わり方を考えさせる」ことが果たされないということである。始めにも述べたようにちよりはこの作品の最初から最後までずっと登場し続けていた。それは、作品の全てを背負っているということの表れだったのではないかと推測される。



## タオル（重松清）

寺田 守



### 一 作者と作品について

重松清（一九六三〜）は、岡山県久米郡久米町（現・津山市）生まれの小説家。中高と山口県で過ごし、山口県立山口高等学校を卒業した。出版社勤務を経てから、一九九一年に作家としてデビューした。一九九九年に『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、二〇〇一年に『ビタミンF』で直木賞を受賞した。その他にも多数の作品を発表している。

「タオル」の初出は『オール讀物』二〇〇四年一〇月号。その後『小学五年生』（二〇〇七年三月）に収められた。『小学五年生』は一七篇の作品が収められた短編集で、いずれも小学五年生の男の子が主人公である。「タオル」は中国地方の方言を用いた港町を舞台にした物語である。

教科書には平成二四年から『中学生の国語 一年』（三省堂）および『伝え合う言葉 中学国語2』（教育出版）に掲載されている。重松清は小中の教科書に多くの教材が掲載されている人気作家である。

### 二 叙述について

祭壇のすぐ前に座っていた父は、その人が来たのを知ると、玄関まで迎

えに出た。

「すぐ前に」とあるので、父は祖父のそばに座っていた。それが、玄関に、ではなく、「玄関まで」とあるので、わざわざ玄関に移動してまで客を迎えた少年が判断していることがわかる。他の客に対してはおそらく玄関に迎えに行くことはなく、父にとってその客がそれほど丁寧に扱うほどの大切な人だった。

父は照れくさそうに「似とるんは勉強のできんところだけですわ。」と言って、客を座敷に招き入れた。

「照れくさそうに」とあるので、少年が父に似てると言われ、父が気恥ずかしくてきまりがわるそうな様子であることがわかる。顔が似ていると言われているのに、勉強ができないことが似ていると返すこととでごまかしているところが、照れくさそうな様子を表している。「だけ」とあり、他のところは似ていないと言っている。「招き入れた」とあるので、仕草や言葉で座敷に入るように促した。

今朝からずっと——ほんとうのことを言えば、二日前に祖父が亡くなったからずっと、家のどこにいればいいのかわからずにいた。

わからないのは少年であり、語り手が少年の視点で説明している。「ほんとうのことを言えば」とあるので、今朝からというのは、思い

返してみると誤っていた。お通夜の今日は今朝からあわただしいのでどこにいればいいのかわからないというのはよくわかる。しかし、祖父が亡くなった二日前からということから、人が少なく、あわただしくなかった時から、少年は居場所がなく落ち着かなかった。つまり、どこにいればいいのかわからないというのは、単にあわただしいからということではなく、祖父の死に対して少年が落ち着かないということの意味している。「ずっと」とあり、おちつかない状態が長く続いている。「わからずにいた」とあるので、「わからなかった」と比べると、時々わからなくなるのではなく、四六時中わからない状態であった。

「邪魔になるけん、外で遊んどりんさい。」と母に言われ、家の前でサッカーボールを蹴っていたら、目を真っ赤に泣き腫らした叔母に「こげな日にふらふら遊んどったらバチが当たるよ。」と叱られた。

「なるけん」は、なるからという意味。「遊んどりんさい」は、遊んでいなさい。「こげな日」というのはこのような日という意味で、祖父が亡くなったような日。「真っ赤に」とあるので、目が充血して赤くなっている。それほど叔母は涙を流した。「叔母」とあるので父または母の妹、あるいは弟の妻。「ふらふら」というのは、考えや目的がなく落ち着かない行動をする様子。叔母は祖父が亡くなった時にもかかわらず、少年が考えもなく遊んでいると思っている。

しかたなく家に入ってテレビをつけると別の叔母に「音を出したらいけんよ。」と言われ、マンガを読んでいたら漁協の組合長が「おじいちゃんのおそばにおってあげんさい。」と酒に酔った声で言っ、そのくせ祭壇の設けられた広間に行ってみると、大人たちが集まっ、座る場

所などどこにもなかった。

「しかたなく」とあるので、少年はどうしようもないと思っている。

母には外で遊べと言われ、叔母には遊んでいたらバチが当たると叱られ、困っている。「そばにおってあげんさい」とは、そばにいてあげなさいという意味。祖父に対するやさしい発話だが、「酒に酔った声で」とあるので、大きな声で、滑舌の悪いしゃべり方だと分かる。息も酒臭かっただろう。「そのくせ」とあり、それなのにと逆接の意味だが、少年の不満が表れている。「行ってみると」とあり、ためしに行く」という意味。少年は行っても駄目だろうと薄々予想している。「など」とあるので、座る場所なんて、という意味。思った通り場所がなかった。

それは、わかる。

「それ」とは、おじいちゃんが死んだということ。「は」とあるので、他のことはよく分からないが、それに限ってはわかっている。

それも、わかる。

「それ」とは、おじいちゃんが死んだのは悲しいことだということ。「も」とあるので、先のおじいちゃんが死んだということがわかることに加えて、おじいちゃんが死んだのは悲しいことだということもわかっている。

それだって、ちゃんとわかっている。

「それ」とは、悲しいときには、泣いてしまうということ。「だって」とあるので、おじいちゃんが死んだということや、それが悲しいこと



だということがわかるのと同様に、人間は悲しいときには泣いてしまふというあたりまえのこともわかっている。「ちゃんと」とあり、十分に、まちがいなくわかっていると少年は思っている。

自分の居場所を見つけれないと、ゆっくり悲しむこともできないのかもしれない。

「ゆっくり」とあるので、急がず、ゆとりをもって悲しむということ。悲しむのに「ゆっくり」とはどういうことなのだろうか。少年は祖父が亡くなった悲しみを実感できていない。頭では理解していても、まだぴんときていないのだろう。だから悲しむためには、祖父をしみじみと思いつけながら、急がずにゆとりをもつ必要があると考えている。

「居場所」というのは、ここでは祖父の祭壇に対して座る場所のことである。だが、少年にとっての居場所とは、祖父の死に対しての構え方でもある。少年にとって身内の不幸は初めてのことなのだろう。祖父の死をどのように悲しめばいいのか、少年にはまだ理解できていない。悲しむことが、でなく、「悲しむこと」とあるので、うまく居場所を見つけないと、ゆっくり悲しむことさえできない、まして泣くことなんてできない、と少年は考えている。

客のほうも、焼香を終えたあとは広間にいる理由をなくしてしまったように、どこか居心地悪そうだった。

「客のほうも」とあるので、他の人が客を意識しているのと同じように、客も他の人を意識していると少年は考えている。「どこか」とあり、はっきりと指摘することはできないが、居心地悪そうな様子が何

となく伝わってきた。客は他の人と会話をしたり、何かの作業をしたりといったこともなく、座ったまま手持ちぶさたな様子だったのだろう。客を感じる居心地の悪い状況は、少年の居場所のない状況とよく似ている。二人とも、祖父の祭壇を前にして、自分が何をしたらいいのか分からず、とまどっている。

「ほいで、どうせおまえはここにおつても邪魔になるだけじゃけえ、お通夜が始まるまでおじちゃんのお世話して、町の案内でもさせてもらえや。」

「ほいで」とは、それだという意味。「どうせ」とあるので、父は少年が邪魔になると初めから決めつけている。そして、間違っていない。「だけ」とあり、邪魔になる以外に何も無い。役に立たない。「じゃけえ」は、だからという意味。「でも」と言っており、町の案内を例として挙げているが、たいして深い意味がないことがわかる。シライさんに町を案内する必要はなく、父は、少年がすぐに家に戻ってこないように何か用事を与えようとしている。

夕方の風の時間にさしかかって、風が止まり、よどんだ潮のにおいが濃くなっている。

「さしかかって」とあり、風の時間ではなかったところから、その時間に入ってきたことがわかる。「よどんだ」とあるので、空気の流れがどこおって、入れ替わらず、息苦しいような潮のにおいがした。毎日生活している少年ですらこのように感じたのだから、シライさんにとっては強烈なおいだっただろう。

ヤツカイバライの意味はよくわからなかったが、なんとなくシライさんが「俺たちは同じだな。」と言ってるんじゃないかと感じて、それがちよつとうれしくて、少年は自分から話しかけてみることにした。

「ヤツカイバライ」とカタカナ表記になっているのは、少年が言葉を知らず、漢字も思い浮かばないためだろう。他の箇所のシライさん、ケンパイも同じだと思われる。「よく」とあるので、全くわからないのではなく、なんとなくは理解している。追い出されたという程の意味だと理解しているのだろう。「なんとなく」とあり、シライさんの先の発言からはっきりとした理由があるわけではないのだが、どこことなく少年は感じ取った。「同じだな」とあり、「同じだ」と比べてみると、「な」があることで、同じだという主張に念を押し、少年に同意を求めていると理解している。少年は、「二人まとめて厄介払いされちゃったな。」というシライさんの発話を、「俺たちは同じだな。」という意味だと理解し、反応した。「ちよつと」とあるので、そこまでうれしいわけではない。少しだけうれしい。「みることにした」とあり、話しかけることを試みようとしてみた。少年はシライさんが自分と同じだと考えている気がして親しみを覚えたので、自分から話しかけることに決めた。

祖父をほめられてうれしかったのが半分、残り半分は、シライさんの話にうまかついていけたことで、うれしいというより、ほつとした。

「ほめられてうれしかった」とあり、少年は祖父のことを誇りに思っていた。「うま〜」とあるが、期待通りに話についていけたという意味。だから「ほつとした」と、安心して緊張がとけた。「ほつとした」とあることで、逆にこれまで少年が緊張していたことがわかる。居場所のなさや居心地の悪さを、シライさんに対しても感じたらどうしよ

うと不安に思っていたのだろう。

ほんとうはよくわからない。

「ほんとうは」とあるので、少年はわかっている振りをした。嘘をついた。「よく」とあるので、あまりわからないが、なんとなくは理解している。少年は、父の昔の写真を見たことがあるので、髪型の映像は思い浮かぶ。しかし、その髪型がリーゼントだということは知らないし、リーゼントという言葉の意味もわからない。

少年は少し足を速めた。

「少し」とあり、いくらか歩く速度を上げた。たくさんの写真を見ることが楽しみに思われ、早く見てみたいと感じた。「速めた」なので、自然と足早になったのではなく、意識して早く行こうとした。それくらい楽しみだった。

酔味噌で食べると、酸っぱさの奥でじんわりと甘みがにじむ。

「じんわり」とあるので、ゆっくりと徐々にしみ出してくる。「にじむ」とあり、ベイカの素材の甘みがしみだしてきて口の中に広がったことがわかる。

はげしていない頃の写真を見せたらおじいちゃんは恥ずかしがるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうか、と頬をすぼめた。

「はげしていない頃」とあるので、現在のははげている。「だろうか」とあり、少年はおじいちゃんが恥ずかしがることを予想している。「クスツ」というのは、声をだしてあははと笑うことでなく、口をつむり、

鼻から息を軽く吹き出すような遠慮した笑いのこと。「笑いかけて」とあるので、まだ笑っていない。頬の筋肉に力が入り口角が上がっている状態。あるいは、シライさんに対して笑いかけた、つまりシライさんに笑顔を見せたと読むこともできるが、シライさんと祖父の頭髪の話をしていくわけではないので、ここでは前者（まだ笑っていない）の笑いかけた、という意味だろう。「頬をすぼめた」というのは、頬をへこませるのではなく、口角があがっている状態から頬の力をゆるめて表情をなくすこと。少年は、おじいちゃんがまだ生きているかのように想像したが、すぐにおじいちゃんはもう亡くなっており、恥ずかしがることもないのだと気づいた。

おとといから何度も思ってきたことなのに、いま初めて、それが悲しさと結びついた。

「何度も」とあるので、もうおじいちゃんと話すことができないということを繰り返して思ってきたことがわかる。「初めて」とあり、話すことができないということも思ってもこれまででは悲しさがなかった。「結びついた」とあるので、両者がばらばらなものだったが、ここにつながった。少年は、初めて悲しいことだということを実感した。

いつもだ。

ここでの「いつも」は、常に、どんなときでも、という副詞の意味。祖父は漁をしているときは、常にタオルを巻いていた。

「ほら、この頃はまたお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ。」祖父に注目し、祖父のことを考えていた少年に、シライさんは「ほ

ら」と父へ注目するように促している。写真の父に対して「まだ」とあるので、今は漁師らしい雰囲気になっている。「あんまり」とあり、その頃は今の父から予想する姿と違って、たいして漁師らしくない。顔つきや姿勢が違うのだろう。

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ったんだ。」

「ぼっかり」とあるので、ただ文句だけで、他には何も言っていなかったと限定している。実際はさすがに文句しか言わないというわけではないのだろうが、シライさんにとっては、昔の父は酒を飲むと文句しか言っていなかったような印象を持っていることがわかる。父も最初は漁師になろうとは思っていなかった。

「仲良くなったっていつでも、俺は東京だから、年賀状のやり取りぐらいいしかできなくて、おじいさんが生きてるうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……でも、昨日ハジメさんから連絡もらってうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ、って。」

「ぐらい」とあり、年賀状のやり取り程度しかしていなかった。疎遠になっていた。「もう一度」とあるので、シライさんはさらに加えて一回祖父に会いたかった。「でも」とあるので、シライさんは祖父と再会できなかったのは残念だが、それ以外でよかったことがある、と考えている。「うれしかったし」とあるが、ここではうれしかったのという理由を表す意味でなく、うれしかった上にさらに、という並べて強調する意味。「けっこう」とあり、シライさんが思っていた以上にス

ケジュールがキツかった。「やっぱり」とあるので、様々な事情で来るんじゃないかと思う理由もないわけではないが、最終的には、祖父のお通夜に行こうと思った時の予想通り、来てよかったと考えている。「って」とあり、いい差し表現になっている。続く言葉は、そのように今は思っているよ、というような表現か。シライさんの最も長い発話。一文であれこれ語っているのは、シライさん自身の葛藤や迷いを語っているためだろう。またビールを飲み始めているので、酒が入った発話であるということもあるだろう。

間違いない、これはおじいちゃんの字だった。

「間違いない」と思えるほど、少年の知っているおじいちゃんの筆跡と、年賀状の筆跡とが一致していた。少年はおじいちゃんの字をよく知っている。年賀状の内容は、「三代で船に乗れたらうれしいことです」とあるのだが、少年は内容には反応していない。

「ボクは大きくなったら、なにになりたいんだ？」

特別に見せてやるといって、三代で船に乗れたらうれしいと書かれた年賀状を見せたのだから、シライさんは、少年が祖父や父の後を継ぎ、漁師になりたいと言うことを期待しているのだろう。

照れくさかったが、正直に「Jリーガー。」と答えた。

「照れくさかった」とあるので、気恥ずかしくてきまりがわるいと感じている。どうして照れくさいのだろうか。一つには、Jリーガーになりたいという希望が、非現実的で夢のようなものであることを少年も自覚していて照れくさかったのだと考えられる。または、シライ

さんが漁師になりたいと答えることを期待しているのを感じ取ったものの、実際は違う答えだということに照れくささを感じたということも考えられる。後者だと考えると、年賀状の内容に反応せず、あえて筆跡に反応したのも照れくさかったからだと考えられる。父が照れくさそうに話題をそらしたように。だが、少年はまだ小学五年生であり、職業としての漁師を真剣に考えたことはないはずである。だから、シライさんの暗黙の期待にも気づかなかったのではないだろうか。年賀状の筆跡に目を向けたのも意図的でなく自然な反応だった。つまり前者のJリーガーという夢が照れくさかったのだと考えられる。それでも「正直に」とあるので、うそをついたりごまかしたりせずに答えた。

シライさんは「そうか、じゃあもっとたくさん食べて、もっと大きくならないとな。」と笑ってくれた。

「もっと」とあり、さらに、今以上にという意味で重ねてつかっている。シライさんは期待した答えと違って、おそらく多少がっかりしているだろう。けれども父がそうだったように、少年も漁師になりたいと思っただけでもないとも予想していたかもしれない。Jリーガーという子どもらしい答えが返ってきたので、スポーツ選手を目指すどのような答えにでも使えるあたりさわりのない大人の反応をしている。「笑ってくれた」とあり、少年はシライさんがあきれたりたしなめたりせずに、笑ってうけとめてくれたことを肯定的に捉えている。

『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲良しだったシライさんが、家に着くとあっさり大人の仲間に入ってしまったのが、ちょっと悔しかった。

「いた頃は」とあるが、「いた時は」と比べてみると、『みちしお荘』

でシライさんと会話をしたことが遠いことであると少年が感じているということがわかる。実際は通夜まで会話をしていたのだから数時間前の出来事である。「あんなに」とあるので、あれほど仲良しだったと仲良しだったことを強めている。実際は数時間会話をしただけであるが、少年はシライさんととても仲良くなったと感じていた。一週間の滞在で祖父や父と仲良くなったシライさんは、少年の家族とウマがあうのだろう。「あっさり」とあり、簡単に大人の仲間に入ってしまった。「しまった」とあるので、少年はシライさんが大人の仲間に入っただけとは思っていなかったことがわかる。「ちよつと」とあるので、少しだけ。とても悔しかったわけではない。「悔しかった」とあるので、少年とだけ仲良しでいて欲しかったシライさんを大人たちに取られてしまったことに寂しさを感じ、敗北感を持っている。あるいは、少年も大人の仲間に入りたかったと考えるならば、シライさんに敗北感を持っていても考えられる。あんなに仲良しだった、と修飾しているので、ここでは前者（シライさんを取られて悔しい）という意味だろう。

おとといまではこの家にいた人のことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべっている。

「もう」という言葉からは、思い出話にするにはまだ早いという少年の考えが分かる。祖父は、病気を患っていたわけではなく、脳溢血で突然亡くなってしまった。周りの人間にとつても、祖父の死を覚悟する時間もなく、突然の出来事だったはずである。おとといには元気に歩き回っていた人間のことを、過去の人のように思い出として語ることができるというところに、少年は違和感を覚えた。みんなはおそ

らく葬式に慣れていて、その場にふさわしい振る舞いを身につけているのだろう。みんなはゆつくり悲しんでいる。けれども少年は、まだ祖父の死を思い出にできるほど整理して受け入れることができない。

涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。

「だんだん」とあるので、悲しみが少しずつ大きくなっていった。どんどん、だと勢いよく悲しみが積み重なっていく様子だが、「だんだん」だと、時間をかけて徐々に悲しくなっていく様子がわかる。ここでの少年の悲しさは、おとといまでは元気だった祖父が、すでに過去の人間のように思い出として語られていることに感じる悲しさである。少年は祖父が過去の人になってしまったことに直面して、悲しさを実感した。

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、しばらくタオルを見つめた。

「伸ばしかけた」とあるので、手を伸ばし始めてその途中で動作を止めた。「なんとなく」とあるので、理由ははっきりとわからないが、触るのが怖かった。「しばらく」とあり、長い時間ではないものの、すぐともいえない程度の時間じっと見つづけていた。

ほいで、今もそうなんじゃろうかと思うて棺おけをのぞいてみたら、やっぱリデコが白いんよ。

「ほいで」は、それで。「そうなんじゃろうか」は、そうなのだろうかという意味で、おじいちゃんやんのデコのところが白いのだろうかという疑問。「のぞいてみたら」とあるので、確認するために棺おけの扉か

らためしにのぞいた。「やっぱり」とあるので、予想通りだった。

じゃけん、のう、シライさん、じいさんをええ男にして冥土に送ってやらんといけんものう……。

「じゃけん」というのは、だからという意味。「のう」は、ねえと呼びかける言葉。シライさんに同意を求めている。「ええ男」とあるので、デコのところ白くなっている祖父を、父はええ男ではないと思っっている。父にとってええ男とは、漁師としての祖父である。「いけんものう」は、いけないからねえという意味。「……」とあるが、父の発話は最後まで言い切っており、省略されていない。ここでは、涙声になって聞き取りにくくなり、声も小さくなった父の言い方を表している。

「やっぱり、タオルがないとおじいちゃんじゃないから。」

「やっぱり」とあるので、結局は、ということ。「おじいちゃんじゃない」と言っているが、タオルを巻いていなくても祖父は祖父である。シライさんや父は、祖父を漁師として送ろうと考えている。

シライさんも「そうだな、写真撮ってやるよ。」とカメラをかまえた。

シライさんはカメラをなぜか持ってきている。タオルを取りにきただけなのにカメラを持ってきたということは、最初からタオルや少年がタオルを巻く様子を撮ろうと思っていたのだろう。「シライさんも」とあるので、父がタオルを巻くように促したのに加えてシライさんも巻くように促した。

額にきつく巻き付けた。

「きつく」とあるので、ただタオルを巻いただけでなく、ずれたりはずれたりしないようにしっかりと巻いた。祖父が漁に出る前に、キユツと巻きつけたように少年もこれから漁にでるかのように巻きつけた。ここから、少年が祖父や父の後を継いで漁師になると決意したのだと読むこともできなくはない。しかし、ここでは父やシライさんに促されて巻いたのであって、少年の意思で自ら巻いたわけではない。そして、Jリーガーになりたいという希望がなくなったわけではない。そのため、ここでは、漁師になる決意をしたというよりも、漁にでる祖父を思い出しながら、祖父の真似をしただけである。

まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものが、まぶたからあふれ出た。

「熱いもの」とは涙のこと。「あふれ出た」とあるので、目いっぱいにたまっていた涙が、目を細め、まばたいたのをきっかけに流れ出した。カメラのフラッシュがたかれた瞬間に泣いたのでなく、それまでに涙がたまっていた。祖父の死に対して、涙が出てこず、悲しいかどうかはつきりしなかった少年だが、少しずつ悲しみを感じていった。それでも涙は出なかったが、タオルの潮のにおいや、父が目元をこする仕草の中で、少年も涙をこぼした。少年は居場所を見つけた。

かすかな潮のにおいは、そこにもあった。

「かすかな」とあるので、少しだけ感じられる様子。ここでの潮のにおいは、涙のしよっぱさのこと。タオルの潮のにおいに対して、涙の潮のにおいがかすかだということ。「そこにも」とあるので、タオルにあるのに加えてまぶたからあふれ出た熱いものにも潮のにおいがあった。

## 三 考察

少年は、祖父が亡くなってからずっと、家のどこにいればいいのかわらなかった。居場所がなく、落ち着かない様子だった。しかしそれは、あわたましいという理由だけでなく、祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからないためだった。

おじいちゃんが死んだということはわかっていても、それが悲しいことなのかどうかも実感できていなかった。さらに、悲しいことだとは頭では理解していても、涙が出てくることもなかった。「タオル」は祖父の死にどのように向き合えばよいのかわからない少年が、最後に居場所を見つけ、涙を流す物語である。

そんな少年が祖父の死を悲しいと実感できたのは三つの出来事があった。第一にシライさんの写真を見て、おじいちゃんがまだ生きているかのように想像した時、もうおじいちゃんと話すことはできないことと悲しさが結びついた。さらに第二に叔母さんたちが、おとといまで元気に歩き回っていた祖父のことを過去の人のように思い出話にしてしゃべっているのを聞いた時、少年は悲しくなってきた。それでも涙は出なかったのだが、最後に祖父のタオルを額にきつく巻き付けた時、すぎきれなかった潮のにおいをおじいちゃんのおいだと感じ、少年は涙を浮かべた。祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからない少年だったが、祖父がまだ生きているかのようにふと想像したこと、まわりの人が祖父をもう過去の人のようにしゃべっていたこと、そして祖父のにおいによって、当事者として悲しみを実感することができ、涙を流した。

もう一人の人物であるシライさんも、はじめ他の人と会話をすることもなく居心地の悪い状況だった。少年の居場所のない状況とよく似ていたために、少年はシライさんに親近感を感じるのだが、しかしシライさんは少年とは異なり、祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからなかったわけではない。知り合いが父しかいないための居心地の悪さであり、実際通夜の後には、写真とお酒が手伝って、あっさり大人の仲間に入ってしまった。

シライさんは、十二年前に漁師の祖父を取材する中で漁師になることを嫌がる父と会い、そして今回は漁師の父と少年とに会った。少年に漁師になるのを嫌がっていた父の話をし、「三代で船に乗れたらうれしいことです」という祖父の年賀状を見せたシライさんは、少年も漁師になることを期待していたのだろう。「タオル」には、漁師という生き方を三世代で継いでいこうとする少年たちをシライさんが見つめるというもう一つの物語も描かれている。

まだ幼い少年は「フリーガーになりたい」と正直に答えるのだが、シライさんは笑って受け止める。「ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ。」というシライさんにとっては、父がそうだったように、少年も時間をかけて漁師の生き方を選ぶはずだという余裕があるのだろう。シライさんは少年たちの生き方に介入することはなく、写真を撮影し、見つめるだけの観察者である。少年が祖父のタオルを額にきつく巻き付けた時、シライさんは絶妙のタイミングでカメラを取り出し撮影する。それは、少年にとっては祖父の死を受け止め、当事者として悲しみを実感し、涙を流す行為だったが、シライさんにとっては、漁師の生き方が受け継がれていく現場に立ち会ったような思いがしたのかもしれない。

「タオル」は、祖父の死にどのように向き合うかという葛藤を抱える少年の物語であると同時に、漁師という生き方を三世代で継いでいく現場に立ち会うシライさんの物語でもある。そして、どちらの物語にも祖父のタオルが大きな意味をもっていた。少年にとってタオルは祖父そのものであり、シライさんにとってタオルは漁師という生き方を表すものであった。



## 卒業ホームラン（重松清）

來住 翔太、千葉 大暉、溝口 智大、柳井 光一



## 一 作者と作品について

重松清は、一九六三年に現在の岡山県津山市に生まれた。角川書店の編集者として勤務した後、一九九一年に『ピフォア・ラン』でデビュー。一九九九年『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、二〇〇一年『ビタミンF』で直木賞、二〇一〇年『十字架』で吉川英治文学賞を受賞する。重松清は彼自身に関して次のように語っている。

言ってみれば、自分の墓碑に記される言葉——それを本人が決められるのなら、僕は「重松清」を「教師の話をたくさん書いて、親の話をたくさん書いて、子どもの話をたくさん書いた男」と呼びたい。（重松清、「せんせい。」、二〇一一、新潮社）

この言葉のとおり、彼の作品には、現代の教育問題や家族問題をテーマに扱ったものが多い。また子どものころから吃音であり、カ行の発音がうまくなかった。彼の作品の中には、『きよしこ』『青い鳥』など吃音症をもつ人物が現れる。

その他の作品として、『流星ワゴン』『疾走』『卒業』『その日のまえに』『きみの友だち』『カシオペアの丘』『くちぶえ番長』『せんせい。』

『どんび』『希望ヶ丘の人びと』『峠うどん物語』など多数ある。

「卒業ホームラン」は、試合に出られなくても野球に真面目に取り組む小学校六年生の息子「智」を、監督と父親の立場で揺れる「徹夫」の視点から描かれている。さらに「がんばってもいいことないじゃん」いう中学校二年生の娘「典子」との関係も交えながら進んでいく構成であり、「親」と「子」の話である。もともと短編小説集『日曜日の夕刊』の中に収められた十二編のうちの一つである。これは「サンデー毎日」で連載された作品をまとめたものであるが、それについて重松清は次のように語っている。

初めての、週刊誌での連載だった。一回二ページ、四回で一話完結——という形式である。連載の注文をいただいたとき、真っ先にかんだのは、「雑誌の“間”になってみよう」ということだった。このご時世、新聞や雑誌は暗いニュースや悲観的なメッセージで埋め尽くされている。そのなかのちよつとした隙間を見つけて、ふわつとした手触りをした、さわやかなおとぎ話が書けないか。（中略）

ひさしぶりに家族が顔をそろえた日曜日の夕食時、ちよつと照れくさくなったお父さんが、「えーと、夕刊は……」とつぶやきながら食卓のまわりを探しかけて、ああそうか、と苦笑して顔を上げる。ぎこちなく、滑稽で、けれど悪くない気分の“間”である。ぼくの

書くお話も、そんな“間”のような居場所を見つけられたら——と願いながら、十二編のお話を書きつづけたのだった。(重松清、日曜日の夕刊、二〇〇二、新潮社)

そのように意識されて書かれた作品の最後、十二編目として位置づけられた「卒業ホームラン」は、ゆく二〇一一年に、重松が東北の大震災の被災者に対して少しでも役に立てないかと考え、刊行された自選短編集表題作品として収められ、さらに表題作として扱われたことから、彼自身の「卒業ホームラン」への愛着を感じる。

なにかできないか。ほんの小さいことでも役に立てないだろうか。そう考えているときに、自分の書いた昔のお話が「オレたちがいるぞ」と声をかけてきたような気がしたのです。

その声にハッパをかけられてつくったのが、『卒業ホームラン』『まゆみのマーチ』です。ともに「自選」という形で、特に愛着の強いお話を集めました。(中略)

『卒業ホームラン』と『まゆみのマーチ』の場合は、それに加えて、読者一人ずつの胸の中にある「東北」や「家族」の幸せな風景が浮かんできてほしいな、と願っています。(重松清、自選短編集・男子編 卒業ホームラン、二〇一一、新潮社)

現在東京書籍の二年生用読み物教材として教科書に掲載されており、「自分と比較しながら作品を読み、生活の中で読書に親しむ。」ことを学習の主な目標とされている。

## 二 叙述について

天気はよかったが、朝のニュースによると、午後からは風が強くなるだろうとのことだった。

午後から何か波乱が起こるといふことの伏線。

平日より少し華やいだスーツを着た天気予報のキャスターは、「行楽にお出かけのかたはセーターを一枚余分に持っていていかれたほうがいいかもしれませんね。」と愛想よく笑っていた。

「華やいだ」といふ言葉や、「セーターを一枚余分に」といふキャスターの言葉から、季節は春先である。

「ねえ、お父さん、春一番かなあ。」

スポーツバッグの中身を点検しながら、智が言った。

「点検」とあることから、中身を一つ一つ入念に見ている。これから智にとって大切なことが控えている。

「どうなんだろうな。」と徹夫は首をひねり、使い込んだノートに〈風の可能性あり。〉と走り書きした。

徹夫は午後から風が強くなることを気にしている。ノートにわざわざ書くということは、風が影響するかと考えている。

表紙にサインペンで書いた〈富士見台クリップパーズ 第六期活動記録〉の文字も一年間でずいぶん色あせた。

富士見台クリップパーズというチームは結成してから六年目というこ

とがわかる。

少年野球チームの監督を引き受けてから、六年がたった。

富士見台クリップーズとは少年野球のチーム名である。徹夫はそのチームの監督で、結成当初から引き受けている。

三十代の後半は、ほとんどすべての日曜日を河川敷のグラウンドで過ごしてきたことになる。

徹夫は四十歳前後であることがわかる。

チームが結成されたころには小学校一年生だった智も、来週、卒業式を迎える。

智は小学校六年生。作中の時期が、三月半ばの日曜日ということがわかる。

長かったような気もするし、あつという間だったようにも思う。

「長かった」や「あつという間」から、監督としてチームの結成時からのことを思い返しての気持ち、もしくは親として智の成長を振り返っての気持ちの両方を取ることができるとは。

智はスポーツバッグのチャックを閉め、そばに置いていた金属バットを手を取った。

智も野球をやっていることがここで初めてわかる。

庭に出た智と入れ替わりに、妻の佳枝がキッチンからリビングに顔をの

ぞかせた。

偶然入れ替わる形になったのか、智が出ていくタイミングを見計らっていたのかわからない。しかし、後述の会話内容を見る限り、後者の可能性が高い。

「ねえ、あなた……。」

「……」とあり、何か話しにくいことを言おうとしているというふくみを持たせている。あるいは、途中で会話を遮られたとも考えられる。

「難しいよ。実力の世界だからな。」

妻のセリフの途中にこのセリフを被せたと考える。まだ尋ねられていないのに返答している。最後まで話を聞かずとも、妻が何を言わんとしているか徹夫にはわかる。以前にも同じような切り口で話しかけられたのではないだろうか。

徹夫がぼつりと返すと、佳枝は「智のことじゃないわよ。」とため息交じりに言った。

「ぼつりと」とあるので、前述の言葉は妻に向けてのものであるが、自分自身への言葉とも取れる。

妻のため息は、自分と夫の間で会話が成り立っていなかったことへの落胆。

「なんだよ。」拍子抜けした思いが、声を不機嫌にしてしまう。

徹夫は智のことを考えており、妻も自分と同じことを考えていると

思っていたので拍子抜けした。また、野球チームの活動前ということもあり、野球以外のことを考えたくなかったため、他の話題を持ち込んだ妻にいらだちを覚えたのかもしれない。

中学二年生の典子の様子が、秋ごろからおかしい。

約半年間、様子がおかしい。

担任の教師によると、授業中もぼんやりと窓の外を見ているだけで、ひどいときには教科書を開こうとすらしないのだという。

娘の様子がおかしいのは、家族だけでなく学校の先生も気づいている。「のだという。」という表現から、学校での様子を徹夫も佳枝も把握しており、そのことが夫婦間での悩みの種となっている。

難しい年ごろだというのは、分かる。

親として娘を気にしていることがわかる。

しばらくは扱いづらだろう、とも覚悟していた。

様子がおかしくなった当初、思春期の娘なので、扱いづらいことも出てくるだろうということは予想していた。

だが、親や教師に反抗するのではなく、一年後に迫った高校受験のプレッシャーでいらだつのもなく、今自分がいなければいけない場所からさらりと立ち去っていくような態度が気になってしかたない。

「気になってしかたない」とあるので、気にしないようにしようと思っただけでも気になってしまうということが分かる。典子のおかしさ

は、自分が予想していたおかしさとは異なるものであった。気になりつつも、親としてどうすればいいのかわからない。

冬休みに、一度きつくしかった。

「きつく」とあるので、普段叱る以上に、厳しく叱った。きつく叱れば態度も変わるだろうと期待していた。

だが、典子はたいして悪びれもせず、「来年は受験なんだぞ。」と繰り返す徹夫をむしろ哀れむように見て、言った。

しかし、典子の態度は変わるところか徹夫の予想外の返事が返ってきた。「たいして」とあるので、あまりおどおどした様子はなかった。

「がんばったら、なにかいいことあるわけ？その保証あるわけ？」と続け、徹夫が返す言葉に詰まってしまうのを見込んでいたように、「ないでしょ？」と言った。

徹夫は「がんばればいいことがある」と言っている裏で、心の中では「がんばっても報われるわけではない」と思っている自分がいた。

ここでは、そんな自分を見透かされているような言葉が出てきたので、返事につまってしまった。

そのときの、まるで幼い子どもに教え諭すような口調は、今も徹夫の耳の奥に残っている。

それほど、典子の返事は徹夫に衝撃を与えた。この返事が、現在の、どうすればいいのかわからないという状態を作り出すことになった。

がんばれば、いいことが——「ある。」とすぐに言ってやらなかったのは、親として間違っていたかもしれない。

親としては、典子のように無気力状態にならないように励ましてやらなければいけないと、後になって思った。「かもしれない」とあるので、いずれにしても自信がない。

それでも、今もう一度同じことをきかれても、やはり言葉に詰まってしまおう。

「やはり」とあるので、一度冷静になった今でも、どういう言葉をかけてやればいいのかわからない。それほど、典子の言葉は徹夫を困惑させた。

「ある。」と答えると、うそとまではいわなくとも、なにか大きなごまかしをしてしまうことになるだろう。

ごまかしになってしまおうという具体的な事例に心あたりがある。

いつものことだ。

「いつも」とあるので、最後の試合ぐらい自分の子を使ってほしいというお願いは、毎年この時期になると聞くことが多いのだろう。

ふざけるな、と監督として思う。

普段の練習を見ているのは自分だし、自分の中でチームの構想は出上がっている。そこに情を挟んでしまうのはよくないことであるという監督の立場からの感情である。

だが、父親として立場を入れ替えてみると、その気持ちも分からないではない。

対して、親という立場で考えてみると、自分の子どもが活躍する場面を見たいという気持ちも分かる。

徹夫は顔をしかめ、それを悟られないよう、棒読みのような口調で言った。

「棒読みのような」とあるので、親・監督両方の立場がわかる分、どうすればいいのか葛藤している。

バットを上から振り下ろしてボールを地面にたたきつけるんだ、と何度言っても、アッパースイングの癖は最後まで直らなかった。

アッパースイングの癖を直そうと、智と徹夫はがんばってきたのだろう。しかし、どうがんばっても癖は直らなかった。典子の「がんばったら、なにかいいことあるわけ？その保証あるわけ？」という言葉は、智のことを指しているのではないかと徹夫は考えてしまったのではないだろうか。前述した具体的な事例とは、智のことを指している。「最後まで」とあるので、今日の試合を最後までと考えている。

ノートには、日曜日ごとの練習や試合の記録が細かく書きつけてある。「細かく」とあるので、監督として、毎週の記録は欠かさず記入している。

今日が二十試合目——智たち六年生にとっては最後の試合になる。

今日の一戦は、徹夫、子どもたち、子どもたちの親にとって特別な

試合である。

結成以来のメンバーだ。一年生のころから鍛え抜いてきた。

小学校入学から卒業まで見てきたので、第六期のチームには思い入れが強い。

そのかいあって、戦績は十九勝〇敗。

一年生のころから鍛え抜いてきたことが、結果として表れている。

ずば抜けた選手がいるわけではなく、試合はいつも接戦になるが、それをものにする粘り強さがある。

頭の中で、第六期のチームの特徴を粘り強さだと把握できている。

その特徴を生かして、勝てるような采配をしてきた。その結果が、全勝につながっている。

ここまで来たら、全勝のまま小学校を卒業させてやりたい。

監督としての願い。勝たせてやるのが監督の使命だという気持ちがある。

それが六年間がんばってきたことへのなによりのごほうびになるはずだ。

自分の子を使ってほしいという願いをされたときに、「ふざけるな」と思ってしまったのは、何としてでも勝たせてやりたいという気持ちが強かったからであろう。

補欠組もレギュラー組と分け隔てなく練習させ、試合のときにはピンチヒッターやピンチランナーでなるべく出番を作ってやるように心がけてきた。

分け隔てなく接して、すべての子どもにも平等にチャンスを与えてやるといのが、徹夫の監督としての信条である。

十六人いる六年生の、しんがり。

「しんがり」から、智が、十六人の内で一番下手であるということが分かる。

公平に実力を判断した結果だった。

「公平に」とあるので、六年生だから出してやりたいがために決めたのではなく、実力的に背番号一六が妥当であると考えた。



いや……ほんとうに公平に見るなら、智よりもうまい五年生は二、三人いる。

「ほんとうに公平に見るなら」とあるので、公平に判断しなかったということがわかる。智よりもうまい五年生たちではなく、智はこれが最後のチャンスであるので、どうしても出してやりたかった。

痛いほどわかっている、そこまでは監督に徹し切れなかった。

「そこまで」とは完璧な実力主義をつらぬくまで。「徹し切れなかった」とあるので、父親として、智を試合に出させてやりたいというきもちが、監督としての公平な判断に勝ってしまった。

父親の自分を少しだけ残してしまった。

監督として徹しきれなかった。「しまった」とあるので、そうするつもりはなかったのだが、意思に反してしてしまった。

まだパジャマ姿だった。

「まだ」ということは、本来今の時点でパジャマ姿であるべきではないと考えている。

むっとしかけた徹夫をいなすように、典子は庭に目をやって「智、張り切ってるじゃん。」と言った。

「いなすように」とあるので、典子は自分の話をされると面倒であると考えていたのだろう。

「最後の試合だからな。」気を取り直して返す。

「気を取り直して」とあるので、むっとしかけた自分を抑えている。

「模試に行かないんだったら、応援に来るか？」

応援に来たら、典子の何かが変わるかもしれないと期待しているのかもしれない。

典子の声に、父親をとがめるような響きはなかった。

「とがめるような」とあるので、責めるようなということ。とがめられるかと予想していた。

ごく自然な言い方で、だからこそ、胸が痛む。

「ごく自然な言い方」とあり、徹夫もそんなことは何度も考えている。それほど誰しもが素直にそう考えること。「だからこそ、胸が痛む」とあり、誰もが思うそんなことをしてやれない自分に胸が痛むのだ。

「実力の世界だからな。」徹夫は言った。

試合に出られないのは、智の実力のせいであると考えている。

「試合に出ることだけが野球じゃないんだ。」

試合に出ることだけのためにがんばっているわけじゃないし、試合に出ないとそのがんばりが報われないというわけでもない。

屁理屈だ。

それとこれとはまた、話が違う。がんばった結果がどうなろうと、そのがんばった過程が大事だと言っただけで、勝っても負けてもどうでもいいということにはならない。

「努力がだいいじで結果はどうでもいいって、お父さん、本気でそう思ってる？」

本当はそう思っていないでしょ、という確信がありつつ聞いている。

徹夫は黙って、小さくうなずいた。

「黙って」とあり、何もいうことができない。「小さく」とあるので、自信のなさが表れている。

新チームのエースになるはずの五年生の長尾君を控えに入れておくべきかもしれない。

となると、誰か一人、ベンチ入りする予定だった子Ⅱ智をベンチから外さなければならぬ。

「はい……すぐに。」

「……」とあるので、どうすればよいか迷っている様子が分かる。

主審に促され、補欠の欄のいちばん下に〈加藤〉と走り書きして渡した。

「走り書きして」とあるので、少し投げやりな行動であることを表している。

メンバー表の〈加藤〉を二重線で消して、横に〈長尾〉と書き込んだ。

父親としての徹夫が消え、監督としてチームを勝利に導くために全力を出さなければという念がこみ上げてきた。より勝利に近づくために長尾君をメンバーとした。

高校時代を振り返って、徹夫は思う。

高校時代におそらく野球部だったのであろう。

負けず嫌いの性格だった。

野球だけでなく、勉強でも他のスポーツでも、負けたくないから必死に

がんばってきた。

徹夫の性格や考え方がわかる部分である。

それが報われたこともあつたし、報われなかったことも、もちろん、ある。

「もちろん」とあることで、報われない頑張りがあることを前提として述べている。

がんばればいいことが——「ある。」とはやはり言えなくとも、「あるかもしれない。」くらいなら典子に言ってやれるかもしれない。

「やはり」から、何度考えてもそう言い切れる根拠が見つからないでいることがわかる。また、「かもしれない」という曖昧な表現を重ねることで、典子が聞き入れてくれるのかどうか、また、自分が典子に言ってやれるかどうかの不確定性が浮き彫りになっている。

「いいことがあるかもしれないから、がんばる。」と言葉を並べ替えてもいい。

前述のような思いもあるが、なんとか自分の考えや経験から、典子にメッセージを伝えようと考えている。

だからこそ、本音を言えば、徹夫にはよく分からないのだ。

「だからこそ」ここまでの徹夫の考えを踏まえている。

「いいことがないのに、がんばる」智の気持ちだ。

「いいことがない」とは、ここでは試合に出られないということ。



監督としても、親としても、それは決して口にはできないことなのだが。

双方とも、選手を、息子を頑張らせる立場にあることが分かる。

まずいぞ、と思う間もなく江藤君は投球動作に入った。

試合が劣勢であることを示している。また、この前後の文では、短文を連続させることで切迫感を出すとともに、試合の展開をスピーディーに伝えている。

左中間にライナーで飛んだ打球はぐんぐん伸びて、レフトの前島君の差し出すグローブのはるか上を越えていった。

「ぐんぐん」「はるか上」という表現から、クリップパーズからすれば絶望的な打球であったことを強調している。

五回の裏を終わったところで○対八。

もう勝つ望みの薄いことを、残された回の少なさ、点差により、伝えていく。

ショートの前島君の父親が小走りにベンチ裏に来て、言った。

「小走りに」とあるので、やや急いでいる。

「もう試合の勝ち負けはいいですから、補欠の子もみんな出してあげましょうよ。せつかく今までがんばってきたんですから。」

急いでいた理由が、補欠全員を出せるようにという配慮だった。「今まで」というのは、今ベンチにいるのは全員六年生であることから、

最長で六年間である。

徹夫は黙ってうなずき、帽子を目深にかぶり直した。

「かぶり直した」という表現から、勝つことよりも、全員で最後を締めくくりに切り替えた徹夫の様子がうかがえる。

この試合なら、智を出してもだから文句は言われなかった。

このような大差の負け試合ならば、という意味。序盤に出てきた表現とも呼応する。また、「文句は言われなかった」という表現から、このような試合でなければ文句を言われる、という状況であることが分かる。つまり、上手でない智を試合に出すことは、父親としての最良であると断ぜられるということである。

あいつの努力を最後の最後で無駄にしたのは、おれだ。

父としての徹夫の言葉である。「無駄にした」というのは、補欠にも入れなかったことを指している。

後悔はしない。

ここは、監督の立場からの思い。

それでも——おれは智の父親として、この監督のことを一生許さないだろう。

頑張った先の「いいこと」をフイにってしまった後悔や、自分への怒りを表している。

一家の声援を受けて、ツースリーまで粘ったが、最後は空振り三振。

「一家の声援」というのは、序盤にもあるように、祖父母も含んでのことであろう。ツースリーというのは、塁に出られるか出られないかのギリギリのところであり、山本君がよく粘ったことを表している。

思い切りスイングをしてよじれてしまった背中の一四の数字が、一瞬、智の背負った一六に見えた。

智を試合に出してやりたかったという思いの表現。

悔しそうな顔で引き上げてくる山本君に、ベンチの横から励ましの声が飛んだ。

「ベンチの横」とあることから、メンバーに含まれていない部員ということがわかる。

「惜しい惜しい、ナイススイング！」

「惜しい」を二回繰り返していることで、ツースリーまで粘り、本当にあと一步であったことを強調している。悔しさをにじませる山本君への励ましをより強めようとしているのである。

智だった。徹夫と目が合った。

試合前の様子など、メンバーを外れてもまじめにひたむきに取り組む智が描写されており、ここで声を出したのも智ではないかと予想する読者も少なくない。ここではその裏付けの意味合いもあるか。また、深読みではあるが、声に反応して智の方をつい見てしまった（ここではおそらく父親の）徹夫の心情も推し量れるのではないか。

智は、元気出さなくちゃね、というふうにはほほえみ、うつむいて、もう顔を上げなかった。

一貫して描かれている、智のひたむきな性格から、試合中であることを意識し、ほほ笑むが、やはり試合に出られない悔しさも出してしまう、小学生の幼さも描いている。

試合が終わった。〇対十の完敗、いや、惨敗だった。

「いや、惨敗だった」と言いなおすことで、試合の結果がいかに惨憺たるものであったかを読者に印象付ける効果がある。

母親どうしのおしゃべりの輪から少し離れた所にぼつんとたたずんで、こつちを見ていた。

六年生の中で、唯一智がメンバーから外れており、周りの母親にも気を遣うてのことか。

誘っても来なかったというより、最初から佳枝が誘わなかったのかもしれない。

朝の様子、最近の典子の様子を見て、来ないことを、徹夫も佳枝も予想していたのである。

今日の試合だけは、見られたくなかった。

大差で負けたが、智を出すことのできた試合である。それを、メンバーから外すことで出られなくしてしまった徹夫にとって、「やはり頑張ってもしょうがない」と強く典子に思わせてしまいかねない。「だけ

は」としていることで、それがより強調されている。

天気予報より少し早く、試合が最終回に入ったところから風が強くなっていった。

朝のニュースの話題をもう一度提示している。「ニュース↓家族の会話」の流れは作者の意図的なものか。

加藤——と呼びかけて、試合はもう終わったんだと思い直し、父親に戻った。

チームの活動のときは、名字で呼んでいることがわかる。折に触れ、父と子でありながら、監督と部員でもあるこの関係性の中で、徹夫はそれを意識している。「思い直し」という言葉から、ここでもこの様子がうかがえる。

智は一瞬きよとんとした顔になったが、すぐに「オッス！」と帽子を取って答えた。

「きよとん」という表現から、智は驚いていることが分かる。しかし、それが急に呼ばれたことに対してなのか、名前で呼ばれたことに對してなのかはわからない。しかし、「オッス！」や「帽子を取って」という表現が野球部部員としての言葉・行動であることから、智が「部員」として「監督」の徹夫に接していることがうかがえる。

ベンチに座って、敵も味方も観客も引き上げたグラウンドを徹夫はぼんやりと眺めた。

もう誰もグラウンドに残っていない。「ぼんやりと眺めた」とあるこ

とから、敗戦について、それから、智に話す内容について思索しながらベンチに座っている。

「お父さん。」隣に座った智が言った。

この時点では、すでに「息子」の智に戻っている。

「いいの？もうすぐ打ち上げ始まつちゃうんじゃない？」

最初から企画されていたのかはわからないが、打ち上げがあることがここで初めてわかる。智も知っていることから、子どもたちも参加できるような形式のものか。

徹夫は笑いながら言って、緩んだほおがしほまないうちに続けた。

「緩んだほおがしほまないうちに」から、徹夫がこれから話す内容を、できるだけ暗くならないように話そうとしていることが分かる。

声は明るかったが、顔はさっきと同じようにうつむいてしまった。

試合に出せなかったことを悔やむ徹夫と、それよりも試合結果に言及した智の会話の場面。自分のことよりチームのことを、という智の性格の表れか、もしくははあえて自分が出られなかったことを話題にすまいとしているのかもしれない。前文「いいってば」の表現は、毎試合同じような話をしているか、もしくは、「声は」の文から、前述のように自分のことが話題に上ってしまい、気丈に振舞おうとしたのかもしれない。

徹夫と反対側の隣に座った佳枝が、智の肩越しにこっちを見ていた。

智と一緒に佳枝も残っていたことがわかる。

目が合うと、しようがないわよ、と小さくうなずく。

徹夫の気持も智の気持も察しての表現か。

あてもなく自転車を走らせ、暇をつぶすだけのために本屋やCDショップをのぞく典子の姿を思い描くと、腹立たしさよりも悲しみのほうが胸にわいてくる。

試合が終わってからここまでの間に佳枝から典子のことを聞いたのであろうか。マイナスの表現（あてもなく、だけの、悲しみ）を使うことで、失望感のようなものが読み取れる。

そう信じていられる子どもは幸せなんだと、今気づいた。

「今気づいた」の表現は、典子のことを思った今気づいた、という意味か。

大人になって「お父さんの言っていたこと、うそだったじゃない。」と責められてもいい、十四歳やそこらで信じることをやめさせたくはない。信じることのできない典子に対する徹夫の思い。また、頑張り続ける智にも、という思いもあるか。

だが、そのために何を語り、何を見せてやればいいのか、分からない。

現時点で、徹夫が苦心していることの答えは、まだ出ていない。

「中学に入ったら、部活はどうするんだ？」

卒業式が来週に迫っており、中学入学も近い。さらには、六年間通して続けてきた野球が、最終戦を終え、一区切りがついたため出てきた言葉である。

答えは間をおかずに返ってきた。

「間をおかず」という表現から、智がはっきりと野球部入りの意思を固めていることがうかがえる。

「ほら、サッカーとかテニスとか。」

野球ではベンチ入りも果たせなかった智に対し、佳枝も心配していた。具体的に「サッカー」「テニス」と提示することから、智に選択肢を増やすという心遣いが分かる。

だが、智には迷うそぶりもなかった。

「迷うそぶりもなかった」から、佳枝に他の選択肢を提示されてもなお、野球部にするという意思が全く揺らがないことがわかる。

「いいよ。だって、僕、野球好きだもん。」

この作品の核心と言っても良い部分。徹夫にはっきりと言われ、なおも同じく野球が好きであるという智の意思が、重ねて伝えられている。

一瞬言葉に詰まった後、徹夫の両肩から、すうっと重みが消えていった。

「一瞬言葉に詰まった」から、智の言葉に対し、徹夫が驚いていることがわかる。また、ここでいう「重み」とは「本音を言う」と智の気

持ちがわからない」という徹夫の悩みであり、智が試合に出られなくともひたむきに頑張る理由を聞いたことで、それが解消されたことを示している。

ほおが内側から押されるように緩んだ。

「緩んだ」とあり、先ほどの「緩まないうちに」と意識せねば表情が固くなってしまっていた表情と対比される。

拍子抜けするほど簡単な、理屈にもならない、忘れていた言葉を、久しぶりに耳にした。

「拍子抜けする」とは、張り合いがなくなること。この場合、気が抜けるというのは、落胆やがっかりなどマイナスなものではない。自分が今まで悩んでいたことに対してあまりに「簡単な、理屈にもならない」答えを「智」が出したことに對して、肩の力、全身の力が抜けるという、「肩の荷が下りる」というようなプラスの意味合いに近い。

「忘れかけていた」ということは、身に覚えはある。それは、自分の子どものころを指すのだろうか。

智の返事を待たずに、試合で使わなかったままさらのボールをグローブに収め、マウンドに向かってダッシュした。

「智の返事を待たずに」とは、「智」の反応は待たない、半ば強引な行動である。「智」を試合に出すか出さないかで決断をなかなか決められなかったときは違い、決断した意思の強さを感じる。

風はホームベースから外野に向かって吹いている。

冒頭の「午後からは風が強くなる」という部分が、ここで影響を与えている。

智のアップスイングなら、うまくいけば一発打って一発の割合だろうが、風に乗って外野の頭を超えることもあり得る。

「一発打って一発」の割合は0・1%である。到底信用できる確率ではない。これを「うまくいけば」とし、「あり得る」とあくまで、無理やりと感じるほど肯定的にとらえようとしている。

それを親が信じてやらなくて、だれが信じるというんだ……。

「徹夫」は「父親」としての自分を強く意識している。「一発打って一発」という到底信用できない確率を、強いて肯定的にとらえようとする「徹夫」の姿を通して、「親だけは、自分の子どもを信じてあげなければならぬ」というメッセージが込められている。

はにかんだ様子で何度か素振りした智は、小さく一礼して打席に入った。

「はにかんだ様子」とあるので、母親が守り、父親が投げる、という状況に恥ずかしさ・照れくささを感じている。それでも打席に入るときに、一礼をする姿勢は「智」が野球に真面目に取り組んでいることを感じさせる。しかしその一礼は「小さく」なっているのはやはり、「智」の「はにかんだ」恥ずかしい、照れくさい感情からである。

「返事が違うだろ、腹に力を入れて。」

父親の口調から、監督としての口調に変化している。返事が違うというのは、いつも練習でしている返事の仕方とは違うということ。そ

れを意識させることで「智」にとっては気持ちを切り替えるきっかけになる。

例えば山なりのスローボール、そんなものを投げるつもりはない。

「智」に打ちやすい球をなげてあげよう、という気持ちは一切ない。

レギュラー組の打撃練習のときと同じように、速球を投げ込んでやる。

むしろ、レギュラー組でない「智」に対して、「智」にとっていつもの練習以上の球を「智」のために投げ込む。

それが、野球が大好きな少年に対する礼儀だ。

「野球が大好きな少年」とは、「智」のことである。息子ではなく、野球を愛する少年に対して、自分も野球をやってきた身として、ここで甘い山なりのスローボールを投げて打たせてあげることは失礼なことだとし、いつもの練習以上の速球をなげることが熱心に野球に取り組む「智」に対する敬意であると思っっている。

しかられて悲しいんじゃない、打てないのが悔しいのだ、と伝えるように、徹夫に投げ返す球は強かった。

半べそをかくほどの、打てない「智」の悔しさは心の中では処理されず、投げ返す球にそのくやしさをぶつけている。最後の試合でベンチに入れなかったのにもかかわらず、「長尾君に笑顔で接」し、「ベンチかの横から励ましの声」を飛ばすなど、「智」は自分の悔しい気持ちを表に出さなかったことを考えると、この「打てないのが悔しい」という感情の大きな高ぶりを感じる。

「智、今のホームランだよ！ホームラン！」と何度も言った。

「！」や「何度も」とあることから、必死に「佳枝」が「智」に呼びかけている様子が分かる。「今のホームランだよ！」という言葉は、明らかにホームランではない打球になった「智」への励ましである。

徹夫も少しためらいながら、右手を頭上で回した。

「ためらいながら」とあることから、明らかにホームランではない「智」の打球をホームランであることに抵抗を感じている。それは、「野球が大好きな少年に対する礼儀」ではないからであろう。「徹夫も」とあることから、この行動は「佳枝」の行動を受けてのものであると分かる。

打席できよんとする智に、ダイヤモンドを一周しろとあごで伝えた。

「一周しろ」と声に出さず「あごで伝えた」というのは、指示・指図という性格を持つ行動である。なので「智」のためを思っているのではなく、「ホームラン！」と言って「智」を励まそうとする「佳枝」の気持ちを気遣っていることではないかと考えた。

一方、「佳枝」の気持ちを気遣うというよりは、「佳枝」が「智」を気遣ったように、「徹夫」にもその「智」への気遣いがあったと考えることもある。

だが、智は納得し切らない顔でたたずんだまま、バットを手から離さない。

自分の打球が、ホームランではないことは明らかであり、それをホ

ームランだとすることに納得できず、ダイヤモンドを一周したくない気持ち表れている。

徹夫をじっと見つめ、徹夫もまっすぐに見つめ返してくるのを確かめると、帽子の下で白い歯をのぞかせた。

「じっと見つめ」、「まっすぐに見つめ返」すというのは、気持ちの共有である。ホームランであることを認めたくない「智」の気持ちを、「徹夫」も感じてくれていると確かめたから、安心し、笑ってみせたのである。

「お父さん、今のショートフライだよね。」

「だよね」、とは相手の同意・返答を期待する表現である。「徹夫」に対して、ショートフライであることの同意・返答を求めている。

あと数年のうちに父親の背丈を抜き去るだろう。

「数年」とすることは、数えられるほどすぐその将来を表しており、父親の背丈を抜き去る「智」の成長をすぐ近くに予感している。

アウト。

「徹夫」は「智」の同意・返答に応えた。

ゆつくりと智に近づいていき、声が届くかどうかぎりぎりの所で「ナイสบッティング。」と言った。

「声が届くかどうかぎりぎりの所」とあるので、「智」に聞こえても欲しいし、聞こえてなくてもいい距離である。決して「ナイสบッテ

ィング」ではなかったが、成長した「智」の姿を見て、ほめずにはいられなかったのではないか。しかし、ほめてしまったら「ショートフライ」と自ら言った「智」の決断に水を差してしまうから、聞こえてなくてもよいと思ったのではないか。

野球とは、家を飛び出すことで始まり、家に帰ってくる回数を競うスポーツなのだ。

「卒業ホームラン」が「家族」の物語であることと、野球を扱う物語であることの意味をここで示している。

「あなた、ほら、やっぱり来てる。」

やっぱり、とあるので「佳枝」は「典子」が来ると思っていたということを表す。「徹夫」と「智」が気持ちを共有したように、「佳枝」と「典子」にも同性ならではの気持ちの確認があったのではないか。

今なら、何かをあいづに話してやれるかもしれない。

「典子」の言葉に対して言い返す言葉が見つからなかった「徹夫」であるが、伝えることができるという気持ちを抱いている。成長したのは「智」だけでなく「徹夫」でもある。

先制点なのか、追加点になるのか、劣勢に立たされたの四点かは分からないけれど。

家族みんなで、ホームインしよう。

家族全員が一つの場にそろろうという場面はここで初めてである。

## 三 考察

## (一)

「がんばったらいいことがある」のかどうか。この物語のテーマの一つである。〈典子と智のやりとり〉〈智のベンチ入り〉そして何より〈主人公である父・徹夫の考え方の変化〉によって、読者に「努力」の必要性・価値について、この作品では語りかけている。

一般的に言われるのは、「努力はがんばったその分だけ報われる」とことわざでは、「努力に勝る天才無し」などと、努力するということは、することこそが成功への鍵であり、それには十分価値があるとされている。俵万智も「努力できるといふことも実力のうち」（俵万智、「りんごの涙」、一九六二、文藝春秋）と、結果にすら触れることなく、努力は価値のあるものだと言っている。

しかし、このように努力に対して肯定的な考えばかりが存在するのではないのもちろんのことだ。「凡人はどんなに頑張ったって天才には勝てない」「どんなに努力したって結果がいつまでもついてこない」といったふうに、自らの人生経験や価値観から「努力したって結局報われるとは限らない」「そんなもの無駄である」などと努力に対して否定的な考えを持っている人が多いのもまた事実である。

また、あわせて述べておくと幕内一步で有名な『はじめの一步』（森川ジョージ）には「努力した者が全て報われるとは限らん。しかし、成功した者は皆すべからず努力しておる」（森川ジョージ、「はじめの一步」コミックス第四二巻、講談社）とあり、読んで字のごとく、努力したからといって報われることが一〇〇％保障されているわけではないが、努力をする者にしか栄光は掴みとれないといった、前の二者

とはまた異なった視点から「努力」の価値について考えている。相田みつをの言葉には「毎日少しづつ。それがなかなかできねんだなあ」（相田みつを、「にんげんだもの」、一九八四、文化出版局）とあり、努力し続けることの難しさについてもうかがい知れる。

※（以下、考察に用いやすいように、前述した3つの考え方のうち、肯定的な考え方をまとめたものを「パターンA」、否定的な考え方をまとめたものを「パターンB」また、そのどちらでもない考え方を「パターンC」とする。）

## (二)

さて、この作品の中では息子・智が小学一年生の頃から結成第一期のメンバーとして鍛え抜かれてきたこと、そしてそのメンバーの中でも智はしんがりであることが「努力」というテーマに対する設定として鍵となって物語の根底に存在している。その上で、話が進むにつれて父兼監督・徹夫の中で次々と浮かんで消えて移り変わる「努力」について様々な考えと、その変化を及ぼしている人々との関わりなどによって、作者が伝えようとすることを描き出している。

物語の中では結局、六年間がんばり続けた智の努力が報われることはなかった。「がんばったらいいことが」ある・あるかもしれないからがんばる、などと様々に考えていた徹夫も、結局彼自身の中ではパターンCの考え方に至るところで落ち着いている。ラストシーンでの智とのやりとりの中で〈結果がどうこうの話ではない、好きだからだ〉〈がんばるだけなのだ〉という智の考え方に、徹夫は「努力」ということについての一種の答えを見出し、そこでこの物語は終わっている。パターンA、B、Cのいずれでもない「努力すること」へのひとつの



答えを筆者は物語の中に描き出している。

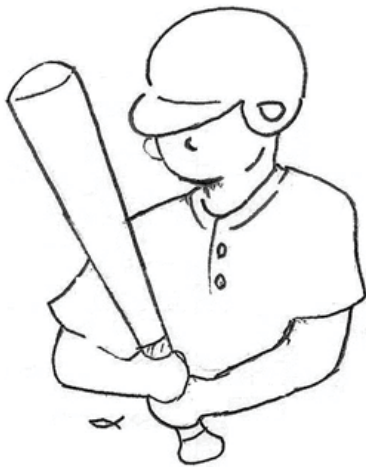
その他の登場人物についても見てみる。わかりやすいのは娘・典子の考え方だ。まさしくパターンBの考え方そのものである。「がんばってもいいじゃないじゃん」と、智の六年の努力が報われなかったことをひきあいに出して父へ問いかける典子であるが、父がどんな言葉を聞いても結局パターンBから離れることはない。また、努力が報われなかった智も自分と同じように、パターンBのように考え出すのではないのかとすら考えている。智の努力することに対する視点を交えて考えたとき、典子の「努力する」意義についての考えには〈報われること〉が絶対の必要条件として存在していることが分かる。

智のように報われるかどうかという次元から抜け出た考え方を典子は、更に言えば徹夫はできていない。しかし、物語の中で、智の「努力」に対する姿勢や考え方が、徹夫や典子の中に新たな風を吹き起こしたことは間違いない。典子についてははっきりとは描かれていないが、試合を見に来ていたことから何らかの変化・気づきがあったのかもしれないと見て取れる。また、徹夫に関して言うと、先に述べたように筆者が作品の中で描き出したかったであろう答えを抱くようになっていく。

結局のところ、「努力」が報われるのか否か、「がんばったらいいことがある」のかどうか、パターンA、Bどちらの考え方が正しいのかはわからない。どちらにも主張する側の考えがしつかりあって、どちらかを否定することなどできない。ましてやパターンCのように中庸を得たような考え方に至ると、その答えは無数に広がってしまう。

この『卒業ホームラン』では、そんな決着がつかない事がわかりきっているはずのテーマについての、考えの微妙な変化を丁寧を描くこ

とに成功している。



## 盆土産（三浦哲郎）

梶原 悠平、川村 亮介、中寫 一貴、村井 隆人



### 一 作者と作品について

三浦哲郎（みうらてつお、一九三一〜二〇一〇年）は、青森県八戸市に生まれた。青森県立八戸高等学校を卒業後、早稲田大学政治経済学部経済学科へ進学したが休学し、八戸市の中学校で助教諭となった。その後早稲田大学第一文学部へ再入学した。在学中の一九五六年に新潮同人雑誌賞を受ける。卒業後、一九六一年『忍ぶ川』で芥川賞を受賞した。

『おろおろ草紙』、『白夜を旅する人々』、『じねんじよ』を含む『短編集モザイク』シリーズ、『少年讃歌』などの作品がある。

『盆土産』は、一九七九年一〇月、三浦が四八歳の時に、『海』に発表された。

### 二 叙述について

えびフライ、とつぶやいてみた。

唐突に出てくる「えびフライ」という単語。この物語に何か重要な役割を持って関わることを予感させる。つぶやいて「みた」とあるので、意図的につぶやいたものだとわかる。しかし、後の叙述から主人公は「えんぴフライ」と発音していることがわかるので、この「えび

フライ」は「えんぴフライ」と発音されたものだと考えられる。それはこのえびフライに「」がないことからわかる。

足元で河鹿が鳴いている。

河鹿とはカジカカエルのこと。カジカカエルは日本中に分布し、鳴き声が雄鹿に似ているのでその名がついた。美声の例えとしても知られ、夏の季語でもある。なので、この物語の季節は夏である。「足元で」とあるので、ここが水辺に近いことがわかる。また、鳴き声は聞こえているが、まだ姿は見えていない。

腰を下ろしている石の陰にでもいるのだろうが、張りのあるいい声がか川につけたゴム長のふくらはぎを伝って、ひざの裏をくすぐってくる。

「腰を下ろしている」から川にある石の上に腰かけていることがわかる。「いい声」といっていることから、河鹿のことを悪くは思っていない。むしろ心地いいくらいだろう。「くすぐってくる」とあり、「くすぐる」には「相手の心に働きかけていい気にさせる」とあることからそれがわかる。

この文中にある「が」は接続助詞の「が」であると考えられる。文意的に逆説ではないので、この「が」の働きを確定することは難しい。例えば推量と考えることもできる。仮に逆説だとすると、「腰を下ろし

ている……だろうが、私にはどこに在るのかわからない。」と「張りのあるいい声が……くすぐってくる。」の2つの文があり、「私には……わからない」の部分省略して、「張りのある……」の文をくつつけて一文にしたと考えられる。

つぶやくにしても声にはならぬように気をつけないと、人声には敏感な河鹿を驚かせることになる。

河鹿を気遣っている。また、河鹿の特性を知っていることから、河鹿を見るのはこれが初めてではない。「つぶやく」とはもともと小声であるが、その小声ですら河鹿は驚いてしまう。だから、声にならないようにしなければいけない。冒頭の一文が、つぶやき、つまり「外に向かつて出している声」なのにもかかわらず、「がつかないのは、声になっていないからなのだろう。」

都会の人には造作もないことかもしれないが、こちらにはほとんどなじみのない言葉だから、うっかりすると舌をかみそうになる。

「都会」とあるので、舞台がその対比の「田舎」であると考えられる。そのためか「えびフライ」という言葉になじみがない。「とんと」とは「すっきり」「まったくと」という意味。つまりえびフライという言葉はこれまで全く知らなかった。「うっかりすると」とあるので、意識すればしっかりと発音ができるということか。

フライのほうはともかくとして、えびが、存外むつかしい。

「えび」という単語が特に発音できないようなので、「えび」になじみのない、海から遠く離れた場所であることが考えられる。しかし、

のちに「小えびなら知っている」ということが書かれるので、「えび」という発音ができないのは不自然でもある。

つまり、ここでの「むつかしい」というのは「えび」と言うことではなく、「都会」の人のように標準語で「えび」と発音することが「むつかしい」という意味だろう。

えびフライ。さつき家を出てくるときも、つい、唐突にそうつぶやいて、姉に、「まあ、えんびだ。なして、間にんを入れる？ えんびじゃねくて、えびフライ。」と訂正された。

「えびフライ」を単独で文にしている。ただし、ここでのつぶやきは「唐突に」である。物語の冒頭部分での「えびフライ」とは、つぶやき方が違う。ここで初めて「姉」が登場する。姉は「えびフライ」という発音がしっかりできているのだろう。また、主人公が「えび」のことを「えんび」と言っていることが分かる。これが「田舎」の方言なのだろう。それを訂正するということは、姉は「田舎」よりも「都会」の方が正しいと思っているのだろう。

「さつき」という表現から今（釣りをしているのが今）の話ではなく回想（釣りに行く前の出来事を振り返っている）であることがわかる。また家を出てから時間があまりたっていないことや家と川があまり離れていないことも予想できる。

自分では、えびと言っているつもりなのだが、人にはえんびと聞こえるらしい。

「らしい」とあるので、自分では間違いの自覚がない。しかし、姉に指摘されたので、人にどのように聞こえているかを推測できている。

それが何度繰り返しても直らない。

「何度繰り返しても直らない」ことから正しく発音しようと努力していることがうかがえる。父親から速達が来たのが夕べだから、そこからあるごとにえびフライを正しく発音しようとしたのだろう。あるいは無意識につぶやいてしまったのだろう。

けれども、そういう姉にしても、これから釣ろうとしている川魚のことを、いつもジャッコと言っている。

「けれども」といれることで、発音の間違いをしているのは自分だけではなく、「えびフライ」の発音を指摘する姉にも正しく発音できない単語がある、という表現になっている。さらに、これから釣ろうとしている川魚の話題を出すことで、主人公がなせ川の中にいるのかがうっすらとわかる（なぜ川魚を釣ろうとしているのかはまだ不明）。

分校の先生から、本当は雑魚というのだと聞いてきて、「ジャッコじゃなくて、ザッコ。」と教えてやっても、姉はジャッコと言うのをやめない。

「分校」とは「本校」の対義語で、地方に設けられる学校である。主人公は分校に通っている。その先生、つまり姉よりも知識のある人から聞いてきたことだといっても、姉は「ジャッコ」という。次の文に書かれているが、それは昔からずっと「ジャッコ」と発音してきたからだろう。「教えてやっても」とあることで自分と姉との関係を少し把握することができる。例えば「教えてあげた」や「言っただけだ」などと比べると兄弟の間がある程度対等な関係であると推測できる。

「雑魚」には「ざこ」とルビが振ってあるのに主人公は「ザッコ」と発音してしまっていることからここでも本人は「ざこ」と言っているつもりだが、実際には「ざっこ」と発音してしまっていることが分かる。

もう中学生だから、分校の子供に物を教わるのはおもしろくないとみえて、うるさそうに、「そつたらごと、とうの昔から覚えでら。」そう言っているながら、今朝もまき餌にする荏胡麻を牛乳の空き瓶に詰めているところへ起きてきて、「ジャッコ釣りな？ ……んだ、父っちゃんのだしをこさえておかねばなあ。」と姉は言った。

姉が中学生であることがわかる。「もう」とあることから姉はこの間までは小学生だったのでないかと考えられる。意地を張って、「ジャッコ」という言い間違いを否定しているが、無意識に「ジャッコ」という発音が癖になっている。「父っちゃん」から父親がいることが分かるが、この時点で出稼ぎをしていることなどはまだ分からない。

父っちゃんのだしというのは、父親の好きな生そばのだしのこと、父親はいつも、干した雑魚をだしにした生そばを食わないことには自分の村へ帰ってきたような気がしない、と言っている。

「父っちゃんのだし」という、読者にとってなじみのない単語を説明している。ここから、父親が帰ってくるのではないかという推測が建てられる。また、主人公の住んでいるところは「村」であることがわかる。

帰るなら、もつと早くに知らせてくれればこんなに慌てずに済むものを、

ゆうべ、いきなり速達で、盆には帰ると言ってくるのだから、面くらつてしまう。

「いきなり」とあるので、突然、父が帰ってくることに焦っている様子がうかがえる。また、あまりの突然の出来事に、いろいろな準備を短時間でやらねばならないことに焦りを感じている。「速達」を使うぐらいだから、急に休みが決まったのだろう。

明日はもう盆の入りで、殺生はいけないから、釣るものは今日のうちに釣っておかなければいけない。

盆の風習である。盆の風習を守るということは、伝統的な暮らしを続けていることが分かる。主人公は早く雑魚を釣ろうとしている。それほど、父親のために生そばのだしを用意しなければならぬという意志が強いのだろう。

今朝釣って、どうにか送り盆の晩には間に合うくらいだから、ゆうべは雨でも降って川が濁ったりしたらと、気が気ではなかった。

父の連絡がどれほど遅いものであったかを強調している。と同時に、何とかして父親のために雑魚を用意しようとしている主人公の気持ちが見取れる。「どうにか送り盆に間に合う」から、本当ならもっと早くに雑魚を釣っておく必要があったことがわかる。これが後に父が雑魚を一気に食べてしまう原因だと思われる。だしができるまで家にいることができないからだ。「今朝」という言葉から釣りは朝に行っていることがわかる。

えびフライ。

すでに四度目の登場である。今度は「気にかかっている」のではなく、常に意識の中心に「えびフライ」があることがわかる。突然「えびフライ」という一文を入れることで場面展開や主人公の思考の切り替えをスムーズにしている。

どうもそいつが気にかかる。

えびフライを「そいつ」と置き換えている。「それ」にくらべるとぞんざいな感じに聞こえる。

ゆうべ、といつても、まだ日が暮れたばかりのところだったが、町の郵便局から赤いスクーターがやってきたときは、家じゅうでひやりとさせられた。

父親は「村」と言っていたので、主人公の住む場所は「村」だと考えられる。ここでは「町」の郵便局からの速達が登場しているので、普段から手紙などを配達しにくる時間ではないのだろう。「ひやりとする」とあるのだから速達が着くということに良い思いはないのだろう。或いは時間帯も問題だったのかもしれない。「ゆうべ、といつても、まだ日が暮れたばかりのところ」とあることから時間的にはゆうべだが、夏なのでまだ明るいということがわかる。

東京から速達だというから、てっきり父親の工事現場で事故でもあったのではないかと思っただ。普段、速達などには縁のない暮らしをしているから、急な知らせにはわけもなく不吉なものを感じてしまう。

普段の生活に「速達」というものは馴染みがない。よって不吉なことが頭をよぎり、父親が事故にあったのではないかと推測している。

父親が「東京」の工事現場で働いていることが分かる。

ところが、封筒の中には、伝票のような紙切れが一枚入っていて、その裏に、濃淡の著しいボールペンの文字でこう書いてあった。

「ところが」から内容は想像していたような不幸なものではなかった。心配をよそに、封筒の中にはたったそれだけのものしか入っていなかったことを表現している。「伝票のような」という比喻表現によって紙の様子が安易に想像できる。「その裏」とあるので表裏が明確な紙であること、表には「伝票のようなもの」が書かれていることが想像できる。「濃淡の著しい」から父親が急いで書いたものと考えられる。

『盆には帰る。十一日の夜行に乗るすけ。土産は、えびフライ。油とソースを買っておけ。』

祖母と、姉と、三人で、しばらく顔を見合わせていた。

唐突に、盆に帰ることを宣言し、その明確な日時も指定している。速達で送ってくるほどだからよほど伝えたいことである。土産の話に触れて、ようやく「えびフライ」がなぜ先ほどから登場しているのかわかる。父の土産なのだ。三人が顔を見合わせていることから、あまりに意外な内容であったことがわかる。この時点で母親が出ないことにひっかかりを覚える人もいるだろう。

もちろん、父親が帰ってくれるのはうれしかったが、正直いって土産が少し心もとなかった。

「心もとない」とあるので土産が、なじみのない「えびフライ」であることを物足りなく思っている。「もちろん」から「正直いって」と

あることで、土産に対する物足りなさが強調されている。見たこともない食べ物だから、その価値を測りかねているからだろう。

えびフライというのは、まだ見たことも食ったこともない。

主人公はこのときに初めてえびフライと言うものが存在することを知った。

姉に、どんなものと尋ねてみると、「どったらもんって……えびのフライだえな。えんびじゃなくて、えびフライ。」姉は、にこりともせず「えび」と言っていて、あとは黙って自分の鼻の頭でも眺めるような目つきをしていた。

姉もえびフライがどんなものなのか見当がついていない。しかし、弟に対して知らないとは言えず、もっともらしく流している。また「えんびじゃなくて」と挟むことで弟の間違いを指摘している。「自分の鼻でも眺めるような目つき」とは、相手の顔を見ないで、下方向を眺めている目つきだ。この表現は姉がえびフライについて思いを巡らせているということだろうか。あるいはもう一度速達に目を通したのかもわからない。

けれども、両方いっしょにして、えびフライといわれると、急になんだかわからなくなる。

「えび」と「フライ」という言葉は知っているが、「えびフライ」となると全くぴんとこない。小えびと、フライとはどうやってもリンクできないのであろう。

そう言つて祖母に尋ねてみると、祖母は、そうだともそうではないとも言わずに、ただ、「……うめもんせ。」とだけ言った。

明確な答えを出さないので祖母がえびフライについて知っているのか、食べたことがあるのかはこの時点ではわからない。ただ、「……うめもんせ。」と言っているのだから聞いたことは有るのかもしれない。

だからこそ、気になって、つい、「えびフライ……。」と、つぶやいてみないではいけないのだ。

なぜ「えびフライ」と何度もつぶやいていたかがわかる。つぶやきの中でもいくつかは無意識のうちに発せられたものなので、意識の中心に「えびフライ」があることがわかる。

これはすこぶるまずいものだが、もうすぐうまいものが食えるのだから、今朝はあまり気にならない。

いつもは「まずい」と思っているのだろうが、今回は「えびフライ」を楽しみにしていて、気になっていない。しかし、いくら父親が買ってくるものとはいえ、おいしいという保証はない。ここでは「うまいものが食える」と断言している。それだけ土産に期待しているのだろう。

父親の土産のうまさをよく味わうためにも、かえって口の中をなるべくまずくしておくほうがいいのだ。

まだ、味がどんなものかわかっていないが、おいしいものだということを確信し、よりおいしく味わえるように工夫している。本当に「口の中をまずくしておくほうがいい」とは思っていないだろうが、そう

思うことですこぶるまずいものでも積極的に口の中に入れることができるということだろう。

すると、それを争つて食う雑魚の口で、川面はそこだけ夕立に打たれたようにあばたになる。

「あばた」とは痘瘡が治った痕のことである。雑魚の口が水面に出てきていることを比喻を用いて表している。人間にとってはまずいものだが、雑魚にとつて荏胡麻は、食べるために他と争うほどの御馳走である。雑魚の全身ではなく口だけがでているから余計に「夕立に打たれたように」見えるのだろう。

盆前で、あまり暇な釣り人がいなかったせい、よく肥えた雑魚ばかりで、それがぴちぴちと砂の斜面を跳ねながら水辺に並べた小石の柵を越えそうになるから、思わず、「ばためぐなじゃ、こりやあ。」とどなりつけると、とたんに、足元の河鹿がぴたりと鳴きやんだ。

どこの家も盆の準備で忙しいことがわかる。そのおかげで良く肥えた雑魚がとれるが、小石の柵はいつもの雑魚を想定していたので、肥えた雑魚はでそうになり、思わず魚に怒鳴ってしまう。おそらく魚もおとなしくなったのだろうが、河鹿も鳴きやんでしまった。

「思わず」という表現や、冒頭から河鹿に気を使っている描写から主人公は河鹿の声を聞いていたかったのだろう。河鹿が鳴きやむことで朝の場面は終わる。場面転換。

「ぴたり」とあることで急にすっきりとまった印象がつく。

父親は、村にいるころから、うさぎの毛皮の防寒帽でも麦わら帽でもあ

みだかぶりにする癖があったが、今度も真新しいハンチングのひさしを上げて、はげ上がった額をまる出しにして帰ってきた。

防寒帽は冬、麦わら帽は夏なので一年中、そして村にいるころからなので昔から父親はあみだかぶりのスタイルを崩していないことが分かる。「真新しい」、そして「ハンチング」といったカタカナの表現から父が都会から帰ってきたという雰囲気は伝わる。「はげ上がった」や「まる出し」という表現は、父は髪に無頓着だが主人公は気になるのかもしれない。

見上げると、その広い額の横じわから上のほうは、そこだけ病んでもいるかのように生白かった。

この時まだ父は家の中に上がってないと後の文から推測できる。また「見上げると」という表現から、ここでは主人公がまだ小さくて土間の上においても父の方が高いのか、教科書の挿絵のように主人公が座っているのか、或いは二人とも座っていると考えられる。「病んでもいるかのように」という表現から主人公がそれを不安に感じていることがわかる。

どうやら、工事現場のヘルメットばかりは自分の流儀で気ままたかぶるといふわけにもいかないらしい。

主人公はそれをヘルメットをかぶっているせいだと考えたようだ。そこでもいつもはあみだかぶりの父でも仕事の時はそのができない、仕事とはそういうものなのかしらと思っている。

「ばかりは」とあるからそれ以外では必ずあみだかぶりなのだろう。

淡い空色のハンチングは、まだ頭になじんでいなくて、谷風にちょっとひさしをあおられただけで慌てて上から押さえつけなければならなかった。

おそらく帰る直前に買ったと思われる。帽子と頭皮への考察が一通り終わったので次の場面に転換する。

土間の上がり框で、土産の紙袋の口を開けてみて、まず、盛んに湯気を噴き上げる氷にびっくりさせられた。

主人公はえびフライが入っているものと思っていたので余計にびっくりしたのである。「まず」とあるので、まだ驚くことがあるのだろう。

ぶつかき氷にしては不透明で白すぎる、なにやら砂糖菓子のような塊が大小合わせて十個ほどビニール袋に入っているの、これも土産の一つかと思つて袋の口をほじめてみると、とたんに中から、もうもうと湯気のようなものが噴き出てきたのだ。

はじめて見たものなのでドライアイスもお土産のように思えてしまう。展開で言うところの方が先か。ぶつかき氷や砂糖菓子のようなという描写から主人公はドライアイスを食べ物ではないだろうかと推測している。

びっくりして袋を取り落としたはずみに、中の塊が一つ飛び出した。

よっぽどびっくりしたのである。

「あ、もったいない。」と姉が言うので、急いで拾おうとすると、ちょうど囲炉裏の灰の中から掘り出したばかりの焼き栗をせっかちにつま



んだときのように、指先がひりつとして、二度びっくりさせられた。姉も主人公のようにお土産か何かだと思っただろう。主人公はドライアイスというものを知らないの、触ってはいけないドライアイスに触れてしまう。

そのうえそいつのほうから指先に吸い付いてくるので、慌てて強く手を振ると、そいつは板の間を囲炉裏の方まで転げていった。

「そのうえ」とあるのでここでも主人公は驚いている。ドライアイスをお土産だと思っていた主人公にとってはかなりの衝撃であったことが考えられる。

「そつたらもの、食っちゃなんねど。それはドライアイスつうもんだ。」と、父親が炉端から振り向いて言った。

父親がどのように言ったのかの描写がないので、父がどのような気持ちで言ったのかはわからない。父も最初は主人公のように食べ物の類だと思っていたのかもしれない。父親は靴を脱いでいるのだろうか、土産の方は向いていなかったことが分かる。おそらく主人公の驚いた声やドライアイスが落ちたりする音が聞こえたのではないだろうか。父は主人公を驚かせたくて、あえて何も教えずに土産を渡したのかもしれない。得体のしれない氷の正体が出てきたので場面転換。

それで父親は、そのドライアイスをビニール袋にどっさりもらって、道中それを小出しにしながら来たのだという。

後にわかるのだが父親は一日半しかいられない。それでも自分の疲れを取ることで子どもを喜ばせることを優先している。それだけ

エビフライを子供に食べさせたかったのだろう。父親は初めてエビフライを食べたときかなりの衝撃を受けたのだろう。

そんなにまでして紙袋の中を冷やし続けなければならなかったわけは、袋の底から平べったい箱を取り出してみて、初めてわかった。

ここでようやくエビフライに注目がいく。それまで主人公はなぜ父親が睡眠時間を削ってまでドライアイスを入れ替えていたのか、何を冷やさなければならなかったのかに注目がいく。それまではドライアイスに衝撃を受けていてエビフライのことは忘れていた。

その箱のふたには、『冷凍食品 エビフライ』とあり、中にパン粉をつけて油で揚げるばかりにした大きなエビが、六尾並んでいるのが見えていた。

エビフライを知らない割にはやや描写が説明的で腑に落ちない。パン粉を主人公は知っていたのだろうか。もしかしたら父親が教えたのかもしれないし、以前にフライが食卓に出たことがあるのかもしれない。ここではさらりと六尾とあるが、この時点で四人家族だということに言及していない。読者にとってはあと二人の家族の登場を思わせるかもしれない。しかし主人公にとって四人家族なのは自明なのだから、ここで六尾をどう配分するのだろうかと思わないのはそれだけエビフライが衝撃的なものであったのだろう。

エビフライといっても、まだ生ものだから、父親は家へ帰り着くまでに鮮度があやしくなったらいけないと思いき、ただこの六尾のエビだけのために、一晩中、眠りを寸断して冷やし続けながら帰ってきたのだ。

えびフライはフライされたものでなくまだフライされる前のものだった。主人公は冷凍食品というものを全く知らなかった、あるいは予想できていなかったということが考えられる。「ただこの六尾」という表現から主人公はエビはもっと多くあるものだとおもっていたのだろう。そして父親の苦勞を感じている。

それにしても、箱の中のえびの大きさには、姉と二人で目をみはった。

主人公だけでなく、姉にとっても衝撃だったことが分かる。えびの大きさは予想を超えていたことがわかる。主人公にとってのえびはただこの時点で沼に住むエビしか想像できていないからだ。

今朝釣ってきた雑魚のうちでいちばん大きなやつよりも、ずっと大きいし、よく肥えている。

エビが雑魚より大きい時点で主人公にとって不自然なのだろう。身に比べられる対象がない。

「ずんぶ大きかえん？ これでも頭は落としてある。」

父親は、満足そうに毛ずねをびしゃびしゃたたきながら言った。

父親は子どもたちの驚いた顔を見て満足そうである。毛脛をたたく描写から足を組んで座っていることがわかる。

いったいどこの沼でとれたえびだろうかと尋ねてみると、沼ではなくて海でとれたえびだと父親は言った。

自分の日常で考えてしまうので海という発想がなかった。主人公の住む場所の近くには海がないことがわかる。

「これは車えびつうえびだけど、海ではもっと大きなやつもとれる。長えびげのあるやつもとれる。」

父親が珍しくそんな冗談を言うので、思わず首をすくめて笑ってしまった。

父親は冗談を言っていないのに、少年は冗談だと理解した。主人公の田舎者っぷりがわかる。「珍しく」から父親は普段はあまり冗談を言わないということもわかる。

午後遅く、裏の谷川のよどみに漬けておいたビールを引き揚げて戻ってくると、隣の喜作が独りで畦道をふらついていた。

主人公の家には冷蔵庫がないことがわかる。おそらく近くの家庭も冷蔵庫はなくて裏の谷川でものを冷やしているのではないだろうか。

喜作はそこにもものを取りに行く主人公、あるいは子どもたちをまぢぶせしていたのではないか。「ふらついていた」からあまり用が感じられない。

隣でも父親が帰ったとみえて、真新しい、派手な色の横縞のTシャツをぎごちなく着て、腰には何連発かの細長い花火の筒を二本、刀のように差していた。

喜作の父親も東京、あるいは町や都会に出稼ぎに行っているのだろう。それは喜作の父親が買ったであろう派手なTシャツなどの土産からわかる。「ぎごちない」とあるので、田舎の風景や田舎育ちの喜作に都会の派手なシャツは似合わないと言ったと主人公が判断している。

「父つちや、帰ったてな？」喜作は一級上の四年生だが、偉そうに腕組みをしてこちらのぬれたビールをじろじろ見ながらそう言うので、「んだ。」とうなずいてから、土産は何かときかれる前に、「えびフライ。」と言った。

喜作は父親から土産をもらって気分が高まっているので偉そうなのだろう。単に級が一つ上なので普段から偉そうにしているとも考えられる。じろじろ見るのは、まず主人公が冷やしていたものがビールであったことから主人公の父親が帰ったのだと思つたのと、主人公の格好からは土産が確認できないので、ビールの中に何か土産はないのだろうかと探っていたのだろう。主人公はそういった喜作の態度から土産は何なのか聞かれそうなのを察知して先に答えた。

喜作は氣勢をそがれたように、口を開けたままきよんとしていた。

先に答えられたことから何となくそれが土産であろうことが分かっている。また、聞いたことのない単語だったので余計によく聞こえなかったのだろう。喜作の先ほどまでの偉そうな態度が崩れてしまっている。

「……なんどえ？」

「えびフライ。」

「……えびフライって、何せ。」

それが知りたければ家に来てみる。そう言いたかったが、見せるだけでももつたいたいのにな、ついでに一口と言われるのが怖くて、「なんでもねっす。」と通り過ぎた。

はじめ、主人公はエビフライのほう喜作の土産よりもすごいぞ！

と思つて発言したが、それが何なのかを特に喜作に教える義理はないし、言ってしまったばかりに取られるのも嫌だったので回避した。エビフライをしらない喜作に優位性を感じている。

普段、おかずの支度はすべて姉がしているが、今夜はキャベツを細く刻むだけにして、フライは父親が自分で揚げた。

普段は姉がしているという表現から母親が家にいないであろうことがわかる。父親しか作れないということもあるが、父親が普段いらないから振舞いたいということや、せっかくのエビフライを子どもに作つてやりたいという気持ちもあるだろう。

煮えた油の中でパン粉の焦げるいいにおいが、家の中にこもった。

「こもった」とあり、パン粉のにおいが充滿した。食事の雰囲気広がっていく。

四人家族に六尾では、配分がむつかしそうに思われたが、父親は明快に、「お前と姉は二匹ずつ食え。おらと婆つちやは一匹ずつでええ。」と言って、その代わりに、今朝釣ってきた雑魚をビールの肴にした。

四人家族という表現から母親がいないことがわかる。いいにおいがしてきたことで物珍しかったエビフライが具体的な食べ物へと変わっていく。それによつて六尾だと四人で分けられないと思ひ、自分がどれだけ食べられるのかを気にした。その不安に対して父親は、明快に答えている。父親は子どもたちにエビフライを味わってほしかったのだろう。「その代わりに」からの表現は父親が言葉にしたのではなく、そのあとの父の行動から主人公が推測した。

串焼きにしたまま囲炉裏の灰に立てておいたのを、あぶり直して、一尾ずつ串から抜いてはしょう油をかけて食った。

雑魚はおそらくそのまま囲炉裏で乾燥させておくつもりだったのだろう。しかし、だしになるぐらい乾燥させるには盆の暮れまで乾燥させる必要がある、父親にはそれを待っている時間はない。少しでも故郷の味を多く食べたくて、村に帰った気持ちになりたかったのだろう。

ビールは三本あるから、はらはらして、「あんまり食べば、そばのだしがなくならえ。」と言うと、父親は薄く笑って、「わかっただけに。人のことは気にしねえ、えびフライをじつくと味わって食え。」と言った。

ビールはまだ一本目のだろう。このペースだと雑魚が出汁にできなくなるのを主人公は心配している。「薄く笑って」から父はそばのだしが取れるまで村に入れないことを自覚していることがわかる。父親は今はそのことよりも、エビフライを味わってほしいと考えている。

揚げたてのえびフライは、口の中に入れると、しゃおっ、というような音を立てた。かむと、緻密な肉の中で前歯がかすかにきしむような、いい歯ごたえで、この辺りでくるみ味といっているえもいわれないうまさ口の中に広がった。

えびフライのおいしさを表現した一文。歯ごたえ、味、二つの視点から褒めることで、えびフライがいかにおいしかったかがよく伝わる。

二尾も一度に食ってしまうのは惜しいような気がしたが、明日からは盆で、精進しなければならない。

逆説に「が」を使っている。一見逆説になっていないように見える。書かれてはいないが、精進しなければならぬので、二尾とも一度に食べてしまおう。といった意味が含まれているので、逆説になっている。

最初は、自分のだけ先になくならないように、横目で姉を見ながら調子を合わせて食っていたが、二尾目になると、それも忘れてしまった。

「自分のだけ先になくならないように」とあり、小学生らしい思考をしている。中学生の姉はそんなことを気にせず食べている様子である。なぜ二尾目になると、それも忘れてしまったのだろうか。えびフライがえもいわれないうまさで食べることに夢中になってしまったからだろう。「それもわすれてしまった」の「も」の意味はなにだろうか。ここの「も」は同種の事物の列挙では使われていない。猿も木から落ちるの「も」と同じ「さえ」という意味合いで使われている。

「歯がねえのに、しつぽは無理だえなあ、婆っちゃ。えびは、しつぽを残すのせ。」と、父親が苦笑いして言った。

「苦笑いして」とあるが、苦笑いというのは普通決まりの悪い時に使う。ここでは、自分のお土産であるえびフライでむせたことと、しつぽは残すものだというのが遅かったこととの、二点からきまりが悪かったのだろう。

そんなら、食う前にそう教えてくれればよかった。

「そんなら」は、それならば。会話は方言満載だが、地の文で方言はここまで使われていない。「そうおしえてくれればよかった」とあ

り、もうしつぽまで食べちゃったよということ。

姉の皿を見ると、やはりしつぽは見当たらなかった。

僕はしつぽまで食べてしまったものだから、姉はどうか気になったのだろう。「やはり」とあるので、「言われなかったら食べてしまうよね」という気持ちがあるので。

姉もこちらの皿を見ていた。

僕と同じように姉も。つまり、考えていたことは二人とも一緒だったのだろう。

顔を見合わせて、首をすくめた。

「顔を見合わせて」ではなく「顔を見合わせて」となっている。「顔を見合わせる」の「面と向かい合う」の意味と、「見合わせる」の「互いに見る」の意味を合わせたものであろう。「首をすくめる」とは恐れ入ったり、困ったりしたことを示す。

「歯があれば、しつぽもうめえや。」

姉がだれにもなくそう言うので、「んだ。うめえ。」と同調して、その勢いで二尾目のしつぽも口の中に入れた。

「しつぽは残すもんだよ」と聞いてショックを受けていたが、「歯がねえのに、尻尾は無理だよなあ」という言葉を思い出して、自分には歯があることを生かし、尻尾を食べてしまったことを肯定している。「誰にもなく」とあるので、ひとり言のようなものだろうか。姉は自分を納得させるために言ったのではないだろうか。それに気づいた

僕は「んだ。うめえ。」と同調することで、姉の言うとおりだということと、しつぽは食べるものなんだと自分で自分を言い聞かせている。さらに、その勢いで二尾目のしつぽを食べることでしつぽは食べるものなんだと納得している。

父親の皿には、さすがにしつぽは残っていたが、案の定、焼いた雑魚はもうあらかたなくなっていた。

「さすがに」とあるので、そうはいつでもやはりという意味。雑魚はあらかたなくなっていたということが、「さすがに」なのか。それとも歯があればしつぽもうまいと僕と姉がしつぽを食べたことに対して「さすがに」なのか。「案の定」という言葉があるので、雑魚があらかたなくなることが僕に予想できていたという事がわかる。

翌朝、目を覚ましたときも、まだ舌の根にゆうべのうまさが残っていた。「残っていた」とあり、それほどえびフライのうまさや衝撃的だったという事が分かる。作者は昨日の夜の事を昨夜とはいわず、ゆうべと表現している。そのほうがあたたかな感じがするからだろうか。

あんなにうまい土産をもらったのだから、今朝もまた川へ出かけて、そばのだしを釣り直してこなければならぬと思っていたのだが、その必要はなかった。

そばのだしに使う分の雑魚までゆうべ食べてしまったから、お土産の礼として釣りなおしてこようと思った。お土産がうまかったから釣りなおしてこなければならぬと思った。

父親が、一日半しか休暇をもらえなかったので、今夜の夜行で東京へ戻ると言い出したからである。

この文章の地の文はすべて僕目線で書かれている。「一日半しか」という表現から、僕が父親の滞在を短いと感じていることが分かり、もう少しほしいと感じていることがうかがえる。「言い出した」とあり、他に先駆けて言った。僕が「明日の分の雑魚をとつてこようか」と父親に言う前に言ったのだろう。

どうりで、ゆうべは雑魚の食いが尋常ではないと思ったのだ。

「どうりで」とあり、前文を受けてなるほど僕は思ったのだろう。「尋常ではない」とは、普段とは違うということ。

午後から、みんなで、死んだ母親が好きだったコスモスとききょうの花を摘みながら、共同墓地へ墓参りに出かけた。

ここで母親がすでに亡くなっていたことが語られる。父親が一日半しか休みをもらえなかったのにもかかわらず、帰って来たのはこの墓参りが一番大きな動機だったのだろう。コスモスの花言葉は「乙女の真心」「乙女の愛情」「少女の純潔」。ききょうの花言葉は「変わらぬ愛」「気品」「誠実」「従順」。父親の妻への変わらぬ愛を表現しているようである。

盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけの小さすぎる墓を、せいぜい色とりどりの花で埋めて、供え物をし、細く裂いた松の根で迎え火をたいた。

「せいぜい」とは力の限りを尽くすこと。「小さすぎる」と表現して

いることから、僕はこの墓では不十分で、もっと大きくても良いと感じている。だから、できるだけ、彩やかにし、供え物をし、豪華に見せている。

祖母は、墓地へ登る坂道の途中から絶え間なく念仏を唱えていたが、祖母の南無阿弥陀仏は、いつも『なまん、だあうち』というふうに聞こえる。

「絶え間なく」は切れ目なくという意味。次の「合間に混じる」への伏線か。「いつも」とあるので、墓参りには今までにも祖母と何度もきていることが分かる。

ところが、墓の前にしゃがんで迎え火に松の根をくべ足していたとき、祖母の『なまん、だあうち』の合間に、ふと、「えんぴフライ……。」という言葉が混じるのを聞いた。

「ふと」とあるので、不意に聞いた。

祖母は歯がないから、言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんぴフライという言葉をもたらしたのだ。

「確かに」があることで自分の中に確証を得ている感じがする。また、相手に訴えかけるようなニュアンスも受ける。

祖母は昨夜の食卓の様子を（えびのしっぽがのどにつかえたことは抜きにして）祖父と母親に報告しているのだろうかと思った。

（ ）の言葉を入れることで、昨夜の食卓の様子を読者に思い出させる効果がある。また、祖母が都合の悪いことは語りたがらない性格

だと主人公が考えていることも分かる。

そういうば、祖父や母親は生きていうちに、えびのフライなど食ったことがあつたらうか。

「そういうば」とあるので、僕はふと気になった。「えびフライ」ではなく「えびのフライ」といつている。そうすることで、より、えびをフライしたものであるというのが強調されているように思われる。

祖父のことは知らないが、まだ田畑を作っているころに早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなからうか——そんなことを考えていううちに、なんとなく墓を上目でしか見られなくなった。

「祖父のことは知らないが」とは祖父がえびフライを食べたことがあるかは知らないが、という意味。祖父の記憶はないのだろう。「なんとなく」とあるので僕にははっきりした理由が分かっていない。「上目」とは顔を上げないで目だけで上の方を見ること。何故だか顔を上げられなくなった。申し訳ない思いがしたのかもしれない。

父親は、少し離れたがけつぶちに腰を下ろして、黙ってたばこをふかしていた。

「少し離れた」とあるが、一人になりたいのだろうか。「黙ってたばこをふかしていた」とあるので、妻との思い出に浸っているのかもしれない。妻にもえびフライを食わせてやりたかったと思っているのかもしれない。

父親が夕方の終バスで町へ出るので、独りで停留所まで送っていった。「独りで」とあるので、姉は一緒ではない。「終バス」から父親がぎりぎりまでいたことがわかる。

谷間はすでに日がかげつて、雑魚を釣った川原では早くも河鹿が鳴き始めている。

「すでに」からは、夏が少しずつだが終わりをかけていることを思わせる。「早くも」からは、河鹿が夜に鳴くことを受けているのだろう。主人公はまだそんなに遅くないと思っていたのではないだろうか。父との別れが着々と近づいてきている。

村外れのつり橋を渡り終えると、父親はとって付けたように、「こんだ正月に帰るすけ、もつとゆつくり。」と言った。

「とって付けたように」とあるので父親の言い方が不自然でわざとらしくかった。息子がさみしそうにしていたからだろうか、励まそうと思つたら、わざとらしくなつてしまったのだろう。

すると、なぜだか不意にしゃくり上げそうになつて、とつさに、「冬だから、ドライアイスもいらねべな。」と言った。

父親の前で泣きたくなかつたのだろう。それで、とつさに口から出た。「しゃくり上げそう」とあるので泣きかけている。

バスが来ると、父親は右手でこちらの頭をわしづかみにして、「んだら、ちゃんと留守してねな。」と揺さぶつた。それが、いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した。

「いつもより」とあることから、頭をわしづかみにして揺さぶるのは恒例なのだろう。ただそれが、少し手荒くて僕は「なんで？」となつている。恐らく、いつもよりさみしそうにしている僕の様子に気づき、元気づけようと思つていたら、手荒くなつていたのである。

「うっかり、さいなら、と言うつもりで、うっかり、「えんぴフライ。」と言つてしまった。

「うっかり」とあるので、つい出てしまった。それほどまでにえんぴフライに心ひかれていたのだろう。

バスの乗り口の方へ歩きかけていた父親は、ちょっと驚いたように立ち止まって、苦笑いした。

この苦笑いはうれしかったという表現だと思われる。お土産を気にいつてくれたことがうれしくて、それがぼろっと口から出てしまつている息子を見ておかしかったのだろう。

「わかつてらあに。また買ってくるすけ……。」

「……」がまだ何か言いたげである事を示している。

父親は、まだ何か言いたげだったが、男車掌が降りてきて道端に痰を吐いてから、「はい、お早くう。」と言つた。

「道端に痰を吐いてから」とあるが、なくても全く支障のない言葉である。これをつけることで男車掌Ⅱ父親を連れていくやつⅡ嫌な奴という少年のイメージが垣間見える。

父親は、何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駆け込んでいった。

「何も言わずに」とあるので、別れの時は何も言わないという男の美学を感じる。それとも車掌にせかされたせいで言えなかったのか。

### 三 考察

#### (一) 物語の舞台について

物語は、青森県の田舎の村を舞台にしている。三浦哲郎は、彼の出身地でもある青森県を舞台にした作品が多く、この作品も彼の持ち味が存分に出的作品であると考えられる。では、どうして舞台を田舎の村にしたのだろうか。それは、普段は遠くに暮らしている家族が、久々に再会するという場面を演出するためではないだろうか。主人公は田舎に姉と祖母と三人で暮らしていて、母親が他界している。父親は出嫁ぎに出ており、一緒に暮らしてはいない。普段は一緒に暮らしていない家族が、盆に再び集合し、家族だんらんのひと時を過ごす、という状況を演出している。また、彼が幼少期を過ごした青森の田舎は、舞台として書きやすかったのではないか。よりリアルな世界観を描き出すのに適した舞台だったといえる。

#### (二) 物語のテーマについて

この物語のテーマは、「家族」ではないだろうか。普段は別々に暮らす父親との久しぶりの再会や、墓参りを通して、生きていくものだけでなく、この世のものではなくなつてしまった家族との交流も描いている。長い休みが取れずに盆の帰省を断念していた父親が、突然帰る



ことを決意し、短い休みの間に田舎に帰ってくる。それは、「家族」を大切にしているということではないだろうか。また、突然帰ってくる父親のために、急いで準備をする主人公たちも、「家族」を大切にしているといえるだろう。それだけでなく、墓参りを通して、亡くなった家族とも交流し、敬っている。家族は死んでも家族なのだ。

### (三) えびフライについて

主人公にとって、えびフライは未知の食べ物であった。未知とはいっても、「えび」と「フライ」は知っている。この二つの組み合わせが想像できないのだ。中途半端な知識が、ますます「えびフライ」の想像を混乱させるのである。

この物語は、主人公が「えびフライ」とつぶやくところから始まる。未知の食べ物である「えびフライ」を、主人公は何度も口にかけている。そして物語の最後の主人公のセリフも「えびフライ」である。えびフライを食べる前も、食べた後も、彼にとって「えびフライ」は非常に大きな存在だったといえる。

主人公は、「えびフライ」を正確に発音できず、「えんびフライ」と言っていて、それを姉にも指摘されている。そういう姉にとっても、えびフライは未知の食べ物であり、長年生きてきている祖母でも食べたことのないものだった。田舎に暮らす人たちにとってもなじみのないものである。海に大きなえびがいることを信じない主人公や、えびのしっぽまで食べてしまう祖母など、滑稽な言動を演出する効果を發揮している。

家族の中で唯一、えびフライはいかなるものかを知っている父親は、えびフライを自ら揚げたり、子ども二人に多めに食べさせたりと、優

しさを見せている。また、えびフライをドライアイスで冷やしながら、腐らないように持って帰ってきているところにも思いやりを感じる。「えびフライ」は父親の優しさを表す効果も持っている。父親にとって「えびフライ」はあくまでも「盆土産」であり、帰省の本来の目的は墓参りや家族との再会である。

主人公は墓参りの際に「祖父のことは知らないが、まだ田畑を作っているところに早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなからうか。」と考えている。おそらく今まで考えたこともないことだろう。えびフライとの出会いによって、先に死んでいた肉親のことをじっくりと考える機会を得ているのだ。これもまた「えびフライ」の存在意義ではなからうか。

## 走れメロス（太宰治）

梶原 悠平、川村 亮介、中寫 一貴、村井 隆人



### 一 作者と作品について

太宰治（一九〇九～一九四八年）は、本名を津島修治といい、一九三三年より小説の発表を始めた。一九三五年に「逆行」が第一回芥川賞候補となった。主な作品に「走れメロス」「津軽」「お伽草紙」「斜陽」「人間失格」などがある。諧謔的な作風で、坂口安吾や石川淳とともに新戯作派、無頼派と呼ばれた。自殺未遂を繰り返し、最期も一九四八年に玉川上水にて入水自殺を行った。

「走れメロス」は、昭和十五年五月号の「新潮」に発表された。初版本は河出書房『女の決闘』で、その後新潮社『富嶽百景』、文芸春秋新社『水仙』に再録された。「走れメロス」は、フリードリヒ・シラーの「人質」を原作としている。

### 二 叙述について

メロスは激怒した。

何に怒っているのか、この時点では、わからない。時間が前後している。

必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。

「除く」に、邪魔者などを排除・排斥するという意味があるので、メロスは王を殺したいと思っている。後に「生かして置けぬ」と発言していることからわかる。

けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

「人一倍に」とあるので、のんびりとした生活を営んできたメロスであるが、悪を察知することに関しては、人よりも長けていたことがわかる。正義感溢れる、メロスの人柄が表されている。

久しく逢わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。

親友・セリヌンティウスに久しぶりに会う、メロスの気分が高まっている様子が、想像できる。

歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。

これまでの物語の流れが一変する。「怪しく思った」のであるから、この後、事態は悪い方向に向かう可能性が高い。

老爺は、辺りをはばかりの低声で、わずか答えた。

「あたりをはばかり」様子から、その話題がタブーとされている、もしくは、誰かに話している場面を目撃されると連行等の危害を加え

られる可能性があるのではないかと考えられる。どちらにしる、住民は怯えている。

人を信ずる事ができぬというのです。

「できぬ」とあり、「信じぬ」と比べると、信じようと思っても信じる事ができないということが分かる。王は、人間不信に陥っている。誰かにひどい裏切り方をされたことが想像できる。

このごろは、臣下の心をもお疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。

「このごろは」とあることから、以前に増して、王の人を疑う気持ちが強くなっていることがわかる。

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

「生かしておけ」ないくらいの怒りが、メロスの中に湧き上がってきている。

買い物を背負ったままで、のそのそ王城に入っていった。

メロスの後先を考えないような性格が読み取れる。「買い物を背負ったままで」から、買い物をしていことやセリヌンティウスに会いに行くことも忘れるほど怒り心頭していることがわかる。それほど、一刻も早く王を糾弾したかったのだろう。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「悪びれず」から、メロスは今の自分の行いは間違っていないと考

えている。

「おまえがか？」王は、憫笑した。

「憫笑した」から、王にとってメロスという正義感の塊のような人物が哀れで仕方がない。

「言うな！」とメロスは、いきりたって反駁した。

「いきりたって」から、メロスはかなり興奮している様子であることがわかる。メロスにとって、「人を疑うこと」は、悪である。

「疑うのが正当の心構えなのだ」と、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。

「おまえたちだ。」から、王と民の間で何かトラブルがあったことが予想できる。王の人間不信は、その件が原因である。

「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

王は疑いたくて人を疑っているのではない。本来は王も人を信じたのである。

「ああ、王はりこうだ。」

メロスの心の内がわかったような気である王を皮肉っている。

たった一人の妹に、亭主をもたせてやりたいのです。

妹の結婚式に参加できないことは、心残りである。妹のことを思い出し、先ほどの興奮状態から、幾分冷静になっていることが、急に敬

語になっていることからわかる。

三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。

妹の結婚式に参加できないことは、心残りである。妹のことを思い出し、先ほどの興奮状態から、幾分冷静になっていることが、急に敬語になっていることからわかる。

わたしが逃げてしまつて、三日目の日暮れまで、ここに帰つてこなかったら、あの友人を絞め殺してください。

セリヌンティウスに全く承諾を得ていないにもかかわらず、約束を破ったら殺すよう言い切っているあたりから、彼らの友情の強さがうかがえる。「絞め殺す」というように殺し方を指定しているが、そもそもメロスは「磔」になるはずだった。なのにもかかわらず、絞め殺すように言っているのはなぜか。せめて苦しむ時間を短くしてやりたいという配慮なのだろうか。そもそもこの時点でメロスは三日以内に帰つてくる自信があつたのだから、そこまで気を遣わなくても良かったはずだ。やはりこれは、メロスの焦りではないだろうか。

人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。

「磔刑」とあり、メロスの要望である「絞殺」は全く受け入れていない。メロスが帰つてこないことを望んでいる。

メロスはくやししく、じだんだ踏んだ。

王の言動に腹を立てている。一方で残念に思っている。どこまでも

人を信じようとしないう王に対して、もどかしい気持ちを抱いている。だがしかし、初めて会つたメロスのことをそうやすやすと王が信じるはずはない。これ以上何を言つても無駄であると感じている。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。

深夜になつてようやくセリヌンティウスが王城に召される。「竹馬の友」とは幼いころからの友人、親友という意味である。それまで、メロスはどうしていたのか描かれていないし、セリヌンティウスもなぜ深夜まで王城に來なかつたのかわからない。メロスはセリヌンティウスの住む場所も伝えているのに、なぜこんなに時間がかかつてしまったのだろうか。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは明るる日の午前、日は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。

「十里の道」とあるので、王城とメロスの村との間の距離が明確になる。また、「急ぎに急いで」とあり、夜通し走つてさらに日が高く昇るころまで一睡もせずに全力で走らないと着かない距離であることがわかる。村人たちは野に出て仕事をしている。野に出ているので農業や放牧業だ。時期は初夏である。北半球の初夏であるから、おそらく日照時間は長いと推測される。それでも一睡もせずに急ぎに急がないと着かない距離である。

婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらにはまだなんの支度もできていない、ぶどうの季節まで待つてくれ、と答えた。

冒頭において、メロスは妹の結婚式のためにシラクスの街にやってきたと記述があった。結婚式が近いという記述もあった。ところが、ここでは婿の牧人が非常に驚いていて、まだ結婚の準備に時間がかかるといふ。しかも、「ぶどうの季節」までかかるという。ぶどうの季節は秋である。物語で描かれているのは「初夏」である。いつまで待たせる気だったのか。メロスに対する困難のひとつとして作者が書いたのだろう。

祝宴に列席していた村人たちは、なにか不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引き立て、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのもこらえ、陽気に歌を歌い、手を打った。

急に決まった結婚式であるが、村の人たちはしつかりと参加している。やはり結婚式は近いうちに行く手はずだったのではないか。だが、「狭い家」の中に納まる程度の人数である。雨に不吉なものを感じていても、「めいめい」とあり、一人ひとりがそれを感じさせないように盛り上げているあたり、村人たちの暖かさを感じる。想像だが、両親のないメロスとその妹は、村の人たちにとって自分の子どものようにかわいかったのかもしれない。

このよい人たちと生涯暮らしていきたいと願ったが、今は、自分の体で、自分のものではない。

「このよい人たち」とは、もちろん村人たちのことである。妹や婿も含まれているだろう。メロスは自分の生活に未練を感じている。と同時に、自分の置かれている状況を冷静に見つめなおし、死の覚悟をかためている。

メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。

メロスほどの男とあるが、ここではメロスほど「信念を貫く」男という意味ではなかるうか。未練とは、村への未練だけではなく「生きること」への未練も含まれると考えられる。何かと理由をつけて出発を遅らせている。

おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りをもっていろ。

嘘をつくことをこの世で一番嫌いなものとしているメロスは、「市に用事を残してきた」として、妹に自分が死ぬことを隠している。妹や家族を捨てても、信念を貫くことはこの上なく尊いことだということとを頭では考えているが、それが果たしてもっとも偉いことであるのか自信を持っては言えず、あえて「たぶん」という表現を使うことで、気持ちを濁している。

もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。

「くれ」とあり、婿にもメロスを誇ってほしいと求めている。これまでのメロスの行動や、今からメロスが行うことは尊いことなのだと思っている。「もう一つ」とあるので直前の「娘や羊を託す」という言葉も合わせて、いわゆる「遺言」となる言葉である。

さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢のごとく走り出た。

「さて」という転換の接続詞が使われていることから、場面が大き

く変わることを予想させる。メロスの出発をドラマチックに表現している。「雨中」と「晴天のもと」だと、やはり「雨中」の方が勇ましく感じる。昨夜は不吉に感じた雨も、ここではメロスの勇者像を作る手助けをしているといえる。「ぶるんと両腕を大きく振って」とは、すなわち走るときの様子を表している。「矢のごとく」から、かなりのスピードであったことが伺える。

満身の力を腕に込めて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅の人の子の姿には神も哀れと思っただか、ついに憐愍を垂れてくれた。

「押し寄せ渦巻き引きずる流れ」と誇張気味に描写することで川の流れの激しさが目に浮かぶようである。「かき分けかき分け」と繰り返し返すことでメロスの必死さや場面の臨場感が出る。憐憫を「垂れて」とは、下の方に向けているという事。神が主語だからである。

おまえは、希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞと自分をしかつてみるのだが、全身なえて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。

自分を奮い立たせようとしてみるが、たまりにたまった疲労で全く動けない。また、「動けない」ではなく「前進かなわぬ」といつていることから、「前に進みたい」という気持ち伝わってくる。

もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心の隅に巣くった。

「巣くう」ということで、「嫌なもの」がすみついたことを強調している。精神もやられてしまった。

わたしは不信の徒ではない。

さきほど、「このままでは希代の不信の人間になってしまふぞ」と自分を叱っていたところなのに、今度は自分を擁護し始める。言っていることが無茶苦茶になり始め、精神がやられてしまったことが見られる。

わたしは、よくよく不幸な男だ。

「よくよく」とは程度がはなはだしいさまのこと。これまで、メロスが不幸だと読者が思う場面は川が氾濫したことがらしいかない。それ以外はメロスの自業自得なところが多い。それでもメロスは自分をものすごく不幸な男だという。メロスは弱い人間だ。

一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。

「暗い疑惑の雲」とあるが、暗い、疑惑、雲という言葉はどれも不吉な感じを与える。

それを思えば、たまらない。

「たまらない」とあるが、なにがたまらないのか。それは恐らく、信じ続けてくれているセリヌンティウスを死なせてしまう事であろう。

友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。

「だからな」とあるので、呼び掛けている。自分に向かって言葉を投げかけているのだろう。

信じてくれ!

「信じてくれ!」に「!」がついている。心の中で叫んでいるのだろう。時間通り戻ってこないメロスをセリヌンティウスはどう思うのだろうか。メロスを恨みながら死んでいくのだろうか。

わたしだからできたのだよ。

仮にそうだとしても、言わないほうがカッコいい。それをあえて記すことで、太宰はメロスを少しダメなやつに仕立て上げている。

王は、独り合点してわたしを笑い、そうしてこともなくわたしを放免するだろう。

約束を守れなかった時のことをかなり具体的に想像している。「独り合点」とあるので、「本当は違うのに」というメロスの悔しさが伝わってくる。

いや、それもわたしの、独りよがりか?

「それ」が指すものは「一緒に死ぬ」ことであろう。メロスの勝手な解釈が目立つ。

正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。

この作品のテーマを揺るがす衝撃の発言。心も体もまいつてしまつて、つい出てしまった言葉であろう。本当はそう思っていない。

ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。

「ほうと長いため息が出た」とあり、メロスからは先ほどまでとは

違い、落ち着いた様子、余裕のある態度がうかがえる。「夢から覚めたような気がした」とあるので水を飲むまではとうとうとしていたのだろう。ここでの「夢」はメロスがまどろんで夢を見ていたということではなく、まどろむ前のメロスがとっていた投げやりな態度だと考えられる。

義務遂行の希望である。

義務とは「日没までに町もどつて処刑されること」である。メロスは体が回復して、今からならまだ処刑に間に合う可能性があると考えている。

我が身を殺して、名誉を守る希望である。

「我が身を殺す」とはメロスが処刑されること。名誉とは「嘘をつかずに、約束を破らずに、身代わりの友を助けること」だろう。

斜陽は赤い光を、木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。

時間の面でいえば盗賊を倒した後の「午後の灼熱」が夕方にかわりつつあり、徐々に日没が迫ってきていることを表現している。またこの描写の中にメロスの心情が書かれているとすれば、「燃えるばかり」という言葉が、メロスが希望を持ち、モチベーションが上がってきている様子を表していると読むこともできる。

走れ!メロス。

メロスが自分を叱咤激励して再び走り出している。ここから先、刑場につくまでメロスは走ることをやめない。

愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。

「知らせてやるがよい」の対象は王である。メロスは日没までに刑場に着くことで、王に「愛（友との友情）と誠（正直であること）の力」をわからせようとしている。「愛と誠の力」とは「友との約束を守ること」「人を信じること」である。

「いや、まだ日は沈まぬ。」

まだ日没になっていないから、セリヌンティウスが直ちに死刑になることはない、と言いたい。同時にまだ日没になっていないからセリヌンティウスを助けられる。だから走るのだ、というふうにもよめる。

メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。

まだ間にあうとは思いつつも、セリヌンティウスに危機が訪れていることを実際に聞いて「胸の張り裂ける思い」がしている。「夕陽ばかり見つめていた」のはまだ日が沈んでいないことを確認するためのなにかもしれない。「赤く」「大きい」「夕日」これらのすべてが日没までに残されている時間の少なさをよくあらわしている。

それだから、走るのだ。

セリヌンティウスがメロスが戻って来ることを強く信じているから、自分は走るのだ、ということ。

信じられているから走るのだ。

前の文と重複しているから、より明確に、強調するために書いてあ

る。信じられているから走るといふことは、メロスがセリヌンティウスの信頼に応えるために走っていることになる。

間に合う間に合わぬは問題でないのだ。

ここでいう間に合うというのは日没までに刑場に着くこと。前文からの繋がりを考えると、信じられているから走っているという理由に比べたら、間に合うため（＝王との約束を守るため）に走っているという理由は比べものにならないということ。

人の命も問題ではないのだ。

「人の命」、つまりセリヌンティウスの命。ここではセリヌンティウスを救うこと。先ほどと同じで、信じられているから走っているという理由に比べたら、セリヌンティウスを救うために走っているという理由は比べ物にならないということ。

わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

「恐ろしく大きいもの」とは「恐ろしくて、大きいもの」ではなく副詞的な意味合いで「物事の程度がはなはだしい」ことを表している。それに加えて「もっと」とあるので、メロスは前述した王との約束を守ることに、セリヌンティウスを救うことよりも、信じられているから走る、信頼に応えるために走るといふことをいっそう強調している。

何一つ考えていない。

「何一つ」とあり、メロスは走ることに集中しているということだ



ろう。

ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。

「わけのわからぬ大きな力」が具体的に何を指すのかは記述がないのでわからない。ただ、直前の会話から考えると、大きな力となりうるのはメロスがセリヌンティウスに信じられていくから走っている、信頼に応えるために走っているという部分だろうか。ただ、直前の「メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。」という記述から考えると、メロスは頭で考えて走っているわけではないようだ。さらに「ひきずられる」とあるので少なくともその力はメロスの頭の外側にあることになる。

間に合った。

あつかりと書くことで読者を安心させている。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、今、帰って来た。」と、大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、のどがつぶれてしゃがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

先ほどの安心とは打って変わって、誰もメロスの存在に気付かないことで読者を再び不安にさせる。しかし「殺してはならぬ。」とあるからセリヌンティウスがまだ生きていること、それをメロスが確認できたことはわかる。群衆は誰一人気付かないということは群衆が磔台に集中していたことだから、まさにもうセリヌンティウスが処刑されようとしていることがわかる。

君がもしわたしを殴ってくれなかったら、わたしは君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。

「資格」がないのはメロスが盗賊を倒した後にセリヌンティウスのことを裏切ろうと考えてしまったから。殴られることで、その報いを受けようとしている。二人にとって抱擁は友とするものである。

ありがとう、友よ。

二人はお互いを疑ったこともあったが、最終的には信頼に応えた。そのことに礼を言っている。

暴君ディオニス、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

群衆の背後から来た、ということとはもとからメロスが来るとは思っていないのが分かったのかもしれない。「まじまじ」から、王が二人の姿に集中していることが分かる。「あからめて」は後の発言や行動を考えると、恥ずかしいというよりは（いままでの自分を恥じている気持ちはあるかもしれないが）、二人の姿に感動したから「あからめた」のではないだろうか。

おまえらは、わしの心に勝ったのだ。

「わしの心」とは「人は私欲で動き、疑ってかからなければならぬ、信じられない」という考え。「おまえら」から、王は「約束を守るができる」ことではなく「お互いに相手を信頼できる関係である」と言うところに感銘をうけたのではないか。

どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。

「おまえらの仲間」という表現から、王は人を信じようとするだけでなく、信じられる人物になりたいと願っていることが分かる。

### 万歳、王様万歳。

民衆は王が暴君をやめ聖君になろうとしている姿に感動している。

メロスは、まごついた。

メロスは自分が裸になっていることに全く気が付いておらず、なぜマントをささげられたのかわかっていない。

勇者は、ひどく赤面した。

「勇者」とはメロスのこと。「勇者」が「赤面した」と書くことでメロスが天晴な人物でありながら、人間味を持つキャラクターとして書かれている。「勇者」とあるのでメロスが見事に暴君の心を倒した、勇気ある人になったことが分かる。

### 三 考察

#### (一) シラー『人質』との相違点について

フリードリヒ・シラー「人質」(小栗孝則訳、『新編シラー詩抄』、改造文庫、一九三七年)と「走れメロス」との比較を行う。

「走れメロス」では描写が非常に具体的である。冒頭の場面、結婚式の場面など例を挙げればきりが無い。では、描写を具体的にするこ

とでどのような効果もたらされるのか。それは、読者にメロスの心情をよみとらせ、メロスの人間性を理解させるためではないか。そして、「人質」で書かれなかった部分を描くことで、より物語を分かりやすくする効果もあるのではないか。では、この二つの作品の相違点をメロスという人物に絞ってみていこうと思う。

冒頭の場面で、シラーはメロスを「のんきなもの」だとは記していない。暴君ディオニスのところに「忍び寄っている」ことから、どこか王殺害の計画があったように思える。対して、「走れメロス」では、突発的に王殺害を思いつき、暴君ディオニスのところにたどり着くとなく、あえなく警吏に捕縛される。この二つの作品の冒頭で、メロスという人物への印象が全く異なるといえる。

また、メロスが大きく異なるのは、王城へと走る場面である。降りかかる困難は特に違いはないが、途中でメロスが疲れ果てて倒れてしまう場面が、大きく異なる。「人質」におけるメロスは、自分に対して叱咤激励しからない。「ここまできて、疲れ切って動けなくなるとは愛する友は私のために死なねばならぬのか?」と、疲れ切った状態にあっても、友であるセリヌンティウスのことを思いやっている。ここで「あきらめ」は一切ない。そして、清水を飲んだ彼はあっさりと元気を取り戻して、再び走り始める。この間わずか六行だ。対して「走れメロス」ではその数倍にも及ぶ長さで細かく描写されている。そして、メロスはその場面で一度友人の命を救うことをあきらめている。そのすえに深い眠りにについている。ここにメロスの弱さが描き出されると感じられる。

#### (二) 作品のテーマについて

ずばりこの作品は「走れ！メロス」である。作者はメロスを、最強の勇者として描かず、どこか人間的な弱さを持ち合わせたものとして描いた。確かに超人的な能力で、荒れ狂う川を越えたり、山賊をなぎ倒したりと、ヒーローとしての一面を見せている。だが、「人質」にはなかった、メロスの「あきらめ」を描くことで、メロスが一気に人間的になる。こうすることで、読者が、メロスとともに苦しみ、かつメロスを応援したい気持ちになっていく。友の命を救うことをあきらめ、ひれ伏したメロスを叱咤激励し、信実は決して妄想ではないということとを証明してほしくなるのである。メロスに対して、人間として抱いて当然である「死への恐怖」や「自らの信念に対する疑惑」を抱かせることにより、メロスをより読者に近い存在にしているのだ。

描写の中には「人の心は、あてにならない」を中心とした王の発言や、「正義だの、愛だの、考えてみれば、くだらない」というようなメロスの発言がある。これらの発言はただ単に登場人物の思考や人間味を表現しているだけではなく、作者、太宰治そのものの心情も表現していると考えられる。このように考えるとき、太宰の生活や性格を考えて彼に一番近い人物は王であろう。また、メロスの弱気な発言やセリヌンティウスを裏切ってしまったかと思う考えも太宰の考えであるといえるだろう。現実世界で人を信じることができなくなったり、人の信頼にこたえようとする太宰。そんな彼が話の世界だけでも書いたのが「走れメロス」ではないだろうか。王と太宰は本当はメロスに走ってきてほしいのだ、たとえどんな困難があつたとしても。そして、そこから何かを信じてみたいのだ。それは「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった」という一文に尽きるのではないか。



## 終わりのない散歩 (石田衣良)



石田 光



笹原 愛



中島 大輔



宮川 沙和



邊見 唯

## 一 作者と作品について

石田衣良（一九六〇～）は東京都江戸川区に生まれた。一九九七年に『池袋ウエストゲートパーク』で第三六回オール読物推理小説新人賞を受賞した。その後、二〇〇三年に『4TENフォーティーン』で第一二九回直木賞、二〇〇六年に『眠れぬ真珠』で第一三回島清恋愛文学賞を受賞した。

本名は石平庄一（いしだいらしょういち）で、ペンネームは名字の「石平（いしだいら）」に由来する。

『終わりのない散歩』は二〇〇五年に出版された『てのひらの迷路』に収められている。『てのひらの迷路』には二十四編の話が収められており、エッセイ風のものから、私小説、ファンタジー、ホラー、恋愛など様々なジャンルの話がある。

作品自体は短く、読みやすい。また、会話文が多く、「ぼく」とおばあちゃんとのやり取りが多く描かれている。後半部分で、おばあちゃんが自分の家や郵便局の場所が分からなくなってしまいが、そのときの「ぼく」の気持ち、もらった草餅を食べながら「ぼく」が何を考えていたのか、などということを生徒に考えさせることが授業のポイントとなってくるだろう。

## 二 叙述について

そのおばあちゃんとは、家の近くを歩いているとき、よく顔を合わせるがあった。

「その」という言葉があることから、おばあちゃんが特定の人物であることが分かる。また、後に続くおばあちゃんについての説明がすんなり頭に入る。

振り返ると、腕を直角に曲げて元気よく振りながら笑いかけてくる。

「元気よく」とあり、おばあちゃんが元気でしたっけ人物であることが分かる。

梅雨入り前のからりと乾いた空は、夏のように硬い青さだった。

この物語では、天気とおばあちゃんの心情とが類似している。後の「厚い雲が切れたような表情は、その日の気まぐれな天気と同じだった。」という記述からも、おばあちゃんの心情が天候の描写と類似していると考えられる。

この一文では、「夏のような硬い青さ」から、おばあちゃんの気持ちや夏の青空のように晴れ晴れとしており、不安もなく強い状態であること（＝硬い）が分かる。

「使わないと膝がもつと悪くなるって脅されてね。」

「もつ」という表現より、元々膝の具合があまり良くなかった。

「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」

「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」  
「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」  
「最近は何の日でも歩かないとなんだか調子が出なくて。」

一日中机に向かっていてるだけのぼくも、運動不足は同じだった。

「だけ」とあり、ぼくの職業は、一日中机に向かって作業を行い、ぼぼ動かない仕事であると考えられる。

彼女はちらりとこちらを見上げた。

「こちらを見上げた」ことが分かるので、ぼくとおばあちゃんの視線がぶつかっている。または、ぼくはおばあちゃんの動作に気付いた程度には、そちらに気を向けていたと考えられる。おばあちゃんが見上げていることから、彼女がぼくよりも小柄な人物だと分かる。

「でも、あなたなら小さなダンベルでも持って歩くといいかもしれない。」

ぼくはおばあちゃんから「付加をかけたウォーキングが出来るだけの体力がある」人物だと分析されている。また、ぼくが聞いていないことまで話していることから、おばあちゃんは話好きであり、ぼくと話すことを楽しんでいてと想像できる。このことは、これ以前のおばあちゃんのセリフからも読み取れる。

「えっさ、ほいさって。」

おばあちゃんの朗らかで茶目つ気のある性格がうかがえる。(言葉にあわせて腕を動かす動作もしていたかもしれない。)

「残念だけどここまでね。」

「残念」という表現より、おばあちゃんはぼくとお喋りをしながら歩くことができ楽しかったと感じている。

「じゃあ、またね。」

「また」という言葉から、おばあちゃんは再びぼくと話す機会がある、または会った時には話しかけようと思っている。

「今日は突然失礼いたしました。」

あの年代の人らしく、最後は急に丁寧になった。

それまでは、砕けた話し言葉であったが、この一言だけは年下であるはずのぼくに対しても丁寧な言葉を遣っている。「あの年代」||「おばあちゃんの年代(七十代後半)」。

直角に曲げていた腕を上げると、信号待ちをするように元氣よく手を振って幅の広い歩道を歩いていってしまう。

立ち止まったときでもおばあちゃんの腕は直角のままに保たれていたとわかる。また、おばあちゃんの元氣のよさが別れ際まで強調されている。さらに「歩いていってしまう」ので、ぼくの反応を待つことはしていない。

ぼくがこちらこそと言うと、肩越しに上がった手がふわふわと漂うように揺れた。

ぼくはおばあちゃんの後ろ姿に声をかけている。手は「肩越しに」上がっているの、おばあちゃんは振り向かず手を振ったことがわかる。「ふわふわと漂うように」とあり、また「振った」ではなく「揺れた」という言葉を用いていることから、先ほどの元気のよい印象とは違い、柔らかい印象を受ける。

ぼくは自宅で仕事をしているので、昼間から近所を歩くことが多いのだ。

「自宅で仕事をしている」とあるので、先の文と関連させて考えると、ぼくの職業は、一日中自宅の机に向かって作業を行い、ほぼ動かない。また、時間の拘束がなく自由に外出でき、その頻度も高い仕事である。

天気の良い日には、彼女はひさしの大きな麦藁帽をかぶり、選挙応援の人たちがするような白手袋をしていた。雨の日は暑くてたまらないと言いながら、防水加工のトレーニングスーツを着ている。

ぼくとおばあちゃんが初めて言葉を交わした後も何度か（最低でも二回以上）会っていることがわかる。また、おばあちゃんはきちんと気候に合わせた格好をしている。白手袋は日焼けを防ぐためか。

彼女と一緒にいるとぼくまで腕を曲げ、しっかりと脇を締めて、早歩きをするようになってしまった。

初めておばあちゃんと会ったころは歩く速さだけであったが、何度

も会ううちに、歩く姿勢までおばあちゃんにつられるようになってしまった。「しまった」とあるので、ぼくはそうするつもりはなかったのだが自然とそうなったと考えている。

たとえ見慣れた路地でも、背筋を伸ばし、そんなふうに風を切って歩くのは、なかなか新鮮で楽しいものだった。

見慣れてしまったいつもの道でも、歩き方を変えるだけで、新しい道を歩いているような新鮮さを感じることができる。「なかなか」とあるので、思っていた以上に新鮮で楽しかった。

あれは初めて言葉を交わしてから、三か月ほどたった日のことである。

初めておばあちゃんと会ったのが、梅雨入り前という記述があるので、三か月後はおよそ八月の終わりごろ。

なんだか朝からおかしな天気で、厚い曇り空からぱらぱらと大粒の雨がこぼれたかと思うと、雲が切れて急に真夏のような日ざしが注いだりする。

これから語られるエピソードが、今までのおばあちゃんとのエピソードとは異なるものであるということの暗示。

ぬれた路面がざらりと黒く光るのだ。

「ざらり」ではなく、「ざらり」という表現になっている点から、光り方がより鋭いように感じられる。

ぼくが彼女と出会ったのは、いつもの町内から少し離れた隣の町のことだ

った。

これまでおばあちゃんは、自分の町内だけをウォーキングのコースにしていると聞いていた。しかし、今回出会ったのは、そのウォーキングコースには入っていない隣町であった。これまでのエピソードとは明らかにおばあちゃんの様子が違うことがわかる。

買い物をすませて家に帰ろうとすると、一方通行の向こうから雨の日用のかっこうをして歩いてくる。

この一方通行は、車の一方通行か。「歩いてくる」とあるので、おばあちゃんらしき人がだんだん近づいてくる様子がわかる。

鮮やかなレモンイエローのポリエステルの上下。

「上下」という体言止めが使われており、おばあちゃんの着ている服そのものが強調されている。ここでは、目立つ色の雨具を着ていたのでおばあちゃん存在に気づいたのではないかと考えられる。

なぜかいつもより早足で、ウォーキングというより小走りでもしているみたいな感じだった。

やはりおばあちゃんの様子が、これまで語られてきたものとは違うことがわかる。「小走り」とあるので、心理的に少し焦っている様子が読み取れる。

彼女はぼくを見つけると、さっそく声をかけてきた。

「さっそく」という言葉から、おばあちゃんが知っている人（「ぼく」）を見つけて、間髪を入れず話しかけてきたことがわかる。

「あら、よかった。おうちに帰るところなの。」

知っている人を見つけることができよかつたという安心感から出たセリフ。次のぼくの言葉を読むと、このセリフが質問の文であることがわかる。

ぼくはうなずいて言った。

「うなずいて」という言葉から、おばあちゃんの質問にまずうなずいて、一呼吸置いてから次の言葉を発していることがわかる。おばあちゃんの普段と異なる様子を受けて、次のセリフに続けている。

「ええ、ちよつと資料を探しにいつて、戻ってまた仕事です。」

具体的に買った物を言わずに「資料」と濁していることから、小説を書くのに必要な材料を買いに行ったのではないかと考えられる。

「そうなの。なんだかわからないけど、自由業というのも大変よねえ。」

「自由業」とは、一定の雇用関係や勤務時間などに縛られておらず、独立して営む職業者のこと。小説家の他にも、画家や医者、弁護士、芸能人などが自由業にあたる。

「なんだかわからないけど」という言葉から、「自由業」というものがどういふものかということ、このおばあちゃんをよく分かっているのだと考えられる。

彼女はぼくが小説を書いているということが知らない。

おばあちゃんには、自分の仕事は何であるかを明かしていないこと

がわかる。

とても近所の人にそんなことは言えなかった。

「とても」とあり、近所の人との関係を気にしていると考えられる。言えない理由としては、世間体を気にしているのではないかという点や、自分のことが小説のネタにされているのではないかと思われ、近所の人から疎まれるのを恐れているのではないかという点などが挙げられる。「そんなこと」とあるので、小説家という職業を、ぼくは決して価値のある仕事だと考えていない。

今でも職業欄に自由業と書くくらいなのだ。

小説家と書けるほど、自分の小説家としての技量にまだ自信を持っていないということが考えられる。

ぼくには、自由業の意味は、いまだによくわからないのだけれど。

「いまだに」という言葉があることから、職業欄に「自由業」と書き続けてきて長くなるが、その間ずっと、「自由業」とは本質的にどういふものなのかわからずに書き続けてきたということが読み取れる。

不安そうな上目づかいで、こちらを見ると言う。

「不安そうな」とあるので、おばあさんの身に何かが起こったのではないかと考えられる。また、以前の「ちらりとこちらを見上げた。」のときと比べてより長い時間こちらのことを見ていたのではないかと考えられる。そして、「言った」という過去の表現ではなく、「言う」と、現在形の表現になっている。

「じゃあ、また少し一緒に歩いてもいいかしら。旅は道連れというけれど。やっぱ一人だけで歩くものじゃないわねえ。」

「旅は道連れ」とは、旅をするには誰か行動を共にする人のいる方が心強いということ。

「やっぱり」とあるので、一人で歩いていて後悔をするような出来事が、おばあちゃんの身に起こったために出たセリフであると考えられる。しかしここでは、おばあちゃんに具体的に何があったのかまでは話されていない。

なぜか深くため息をついた。

ここでも、これまでの話のおばあちゃんとは様子が違うことがわかる。前のセリフを受けて、一人で歩いたことを後悔するような出来事が、おばあちゃんの身に起こったのではないかと考えられる。「なぜか」とあるので、ぼくにはため息の理由が分からない。

私はこの辺りで生まれ育って、もう七十年以上になる。

おばあちゃんが七十歳以上であることが分かる。

おかしなもので、焼けちゃったところのほうが発展して、焼け残ったほうが、昔のままごみごみした感じになっちゃうものね。

焼けてしまったところには新しい建物がどんどん出来て栄えているが、焼け残ったところは昔の姿のままである。「おかしなもので」とあるので、おばあちゃんがこのような状況に軽い皮肉の気持ちを込めているのではないか。



ぼくは空を走る雲を眺めながら、適当なあいづちをうっていた。

雲が走るように流れていることが分かる。「適当なあいづち」ということから、あまり真剣に話を聞いていない。

あまりこの辺りの地誌には興味がないのだ。

「ぼく」は自分の住んでいる地域に興味や関心が無い。「あまり」とあるので、全く興味がないわけではないが、いつでもその話題に飛びつくほど興味があるわけでもない。

そうやって話している間も、彼女の視線は定まらないのだった。

近隣の地誌について「ぼく」に色々と話しているが、郵便局の場所を思い出せないため、周りを見渡しながら歩いている。

電柱や看板、生け垣や表札を、探しのものでもするように行ったり来たりしていた。

「行ったり来たり」とあるので、目線があちこちに移っており、おばあちゃんの落ち着かない様子がかがえる。

なにか気がかりでもあるのだろうか。

おばあちゃんの様子に、「ぼく」は何かあるのかと疑問に思う。現時点ではおばあちゃんが自宅の場所を忘れてしまっているということには気付いていない。

だが、ぼくは人の心配ごとをすぐに口にあげられるほど神経の太い人間

ではなかった。

「神経が太い」は、凶太い、気後れしないという意味。

「ぼく」はどちらかという繊細で撃たれ弱いような性格で、それを自覚していることが分かる。

四、五分ほどすると、ぼくたちは町内に戻ってきた。

五分弱で戻ってこられるほどの近いところで二人が出会ったことが分かる。

彼女は慌てて言った。

おばあちゃんは「ぼく」が住むマンションは覚えていた。もう「ぼく」と別れなければならぬと思いつき、郵便局の場所を教えてもらおうとしている様子がかがえる。

目をそらしているが、彼女の声は真剣だった。

郵便局はおばあちゃんの家のおすぐ裏にある。真剣な声だったので、冗談で言ったのではない。「目をそらしている」ということから、おばあちゃんは何気なく聞くふりをしたのではないだろうか。

彼女の家はそのすぐ裏だったはずだ。

おばあちゃんの家は郵便局の近くであることが分かる。「はずだ」とあるので、「ぼく」は正確には場所が分かっているはずだ。または、なぜおばあちゃん自分の家が分からないのだろうか、という驚きの気持ちが読み取れる。

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ちょっと郵便局に用事があつただけど、道に迷っちゃったの。」

彼女は郵便局に用事があることにして、自宅の位置を探ろうとしている。

ぼくは胸をつかれた。

「胸をつかれる」とは、はつとすること。

このときぼくは、自分の家がどこにあるのか分からなくなっている彼女の状況に気づいた。

そしてあちこち探し回っているうちに、いつもの散歩コースをはずれて、隣町に行ってしまったのだ。

以前、町内だけをコースにしていると聞いていたにも関わらず、この日の彼女とぼくは、いつもの町内から少し離れた隣町で出会っている。このことから、彼女の意思で隣町まで足をのびたというよりも、道に迷ってしまい隣町まで行ってしまったと考えられる。

ぼくは彼女のほうを見ずにさりげなく言った。

「さりげなく」とあるので、人の心配ごとをすぐに口にあげられるほど神経の太い人間ではないぼくは、核心に触れることを避けているのではないか。彼女を見ずに、さりげない様子で話すことで、ぼくが彼女の本当の状況に気づいていないようにふるまった。

「今日はたくさんウォーキングしたんですね。」

ぼくは彼女に対して、迷った末に隣町に行ってしまったのではなく、

彼女の意味で隣町までウォーキングをしたというようなニュアンスで話す。

彼女の笑顔は必死だった。

彼女は、自分の家がわからないような状況であるため必死になっている。また、彼に気づかれまいと笑顔を作って不安感を隠すためにも必死になっている。

「そうね。もう二時間も歩いたから、くたくた。」

実際に二時間歩いたため、体力的にくたくたになっている。また、家が分からないという不安により、精神的にもくたくたになっている。

「そうですか。じゃあ、近くだから郵便局まで一緒に歩きます。」

さりげない彼の気遣いである。彼女が家に帰れない状況を理解した上で、郵便局までの案内を提案する。

彼女の顔がぱつと明るくなった。

「ぱつと」とあるので、今までの不安感が急速に消えていった。

厚い雲が切れたような表情は、その日の気まぐれな天気と同じだった。

厚い雲は、彼女の不安感と類似している

ぼくたちは少し速度を落として、郵便局に向かった。

くたくたである彼女に対するぼくの気遣いか。精神的にも体力的にも疲れているであろう彼女を気遣ったのではないか。

彼女は女学生時代の話を始めた。

ここから彼女の女学生時代の話が始まる。先ほどまでの続きか。彼女の若いころの話は現在の彼女の年齢を感じさせる。

「今日はどうもありがとう。」

一緒に歩いてくれたことに対する感謝であり、自宅が分からなくなっていた状況を救ってくれたことに対する感謝でもあると考えられる。

「若い人の口に合うかどうか分からないけれど。また、一緒に歩きましょうね。」

彼女は、若い人は草餅をあまり食べないものだと考えている。

「また、一緒に歩きましょうね」の解釈としては、左記の四つが考えられる。

- ・ 今回の散歩で家が分からなくなったが懲りていない。
- ・ 彼とともに歩くことよって迷わないようにするつもりである。
- ・ 社交辞令である。
- ・ 本当に彼とまた歩きたいと思っている。

彼女は郵便局には寄らずに、路地に消えてしまった。

彼女の目的は郵便局に行くことではなく、帰宅することである。

ぼくは黄色いウインドブレーカーの背中を見送ってから家に帰った。

「見送ってから」とあるので、彼女がぼくと別れた後も迷わずに帰ることができているか、確認している。

途中で食べた草餅は、彼女の体温でまだ温かった。

先ほどまで彼女の上着のポケットに入っていたため、温かった。二時間のウォーキングの影響もあり、温かくなっていたのか。

### 三 考察

#### (一) おばあちゃんの人物像

この話の登場人物の一人であるおばあちゃんの人物像について考えていきたい。物語前半までのおばあちゃんは、

淡いピンクのジャージを着て、同じ色のウォーキングシューズを履いている。

おまけに髪も薄い紫というか、青みがあったピンクに染めているのだ。

という外見に関する描写や、

腕を直角に曲げて元気よく振りながら笑いかけてくる。

信号待ちをするぼくに元気よく手を振って幅の広い歩道を歩いていてしまう。

という動きに関する描写から、明るくて元気なおばあちゃんとイメージすることができる。

話が進み、物語の後半にあたる三か月後、登場人物であるおばあち

やんは、もの忘れが進み、道に迷ってしまう。ここで、読者である我々は、この「もの忘れ」について二通りの予測を立てることができる。一つは、このおばあちゃんは認知症になっており、その症状としての「もの忘れ」ではないかということ。もう一つは、認知症ではなく、誰にも起こり得る「もの忘れ」ではないかということである。物語の中で、直接的に「認知症が進行して」という表現はされていないので、年をとったことから生じる「もの忘れ」であろうと推測するのは、ごく自然なことであろう。しかし、隣町から家に帰っている途中で、おばあちゃんは昔の町の様子を長々と話している。これを、「昔の話ほどよく覚えている」という認知症の症状の一つだと考えられる、やはりこのおばあちゃんは認知症であったのではないかと考えられる。

しかし、このおばあちゃんは、自分が認知症になってしまったという事実を素直に認められないでいる。それは、おばあちゃんの次のようなセリフによく表れている。

「あら、あそこがあなたのおうちよねえ。ところで、郵便局はどこだったかしら。」

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ちょっと郵便局に用事があったんだけど、道に迷っちゃったの。」

ここで、おばあちゃんは郵便局に本当に用事があったので場所を聞いたわけではない。その証拠に、最後の場面でおばあちゃんは、郵便局へは寄らずに、路地の中に消えてしまっている。では、なぜおばあちゃんは郵便局の場所を聞いたのだろうか。おばあちゃんの家が郵便

局の裏であったことを考えると、郵便局が自分の家へ帰るための目印であったからではないかと推測できる。この場面、おばあちゃんの心の中での本当のセリフは、次のようなものではないかと考えられる。

「どうも年をとると、もの忘れがひどくてね。ウォーキングの途中で、家の場所を忘れてしまって。郵便局の裏というのは覚えていたからその郵便局を探していたら、道に迷っちゃったの。」

しかし、自分が自宅の場所まで忘れてしまうほどに認知症が進行しているということを認めたくないという思い、また、他人にもそのように思われたくないという思いから前述しているようなセリフになってしまったのではないかと考えられる。

## (二) ぼくと彼女の関係の変化

ぼくが彼女と言葉を交わす前

・ぼくと彼女（おばあちゃん）は家の近くを歩くときに顔を合わせる程度の関係。

最初に言葉を交わした日

・きっかけはコンビニエンスストアに行く途中にいきなり後ろから、声をかけられたこと。

↓「よくお会いしますね。」

○彼女が彼に声をかけたのはどうしてか。

顔を合わせるうちに顔見知りの関係になり、声をかけた。このときの彼女の元気な様子から、積極的な性格がうかがえる。顔見知り程度の人間に声をかけたのは、彼女の社交的な性格や七十代後半という年齢のためか。

↓「じゃあ、しばらくご一緒してもいいかしら。いつも一人だから、話し相手がいるとうれしいの。」

この彼女の言葉により、二人で大通りの交差点まで歩く。

#### ○会話の内容

・彼女が歩く目的について話す。いつもウォーキングをしている彼女との初めての会話は、そのウォーキングの目的についてである。

#### 最初に言葉を交わしてから三ヶ月間

・顔を合わせるたびに二言三言の挨拶を交わすようになる。

#### ○ぼくが彼女から受けた影響

・彼女と出会うと、ぼくも彼女のようなウォーキングをするようになる。

(腕を曲げ、しっかりと脇を締めて、早歩きをする)

↓ぼくは、見慣れた路地でも、背筋を伸ばし、そのように風を切って歩くのは、新鮮で楽しいものだと思うようになる。

・顔見知り程度の関係から、出会うと挨拶を交わす程度の関係になった。また、ぼくは彼女の日々の様子を知りようになる。

(天気の良い日、雨の日の格好や様子など。)

↓彼女と知り合ったことにより、歩き方が変化する。その結果、街の

見方や心のもちようにも変化があらわれる。

#### 最初に言葉を交わしてから三ヶ月ほどたったある日

・いつもの町内から少し離れた隣町で出会い、ぼくを見つけると、さっそく声をかけてきた。

#### ○会話の内容

ぼくの自由業についてや昔と今の町の様子、東京大空襲など話題はころころと変化する。話題というよりもむしろ、彼女が一方的に話しているような印象を受ける。「ぼくは空を走る雲を眺めながら、適当なあいづちをうっていた。あまりこの辺りの地誌には興味がないのだ。」「彼女の話を失礼にならないように聞き流しながら、一緒に歩くだけである。」などとあるように、ぼくは彼女との会話に積極的ではなく、聞き役にまわっている。しかし、彼女の話聞きながら、ぼくは彼女の異変に気づき始める。話している間も定まらない視線から、何か気がかりでもあるのではないかと思いついたのだ。ぼくは、彼女が郵便局の場所を尋ねたことにより、彼女が自宅に帰れない状況であるのだと悟る。

#### ○『終わりのない散歩』を書いたきっかけ

この作品における「ぼく」はおそらく著者である石田衣良だろう。「終りのない散歩」を書くうと考えたのは、やはり最初に言葉を交わしてから三ヶ月ほどたったある日の彼女とのやりとりがきっかけではないかと考えられる。そのときまで、ぼくにあって彼女は「出会えば挨拶を交わす程度の近所の元気なおばあちゃん」であった。彼女が置か

れている状況に気づくまで、彼女の話を聞き流しながら、ただ共に歩くだけであった。

しかし、彼女が自分の家に帰れなくなったという事実気づいた直後から、ぼくは自分自身の言動に細心の注意を払うようになる。あくまでさりげなくふるまうぼくは、明らかにそれまでのぼくの気持ちや行動から変化している。三ヶ月前まで、ぼくにとって、「元気なおばあちゃん」であった彼女の異なる様子に心を動かされたのではないか。ぼくが胸をつかれたこの日の出来事をきっかけに「終わりのない散歩」を書いたのではないだろうか。



## 高瀬舟（森鷗外）

小山 明里



## 一 作者と作品について

森鷗外（一八六二～一九二二）は現在の島根県津和野出身の小説家、軍医である。「舞姫」「雁」「山椒大夫」「渋江抽斎」など多数の作品を残している。

安楽死学説を翻訳した「甘暎の説」（一八九八）、喉に血膿が詰まって窒息死した弟篤次郎の状況（一九〇八）、生後間もない二男不律の百日咳による死（一九〇八）同じく百日咳に苦しむ長女茉莉をモルヒネ注射で安楽死させた体験（「金毘羅」）（一九〇九）など、鷗外は安楽死と深い関わりがある。

森鷗外は「高瀬舟」と同時に自作解説「高瀬舟縁起」を発表している。これによって長らくテーマは「知足」か「安楽死」か、それとも両方かで議論されてきた。その後、研究の動向は「（一）ふたつの主題が分裂しているか否か、（二）分裂しているとして、両者のいずれに比重が置かれているか、（三）ふたつのテーマを統一する主題は果たして発見できないのか、といった点に集中している」という流れで変化している。

近世文学の伝統が生きていた明治三十年代ぐらいまでは縁起、ないしは小説の成った由来を示した小文がつけられることがよくあったという。「高瀬舟」を「高瀬舟縁起」と合わせて読むべきかどうかでも議

論が分かれている。

その「高瀬舟縁起」のなかで「高瀬舟」は、江戸時代の随筆集「翁草」の中の「流人の話」をもとにして書かれたと述べられている。

教科書の資料集を見ると、（第一学習社『国語便覧』監修 稲賀敬二・竹森天雄・森野繁夫）「文学の学習 近現代 森鷗外」という項目の「歴史小説と史伝」に以下のように記述があり、「高瀬舟」も歴史小説の一部として扱われている。

そしてその創作理論として「歴史其儘と歴史離れ」という論文を書いている。「歴史其儘」とは、史料を尊重して、勝手な空想をつけ加えないこと、「歴史離れ」とは史料を離れて小説的なフィクションを付け加えることをいう。

「高瀬舟」は歴史小説であるのか、ということも議論がなされてきた。歴史小説とするならば、情報を十分に収集して作品の解釈に臨まなくてはならない。藤本（一九八四）は「鷗外の歴史小説のねらいは、現代批判と諧調の美学である」と述べている。「諧調」とは、「硬質のテーマを、鷗外は荒々しく主張するのではなく、美的虚構を用いているらしい」としている。例えば「対句、対照、象徴、比喩などをつかって、あるいは中国文学の技巧を借り、あるいはイプセンのごとく劇

的に、あるいはメーテルリンクの象徴劇風に、書いて見せた」という。

しかし、小田島（二〇〇四）は『高瀬舟』＝「流人の話」ということにはならない」とし、『高瀬舟』ではこの同心に羽田庄兵衛という固有名詞が与えらればかりか、罪人喜助の話を聞くうちに我が身を照らし合わせ、更には深い昏迷の淵に沈んでいく彼の姿を浮き彫りにしたのは、明らかに鷗外の独創であった。」と述べている。

檀原（一九九九）によると、文学研究において、テーマの前半は足ることを知る、後半は安楽死であるとされてきた。

文学研究史としては、まず作品の評価を低くとらえるような、作品に対して否定的な論文が発表され、後に、喜助を評価する論文が登場したということである。研究が進められるうちに、作品、喜助への評価の変化が起こっている。そしてその後、喜助を見る庄兵衛の観察により語られるということが注目されるようになった、ということが言えるという。

「足ることを知る」「安楽死」、さらに近年では「オオトリテエ」という主題について文学研究、文学教育それぞれにおいて論文が発表されてきている。この主題については後に取り上げ考察する。

## 二 叙述について

知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類の無い、珍しい罪人が高瀬舟に乗せられた。

「入相の鐘」が寺院の厳肅な雰囲気をかもしだしている。また、鐘の音が時刻を表しているとも考えられる。「入相の鐘に散る春の夕べ」という表現は、読者に入相の鐘を背景として桜が散るといふ映像、遠

く聞こえる鐘の音、という目と耳からの情報を与えている。「春」という季節、「夕べ」である時刻は美しくも物悲しい様子を演出している。罪人を乗せた船なので、薄暗い方が良い。

また、これまでの罪人は悲しんでいるのに、喜助は悲しんでいないという比較を、桜の表す明るさと夕べの薄暗さで表現しているのではないか。

「これまで類の無い、珍しい罪人」とは、後に喜助が目が輝いでいる様子を庄兵衛が不思議だ、と思うことを示唆している。

それは名を喜助といって、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。

初めて語られた喜助の情報は、最低限のものでしかない。喜助は、三十歳、庄兵衛は後に初老であることが明かされる。この年齢差は、庄兵衛が喜助を理解するのに影響を与えていると考えられる。たとえば、後に「口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしように思われた」という表現があるが、それは庄兵衛にとっては喜助が三十歳という本来ならば社会的な責任を負う年齢の男が無邪気、無垢、自由なようにみえた、ということがわかる。

さて牢屋敷から棧橋まで連れてくる間、この痩せ肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。

痩せ細り青白い顔にはこれまでの生活の苦勞が刻まれている。「自分をば」という表現からは、語り手が喜助に寄り添い語っていることがわかる。



しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順をよそおって権威にこびる態度ではない。

権力の最下層にいた喜助は権威にこびるほど世渡りが上手な、世慣れた人間ではないことがわかる。権力が自分たち兄弟をこれまで助けてくれなかったということがあるから媚びていないのではないか。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終、喜助の顔から目を離さずにいる。

庄兵衛は護送する役人なので、ジロジロ見られない立場である。しかし、この珍しい罪人が気になって仕方がない。それゆえ、「まともに見ていない」と「始終目を離さない」で矛盾がうまれたのだろう。

まず、「まともに見ない」は漠然と不思議だと考えているだけで、具体的に分析などはしていない状態だといえる。だから、ぼんやりとしながら常に喜助の顔が視界に入っている状況だということが読み取れる。

そして、不思議だ、不思議だと心の内で繰り返し返している。

「不思議だ、不思議だ」と連続して繰り返す人はそういない。なので、ここは「不思議だ…(少し時間の経過)…やっぱり不思議だ」というように時間の経過が感じられる。

また、心の「内」という表現が、心の奥底からの気持ちであることを表しており、「繰り返し」というのが、喜助へ理由を聞いてみたいという気持ちの高ぶりを表している。

それは喜助の顔が、縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌

を歌いだすとかしように思われたからである。

三十歳の男が、いかにも楽しそうな様子を見せ無邪気な態度を取るのは異様な光景であるが、喜助の楽しそうな様子からは、これまでの生活苦からの解放や安定した暮らし・身の安全に対する期待が感じられる。「縦から見ても、横からみても」という表現からは、どこから見ても楽しそうであることと、文のリズム(語調・語感)を整える印象をうける。横からというのは想像がつくが、縦からということは、上からなのか、それとも正面からなのか様子なのかどちらなのだろうか。また、役人に対する気がねという部分からは、庄兵衛に対する気遣いや敬う様子を感じ取ることができる。

庄兵衛がためには、喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

「庄兵衛がためには」とは、「庄兵衛にとつては」という意味になり、これは喜助に対して庄兵衛自身の意識が入り込んでいることがわかり、又さらに、「考えれば考えるほど」とは、この段全体で述べられている〈喜助の他の罪人との異質感〉における庄兵衛の長い思考・多くの興味を表れている。そして、どれだけ喜助について考えても謎はより一層深まるばかりであり、喜助に対してより興味をもっている。

他人対して好奇心をもつ性格であることがわかる。

何事かお役人に見とがめられたのではないかと気遣うらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色をうかがった。

先ほどの「口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしそう」という態度とはうってかわって、びくびくとしている。先ほどは役人が

見ていても気にせず楽しんでそうな表情をしていたが、見とがめられるのはまずいと気付いたのか。

「京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私のいたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなかるうと存じます。

「これまで私のいたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなかるう」と思うほどつらい体験をしてきていた、とはつきりと述べている。これまでの暮らしに不満を持っている。後に庄兵衛によって「足ることを知る」と判断されるような、満たされた生活を喜助は送って来なかったことがこの言葉からわかる。

「わたくしはこれまで、どこといていて好い所というものがございませんでした。

「喜助を役場につきだしたのは、かれの行為が村の掟を破犯するものだったからである。かれはその村からも追放されたのである。このために、喜助にはもはや帰るところがどこにもなくなったのである。だから、かれはどこにも居場所がないと述べ、島送りという強制住居指定を受け入れたのではないか。」という解釈をしている竹内(二〇〇五)の論文がある。

竹内によると、これらの言葉が町奉行に向けられたものとして読むと、それは皮肉をふくんでいるということができるといえる。

この二百文を島でする仕事の元手にしようと思しんでおります。

「いかにも楽しそう、もし役人に対する気がなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしように思われ」る態度

をしていた原因は、国から貰った二百文島で新しい仕事を始められるからであるからだ、とここで喜助によって明かされる。

聞くごとあまりに意表に出たので、これも、しばらく何も言うことができずに、考え込んで黙っていた。

あまりに意表に出た、ということは自分のこれまでの経験では喜助のような境遇の人物の話聞いたことがないということが予想される。下層に生きる人間の心情や暮らしを知り、驚いている。

初老に手の届く年になっていて、もう女房に子共を四人も生ませている。

弟と二人暮らしだった身寄りのない喜助とは違い、家族がいる。

何者かわからぬ喜助の言葉を受け止めるのは、生活に疲れ人生に悟りを開きつつある初老の庄兵衛である。人生をそれなりに経験してきた庄兵衛だからこそ、喜助に興味を持ち、また、喜助に自分にもないものを持っていると思ひ込んだ。

それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。

「ようよう」とはかろうじて、やっと、という意味でとる。

一生懸命働いて、日々の生活を最低限の水準で生きているだけで満足できるという喜助の価値観が分かる。また、そのことが他の罪人との違いを生み出している。また、庄兵衛が喜助という人物に興味を持った理由も、この喜助の価値観を自分と比べてみたからであると考えられる。

しかるに、そこに満足を感じたことはほとんどない。

しかるに、というのはそれなのという意味であり、たいてい出納のあつている、手一杯の生活を送っているのに、ということである。つまり、ここでは、手一杯の生活（余裕のない）生をプラスにとらえていると考えることができる。

「そこ」というのはそんな生活のことであり、そこに満足を感じたことは「ほとんど」ないと思つている。ここでの「満足」とは、これ以上を求める気持ちを持たないことと解釈する。また、「ほとんどない」とあるので、最低でも一度は満足したことがある、と考えられる。つまり、今の暮らしに不満は持つていないが、大満足をしている訳ではなく、その時々には満足だが、ふとした時に不安を感じるという気持ちを表していると考えられる。

常は幸いとも不幸とも感ぜず<sup>レ</sup>に過<sup>レ</sup>している。

今の暮らしを幸せだとは思つていないが、不幸せだとも思つていない。惰性で生きていけると言えるかもしれない。しかし、無職になることや病氣への漠然とした不安を抱いている。しかし、喜助からみれば庄兵衛は十分に幸せな暮らしをしているといえる。

しかしそれはうそである。

この一文を境に庄兵衛の違いについての仮説がはっきりと否定されている。「それ」とは喜助に身寄りがないので彼が満足を知っているということである。庄兵衛はそれを否定し、より根底にある喜助との違いを発見しようとするが、この後に庄兵衛はその答えを見つけないに至っていない。この一文は庄兵衛が喜助との違いについて悩んでいるこ

とが顕著に現れた一文だと考えられる。

このとき庄兵衛は、空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思った。

今まで不思議に思つていた喜助の他の罪人との違うように感じられる異質性が「毫光」で表される。「毫光」とは仏の眉間から放たれる光であるので、非常に尊いもの、神々しいもの、敬うべきものと読み取ることができる。喜助の欲の無さという異質性をそのように捉え彼に對し神秘的な尊敬の念を感じている。

「空を仰いでいる」という行為に對しては、罪人が許しを乞うような、悲しみや途方に暮れたような行動として捉えるならば、「毫光」という言葉との対照性・ギャップがある。一方、悟りを開いたようなすがすがしいような行動とするならば神らしいイメージで捉えることができ、「毫光」という単語との統一性がある。

庄兵衛は、今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。

「今さらのように」の意味は、まるで今初めてあるかのように、改めてという意味である。

庄兵衛は今までずっと船の上で喜助をみていたが、「欲を踏みとどまる」という一般の人間にはできないことをしている喜助のすごさを感じ、仏のようという尊敬の念まで抱き、改めて喜助をみた。「驚異の目をみはつて」からは、庄兵衛の静かだが、隠しきれない驚きと衝撃がと見とれる。

今度は「さん」といったが、これは十分の意識を持つて呼称を改めたわ

けではない。

喜助の姿をみて「さん」と言わなければならないと思ったが、自分の役職や立場を考えていなかった。この部分が十分の意識を表している。

はじめは喜助のことをただの罪人としか思っていなかったが、その言動を見ているうちにだんだんと「不思議な人」ひいては「うらやましい存在」（「毫光が差すように思った」から）というように変わっていき、喜助への認識が良い方向へ変わっている。その過程で、「さん」と呼んでしまふに至ったということが表れている。また、「十分の意識」について、これは庄兵衛の自分の役割に対する認識であり、それが足りずに「さん」をつけることになったと読む。これで、後の分との整合性があるように捉えられる。

その声が我が口から出て、我が耳に入るやいなや、庄兵衛はこの呼称の不穏当なのに気がついたが今更既に出た言葉を取り返すこともできなかった。

声は無意識に近い状態で発せられた。自分が発した言葉ではないように感じる。

「我が口から出て、我が耳に入るやいなや」：他人事のようなのである。普通は考えてから口に出すはずである。

「さん」という言葉ではなく「声」としてあるところから、「喜助さん」という呼び方が無意識に近い状態で発せられたものである、あるいは他人の発したものであるかのように感じられたのではないか。「さん」と言ったことに気付いて初めて庄兵衛は喜助に対する認識が変わりつつあることに気付く。「今更既に出た」という表現から、言い直す

ことは可能であるが言い直してないので、「さん」を付けることが適当であると思っている。社会的身分という点だけが不穏当に感じられるのではないか。「言葉を取り返す」という表現は、「取り戻す」ではない。言葉は発せられてしない、自分のものではなくなっていることがわかる。

すると弟の目の色がからりと変わって、晴れやかに、さもうれしそうになりました。

・この場面では、目が口とほぼ同じ役割を担っている。早く殺して欲しいという気持ちを、喜助の弟は言葉よりも目で伝えているのである。喜助が弟ののどに刺さっている剃刀を抜いてやると言った時には、それまでの恨めしそう・憎々しい目から晴れやか・さも嬉しそうな目になった。目の色が変わった時の表現「からり」は洗濯物がからりと乾く、というように乾燥した、さっぱりしたイメージを抱かせる。喜助は目の色が変わったことをプラスにとらえていると考えられる。

また、「さも」という表現は「さも悪気がなかったように」等、悪意が無かったことを正統化する時に多く使われるイメージがある。このことや、文末の「なりました」という喜助視点の表現から、実は弟殺しは喜助の悲願で、庄兵衛に語った話はすべて作り話なのではないかと邪推もできる。

・「さも」という言葉は「いかにも」「みるからに」「実に」という言葉に置き換えられる。このことから、弟は「誰が見てもすぐわかるぐらいの分かりやすさで表情を変えた」「ただ『嬉しそう』」になったのではなく、「ものすごく『嬉しそう』」になったことが読み取れる。

この二つの解釈は対立している。「悪意が無かったことを正統化する時に多く使われる」「弟殺しは喜助の悲願」であり「庄兵衛に語った話はずべて作り話」とする解釈と、弟は「ものすごく、嬉しそう」になった」と解釈するものがある。喜助の心情をどう読みとるか、この「さもうれしそうになりました」という表現で解釈が分かれる。

もうだいぶ家のなかが暗くなっていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのかわかりませんが、ばあさんはあつと言ったきり、表口をあげ放しにしておいて駆け出してしまいました。

この事件の目撃者である「ばあさん」は、死んだあとの様子しか目撃していない。

この「弟殺し」の事件の本当のところはどうであったか。喜助は罪を犯していない、初めから弟は死んでいた、冤罪であるということも考えられる。一方、意図的に殺したことを、自分に罪が無いように話を作りかえているとも考えられる

わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、真直に抜こうというだけの用心はいたしました。

喜助の言葉からは「手早く」「真直に」という表現が印象に残る。喜助は弟を殺してやろうという意思があったのかは定かではない、と解釈できる。喜助は自分は弟を殺していないと、自己弁明をしているのではないか。

どうも抜いた時の手応は、今まで切れていなかった所を切ったように思われました。

「どうも抜いた時の手応は」という言い方は喜助にとって弟が死んだ理由ははっきりしない、ということがわかる。喜助によると「今まで切れていなかった所を切った」ようだということになる。

ほとんど条理がたちすぎているといってもいいくらいである。

この一文は、唯一喜助の証言を疑っているものだ。この一文があることで、読者は今までの喜助の話が作り話かもしれないという疑問を抱かされる。しかし、反対にこの一文をあえて挿入し、その後弁解するというところで読者が疑問を抱くことを防ぐ役割を果たしている可能性もあるという解釈もある。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。

「いろいろに考えてみた末に」「自分よりも上のものの判断に任すほかない」という結論に至ったのは、役人として初老まで働いてきた庄兵衛の賢い生き方、波風を立てない思考のパターンによるものである。喜助をきっかけに、考えはしたものの、行動に移すほどこれまでの人生を棒に振ることはできないでいる。

ここで「オオトリテエ」という表現が使われたのはなぜか。庄兵衛の生きた時代には無いことばである。

庄兵衛はお奉行の判断を、そのまま自分の判断にしようと思ったのである。

庄兵衛が喜助の罪に対しての考えを放棄しようとしている。しかし、

結局お奉行様の判断は「弟殺し・島流し」であるために、庄兵衛には腑に落ちないものが残ってしまう。

人殺しには違いないという判断が変わることはないが、庄兵衛はそのまま自分の判断にしていることから、罪かどうか悩んでいても結局は罪なのである。

どうすることもできないという結論がこの一文に隠れているようにも思える。

**次第にふけていくおぼる夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった。**

ぼんやりとした夜がだんだんとふけていく。庄兵衛と喜助はそれぞれ考え込んでいたので、二人は話すこともなくお互い黙っている。「黒い水の面」は、夜だから黒く見えるということと、庄兵衛は喜助のことが腑に落ちず、心が晴れやかでないということが分かる。おぼる夜も、もやもやとした心を表している。「滑っていく」は、よりゆっくりしている様子、静かな様子。ほかの生き物がいる気配がしない、また、風などの自然現象が起こっていない様子。「沈黙の人二人」という表現で視線が船の上空（または遠く）になったことがわかる。

### 三 考察

これまで議論されてきた三つの主題について、本文を引用する。また、それぞれの主題について述べられてきた論を紹介する。

#### (一) 主題について

(ア) 足ることを知る  
「足ることを知る」という言葉は、喜助の楽しそうな姿をみて庄兵衛の観察により語られた言葉である。以下が該当する本文の箇所である。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかしいかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

「足ることを知る」の主題を考える上で、東洋思想、特に『老子』を視野にいれてもいいのではないかと主張もある。また、鷗外が大正四年の師走に、一切の公職から身を引こうと決心した時に『高瀬舟』として表出したのではないかと指摘もある。

喜助の本心はどうか、ということを考えて、弟との関係性が喜助にとつては絶対であり、それ以外の者には自分たちの苦は理解されないとしてお上やお奉行、庄兵衛にたいして「皮肉」を言っている、と解釈することができる。

#### (イ) 安楽死

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いているが、これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた時から起こって来て、聞いてしまっても、その疑いを解くことができなかつた。弟は剃刀を

抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言った。それを抜いてやって死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと言つたのは、苦しさに耐えなかつたからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかつた。苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思うと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

「苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。」という言葉は、弟殺しの罰を受けることになつた喜助の告白、証言を聞いて庄兵衛により語られた言葉である。「しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい」のは、本当なのか。喜助には初め医者を呼ぶという選択肢もあつたということも確認したい。

また、「安楽死」という主題は、小説の内容を読む行為である。「安楽死」を主題としたとき、小説作品そのものをよむというより、「安楽死」という問題を議論するということに重きが置かれていく授業となるだろう。

(ウ) オオトリテエ

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこ

やらに腑に落ちぬものが残つているので、なんだかお奉行様に聞いてみたくてならなかつた。

「オオトリテエ」という社会批判の主題に関しては、篠原(二〇一)は「オオトリテエ」という言葉を「庄兵衛の心中表現」としている。一方、夏目(一九九四)は、この「オオトリテエ」について「寛政期の人間が使うはずのない言葉が使われている」として、「近代小説確立以前の、作者と語り手と、明確に分化されていないことの一つの表れ」として考えたいとしている。

ここで、「オオトリテエ」という言葉は誰の言葉なのか、なぜこの言葉が使われたのかという《語り手》の問題を考える必要がある。

## (二) 《語り手》への着目と解釈の変化

斎藤(二〇〇九)による自由の森学園の高校二年生の授業記録を基に考察を行いたい。斎藤は、「何が書かれているか」ではなく、「どう書かれているか」に着目し、「高瀬舟」の空間の持つ意味、《語り手》と登場人物の関係性を読むと小説の見え方そのものが変わってくる、と主張している。

I 《語り手》は、「高瀬舟」という空間をどのように描いているか  
II 《語り手》は庄兵衛と喜助をどのような人間として描いているか。

III 喜助の話聞く前と後で、庄兵衛の変化はどう語られているか  
IV 鎖国している江戸時代の話に、「オオトリテエ」などというフランス語が持ち込まれているのはなぜだろうか。

「喜助に対する庄兵衛の認識のありようを問う」というねらいで行われた授業で行われた議論を取り上げ、生徒の解釈が対立していく様子について考察する。傍線部は小山によるものである。

T 喜助の話を庄兵衛は聞いて、喜助を「足ることを知っている」人、「欲のない」人、あるいは「踏み止まってみせてくれる」人として、仏様のように思っている。これに関してはいいね。でも喜助の話を庄兵衛をおさずに、ぼくらの目から見るとどうだろう。喜助の発言から、どんな感じを受ける？

中略

S なんでおれだけがこんなに苦しまなければならないのか、と言っているようにも見える。

S 喜助は自分に対して納得させて生きようと思っているのかな。

T という読み方をどう思う？

S ちよつとわからない。

S いやわかるよ。

S 読みようによっては、お上に対する批判とも。

S でも喜助は自分の思っていることを自然にしゃべっているよね。

S それはそうだと思うよ。

S いや、皮肉を言っているのだけれど、庄兵衛はそれを理解していないということだと思う。

S いや、と言うよりも、この時代の社会構造の底辺にいた喜助が、全然意識はしていないけれども、思ったことを自然にしゃべると、お上や庄兵衛に対する批判とも読める言葉が無意識に出てくるとい

うことでは。

S 意識してないかなあ。

S 全然意識してないと思うよ。喜助はもともと、自分はこんなに一生懸命働いているのに、なぜこんなに苦しいのか…、という気持ちで底辺にあつて、それが浮かび上がってくるのだと思う。皮肉を意識的に言うほどの強さはないと思う。

S そうかも。

T みんな今問題になっていることわかる？どちらの意見とも、この喜助の言葉が聞きようによっては皮肉に聞こえるということは共通している…、お上とか庄兵衛に対する皮肉とも読める、ただ一方は皮肉としては話していないという読み…。

S そう。そうした生活をしてきたから、どうしてもそういう言葉が出てくるだけ。

T で、一方は意識的に庄兵衛を追い詰めているように読めると。

S そう読んだ方が喜助が人間くさくみえるし、おもしろい。

T おもしろいかどうかではなくて、この文章からどう読めるかということ。でもここが意識的かどうかというのは、この場面だけではなくて文章全体で考える必要があるね。このあと喜助の弟殺しの話もあるし。ただここで確認できるのは喜助の話は聞きようによっては皮肉に聞こえる内容をもつていて、ところが庄兵衛は？

S 庄兵衛にはこのことが見えない。

T 見えていないのに喜助のことを理解したと思っている。

T 人間ってほかの人間のことを、表面的なところで理解したつもちになつてしまふんだよね。深層の部分が見えていない。

S 喜助の話がやたら丁寧なのは どうしてだろう？



- S そういう時代だったんじゃない。
- S おれの読み方からすると、それ自体が皮肉なんだけど…。
- S お上の処置に納得しないと生きていけないのだから、納得しているようなもの言いになってくるのでは？
- T 喜助は半年取り調べを受けていると書いてあったでしょ。そういう取り調べを続けていると…。
- S 取り調べに対して答えているような言葉遣いになってしまふ。
- S でもそれは、自分がなんとか生きていく知恵でもあるでしょ。
- T 自分自身をそうした権力構造に慣らししていくようになったと。
- S 庄兵衛は役人の一番下だから、本当は喜助の話の深いところに気づく可能性をもっていたはずなんだけど…、庄兵衛自身も下の者の厳しさがわかると思うし。
- T しかも奉行所とは違う「高瀬舟」という空間の中…
- S でもさ、ここでの庄兵衛は自分が役人であるということをはほとんど忘れかけているでしょ。喜助に話しかけたり、あとでは「喜助さん」なんて「さん」をつけたりさ…。
- S そういうところから見ても見えない。
- S だからこそ見えないともいえるべきなのでは。
- T そうだね。
- S そうして何か隠されてしまふ。
- S 喜助がそうして包み込まれてしまっている。囲い込まれてしまっている空間というのは、現代でもそういう権力の流れているのは変わらないと思う。人間が生活していくうえでどうしても生じてしまう。そういうところを自分たちの生活とたぶって見えてくるというのはいすごい…。

T この小説ってすごいと思う。語りの方法を読むと、喜助の話を庄兵衛がどう聞いたかということが問題になり、そこから庄兵衛の認識のあり方が問題になり、しかもそうした庄兵衛のもっている問題点は、ぼくらがみんなもっている問題点だといふ…。

S 最初読んだときにはウチらはそうは読めなかった。喜助のことを庄兵衛が表面的にしか読めなかったように、庄兵衛のことをウチら読者は表面的にしか読んでいないということだよ。そういうことも含めて、深く読んだ時にもっと見えてくるものがある。

斎藤の主張する《語り手》への着目は、語られた内容を絶対的なものとして受け入れるのではなく、語られた内容が本当かということと疑う視点を生徒に与えた。その結果喜助の言述は皮肉ではないか、という解釈が生まれた。

「喜助の話がやたら丁寧」なこと「おれの読み方からすると、それが皮肉なんだけど…」と主張しているということは、喜助の丁寧な言葉使いと本心がかけ離れている、あえて批判的な内容の言述を丁寧な言葉で厭味つたらしくいっているという解釈をしていることがわかる。

この生徒の主張から考えられるのは、「喜助はにっこり笑った。」という丁寧な態度、「親切におっしゃってください、ありがとうございます。」という前置きから喜助の話が始まり、そして「これまで私的いたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなからうと存じます。」と自分の身の上話を淡々と語る喜助に対してひっかかりを覚えた、ということだ。

この喜助の言葉を「皮肉」であると解釈した生徒は、自身の生活経

験で、嫌味をあえて相手にすぐにはわからないよう、丁寧なことばでいった経験があるのかもしれない。特に、本心をそのまま言えないような状況、例えば立場が上の人に対して、自分の理解してもらえない苦しさを自嘲的に話すような経験があったのかもしれない。そのような経験をしてきた場合と、無かった場合ではこの「皮肉」という解釈を理解できるかできないか、意見が分かれてくる。

生活体験が、登場人物の態度、会話表現の解釈に影響を与えている。この授業では、語りに着目させることで、喜助の直接話法の語りとその内容を読んで、小説の語られた内容をそのまま鵜呑みにするのでなく、自分の思考や生活体験と照らし合わせて登場人物の心情を捉えるきっかけを得ることができている。

このような「喜助の言述は皮肉」という読みについては、竹内(1990)も言及している。

「喜助の語りは、その内部に矛盾をはらみ、かならずしも意味的に統一していると思われぬ」、「外部からの有罪の裁きは拒否しても、自分のからだの側からは自分の行為を有罪と認め、それをすすんで受け入れている」と述べたうえで、喜助が現在「いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている」こと、「その額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある」こと、「喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、…口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしうに思われた」ことの理由が以下の三点にまとめられるとしている。

- 1、死罪ではなく遠島に処せられたので弟の献身的な行為によって与えられた生をまっとうできる
- 2、自ら進んで受け入れた罪を遠島という罰で償える

3、だれかを犠牲にしなければ自分が生きられない「苦」から解放され、二百文を元手として島で仕事をする事ができる

これは、喜助の心情に迫ろうとするもので、喜助の心情に迫り解釈を行うことで作品をより深く面白く読むことができる。

もちろん、小説本文を忠実に読まなくてはならないという主張、生徒が作品を生活体験で塗り替えるという行為を批判的にみる意見もある。しかし、今回の『高瀬舟』の「喜助の言述は皮肉に聞こえる」という生徒の読みに着目し、教材研究を進めるうちにわたし自身『高瀬舟』をより深く解釈していくことができた。解釈を交流するときに注意しなくてはいけないのは、その解釈がどこを、何を根拠にしているかということを明らかにすることである。そこを徹底しなくては、その解釈を交流し合うことができない。「喜助の言述は皮肉」とした生徒の解釈が教室で共有されなかったのは、なぜその生徒がそう読んだのが明確にならなかったからである。教師は生徒の解釈について丁寧に扱い、追求する姿勢が必要である。

《語り手》に着目した教材研究では、《語り手》が誰かに寄り添って語っていた場合、その視点から離れて解釈することができるので、解釈は多義的になる。《語り手》に着目することで、登場人物の心情により迫って、自分の解釈を考えるきっかけを与えることができる。

しかしながら、《語り手》が小説世界でどういう役割をしているのかということをも十分に分析してからでないと、安易に授業に取り入れると混乱を招くことも予想される。

## 参考文献

- 出原隆俊、「高瀬舟」異説、『森鷗外研究』、森鷗外研究会、一九九九
- 小田島本有、「疑問の行方―森鷗外『高瀬舟』論―」、『釧路工業高等専門学校紀要』、釧路工業高等専門学校、二〇〇四
- 斎藤知也、『教室でひらかれる〈語り〉―文学教育の根拠を求めて』、教育出版、二〇〇九
- 篠原武志、「教室という場の「高瀬舟」―「オオトリテエ」の受け取り方を中心に―」、『同志社国文学』、同志社大学文学会、二〇一一
- 竹内常一、「〈再審の場〉としての「高瀬舟」」、田中実・須貝千里編、『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 1、『右文書院』、一九九九
- 竹内常一、『読むことの教育―高瀬舟、少年の日の思い出』、山吹書店、二〇〇五
- 檀原みずす、「高瀬舟」、『国文学 解釈と鑑賞』、五七（一一）、至文堂、一九九二、一一九―一二二頁
- 夏目武子、「森鷗外 『高瀬舟』の印象の追跡 文教研秋季集会の記録 “読み”の楽しさ・むずかしさ―文体との出会い」、『文学と教育』、文学教育研究者集団、一九九四
- 藤本千鶴子、「歴史小説の課題」、『国文学 解釈と鑑賞 一月臨時創刊号 森鷗外の断層的撮影像』一九八四

## 故郷（魯迅）

市川 奈央子、片岡 文、田中 麻佑子、辻 友葵



### 一 作者と作品について

魯迅（一八八一〜一九三六）は中国の小説家、翻訳家、思想家である。「阿Q正伝」、「狂人日記」などの作品がある。一九〇四年から一九〇六年まで仙台医学専門学校に留学している。

魯迅は、友人に小説の執筆を勧められたことを『呐喊』の自序に記述している。

たとえば一間の鉄部屋があつて、どこにも窓がなく、どうしても壊すことができないで、内に大勢熟睡しているとすると、久しからずして皆悶死（もんし）するだろうが、彼らは昏睡から死滅に入つて死の悲哀を感じない。現在君が大声をあげて喚び起すと、目の覚めかかった幾人は驚き立つてあろうが、この不幸なる少数者は救い戻しようのない臨終の苦しみを受けるのである。君はそれでも彼らを起し得たと思うのか。

「故郷」は、一九二二年に『新青年』に発表された。その後、『呐喊』に収録された。日本では、中学三年用国語教科書の五社すべてに採用されている。国語教科書では竹内好訳の「故郷」が採用されている。

### 二 叙述について

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。

「わたしは」という主語が文末の方にあることで、「故郷へ」が強調されている。また、「厳しい寒さ」から季節は冬であることがわかる。

そのうえ、故郷へ近づくにつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音をたてて、船の中まで吹き込んできた。

船に乗って故郷まで来ていることから、今住んでいる場所と故郷がとても離れていることがわかる。また、今現在わたしは船の上にいる。

苦のすきまから外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。

「鉛色の空」「わびしい村々」といった表現から故郷の様子がよいものではないことがわかる。「横たわっていた」というところからも故郷のぐったりと、すさんだ様子が伝わってくる。

覚えず寂寥の感が胸にこみあげてきた。

「寂寥」は心が満ち足りず、もの寂しいこと。

「覚えず」という表現からわたしが無意識のうち、知らず知らずもの寂しいという思いがこみあげてきていることがわかる。

その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。

考えていることや昔の記憶と、現実の差が大きいと考えられるが、「その影はかき消され」という表現から、昔の美しかった故郷の姿を思い出すことができなくなってしまったとも考えられる。

どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

引っ越すことは不本意であり、現在わたしは異郷の地に住んでいることがわかる。

一緒に住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまっただとらしく、ひっそり閑としている。

一緒に住んでいた親戚がいたことから、この家が大きな家であることがわかる。その反動で、今の空間的な寂しさを表現している。

母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。

「やるせない」は、どうしようもない、せつない、気持ちに余裕がないという意味。

息子が久しぶりに帰ってきたことによる機嫌のよさだと思われる。しかし、さすがに家を手放さなければならぬような経済状況、暮ら

しぶりにはどうしようもなくせつないという感情を隠すことはできなかった。

わたしを座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引越しの話は持ち出さない。

母はわたしに対して、客のような扱いをしている。久しぶりに会ったからかと思われる。甥の宏児は八歳であるため、二十年ぶりに故郷に帰ってきたわたしとは初対面である。

また、引っ越しの話を切り出すのをしぶっている。明るい話題ではなく、暗い話だからである。

そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、わたしは坊っちゃんでいられた。

今は「坊っちゃん」ではいられない。暮らし向きも楽ではない。「いられた」という表現から苦勞を知らなかった子供のころを思い出している。また、「父もまだ生きていたし」という表現から、家の経済状況が悪くなった一因に父の他界があるのではないかと考えられる。

ルントーはまた言うのだった。

このころのルントーは身分の差など気にしていなかったためか、非常に饒舌である。心を開いていることもわかる。

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまでわたしは思ってもみなかった。

ルントーにとっては日常の当たり前前のことであるが、わたしにとっ

てはそれらがすべて珍しいことである。わたしとルントーの育ってきた環境の違いがよくわかる。

ああ、ルントーは心の神秘の宝庫で、わたしの遊び仲間とは大違いだ。ルントーはただの友達ではない。特別な友達である。しかし、その違いが、育ってきた環境の違いであることに、私はまだ気づいていないのではないか。

また、ルントーはお金を使う遊びではなく、住んでいる環境から自然の中で様々なことを学ぶ心を持っており、その経験をする自由がある。それとは対照的に、わたしは周りの友達も裕福であるため、ルントーとの「遊び」の概念さえもが違っている。

ルントーが海辺にいる時、彼らはわたしと同様、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

「彼ら」とは当時のわたしの「遊び仲間」。

ルントーの眺める空が海辺の広い空であるのとは対照的にわたしや友達の間を眺める空は囲まれた四角い限られた空である。二つの空を比較することでルントーとわたしや友達の違いを明らかにしている。ここでは裕福な環境ではなく、自由な環境を比べている。

別れがつかなくて、わたしは声をあげて泣いた。

わたしとルントーが一緒に過ごしたのは正月のわずかな間だけである。しかし、わたしにとってのルントーの思い出は時間とは比例せずはかり知れないほど濃いものであり、その分だけルントーとの別れが辛かったことが読み取れる。

わたしはやっと美しい故郷を見た思いがした。

故郷を二十年ぶりに見たときは、美しい故郷の長所を言葉にできなかったが、ルントーとの思い出がよみがえったときにやっと美しい故郷を思い出した。つまり、わたしにとっては「故郷＝ルントー」だと考えられる。

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やして。」

ひげを「立派になって」とは表現せず、「こんなに」と表現することで、皮肉、嫌味を伝えている。

わたしはドキンとした。

相手は自分のこと知っているにも関わらず、わたしはその女性が誰なのか全くわかっていない。

ところがコンパスのほうでは、それがいかにも不服らしく、さげすむような表情を見せた。

呼称までもが「コンパス」となっている。これは容姿だけでなく、目の前にいる女性が「コンパス」という金属的な鋭利な道具のイメージにぴったりであったため、心の中でそう呼んだのだと思われる。

わたしは感激で胸がいつぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、「ああ、閨ちゃん——よく来たね……。」

三十年ぶりに再会できたうれしさ、感動があったが、久しぶりすぎるため、またルントーが変わってしまったため、何から話してよ

いかわからずにいる様子である。四十歳近くになってはいるが、昔の呼び方を用いている。しかし、これは何かを意図してでた言葉ではなく、自然と口に出た言葉であると思われる。

角鶏、跳ね魚、貝殻、猿……だがそれらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆けめぐるだけで、口からは出なかった。

思い出すことはたくさんあるが、次から次へ思い出の単語ばかりが出てきて、文章にならない様子である。なぜ口から出ないのかは自分でもわかっていない。

「だんな様！……。」

昔の呼び方を用いたわたしとは異なり、現在の関係から「だんな様」と呼んでいる。ルントーは子どもどきとは違い、自分の差を理解しているため、昔と同じように接することができないでいる。

わたしは身震いしたらしかった。

「らしい」とは推定の助動詞で、自分で自分のことがはっきりわかっていない様子を表している。それほど、ルントーの発言に対して衝撃を受けている。

悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。

「悲しむべき厚い壁」とはわたしとルントーの間にある身分の差。わたしは昔のように接したいが、ルントーが身分を気にするため、できないでいる。

昔のように、迅ちゃん、でいいんだよ。」と母は、うれしそうに言った。

わたしとルントーの、身分の差を気にするために昔のように会話ができいない様子と裏腹に、母は心底二人の再会を喜んでいる。また、母もわたしと同じようにルントーとの身分の差などは気にしていないようである。

言われて宏児は、水生を誘い、水生もうれしそうに、そろって出ていった。

水生は恥ずかしがりながらもうれしそうである。同世代の子どもに誘われて素直に喜んでいる。また、宏児と水生の姿は昔のわたしとルントーの姿と重ねることができ、昔と現在の二人の関係の違いを強調している。

苦しみを感じはしても、それを言い表すべがないように、しばらく沈黙し、それからきせるを取り上げて、黙々とたばこをふかした。

苦しい生活を強いられることがわかる。苦しみが大きすぎて、言葉にできない、あるいはもう文句や不平を言うことにあきらめを感じている。

母は、持っていかなぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、とわたしに言った。

売ってお金にすると決めていた物までルントーにあげようと母は考えている。ルントーが苦しい生活を送っていたということ、また近所の人との関係とは異なり、わたしや母にとってルントーは特別な存在であることがわかる。

「おじさん、ぼくたち、いつ帰ってくるの?」

幼い宏児は今回の離郷の理由をはっきりと理解していない。またいつかこの故郷に戻ってこられると考えていると思われる。

「だって、水生がぼくに、家へ遊びに来たって。」

かつてわたしもルントーから自分の土地に来るように誘われていた。このような些細なことからも、かつてのわたしとルントーの関係を宏児と水生の關係に重ねている。

わたしも、わたしの母も、はっと胸をつかれた。

宏児の発言から、彼らもわたしとルントーのような悲しい体験をするのではないかと心配している。また、子どもの純粋な質問に対してどう答えてよいのかわからず、少し困惑している。

自分の周りに目に見えぬ高い壁があつて、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。

目に見えぬ高い壁は身分の差のことを指している。「自分だけ取り残されたように」とは、故郷から二十年も離れていたため、その間の時間の経過により変化してしまつた人たちと自分がずれてしまつて取り残されたように感じていることを指している。

希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。

「新しい生活」とはすべての国民が平等で、みなが自立し、封建制から抜け出した自由な生活のこと。

たしか閩土が香炉と燭台を所望した時、わたしはあい変わらずの偶像崇拜だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑つたものだが、今わたしのいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。

ルントーの偶像崇拜を小馬鹿にしていたが、自分が願っていることも「希望」であるとしているだけで、現在とはかけ離れた考え方をしている。この行為がルントーの偶像崇拜となら変わりのないことに気付いた。

ただ彼の望むものはすぐ手に入り、わたしの望むものは手に入りにくいだけだ。

ルントーが望んでいるものは安定した生活で、お金が手に入れば解決することができる。それに対し、わたしの望むものはみな「新しい生活」をもつことであり、そう簡単には手に入らない。

### 三 考察

#### (一) 魯迅の時代背景から見る「故郷」

作品に描かれた主人公「わたし」の故郷の没落、そして退去は、魯迅本人の経験がもととなっている。

魯迅は一八八一年、浙江省紹興府の読書人(昔中国で、学問を積み、科挙を受けて官になった人)の家に生まれた。幼少の頃には暮し向きは豊かだった。けれどもその祖父が一八九三年(魯迅が十三歳のとき)に収賄事件を起こして入獄となつてしまった。さらに父が病気を患つ



て周一家は急速に没落した。そのため魯迅は質屋と薬屋の往復に三年間費やし、その薬代の為に家財はほとんど失われてしまった。けれどもそれもむなしく父は没した。これらは「故郷」が収録されている『呐喊』の自序に書かれている。また本文の「そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、わたしは坊っちゃんでいられた。」の部分とも一致する。

その後、魯迅は家を出て南京に出て官立の学校に入学、そして卒業後留学生試験に合格した。この頃、日清戦争、戊戌の変法、義和団事件などが続き、中国は半植民地化されていた。一九〇二年、二二歳の周樹人は弱体化する中国には革命が必要であるとして、留学先を日本に決めた。そして一九〇九年、七年間の日本留学を追い、帰国した彼を待っていたのは彼に頼るより他に方法の無い困窮した「家」であった。

そして一九一一年、辛亥革命がおこった。けれども、一九一二年三月、つまり中華民国の政権が孫文（一八六六〜一九二五年）から袁世凱（一八五九〜一九一六年）に移ってからは、政局は首都南京ではなく袁世凱の拠点である北京に向けられるなど、袁世凱の専政が続いた。このような時代背景の下、魯迅が数々の革命運動を起こしていった。最初に起こした革命運動は、処女作を白話文学として『新青年』に発表したことである。これが一九一八年発表の『狂人日記』だ。『狂人日記』は、狂人が書いた日記という体裁で、古来の儒教道徳、封建体制を鋭く批判したものである。こうして中国国民に、現在の中国政府のあり方を訴えていた。

これらの時代背景を見ると、主人公である「わたし」は魯迅の経験を中心に描かれていることがわかる。またこの作品は単なる幼馴染との

再会・別れを描いたものではなく、当時の中国行政へのメッセージであると考えられる。さまざまな登場人物にその思いを投影しながらも、中国国民へ、これまでの社会を見直し、希望をもって新しい社会を築いていくことを目指していくことを訴えかけた文章ではないか。だからこそこの作品の主題は「国民が希望をもつこと、自立した心を持ち平等な社会をつくっていくことを目指す」ものなのではないだろうか。

## （二）「希望」について

本文に次のようにある。

希望という考えが浮かんだので、わたしはどきつとした。たしかルントーが香炉と燭台を所望したとき、わたしは相変わらず偶像崇拜だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今、わたしのいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ彼の望むものはすぐ手に入り、わたしの望むものは手に入りにくいだけだ。

では、わたしの「望むもの」とルントーの「望むもの」とは何なのか。このことについて考えたい。

文中に「偶像崇拜」とあるが、「偶像崇拜」とは、神仏の姿を象った作りものを宗教的にあがめ、敬うこと。ルントーは「香炉と燭台」をほしがったが、「香炉と燭台」は神仏への祈りに使うものである。ルントーは生きる気力を失い、神仏に祈るしかなく、積極的な行動に出ようとは考えていなかった。しかし、希望を持たないまま何もせずに、ただ神仏に祈っているだけでは、現在の苦しい生活は変わらないので

ある。このような神仏の道具はわたしなど他の人に頼めば手に入れられる。つまり、ルントーの「望むもの」は神仏の道具であり、「すぐ手に入る」ものである。

わたしの「望むもの」＝「希望」は八行目く九行目の「希望をいえば、彼らは新しい生活を持たなくてはならない。わたしたちの経験しなかつた新しい生活を。」とあるように、「若い世代の新しい生活」である。確かにこのような「希望」は手に入りにくい、これも「手製の偶像」にすぎないのだろうか。

「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」とある。これは、「歩く人が多くなれば」というのは『努力すれば』ということである。

いろいろな人が道ではなくさまざまな所を歩くと、道はできない。つまりみんなが同じ道を歩くべきだということである。全ての人が同じ目標に向かってひたすら歩くと、道ができる。「故郷」（魯迅／竹内好訳）の教材解釈・門島伸佳より）多くの人々が同じ「希望」に向かって努力すれば、その「希望」は叶うであろうという意味と考えられる。つまり、わたしの「希望」は多くの人々とともに努力することで叶えられるものであり、自分ひとりの力では到底叶えられるものではない。その点でわたしの「希望」も「手製の偶像」にすぎないとしていえると考えられる。また、わたしの「希望」もただ願っているだけでは、諦めて何も行動しないルントーと同じになってしまうということを示している。



## 夢十夜（夏目漱石）

### 一 作者と作品について

夏目漱石（一八六七―一九一六）は、東京に生まれた時、すでに父が五〇歳、母が四一歳の高齢だったため、生後まもなく里子に出された。一八九五年に松山に旧制中学校の英語教師として赴任、翌年熊本に旧制第五高等学校の教師として赴任する。一九〇〇年より、イギリスで二年間の留学生生活を送った。

人間の心理を追求し、近代的人間の苦悩を描き続けた作家である。主な作品に『我輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『三四郎』『それから』『こころ』『道草』『明暗』などがある。

明治三八年に『ホトトギス（※1）』に「我輩は猫である」を発表した夏目漱石は、続く『坊ちゃん』『草枕』で余裕派・高踏派（※2）の作家として活躍した。作家活動中期となる明治四〇年頃は、文明批評を織り込みながら近代人の内面を描き、『三四郎』『それから』『門』の三部作を発表した。作家活動後期には、『行人』『こころ』『道草』などで人間のエゴイズムの問題を追及した。晩年は「則天去私（※3）」の境地から『明暗』を執筆したが、未完のままで没した。

「夢十夜」は、「国語総合」（高校一年生）の教材として採用されている。一九〇八年七月二五日から八月五日まで『朝日新聞』に掲載された。一九一〇年五月に春陽堂『四篇』に収められた。それぞれに独



岸 美位、小山 明里、前原 陽一、山本 舞

立した十夜の夢の話を、並べ方に工夫して一作品としている。夢には意識下の世界が様々な記号となって表れる特性がある。この特性を生かして、日本の近代を生きる人々の内面を、イメージ豊かに描いた暗喩的作品である。

#### ※1 『ホトトギス』

正岡子規が創刊した俳句雑誌。子規の没後は高浜虚子が編集にあたった。「我輩は猫である」「坊ちゃん」などの小説も掲載された。

#### ※2 余裕派・高踏派

余裕派は、正岡子規の写生文に始まるが、夏目漱石によって完成した。高踏派は、感情を抑制し、客観的な形象を表そうとした。余裕派・高踏派は、自然主義の作家たちと異なり、俗世間を超越した立場から社会を眺めようとした鷗外や漱石を指している。

#### ※3 則天去私

エゴ（我執）を去って、大きな自然の理法に従おうとする立場。

#### 参考文献

『完成 日本文学史ノート 改訂版』、京都書房、二〇〇六年

## 二 叙述について

## 「第一夜」

こんな夢を見た。

つぎの文から夢の内容が語られるとわかる。「自分」が夢を振り返って語る。「夢」と最初に断ることで、読者に現実ではありえないことであり、さらにその真偽はわからないという意識を持たせる。

腕組みをして枕もとに座っていると、あおむきに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。

物語のはじめに与えられる情報であるが、日常会話としては違和感が残る文章である。この時点では主人公と女の関係はどうか、主人公と女の年齢はどうか、時代や場所はどこかなどの情報は無い。腕組みをして病人の枕もとに座っていることから深い関係であることは予想できる。「腕組みをして」とあるが、腕組みは物事を思案している時に人間がよくとる動きであり、心理的には自己の防衛を表すと言われている。何か考え事をしているか緊張しているかは分からないが、座っているいきなり腕組みをするということはあまりないので、ある程度の時間が経っているということなのだろう。「あおむきに寝た女」がいることから、(主語こそないものの)主人公とその女の二人がいるということが分かる。あおむきといえば多くの場合休息時、就寝時とする自然な体位である。また、安静が必要な患者や被介助者にも適している体位でもあるため、「あおむきで寝た女」という言葉によって、その女が

就寝中である、または体調が良好な状態でない、ということが分かる。続く「静かな声でもう死にますと言う」という文により、少なくとも就寝中ではないということが分かるだろう(しかし作中に病气であるというような描写はないため、生物学的な“死”を表しているかどうかは不明である)。「静かな声で」とあるので静かな場所であること、女の体調が思わしくないというようにことが想像される。また、「もう死にますと言う」と現在形で終わっているのが臨場感を伴う。

場面として不可解な設定であるが、一気に日常を離れ、不可思議な、まさに“夢”の世界に入っていく一文であるといえよう。

女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。

「女は長い髪を枕に敷いて」とあるので、女の髪が長いことが分かる。さらに「その中に横たえている」と書かれているのが特徴的だ。「横たわる」は自動詞であるが、「横たえる」は他動詞である。「横たわる」という動詞を使う際は「その場に横たわる」というような言い方をする。「横たえる」という動詞を使う際は「ソファに体を横たえる」というような言い方、また「倒れた彼をその場に横たえる」というような言い方をする。つまり、「横たわる」よりも「横たえる」という動詞を使うことで「身を委ねる」というような意味、もしくは「自分以外の誰かにしてもらう」という意味合いが生まれてくるのだ。長い髪の女は、枕に身を委ねている、もしくは自分ではどうしようもなくただ横たわっているのである。瓜実顔といえれば色白でやや面長な顔のことであり、昔から美人の形容とされている。また輪郭の柔らかな、とあるので瘦せていて頬がこけているというようなこともないのだろう。

真つ白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇の色は無論赤い。

「真つ白な頬の底に温かい血の色が程よく差して」とあるので、健康的な様子であることが伺える。また「唇の色は赤い」と書かずに「唇の色は無論赤い」というように書かれているのも特徴的である。「無論」は「もちろん」「いうまでもなく」というような意味であるので、「唇が赤い」のは当たり前であり、顔色から伺えるということであろう。ここまできて「長い髪の女」が（おそらく）病気でないということが分かる。「もう死にます」という一文目の発言や、「横たえている」という二文目からは推測できない女の状態である。今までの文章からぼんやりながら想像出来ていた女の予想図が覆されるかたちになる。ここまで読んだ読者はさらに疑問を持つことになり、さらに不可思議な世界に巻き込まれていく。

どうてい死にそうには見えない。

「どうてい」とあり、自分はこの女の様子から、とても死ぬとは思えないことが分かる。

そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上からのぞき込むようにして聞いてみた。

「もう死にます」に対する主人公の返答は、もう一度確認を取るような言葉である。恋人関係であるならば、「まだ頑張れるよ」などの励ましを言うこともあると思うが、これでは子供を相手になだめているような声かけである。

大きな潤いのある眼で、長いまつげに包まれた中は、ただ一面に真つ黒であった。

「長いまつげに包まれた中は」「一面に真つ黒」、という言葉がやや人間ではないものを思わせる。白目がない様子だ。

それで、ねんごろに枕のそばへ口をつけて、死ぬんじやなかるうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。

「ねんごろ」は親切に、ではなく、「念入りに」という意味である。動けない病人を気遣って枕の傍へ口をつける。ここでやっと「大丈夫だろうね」と、女を心配する気持ちを表す。

すると女は黒い眼を眠そうにみはったまま、やっぱり静かな声で、でも死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

「みはる」は、「目を大きく見ひらく」という意味である。本文では「眠そうにみはったまま」とあり、目を開いてはいるがどこか眠そうにも感じられる。女は「死ぬんですもの、しかたがないわ」と言い、自分が死ぬことを分かっている、生きようとするのではなく、死は変えられないものでしかたがないとあきらめているようだ。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじやありませんかと、にこりと笑ってみせた。

「自分」のセリフと女のセリフに「」がなく、状況説明のための文であると考えられる。読者に印象づけたいセリフを「」にし、引き立たせるためにここでは使われていないようである。読点が多くついている、女がひと言ひと言間をあけてゆっくり確かめるように話している

る様子が感じられる。「一心に」から、「自分」の必死さが伝わる。女の瞳に「自分」の姿が写っているということだが、「そこに」という距離感があり、私の眼を通して写る女の瞳というようである。「にこりと笑ってみせた」から、もうすぐ死ぬとは思われない落ち着き、穏やかさを感じさせる。

腕組みをしながらどうしても死ぬのかなと思った。

自分は女が死ぬことがどうしても信じられないようである。腕組みをしていることから、考えている様子が伝わってくる。「どうしても」から、まだこの女が死ぬと言っていることに疑問を感じていることが分かる。

——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちてゆくうちに、——あなた、待っていられますか。

——の中の使われ方は様々あるが、ここでは直前の複数の文を書き換えたかたちである。つまりここだけで四文、日が昇り、日が沈むことを述べていることになる。——は文章の接続、言い換え、補足を表す。会話文の中で使われているので、女が口に出したのかもしれない。言い換える必要性、補足する必要性がなければ——を用いた文は不要である。つまり、この文は夏目漱石の明確な意思をもって入れられているのである。細かく文章を読んでいく。「赤い日が東から西へ、東から西へと」というように二回、太陽の動きについて述べられている。これは何度も何度もというように強調の意味合いであろう。考えたいのは次の「落ちてゆくうちに、」の部分である。「」とあるので後に続く何らかの言葉が省略されている。さらに、直前の三つの文の中で「日が

出る」と日の出に関する描写が見られるが、この——の中の句には日の出についての描写はない。このことから考えると、厳密な言い換えをしているわけでない、ということが分かるだろう。そのことから考えてみると、「落ちてゆくうちに、」は言い換えではなく、女の心情、発言の補足という意味合いが強いのではないだろうか。「」の後に続くであろう言葉は読者の想像に委ねるほかないが、女は一体何を考えていたのだろうか。

女は静かな調子を一段張り上げて、「百年待っていてください。」と思いついたと言った。

「静かな調子を一段張り上げて」ということから、女は静かな状態をあくまでもったまま、そこから今までよりも大きな声を出したということが分かる。張り上げるといふ言葉が使われているので、女は出来る限りの大きな声を出したのだろう。静かな調子という言葉と少し矛盾しているような気もするが、静かに寝ている状態の女が出せる声の限界に近い音量でという意味合いだろう。そして女は「百年待っていてください。」というかなり無茶な願いをする。実際に百年待てるとはとても思えないので（夢の世界であるので何でもありなのかもしれないが）、「百年と表現できるぐらい長い時間」という意味だろうか。女もいつか会いに来られるか定かでないからこのような言い方をしているのかもしれない。そして台詞の後に「と思いついた声で言った。」と書かれている。ここでの「思い切った」という言葉は「思い切りが良い」という意味で用いられているのだろう。言い換えるとすれば「迷いのない声」と言うことが出来る。

「百年（と思えるぐらい長い時間）待っていてください。」という無

茶な願いをすることが出来たのは、主人公に絶対的な信頼をおいていたからではないかと予想できる。死を看取るということですすでに女と主人公の関係はかなり親密なものであるということが伺えるが、この言葉で女と主人公が恋愛関係に近しいものであるということがさらに浮き上がってくる。

土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。

幻想的なイメージ。月の光の明るさを感じられる。貝の裏の質感が想像される。「すくう」からは、土の軟らかさと、貝の湾曲を引き立たせているようである。

掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

ここでも曇りのない月の明るさを感じられる。手ではなく、真珠貝を使って土を掛けている。「たびに」とあるので、常に月の光が差している。また「自分」は掛けるたびに貝の裏に注目している。

抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し温かくなった。

抱き上げた星の破片は、すこし温かかったのだろうか、もしくは、作業が終わったことで満足感が得られて、興奮し胸と体が温かくなったのだろうか。

これから百年の間、こうして待っているんだと考えながら、腕組みをして、丸い墓石を眺めていた。

百年の間、女を待つつもりであるとは思えないような口ぶりである。どちらかと言えば流されているようにも感じられる。ここでも腕組み

をしており、考えていることが分かる。「丸い墓石を眺めていた」とあるので、少し離れたところに座っていることが分かる。

そうして黙って沈んでしまった。

太陽は何も言わないので黙っているのは自然なことである。しかしここで「黙って」とあることから、「自分」は何らかの反応（女からの合図のようなもの）を期待していたとみえる。「しまった」から、日が沈むあつげなさが感じられる。

と思うと、すらりと、揺らぐ茎の頂に、こころもち首を傾けていた細長い一輪のつぼみが、ふつくと花弁を開いた。

「と思うと」から、時間の短さを感じられる。「すらりと」から、茎自体細くきれいな感じがする。また、「揺らぐ」「首を傾けている」「ふつくと」など細かい描写があり、「自分」が目の前の植物に手申していることがわかると共に、生命感を感じ取っている。

真っ白な百合が鼻の先で骨にこたえるほどにおった。

「骨にこたえるほど」というのは、吸った香りが骨まで深く感じるように染みるほど、という解釈だろうか。主人公にとってこの香りは強いこと、影響力があることを表している。

そこへはるかの前から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。

どこからの露だろうか、空か。花は儂くふらふらと揺れる。その儂さがより美しさを際立てる。自分の重みで、あることから花がかなり

大きいと予想できる。

自分は首を前へ出して、冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。

百合は胸の高さまで咲いているので、主人公は首を前に出している。潤った花卉は女の唇を思わせる。

自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

「顔を離す拍子に思わず」とあるので、意図的に遠い空を見たのではなく偶然目がいったようである。「遠い空」を見たのであるので、百合の向こうにある空を見たと考えられる。「暁」には、「①よあけ。あけがた。」という意味だけでなく、「②ある事柄が実現したそのとき。」という意味もある。単に夜明けの星と解釈するのではなく、女との再会を果たしたことを暗示するものとして「暁の星」と描いたのではないだろうか。百合、露、星という美しい世界が広がる。女の化身は、百合か、星かどちらか、またどちらでもないのか。

「百年はもう来ていたんだな。」とこのとき初めて気がついた。

百年が来ていた、ということは女が会いに来ていた。このとき気がついた、ということは花卉への接吻の時には女を意識していないことになる。

### 「第六夜」

ところが見ている者は、みんな自分と同じく、明治の人間である。

これまでに描写されていた護国寺の山門の風景、そしてそこで運慶が仁王を刻んでいる様子は、「なんとなく古風」であり、「鎌倉時代とも思われる」様子である。しかし、それを見ている者は「明治の人間」であるという。「明治」という、この物語の舞台を設定する言葉がここで始めて登場する。「明治の人間」という表現の意味は、「明治という時代に生まれた人間」という意味であろうか。こころの「明治の精神」という表現を思い出させる。

そのようすがいかにも古くさい。

「自分」が運慶の姿を批評している。明治の人間からしてどう考えても「古くさい」のであり、鎌倉時代の運慶との差を感じさせる。

わいわい言っている見物人とはまるでつり合いがとれていないようである。

見物人と運慶は「つり合いがとれていないよう」であり、運慶はまわりと調和がとれていない異質なものだと感じられる。

自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。

「今時分まで」とあり、自分は今まで運慶が生きているととらえている。しかし「どうして」とあり、このことに疑問も感じているようである。

しかし運慶のほうでは不思議とも奇態とも感じえないようすで一生涯懸命に彫っている。

「自分」のほうでは不思議で奇態だと思っている。「とんと」から、



全くそういう様子が見えない。周りのことに対して何も感じる事ができないほど彫ることに夢中になっている運慶の姿が見えてくる。

天下の英雄はただ仁王とわれとあるのみという態度だ。

「運慶のほうでは不思議とも奇態とも感じないようすで一生懸命に彫っている」様子を眺めていた一人の若い男が主人公に対して投げかける言葉。運慶が一心不乱に彫る様子が、他のものの存在を許さないようにみえたのだろうか。それほどまでに運慶が集中して仁王を彫っている様子が伺える。

自分はこのとき初めて彫刻とはそんなものかと思いだした。

自分は彫刻を「そんなもの」と思っている。それは自分が思っている以上に簡単かもしれないと感じたからではないだろうか。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めてみたが、不幸にして、仁王は見当たらなかった。

「一番大きい」とあるので、直前にある、木挽にひかせた檜の木の中で一番大きいものを選んだということが分かる。「勢いよく」という言葉が用いられていることから、迷いなく鑿と金槌を動かしている様子が分かる。「あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で彫り出すまでだ。」という文を受けて、ただ単に木の中にある仁王を見つめるだけであるからこのように迷いなく彫っているのだから。「不幸にして」という言葉は「運が悪いことに」という言葉と置き換えられるので、仁王を彫り当てられなかったのは運が悪かったせいでと思っっている。

その次のにも運悪く彫り当てることができなかった。

「運悪く」から、仁王を彫ることができないのは運があるかないかであると思っっている。二度目にしてまだ運悪くと思っっている。「彫り当てる」からも、仁王が埋まっていると思ひ込んでいる。

自分は積んである薪を片っ端から彫ってみたが、どれもこれも仁王を隠しているものはなかった。

「積んである薪」という表現から、かなりの薪の数があつたことが伺える。さらにその積まれている薪を「片っ端から」彫っている。最初は一番大きなものに狙いをつけて彫っていたのにも関わらず、ここまできて見境なく薪を彫っているということがわかる。大きな薪は無くなつてしまい、似たような大きさのものばかりになつてしまったので手当たり次第彫っていったのだろうか。かなりの長時間薪を彫り続けていたことが分かる。「彫ってみた」の「みた」という表現から、「結果が分からない状態の中やった」ということがわかる。ここにきてはまだ主人公は「中に仁王があるかもしれない」という考えを抱いている。「どれもこれも」は「全て」「例外なく」というような言葉に置き換えることができる。つまり、主人公が彫ってみた檜の木全てに仁王は入っていないかつたのである。飽きないだけでなく、仁王が隠されていると信じて疑わない「自分」の姿が見える。

ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないのだと悟つた。

「ついに」とは、それまでの作業が労力のいる作業であつたこと、いろいろとやってみたが最終的な判断として、という意味合いがある。

さらに「どうてい」とあることで、どうやっても結果は同じであるようにあることが読み取れる。「明治の木」というのはここでは主人公の彫った櫛の木を指す訳でなく、「明治にある木全て」を指す語だと読み取ることが出来る。主人公は「結局明治の木の中に仁王はいない」と悟っているのである。疑問なのは、「明治の人間」だから彫れないのであって、「明治の木」が問題ではないのではないか、ということである。

それで運慶が今日まで生きている理由もほぼわかった。

主人公が、鎌倉を生きていた運慶にしか仁王は彫れない、ということとを理解したという意味であろうか。運慶が明治の時代に生きて仁王を彫り続ける意味は、鎌倉の精神を伝える使命、ということか。「ほぼ」わかった、というのは、わからない部分も少しは残っているということであろう。

### 三 考察

#### (一)「第一夜」

##### ・感覚に訴える描写

色を表す表現が非常に多い。白、黒、赤、青の色が出てきており、特に「真っ黒なひとみ」や、「赤い日」が強調されている。女の黒い眼に関する記述は多く、主人公の視点が女の眼にいつていることがよくわかる。そして女の生命感を一番に眼から感じ取っている。また、「赤い日」というのも、女がわざわざ日を、「赤い日」と言い換えているものである。そして主人公も「女の言ったとおり」、「赤い日」を見る。ここではただ色によって日が印象的なものになるだけでなく、「女の言

ったとおり」になっていることを強調しているようである。それぞれの色が交わり合うわけではなく、一つ一つの色が主張するようで、独特な世界が夢の中で作られている。

聴覚としては、「静かな声」、「黙って沈む」などから、全体的に音が無く、世間から切り離された場にいるようである。二人がいる場面が夜であることから、その静けさを引き立たせている。二人がいる場面が夜だったというのは、女が死んで穴を掘っている時、月の光があり、月が出ているので夜であることがわかるからである。「それから」という表現から、穴を掘ったのは女が死んで間もないと考えられるので、女と会話している時も夜だと想定される。その静けさから、何か第一夜全体が神聖なイメージが漂うものとなっている。

嗅覚としては、土のにおい、百合のにおいである。夢では感じることはないはずの臭いが描かれている。それには生命感を一層引き立たせる効果がある。また夢の中でも実際に自分が体験しているというリアルさを表現している。

他にも真珠貝の裏側が月の光によってきらきらしたことから分かる質感や、土の柔らかさ、星の破片を置いた時の胸と手の温かさなども、非常に細かい感覚に関わる記述である。それは、さきほどいった神聖な雰囲気を引き出すことを強めるようでもあり、語り手の、女に対してこうありたい、こういう態度で臨みたいというような思いが込められているようである。

今回の分析にあたって、グループで真珠貝についてのイメージについて意見が出された。ある学生の解釈では、真珠貝や月などは、女の繊細さや崇高さ、美しさを象徴し、作品全体に一切の汚れを許さないような意図があるとした。それは、主人公、つまり語り手の女性観と

いえる。ここで、異なる視点からの考えが出た。土を掘るときに、掘りやすいシヨベルではなく、わざわざ真珠貝を使うことは、女側が、自分に対して一手間かけてほしいという思いが読み取れるという解釈である。また、真珠貝の裏のまだら（オーロラのように）な様子を、作者のはっきりしない気持ち、ないまぜになっているとする意見も出ていた。

・なぜ、「百年はもう来ていたんだな。」と気がついたのか。

まず、気がついた時を押さえておく。「このとき」とは、「暁の星がたった一つ瞬いていた」を見た時である。一文解釈でも出ていたように、単なる星ではなく、「暁の星」である。夜明けの星、という意味だけでなく、ある物事が実現したその時の星、という風にも考えられるのである。とすると、この暁の星は、女が逢いに来た（再会が実現した）合図と捉えることができる。

そこで、百合であるが、これこそ女であったと思われる。まず、その描写から考えていく。女は、「真っ白な頬」であった。百合も「真っ白な百合」と表現されている。百合が星の破片の墓石の下から主人公に向かって伸びてきたこと、一輪だったことから、百合が女だといえる。はなにこたえるほどにおう百合は、女が逢いに来たのだと強く主人公に訴えかけているようである。

一方で、女を百合に特定するのではなく、神に近い存在であるという論も出た。それは、もっと大きな存在であり、真っ白な百合も、はるかの上から落ちてきた露も、瞬く暁の星も、女であるということである。露に関しては、主人公と再び会えた喜びの涙ともいえるのではないか、とも考えられた。それは、女が死ぬ際、「ただ待っている」と答えたことに対して流した感動の涙にも対応しているのではないだろう。

うか。

どちらにせよ、主人公は女が自分に逢いに来たことがわかった。百年待っているという約束が果たされたのである。つまり自分は、約束通り女が逢いに来たことで、百年はもう来ていたと気付いたのである。

今回の分析にあたって、グループで、星が女ではないのは何故かという問いが出された。グループの中でも意見は分かれた。確かに、「暁の星」は「たったひとつ」瞬いていた。その強調の表現から、女なのではないかというようにも思われる。しかし、その前には「遠い空を見た」とある。今、主人公は百合と接吻をした。その百合とは、前述したように女と重ねられたものであり、墓石の下から出てきた一輪の百合こそ女だと考えられる。この場合、近くにいる女と、遠くにいる女が存在するとなると、不自然である。夢の中とはいえ、女が二人いる、とするのは再会にふさわしくない。この星は女の力によって瞬いた合図として考え、女の意思が加わっていると考え、女そのものではないとするのが妥当だと考えられるのである。

## (二)「第六夜」運慶が今日に生きている理由とは

第六夜を考察にするにあたり、まず時代背景にふれておきたい。第六夜という「今」は明治時代のことである。明治時代は文明開化、西洋文化の流入により、国民の生活様式に変化が生じ、近代的思想・学問が生まれた。

第六夜は、「運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいるという評判だから、散歩ながら行ってみると、」という書き出しで始まっている。運慶は、鎌倉前期の仏師である。鎌倉彫刻の基礎を築き、東大寺の仁王像は有名である。ここで、「なぜ明治時代に、運慶が存在しているのか」

という謎が生まれる。また、護国寺は東京都文京区にある真言宗の大本山である。一六八一年に五代將軍徳川綱吉の生母桂昌院が帰依するときに、開創された。

自分が山門の前に行くと、大勢の人が「下馬評をやっていた。」見ている人はみな明治の人間である。

「大きなもんだなあ。」

これは、運慶の彫る仁王の大きさに驚いている人の声だと考えられる。

「人間をこしらえるよりもよっぽど骨が折れるだろう。」

仁王を彫る大変さを考えているようだ。明治時代に学制が公布され、学校教育の充実が図られた。仁王を彫ることは「人間をこしらえる」学制よりも苦勞するのではないかという意味も考えられるのではないだろうか。

「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。わっしやまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた。」

この発言の「今でも仁王を彫るのかね。」「また仁王はみんな古いのばかりかと思つてた。」に注目したい。仁王は、古いもので今は作らないという認識の表れではないだろうか。鎌倉時代の文化を代表する仏師に対して失礼な発言であり、鎌倉の文化を時代遅れだと思つているようである。

「どうも強そうですね。なんだってえまず。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あないつて言います。なんでも日本武尊よりも強いんだってえんからね。」

これは「よほど無教育な男」が言った言葉である。ほかの人と比べると、訛りがあるような話し方である。仁王は人ではなく、伽藍守護

の神である。一方の「日本武尊」は古代の伝説上の人であり、少しずれた発言のようであり、文化や歴史について何も知らない人のようにも感じられる。

次に出てくる「一人の若い男」は、

「さすがは運慶だな。眼中にわれわれなしだ。天下の英雄はただ仁王とわれあるのみという態度だ。あつぱれだ。」

と褒めている。運慶を「天下の英雄」とし、「あつぱれだ。」とほめたてている。そのあとに「自分はこの言葉を面白いと思つた。」とある。

今までの人とは違う発言をこの若い男はしている。さらに、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している。」

とも言っている。「大自在の妙境」とは、完全自由の境地に達した精神であり、神に近い存在のように運慶をたたえている。

そして、その若い男は運慶が次々と彫っていくのを、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まつているのを、鑿と槌の力で掘り出すまで。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違はずはない。」

と言っている。その言葉を聞き、自分は急に仁王が彫つてみたくなり、家へ帰り彫ることにした。しかし、積んである薪を片っ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかった。

なぜ、運慶が今日まで生きているのか。それは西洋文化におされ衰退しつつある日本独自の文化を明治の人に再認識してもらつたためである。運慶をみた人たちの下馬評の中には、仁王は古いもの、時代遅れだというような言葉もあった。これらの下馬評は明治の人の今までの文化に対する考えだととらえてもよい。それらを変えるべく運慶は護国寺に現れたのだ。運慶は若い男が言うように「大自在の妙境に達し

ている」仏師である。運慶と同じように、自分が「まるで土の中から石を掘り出すよう」に仁王を彫ることは不可能だろう。自分は「ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていけないものだ」と悟った。」といっている。それは、自分が仁王を彫ることができなかったからであるが、明治の木に埋まっていけないのではなく、運慶のように仁王を木から掘り出すことのできる人がいないからなのだ。

作者である夏目漱石は明治時代に運慶を登場させることで、明治の人にもう一度、日本に昔からある文化のよさに気づいて欲しかったのではないだろうか。そして、単に西洋文化をすべて取り入れるのではなく、日本の文化も大切に残しながら調和のとれた明治の文化を築いてほしかったのではないか。

## 婪り (辻邦生)

來住 翔太、千葉 大暉、溝口 智大、柳井 光一



### 一 作者と作品について

辻邦生（一九二五～一九九九）は東京の駒込西片町に生まれる。日本大学第三中学校、旧制松本高等学校へと進学している。一九四九年に東京大学文学部仏文学科に進学。大学院へも進学している。その後立教大学や学習院大学に勤めた。

一九五七年からパリへ留学している。留学中に「見知らぬ町にて」の第一稿、「城」、「ある晩年」、「影」を執筆する。一九六三年に「廻廊にて」で第四回近代文学賞を受賞、一九六九年に「安土往還記」で芸術選奨新人賞、一九七三年に「背教者ユリアヌス」で第一回毎日芸術賞、一九九五年に「西行花伝」で第三二回谷崎潤一郎賞を受賞した。

「婪り」は、短編集『風の琴 二十四の絵の物語』（一九九二年）に収録されている。これは、題名の通り、二十四枚の絵にまつわる物語が綴られている。「婪り」は、「フェデリゴ・モンテフェルトロの肖像」（ピエロ・デラ・フランチェスカ）から作られた物語である。肖像画による物語は第十二までで、「婪り」は「第十一の物語」である。風景画から作られた物語が、「第一の旅」から「第十二の旅」まで、以降十二話続く。前半十二話が人物画、後半十二話が風景画を題材としている。「第一の物語」が一九八〇年三月刊行のものに掲載されて以降、「第十二の旅」が一九八四年二月刊行のものに掲載されるまで続いていた。

### 二 叙述について

ある冬の寒い夜のことであった。

季節は冬、時間は夜と、舞台の説明から入っている。

ウルビノのモンテフェルトロ公の宮殿で、夜伽の廷臣たちが、暖炉の火に当たりながら、よもやま話に花を咲かせていた。

前文と併せてこの物語の舞台説明の役割を果たしている。ここでは、「宮殿」や「廷臣」という語から、王族、もしくは貴族の館が舞台であろう。また、中世のヨーロッパのイメージを彷彿とさせる。

夜伽とはいい条、彼らはただ夜の一定時間、公の寝所の周りを見回るだけで、あとは非番も同様だったのである。

この「廷臣」たちの仕事は警護であるにもかかわらず、見回りもそこそこに油を売っている。また、言い回しから、普段の「夜伽」も同じような状況であったと推測される。

もう夜半に近いころ、廷臣たちは奥の廊下から聞こえる足音に、思わず話をやめた。

「思わず」とあることから、「廷臣」たちが驚いていることがわかる。自分たちが「非番も同様」に「話」をしているときに、普段聞こえないはずの足音にさっと耳をそばだけると同時に、気を抜いていた故の焦りも感じさせる記述である。

足音の主は、ほかならぬモンテフェルトロ自身だった。

「ほかならぬ」という語が、「モンテフェルトロ」という宮殿の主の存在を強めている。

遠くからおまえたたちの話し声を聞いていると、いかにも楽しそうなので今夜は、こうして話の仲間入りをさせてもらおうと思つてやつて来た。

「遠くから」や「いかにも楽しそう」などの表現から、この時点ではやや皮肉じみたニュアンスを含んでいる。

そのせいか、公がそこに姿を現すと、名うての話し手をもって任じていた廷臣たちも急に自在に物語る能力を失って、ただばちばちはぜる薪の炎を見つめるほかなかった。

「名うての話し手」とあるように、廷臣たちの中にも話し上手なタレントがいたことがわかる。しかしながら、そのような人物でさえ「自在に物語る能力を失って」とあるのは、仕事を全うしておらず、それをモンテフェルトロに知られたばつの悪さからか。また、廷臣たちは、自分たちの「話」がモンテフェルトロの睡眠を妨げたと思っており、その申し訳なきも一因であると思われる。

モンテフェルトロ公は、鼻梁の付け根から突出した鼻に指を当て、息の

通りを試すように、二度ほど、ふんふんと息をした。

「息の通りを試すように」とあるので、これから話をする準備をしている。「二度ほど、ふんふんと」とあり、入念に行っていることから、物語が長くなるのかもしれないということも表している。

廷臣たちはそう言つてひざを乗り出した。

「ひざを乗り出した」とあり、これまでモンテフェルトロに対して抱いていた罪悪感や焦りもあつてか、せめてモンテフェルトロの物語だけは熱心に聞こうという姿勢を見せている。もしくは、うわべを取り繕っているのか。

「いいえ。」

少し英語のような表現。現代の標準的な受け答えからすれば「はい」と答えるところを、ここでは「いいえ」と答えている。質問にあつたような事実がないために、そういう表現をしているのか。

空を斜めに切つて、野鴨が、まるでつぶてでも投げたように落ちてきたのだ。

「つぶてでも投げたように」は二通りの解釈ができる。「つぶてを投げつけられたように野鴨が落ちてきた」のか、それとも「投げられたつぶてのように一直線に野鴨が落ちてきた」のか、である。ここでは、「空を斜めに切つて」という表現から、後者であると解釈する。

私はそれを抜き、野鴨を上着の懐に隠した。

モンテフェルトロの性格の表れか。だとすればここでは、「優しい」も

しくは、「気まぐれ」だといえる。

まもなく、猟犬の音がしたかと思うと、四、五人の男が馬を並べて走ってきて、この辺に鳥が落ちるのを見なかつたか、と尋ねた。

「猟犬」や「馬」という語から、男たちが馬に乗って狩りをしていくことがわかる。モンテフェルトロは、鳥に刺さった矢を見て、狩られた鳥であると判断していたことがわかる。

もちろん理由などはなかつた。

「もちろん」とあることから、鳥をかばったのは全くの気まぐれである。しかしながら、この考察は、現時点で表現されている事実からの読み取りに限る。後に出てくる表現から読み取るモンテフェルトロの心情についてはその都度述べることにする。

ただ枯れ草の上でのた打っている鳥が哀れに思えたのだ。

「ただ」と、前文で理由は無いとしながらも、ここで理由と考えられるものが挙げられている。

私は城に戻ると、自分の部屋で野鴨の手当てをした。

狩人たちから野鴨を隠すだけではなく、手当をし、傷を治すつもりで野鴨を助けていたことがわかる。ここまでの表現から、前述の「まったくの気まぐれ」というのは当てはまりにくい解釈となっている。

野鴨は、私が作った巢の中で身動きしなかつた。

「身動きしなかつた」とあるので、野鴨もモンテフェルトロに対し、

警戒心を抱いていない。

冬の夜半の風が暖炉の奥でごうごうと鳴っていた。

「夜半に近いころ」から「夜半」へと時間が経過している。また「ごうごう」という語から、風が強いことを示している。

一度、窓のそばに置いてやったが、そのときは何か考えるようにして、羽を動かそうとしなかつた。

「羽を動かそうとしなかつた」とあるので、ただ単に羽が治っていないことを示しているのか。または「何か考えるようにして」とあるので、この野鴨が本当に何か考えているのか。後者だとすれば何か特別な野鴨であるともとれる。

野鴨が城の窓を飛び立って仲間たちのいる沼に戻って行ったのは、それからさらに十日ほど後のことだった。

傷が癒えるのに全部で二〇日ほどかかっている。

私は野鴨から解放されると、子どもながらに、ほっとした。

「ほっとした」とあるので、野鴨の世話を重荷に感じていたともとれる。しかし、「子どもながらに」という表現から、ただただ無事に飛び立ってくれた安心感を示しているともとれるのではないだろうか。

哀れな生き物を助けたという満足感はあるが、やはり多少親しみを分け合ったものと別れたという哀しさは残った。

「哀れな生き物」という表現から、自分が野鴨よりも上の立場にい



ることと考えている。城主、領主としての性格の表れか。また、モンテフェルトロ自身、野鴨に対して、世話を焼くうちに親近感を抱いていたこともわかる。

ある事件が、突然、その野鴨のことを思い出させたのだ。

「ある事件」や「突然」という言葉を、事件の内容を示す前に出すことで、聞き手に興味を持たせようとしている。モンテフェルトロ公の語りの上手さが出ている部分である。

延臣たちは、剛毅なモンテフェルトロ公の意外な面をかいま見る思いで、じっと公の物語に聞き入っていた。

「剛毅」とは、意思が堅くて強く、くじけないこと。そんなモンテフェルトロの「意外な面」ということは、意思が弱くて、折れやすい様子が想像できる。ここでは野鴨の世話にあたって子供のように無垢であったというモンテフェルトロの様子が、普段の様子とはかけはなれているということ。「かいま見る思い」とあることから、本来見るはずのない領域を、たまたま出来たすき間から覗くことができているという、特殊な体験をしていると延臣たちが感じている様子がわかる。その特殊さから、つい「じっと」「聞き入って」しまっている。

事件というのは、ほかでもない、当時、敵対関係にあったヴェネツィアから刺客が送られ、私の暗殺を謀るという出来事が起こったのだ。

「当時」とあり、事件が起きたのは過去のことなので、暗殺はなんとか免れた。

その日、私は夕刻、城に出かけることになっていた。

「その日」とは事件が起こった日。事件の日のことについて話し始めた。

ローマから来た大使の歓迎の宴が開かれるはずだったからだ。

この「はずだった」は、「開かれる予定があった」という意味で、「開かれるはずであったが、開かれなかった」という意味ではない。

ところが、昼ごろ馬場に出ようとすると、戸口で、ぱったり若い女に出会った。

「ところが」ということから、誰かと馬場で会うことは予定していなかった予想外のことであるとわかる。

身なりはそれほどいいわけではない。

予想外に出会った若い女を観察していることから、懐疑的になって、興味を抱いていることがわかる。

だが、さっぱりした衣服を着て、生き生きした表情をしていた。

それほどいいわけではないということも、「さっぱり」していると評価している。「生き生き」して、清潔感のある様子であると、モンテフェルトロは若い女に対して好印象を抱いている。

それぞれに優美な衣装をまとい、ものごとくしとやかだ。

「それぞれに」とあり、宮殿の女たちは、一人ひとりぜいたくに着飾り、上品な振る舞いをして、育ちの良い立ち居振る舞いをしている。

だが、私は、その若い女ほど新鮮な美しさを持った女に出会ったことはなかった。

「だが」と宮殿の女たちに対して逆説的・否定的に話している。美しく着飾り、上品で美しい所作ができる宮殿の女たちの中にも、この馬場にいる若い女のような、着飾りが必要としないさっぱりした美しさを持つ女はいないということ。それだけに、その「新鮮」さが魅力的に感じられている。

いかにもきれいで、さわやかな感じだった。

「いかにも」とあるので、若い女がどれだけ魅力的であったかを廷臣たちに説明している。

まるで、もぎたてのりんごのようだった。

「もぎたてのりんご」とは、つや・光沢がある、青々とした若さ・美しさを感じさせつつ、もぎたてのりんごのかじりつきたくなるジュージューで甘美なおいしさを持った女であることを想像させる比喩。

私は胸が楽しく弾んでくるのを感じて女に言った。

この女と出合い、こうして話していることがうれしく、興奮している。

——どうりで、君を知らなかったわけだ。

「どうりで」ということから、こんなにも魅力的な女性のことを自分は覚えていなかったのではなく、もともと知らなかったから見覚え

がなかったのだと納得している。それと同時に、「君」と知り合えたことに感動を表している。

私はひと目でその娘に夢中になっていた。

彼自身の心情を話している。「ひと目で」と言うことで、娘にのめりこむ勢いの強さ・速さを強調している。一目惚れをした。

この娘なら貴婦人にも育て上げることもできる。

「この娘なら」ということから、他のどの娘でもないこの娘に、ただならぬ魅力と可能性を感じている。「育て上げる」ということから、この娘を自分の手で養い、世話をすることまで考えている。

古ぼけた貴族の血筋より、それだけ新鮮で、生き生きした血が流れているかもわからない。

「古ぼけた」ということから、貴族の血筋に対する嫌悪感が見取れる。そして、宮殿の女とは違う「新鮮」で「生き生き」としたこの娘にこそ魅力を感じている。

しゃべり方にも品がある。

それほど会話を交わしたわけではないのにこのように言っている。「にも」とあり、自分がこの娘に魅力を感じていることを肯定するために、娘の魅力的な点をさらに挙げている。

話す内容にも生まれながらの才知が感じられる。

「にも」とあり、娘に魅力を感じたことへのさらなる後付けの理由。

こういう女をめぐってどうしていけなからうか。

「どうしていけなからうか」と反語を用いることで、これだけの魅力を持った女をめぐることがいけなわけではないと強調している。「こういう」とは、これまでに挙げていた通り、とても魅力的な女性であるということ。

身分など問題ではない。

「公」という立場である自分が、貴族でもない庶民の娘などと結ばれることは、きつと世の慣例に反することである。しかし、「など」とあり、そんな身分の差は関係なく、この女と結ばれることがどうしていけないのだろうか、さらに強調している。

女のためなら何をしたらつかまわない。

女に、異常に魅了されている様子が見て取れる。「何をしたら」というのは、「この女と結ばれるためなら」とここでは解釈することができるのではないか。

要するに私は何もかも忘れた。

「何もかも」とあり、ローマの大使の歓迎会に行くことも、自分が「公」であるという立場にあることも、何もかも忘れて私は女に夢中になった。異常なまでの女へのめりこみ具合が分かる。

私たちは抱擁し、語らい合い、時のたつのを忘れた。

我を忘れ、時の経つのも忘れるほど、娘との時間を楽しんでいた。

気がついてみると、夜はもうすっかり更けていた。

「すっかり」とあり、夜が更けてしまうまで気づかないほど、昼からいた娘との時間は短く感じられており、いかに自分が夢中になって我を忘れていたかを表している。

もういまさら大使の歓迎宴に行っても始まらない。

一応大使の歓迎会があったことは覚えていたようであるが、「いまさら」とあり、これから行っても仕方がないとあきらめている。

だれか呼びに来れば病氣と偽ればいい——私は若い女の肩に手を回しその頬に唇を当てながら、そう思った。

大使の歓迎会に行くことよりも、この娘といることを選んだことに後悔している様子はない。「病氣と偽ればいい」程度の比重で考えている。それほど娘との甘美な時間に酔いしれている。

私はしびしび立ち上がって、戸口まで出た。

「しびしび」とあることから、娘との時間を遮られて不服ながらも、無視するわけにはいかなないので、嫌々訪問者に応じている。

扉の外には、父の重臣が四人立っていた。

モンテフェルトロが見た状況をその流れにそって説明している。

ただならぬけはいだった。

「ただならぬ」とあり、普段とは違う様子だった。モンテフェルト

口が娘といた間に何かとんでもないことが起こったことを予感させる。

——若君、ご身边に変わったことは？

重臣の一人があえぎながら言った。私は首を振った。

「ご身边に」とあり、モンテフェルトロ自身の身に危険を及ぼす何らかの事態が発生したことがわかる。「あえぎながら」ということから、とても焦りながら、確かめようと急いで来たことや、その必死さがわかり、事がいかに重大であるかを予感させる。

私が歓迎宴に出なかったのは……。

この三点リーダは、歓迎宴に出なかった理由をモンテフェルトロが考えている間を表している。また、理由を述べようとしたが、重臣のセリフで遮られたとも考えられる。

——お出にならなくてよかったのです、とほかの重臣が声を震わせて言った。

「声を震わせて」とあるので、ただならぬ事態が起こったことを示している。

——お従兄のマテオさまが……。

何が起こったのかを一気に伝えず、少しずつ伝えていくという形式をとることで、重臣たちがどれほどの衝撃を受けたのかを表している。また、伝えようとしている内容がモンテフェルトロに与える影響を考慮して、少しずつ伝えていとも考えられる。

——暗殺されました。

もつとも重要な部分である。前述した情報を少しずつ伝えているということからも、最後のこの言葉は絞り出すように言ったのではないかと考えられる。

——まさか……、と私は一步後ずさつて叫んだ。

「一步後ずさつて」とあり、マテオの暗殺は私にかなりの衝撃を与えたことがわかる。「まさか……」には、事実を知らされた衝撃に加えて、信じることができないという気持ちも反映されている。

父君が若君の代わりをなさるようにお言いつけになって……。

この場合の「代わり」は二通りの解釈ができる。一つは、文字通り姿の見えない息子の代役としての「代わり」。もう一つは、暗殺が決行される危険性に備え、息子の影武者としてマテオに「代わり」をさせた。後者の場合、暗殺に関する情報を事前に知っていた可能性があり、息子を守るためにマテオに影武者を演じさせたことになる。しかしながら、従兄ともなると位は高い。そのような立場の者に影武者をさせるとは考えづらいという見方もできる。

——おそれながら、そのように見受けられました。

重臣の目には後者に映った。

従兄には気の毒だったが、私は、女といっしょにいたために生命を救われたのだ。

女といっしょにいたために歓迎宴に出なかったというのは、人には

言えないような理由である。しかし、そのおかげで生命を救われたという事実もあるので、従兄に対して気の毒だという気持ちが生まれた。

もし女に会っていなかったら、もし女が私を夢中にさせてくれなかったら、私は、予定どおり歓迎宴に出ているに違いないのだ……。」

「のだ」とあり、女との出会いがあったために、今の自分があるということ、自分を納得させようとしている。

好奇心を抑えかねた若い廷臣が尋ねた。

モンテフェルトロにとっては従兄を亡くすことになった事件であるが、廷臣たちにとっては、「抑えかねた」とあり、好奇心を揺さぶる不思議な出来事である。

ぬれた野鴨の羽が二枚ほど落ちていたのだ……。

どこにも女がいた形跡はなく、唯一、野鴨の羽が落ちていた。ここでこの不思議な話は終了する。

廷臣たちは目と目を見合わせた。

驚きでお互い目を合わせた。この不思議な出来事が何だったのかを悟った廷臣もいたのかもしれない。

わが殿は善き心のほかは何も持っておられないのでございませぬ。

この不思議な話は、モンテフェルトロが子どものころに助けた野鴨の恩返しであると廷臣たちは考えた。加えて普段のモンテフェルトロの様子からも、善き心だけを持っているという発言につながった。

「そう思われては困る。」

「困る」とあり、しかし、モンテフェルトロにとってはそのように思われるのは心外であった。

人間とは複雑な化け物なのだ。

「なのだ」と、このように言い切ることができるということは、他人だけでなく、自分自身にもこのような点が存在するということを自覚している。

人間ほど混沌として始末に負えないものはないのだ。

人間ほど、はつきりせず手に負えないものはない。「混沌として」とあり、表と裏の二面性を持っているのが人間であると考えている。

普段人々は私のことを我慢強い温厚な男だといっている。

多くの人に慕われている現在のモンテフェルトロへの人々の評価。

だが、私が、傭兵隊を率いてイタリア中を走り回っていたころ、人は、私を血に渴いたおおかみだといったものだ。

対して、傭兵隊を率いてイタリア中を転戦していたころのモンテフェルトロの評価。「血に渴いたおおかみ」とは、血を欲してあちこちを転戦している非常に好戦的な性格の人物であるということの比喩。

私が宮廷でも寡欲を説くので、人々は本来、私が欲のない男だと思っている。

人々の目には欲のない男であると映っている。

「だが、そうでないからこそあえてそう説いているのかもしれない。」

しかし、自分は欲にまみれた人間であると自覚しているから、逆にこのように説いているのではないかと考えている。「かもしれない」とあるので、モンテフェルトロ自身もはつきりと分かっているわけではない。

公は言葉を切つて、何かを思い出すような表情をした。

「何か」とは、サルツアナの戦いの際、兵糧攻めにあつた過去の記憶である。ただし、自分が兵隊に食料を分けたという美德を象徴するエピソードではなく、「饗宴」で一人むさぼっていた食欲さを露にするエピソードの方が主であると考えられる。

もうとりでの中の物は何もかも食べ尽くした。

「もう」とあることから、「何もかも食べ尽くし」てからの時の経過を強調し、空腹に苦しんでいた様子が想像できる。

ねずみでも一匹顔を出そうものなら、それを捕えようというので大騒ぎになつたものだ。」

「ものなら」というのは、一般的に、もし実現したら好ましくない事態が起こるといふニュアンスを仮定的に示す。好ましくない事態とは、ねずみを捕まえ、食べることであるが、「捕えよう」と意思の意味を含ませることで、そうするほかにないという状況がわかる。また「顔を出そう」からは、現れるとするより、食べることへの必死さが読み

取れる。

ただそのとき、モンテフェルトロ公だけが乏しい食糧を兵隊に分けて、パンひと切れも口にされなかつたとか……。」

「廷臣」は、サルツアナの戦いの話を、モンテフェルトロの勇ましく、我慢強く、臣下を大切に思う優しい性格を象徴するエピソードとして、捉えている。「……」とあるのは、伝聞したことであるからと考

える。

「そのことだ、私が話したいのは。」  
倒置法を用いることで、「そのことだ」を強調している。「私が話したいこと」が、食糧を分け与えたエピソードに関係があることであることを示し、焦点化している。

公はゆつくりした口調で話を続けた。

「ゆつくりした口調」とあるので、落ち着いている様子が分かる。また緊張感も感じられる。

確かにその結果、部下たちはだれ一人兵糧攻めに泣き言をいう者はなかつた。

「確かに」という語は、その後の展開に含みをもたせるものである。例えば、「これを盗んだのか。」「確かに盗んだ。」と言う場合を考える。このとき、盗んだことに対して認めてはいるものの、それを盗んでもやむを得なかつた理由を持っているかのような含みを感じる。このことから「確かに」とあるので、「部下たち」がだれも泣き言を言わな

ったことの事実を認めて、それに対しては望ましい結果であると捉えてはいるが、その後自分にとって不満足な事象があったというような含みを持っていると考える。

だが、そこまではいい。

「だが」と逆接を用いて、はっきりとこれからの展開がよくない方向へ向かっていくことを示している。

その後、私は夜になると、自分の目の前に、実に妙な物が出現するのに気がついた。

「夜になると」とあることから、朝または昼には出現しない。朝昼は戦いや部下の統率に忙しいからなのか。夜に出現するのはミステリアスな印象である。「実に妙な」とあることから、ミステリアスな印象が強く、また「妙」としていることから信じられない、おかしいと思っている。

それは焼きたての牛の肩肉だったり、薫製にした豚のもも肉だったりする。

ただの「牛の肩肉」や「豚のもも肉」ならまだしも。「焼きたて」であったり、「薫製」であったり近い時間に調理された料理であるのは、ねずみを食べようとしていた状況には明らかにおかしなもの、「実に妙な物」である。

ときにはゼリーに包まれた鶏の蒸し焼きのこともある。

珍しい食べ物が出てくることから、その「妙」さは一層増す。

それに杯になみなみつがれたぶどう酒とか、チーズの塊とか、露にぬれた果物とかが出てくるのだ。

飲み物、つまみ、デザートなども出てくる。「杯になみなみつがれた」「塊」「露にぬれた」とあることから、量・質ともに十二分の品物である。

私はつばを飲み、目をこすり、舌なめずりして、それにつかみかかろうと思った。

「つばを飲み」「舌なめずりして」とあることから飢えに飢えていた様子が分かる。また「目をこすり」とあるので夢幻ではないかと確認している。

彼らにもこの饗宴にあずかせようと思ったからだ。

食べる前に近習を呼び寄せるといふ気持ちをもっただけでも、部下思いの人物なのではないかと思う。

私は恥ずかしくて、彼らに、私の見たものの話をすることはできなかった。

「武将たるもの、空腹に打ち勝つことができなければ、何事もおぼつかない」と考えているので、そうあるべき自分が飢えてしまつて夢幻をみたなど思われてしまうのは、「恥ずかしくて」話せない。

ところがその後、夜になると、必ず豪華な饗宴が私のテーブルの上に繰り広げられる。

「豪勢な饗宴」が出現するのは、一日だけのものではなく、「必ず」夜になると」出現する。また「テーブルの上に繰り広げられる」とあることから、テーブル一面に料理が並べられていることが読み取れる。

私は肩肉にかぶりつく。

「かぶりつく」とあることから、これまでの飢えを満たすように豪快である。また、料理は視覚的な夢幻ではなく、触覚をともなった実体である。

そのあげく、腹はくちくなり、酔いも手伝って眠くなる。

「豪勢な饗宴」は、食欲を十分に満たし、さらに酔いまで引き起こすものである。「あげく」という語は「A、そのあげくB」の場合、A・Bともにマイナスの事象がくる。(例、口論になった。そのあげく殴り合いになった。)ここでは「豪勢な饗宴」にかぶりついたこと、さらに「腹はくちくなり、酔いも手伝って眠くな」ったことをともに情けないこととして捉えている。武将としてあるべき姿ではないと思っっているからだと考える。

なんと援軍が来て、とりでが救い出されるまで、私はこうして毎晩のようにならふく食べていたのだ。

「なんと」は何にかかっているのだろうか。「援軍が来て、とりでが救い出されるまで」にかかっていると考えるならば、その期間を強調していることになる。「私はこうして毎晩のようにたらふく食べていたのだ」にかかっていると考えるならば、その事実を強調することにな

る。

呼べば、せつかくの饗宴が煙のように消えるのではないかと恐れたからだ。」

「せつかく」とあることから、「饗宴」という恵まれた状況に対して、大切にしたいという気持ちを読み取れる。「煙のように消える」とは、跡かたもなく消えることである。最初に「饗宴」が出現したとき、近習を呼ぶと無くなってしまったことから、誰かを呼ぶと食べられなくなってしまおう、と恐れている。

むさぼる——それが私の本当の姿だった。

「私の本当の姿」だとした「むさぼる」ということばは題名にもなっている。「人間は美德だけからできていると思っっているわけではない。人間とは複雑な化け物なのだ。」と前にあったように、人間をなす「美德」ではない部分、時に恐ろしい「化け物」に当たる部分を、モンテフェルトロでは、「むさぼる」とした。あなたたちはどうだ？と読者に語りかけているように感じる。

だが、私にはわかっていたので、自分の本当の姿がどんなものであるかということが。」

「乏しい食糧を兵隊に分けて、パンひと切れも口にされなかった」という廷臣たちが見ていた勇ましい姿はモンテフェルトロの表面に過ぎず、「せつかくの饗宴が煙のように消えるのではないかと恐れ」、「ただ一人で肉でも魚でもむさぼり食べていた」姿こそ本当の自分であると訴えている。この自分自身に対する、周りとの自分の評価の違いにモ



ンテフェルトロは苦しんでいたのではないか。

一人一人の心の中に、この饗宴も例の野鴨の贈り物であろうかという疑問が浮かんでいたが、それをあえて口にする者はなく、ただ暖炉の奥で鳴る夜あらしの音に耳を傾けていた。

「野鴨の贈り物」の話聞いた時、廷臣は「わが殿は善き心のほかは何も持っておられない」と考えた。しかし、サルツアナの戦いにおけるモンテフェルトロ公の、決して善き心だけ持っているわけではない本当の姿が語られたため、「あえて口にする者は」いなかったのである。

「この饗宴」とあるが、サルツアナの戦いにおける毎晩の「饗宴」なのか、それとも今ここで開かれたモンテフェルトロと廷臣たちとの「饗宴」なのか。後者と考えると、周りと自分の評価のギャップに苦しんでいた悩みを打ち明けることができたことから「贈り物」と考えられて面白い。しかし、そもそも饗宴とは豪華な酒や料理で盛大にもてなす宴であること、全体を通して「饗宴」という語はいくつも出てくるがどれもサルツアナの戦いにおけるものであること、さらに一度もモンテフェルトロと廷臣たちの話を「饗宴」という語で表していないことから、前者であると考える。

### 三 考察

#### 「婪り」のテーマについて

本作「婪り」は『風の琴―二十四の絵の物語』（文春文庫）に収録されている短編である。十二の肖像画と十二の風景画のイメージを元に書

かれている。「婪り」は作品の主人公であるフェデリゴ・モンテフェルトロ公の肖像画を元に作者のイメージで書かれた。



本作はモンテフェルトロが廷臣たちに二つの話をするという構成になっている。

A、モンテフェルトロが体験した野鴨の恩返しを受けた話

B、サルツアナの戦いの話

Aは世界中の物語でよく見られる話型である。しかし、本作で重要なのはBである。AはBを引き出すための布石であると考えてよい。作中ではAを話し終えた後、廷臣たちは「わが殿は善き心のほかは何も持っておられないのでございますね。」とモンテフェルトロを称賛する言葉を発している。しかし、それに対して彼は「そう思われては困る。」と否定している。そのあとにBを話し始めていることから、Bの話は彼が伝えたかったこと、すなわち作者である辻邦生が伝えたかったことであると考えられる。

では、作者がこの作品で扱ったテーマは何だろうか。本文を見てみると、「人間とは複雑な化物なのだ。」というセリフがある。さらにその後ろには複雑の具体的な中身が記されている。中身を抜き出すと次のようになる。

- ・ 表面は静かでも、本当は荒れ狂った獅子
- ・ 雄やぎのように怒りっぽくても、内心は気弱
- ・ 普段は我慢強い温厚な男といわれているが、昔は血に渴いたおおかみといわれていた
- ・ 寡欲を説く欲のない男と思われているが、貪欲だからこそ寡欲を説いている

このような表と裏、寡欲と貪欲、温厚と癡猛、といった人間のもつ二面性がこの作品のテーマとなっている。

また、作品の元となったフェデリゴ・モンテフェルトロの肖像画からもこのことを考えることができる。先に示した図を見てもらえればわかるが、右半身が完全に隠れてしまっている。というのも、モンテフェルトロは槍試合の際に負傷して右目を失ってしまっている。よって、彼の肖像画は左半身のみを描いたものとなっている。この絵を見る限りでは、顔立ちの整った男性であるが、実は右目を失っているのである。作中の「——それが私の本当の姿だった。しかしだれもそう思わなかった。そう見えなかった。」というセリフは、この肖像画を見て作者がどう感じたのかを表していると考えることができる。

## 城の崎にて (志賀直哉)

## 一 作者と作品について

志賀直哉(一八八三—一九七二)は、宮城県石巻に生まれた。学習院中等科六年の時、足尾銅山鉱毒事件をめぐり父と衝突、父との不和が始まる。一九一〇年、新しい文芸同人雑誌『白樺』が作られた。有島武郎や里見弴などの同人と共に「白樺派」と呼ばれ、人間の生命の力を信じる理想主義・人道主義の立場をとった。このころ、『大津順吉』『清兵衛と瓢箪』などの作品を執筆した。

結婚問題などから一九一二年に、志賀直哉は東京を離れ、広島県尾道に行った。この時期に、父との不和を扱った長編『時任謙作』を書き始める。一九一七年に父との不和が解けると、多くの作品が発表されるようになる。『城の崎にて』『小僧の神様』『焚火』などがこの頃に執筆された。また、内村鑑三のもとでキリスト教を学んでいる。

「城の崎にて」は、大正六年五月『白樺』に発表された。父との不和を描いた『時任謙作』(『暗夜行路』の前身)の中絶以来、創作を再開した最初の作品である。「城の崎にて」について志賀直哉は「これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、ゐもりの死、皆その時数日間に実際に目撃したことだった。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生まれた心境ではなかった」(『創作余談』)と記している。



田中 大樹、谷口 唯、安福 佳奈、水上 志織



余裕を否定しているのは三つの小動物の死を通して志賀直哉が自己の生死の問題に直面し、見定めようとしているからである。

志賀直哉にとって城崎での体験(大正二年秋)がいかに印象深いものであったかは、作品として描かれるまでに三年余りを隔てていることからうかがえる。

## 二 叙述について

山手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に、一人で但馬の城の崎温泉へ出かけた。

主人公の状況が伺える第一文である。「山手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、」の部分が読点になっているのはなぜか。句点であつてもいいはずのこの部分をあえて読点にしているのは、事故に注目させるのではなく、城の崎へ行つたことに着目させる効果があると考えられる。「養生」とは、「生命を養うこと」である。ちなみに「療養」は病気を治すため治療し養生すること。怪我をしている主人公であれば、「療養」がふさわしいと考えられる。「養生」とあることで、怪我を癒すだけでなく、彼自身の人生感を顧みて、生死について考える筆者の心情を表す言葉としてとらえられる。

怪我を負っているにもかかわらず、東京から城の崎へ出かけること

がとても不自然である。この部分から、主人公に養生を勧めた人々は、単なる怪我の治癒だけを目的にしているのではなく、主人公に心の休養も必要であると考えたのであろうか。

三週間以上―我慢できたら五週間ぐらいいたいものだと考えている。

「我慢できたら」というのは何に對する「我慢」なのか。結果的に、城の崎には三週間しかいなかったことから考えると、主人公は「我慢」できなかったようである。おそらく主人公は一人で養生するということに対して退屈であるということがある程度予想できたのであろう。よって、「退屈」に對する我慢であると考えられる。

イネの穫り入れの始まるころで、気候もよかったのだ。

「イネの穫り入れの始まるころ」とあるので、養生に來たのが秋の一〇月中旬であるということが伺える。気候もよく、養生にはよい時期にやってきたということがわかる。

ひとつ間違えば、今ごろは青山の土の上に仰向けになって寝ているところだったと思う。

この部分から、主人公一家は土葬で埋葬されている、つまりキリスト教であるということがわかる。「寝ている」という言葉を用いたのはなぜか。この部分は「死んでいる」「埋められている」でもよい所を、死の表現に「寝ている」という穏やかで静かな人間の生を感じる表現を用いている。このことから、作者は「生死」の区別が曖昧で、死を恐怖としてとらえず、生の延長として考えている様子が伺える。

青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのまま、祖父や母の死骸がわきにある。

「青い冷たい堅い顔」と形容詞を三つつなげ、見た目から手触りへと深め、徐々に近づくように表現していることで、死体としての顔の様子をリアルに表現している。「そのまま」とすることで、「顔と背中の傷」がそのままであるということを観客的に描くことにより読者に想像させる効果が伺える。

「死骸」と露骨に表現することによって、死んでいるものをダイレクトに表す。自分の死は生の延長だが、祖父母「もの」のようにとらえているのは、死んでいるものは事実としてとらえている。

それは淋しいが、それほどまでに自分を恐怖させない考えだった。

「それは淋しいが」の「それ」というのは、「ひとつ間違えば」こんなことが思い浮かぶ。」の部分であり、彼自身の死に對して「淋しい」と感じている。しかし、「淋しい」とは「恐怖」ではなく、むしろ「恐怖させない」と表現していることから、主人公は死から恐怖を感じられないことがわかる。

自分の心には、何かしら死に對する親しみが起こっていた。

「起こる」という表現から「親しみ」は何もなかったところから生まれた感情であり、事故後に「死」というものが自分と近いものとなったということがわかる。つまり、この時点で、事故を体験することによって「死」が身近な存在となり、「死」について深く考えるようになったということがわかる。

「何かしら」という表現から、主人公はこの「親しみ」の根源が何

なのかをこの段階では理解できていないということがわかる。

それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。

「いかにも」はぴったりという意味がある。「いかにも」という表現がこの近辺で多用されている。「忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きていく物という感じを与えた。」「そのわきに一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずに俯向きに転がっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを与えるのだ」

「いかにも」と同時に「感じを与えた」という言葉がセットで出てきている。このことから、生死に対する印象を客観的に表現している。主人公が感じた印象ではあるが、その印象はあくまでも普遍的であるということ強調する要因となっている。

淋しかった。

前文は客観的に表現されているが、この部分は主観的である。蜂の生死について自分の印象は「淋しい」といつている。

しかし、それはいかにも静かだった。

「いかにも」感じを与えた」から脱却している。客観視が続いてきたが、この部分は主観的な表現である。「寂しかった」という表現よりも、「静かだった」という表現の方が、言いたい表現に適用される。

今までの部分を整理すると、主人公は蜂の生死を客観的に考えるところ「静か」ではあるが、主観的には「淋しい」といつている。どちらも視点は違うが同じ主人公の考えであることから、「静か」と「淋しい」は一体のように感じるが、「しかし」という逆接から、「静か」といつ

表現がぴったりであるということ強調している。

せわしくせわしく働いてばかりいた蜂がまったく動くことがなくなったのだから静かである。

「働いてばかりいた」ことが「動くことがなくなった」ということから、生と死の対称は動と不動の対比としてとらえていることがわかる。

「せわしく」を重ねたのはなぜか。「せわしい」とは忙しい、せかせかしている、事が多くて暇がないという意味である。同じ言葉を重複することにより、生きていく間ずっと働くことだけをせつせとやってきた様子が伺える。つまり、「せわしく動く」ことが「生」としてとらえられる。

「動くことがなくなった」と表現したのはなぜか。「動かなくなった」でもよい所をあえて「動くことがなくなった」。「せわしく動く」ことが「生」としてとらえられるならば「動く」ことが「なくなる」ということは、つまり「生」がなくなるといつことがわかる。

自分はその静かさに親しみを感じた。

「その」といつるのは「死」のことである。最初は「自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。」といつているが、「起こっていた」から「感じた」に変わっている。つまり、死の何に親しみを感じるのかわからなかったが、「静かさ」への親しみであるといつことが明確なものとなった。

顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情に、それが一生懸命であ

ることがよくわかった。

「動作の表情」という言葉で、鼠の動きの様子だけではなくその懸命さ、感情や心情を表現している。「人間」と書くことで、周りで唯し立てる人間たちを客観的に批判している。

子どもや車夫はますますおもしろがって石を投げた。

子どもにまじって大の大人である車夫が混じっていることが不自然である。「車夫」とは人力車を引く男である。残酷な大人である。ここでの文章中の「車夫」の役割を考えると、生死について深く考えることがない人間の姿を投影していると考えられる。

自分が希(ねが)っている静かさの前に、ああいう苦しみのあることは恐ろしいことだ。

「希っている」はなぜ「願っている」ではないのか。「希う(ねがう)」とは、めったにないことをあつて欲しいとねがうことである。「希っている」静かさは、人生に一度しか訪れることのない「死」であるということを強調している。

「ああいう苦しみ」とは、死ぬと決まった運命を担いながら全力を尽くして生きる努力をせざるを得ない、そのような心理状況に陥ることが「苦しい」といつていると考える。

しかもこの傷が致命的なものかどうかは自分の問題だった。

この部分は、一つの解釈に絞ることが難しい。そこで、二通りの解釈を挙げる。

①自分の「行動の」問題だった。主人公は、「半分意識を失った状態で

一番大切なことだけによく頭の働いたことは自分でも後から不思議に思っただけである」といつている。傷が致命的なものかどうかは、このような状況にありながら、自分自身で対応ができたかできなかったかということが関わっていた、という意味で、「自分の問題だった」といつている。「しかも」とある点から、前文からの添加と考えても、この考えは有力である。

②自分の「運命の」問題だった。どんなに努力しても、致命的かどうかというのは、自分自身ではどうしようもないことであり、自分の運命の問題であるということ。

しかし、致命的のものかどうかを問題としながら、ほとんど死の恐怖におそれなかったのも自分では不思議であった。

この部分は主人公が電車にひかれた直後の出来事を回想しているところである。主人公は事故が起こった後に死への親しみが生じた。電車にひかれた直後を思い返してみると、自分の負った傷が「致命的かどうか」は気にしていたが死ぬことへの恐怖はほとんど感じなかった。普通は「致命的かどうか」を気にするということは、生死に関わることを案じているのである。つまり、死にたくないから「致命的かどうか」を気にするのである。しかし、主人公にとってはひかれた時点で「死」は恐怖でないというふうに感じていたのだ。この部分は死への親しみが起こる前の主人公の「死」の捉え方に自身で気づいた部分と考えられる。

で、またそれが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分が希うところが、そ

う実際にすぐは影響しないものに相違ない、しかも両方が本場で、影響した場合は、それでよく、しない場合でもそれでいいのだと思った。

一文が長いので、「で、またそれが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思う」と「あるがまま」で、気分分で希うところが、そう実際にすぐは影響しないものに相違ない、「で一文を分ける。順に解釈していく。」

① 「またそれが今来たらどうかと思ってみて、」とあるが、「それ」とは何か。「また」「今来たらどうか」ということから考えると、死に至るような状況であると考えられる。「なおかつ」ということから前事に添加する形になる。

② 「あまり変わらない自分であろうと思う」と「あるがまま」であるが、この場合、「あまり変わらない自分」というのは、「あるがまま」とイコールになると考える。死に至るような状況で、主人公は「死の恐怖に自分は襲われなかったろう」という気がする。「自分は助かろうと思ひ、何かしら努力をしたろう」という気がする。」と、「死に恐怖を感じないが助かる努力をする」という状況にあったということが書かれている。この場合、「あまり変わらない自分」というのは、事故にあった時に「死に恐怖を感じないが助かる努力」をした「自分」であると考ええる。死に恐怖を感じないが助かる努力をする」という矛盾した心情の自身の様子が分かる。その矛盾した心情を持つ自分が「あるがまま」といつていると考える。

③ 「気分分で希うところが、」とあるが、何を「気分分で希う」のか。「気分」ということで、軽いイメージが伺える。「死に恐怖を感じないが助かる努力をする」という事実から、ここで希うのは「助かること」であると考えられる。矛盾した心情を抱きながら、それでもなんとなく

助かることを望んでいる。

④ 「そう実際にすぐは影響しないものに相違ない、」とあるが、何が何に「影響しない」のか。③でも述べたように、主人公は自身の死に対して中立的な立場である。「死に対する恐怖を感じない」が「なんとなく助かりたい」と思う主人公の曖昧な心情が、主人公自身の「生死」に「影響しない」と考えられる。「相違ない」とは「確実である」という意味なので、影響しないことは確実にいえるといっている。

「しかも両方が本場で、影響した場合は、それでよく、しない場合でもそれでいいのだと思った。」

① 「しかも両方が本場で」とあるが、「両方」とは何と何か。これは、前事で述べた「死に対する恐怖を感じない」が「なんとなく助かりたい」という矛盾した双方の心境であると考えられる。これらはどちらも主人公自身の心情で、どちらも本当に思っていることである。

② 「影響した場合は、それでよく、しない場合でもそれでいいのだと思った。」とあるが、影響は前事に挙げたように「死に対する恐怖を感じないが助かる努力をしてしまう」が「なんとなく助かりたい」と思う主人公の曖昧な心情の、主人公自身の「生死」への影響と考えられる。「影響した場合」というのは、影響して助かったならば、生き長らえることができ、「しない場合は助からなかったとしても、それは仕方ない」という心情であるということが分かる。

以上のことを踏まえて、言葉を補って本文を解釈するならば、

「で、またそれ（死に至る状況）が今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない（死に恐怖を感じない）自分であろうと思うと「あるがまま」で、（助かることを）気分分（なんとなく）希うところが、そう実際にすぐは（自身の生死に）影響しないものに相違ない、し

かも（「死に対する恐怖を感じない」と「なんとなく助かりたい」という）両方が本当（に思うこと）で、影響した（その思うことが影響して生きる事が出来た）場合は、それでよく、しない（影響しなくて死んでしまった）場合でもそれでいいのだと思っただけ」となる。

そうしたらその動く葉は動かなくなった。

「そうしたら」は前文をさす。ここでは「風が吹いてきた」すると「その動く葉は動かなくなった」。葉は生きているものを表している。その生きているものが風が吹いたことによって動かなくなったということは、生きているものの生命が何らかの要因によって絶たれたことを表していると考えられる。

何かでこういう場合を自分もつと知っていたと思っただけ。

「何かで」とあるので、具体的には自分では思いついていないが、動いているものが動かなくなるという状況をこれいがいにもつと知っていたということが分かる。この部分は自分の事故や蜂、鼠などの生死と重ねて表現しているのではないだろうか。

いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がないってその心持ちを感じた。

ここでは二つの「心持ち」が出てきている。「心持ち」は、①物事を見聞き、何かを感じ取った心の状態。②気持、気分、心地。

一つめの「心持ち」は、「いもりと自分だけになった」という心持ちである。意味的には①の意味でとる。いもりは実際死んでいるのでこの空間では主人公一人なのだが、その空間にいもりと自分が二人きり

になったような感覚が感じられる。とても静かなイメージである。

二つ目の「その心持ち」は、不意に死んでしまったいもりの心持ちである。②の意味でとれる。自分をいもりに重ねて、いもりとの心的距離が縮まっている。主人公は「好きでも嫌いでもない。しかし自分がいもりだったらたまらない」と表現しているので、そのようないもりと自分を重ね合わせるほど接近している。



かわいそうに思うと同時に、生き物の淋しさをいっしょに感じた。

「かわいそうに思う」と書かれているが、自分が殺してしまったということよりも偶然に死に至ったということが「かわいそう」といっているあたりに、主人公が「偶然の死」に対して考えているということが分かる。「生き物の淋しさ」とは、人間も含む生き物の生死のあつけなさ、自分の意志とは関係のない「偶然」に生死がゆだねられているということと考えられる。「いっしょに」はなぜあるのか。前に「同時に」とあることから、この「いっしょに」には「かわいそう」と「淋しさ」が両立していると考えられる。

生きていることと死んでしまっていること、それは両極ではなかった。

「生きている」は現在進行形であるが、「死んでしまっている」と現在完了形で表現している。ここを「死んでいる」ではなく、あえてこのような表現をとったのはなぜか。「生きていること」は偶然であり、「死んでいる」ことが偶然とは不自然な感じがする。「死んでしまっ



いる」ことが偶然、というニュアンスには、感情が含まれる。生きていたものが「死んでしまった」その淋しさを主人公が感じ取っているように考えられる。そして、生死は相反する物ではなく、「偶然という運命」に委ねられているという点で両極ではない、紙一重なものであるということが考えられる。

自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。

「なるだけは」とあるので、脊椎カリエスにはならなかったが、偶然によってそれが免れただけで、またいつ死ぬか分からない、生と死が隣合っていることには変わらないということの主張であると考えられる。また、「助かった」という点において、やはり生きていたいという主人公の本音が感じられる。

### 三 考察

#### (一)「城の崎にて」における志賀直哉の自己投影

「城の崎にて」は、蜂、鼠、いもりなどの動物を通して生死についてを考える主人公の物語である。実際、この主人公は作者志賀直哉本人であり、事故の後養生として城の崎を訪れた際の実際の出来事を綴ったものである。本文中には、志賀直哉が事実として描いた中に、自己投影と考えられる部分がいくつかあるので考察する。

せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全くうごかなくなったのだから静かである。

今まで働き動くことだけをしていた蜂が、死ぬと全く動かなくなっ

た。だから静かである。ここには、事故にあった志賀直哉自身が投影されていると考えられる。事故以前は作品創作や雑誌発行など、仕事に勤しんでいた。つまり蜂と同じ状況である。それが、城の崎で養生し、仕事のしがらみから解放された結果、「何もしなくなった」つまり、「動かなくなった」自分の状況を蜂に照らしあわせて表現したと考えられる。「死んだのである」ではなく、「静かである」と表現されているのも、作者が「死」に感じる「静かさ」は、死だけではなく、自身の状況が「静か」な状況であるということに投影できると考える。

風もなく流れの他は全て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。

この部分の表現から、「葉」だけが異質である。周りが静寂なものにも関わらず、葉だけがせわしく動く。ここにも志賀直哉の自己投影が伺える。周りが静寂、つまり周囲が皆同じ状態であるにも関わらず、葉だけが周囲とは違う様子である。この部分から、周囲とは少し違う志賀直哉自身の孤独な心境が伺える。

志賀直哉の人生を振り返ると、父との確執やキリスト教の呪縛などに悩む。普遍的に「正しい」とされていることが、志賀直哉にとっては苦痛であった。そのような「正しさ」との心理的な葛藤の中で、作風である「自然主義」が確立されていく。周りと自分の違い、その異質性がこの一文に投影されていると考えられる。

十年ほど前によく蘆ノ湖でいもりが宿屋の長清水の出るところに集まっているのを見て、自分がいもりだったらたまらないという気をよく起こした。

なぜ「自分がいもりだったらたまらないという気」がよくおきたのか。「集まる」というところに着目すると、周囲と同調せざるをえない状況で、自身がいもりだったらそこに同調しなければならぬ。それは自分には「たまらない」と表現しているのである。周囲と自分の異質性、周囲に同調することに嫌悪する志賀直哉の自己投影であると考えられる。

「城の崎にて」はただ事実や所感の羅列をしてあるのではなく、志賀直哉本人の心的状況を垣間見ることができ、そして、志賀直哉の複雑な心境を、自己投影として表現しているのではないだろうか。

## (二)「城の崎にて」の文体について

志賀直哉の文章は一般的に、短く簡潔で無駄がないと言われている。事実、「城の崎にて」の文章も簡潔なものが多く、読みやすい。さらに、客観描写が多く、かつ的確で読んでいて情景をありありと想像できる。本稿では、この志賀直哉の文体のうち主語を取り上げ、どのような特徴があるのか、どのような表現効果があるのか考察する。

「城の崎にて」を読んでいて情景をありありと想像できることは、どのような文体的特徴に由来するのか。たとえば冒頭を見てみよう。冒頭で気づくのは、一人称主語が少ないということだ。「自分はよくけがのことを考えた」まで「自分」という一人称主語は出てこない。それまでは客観的事実を描写している。自分の感情を書く際も、感情を主語にして客観的に描写している。

対象を追い、事実のみを描写すると、読み手は情報を受け取りやす。自分が実際に見ているような印象を受けるからだろう。先にも取り上げたが、「それは見えていて、いかにも静かな感じを与えた」では、

主人公が「静かな感じを受けた」と書かないことによって、読み手自身がその対象（ここでは蜂の死骸）を見ているような感覚になる。そのような表現が随所に見られる。

一転して「自分は」という一人称主語が多用される箇所がある。鼠を見てから自身の死について考える部分だ。「自分は」と書かれることで、それまでとはちがって、主人公の切羽詰まったようすがありありと伝わってくる。書き手が自分と作中の主人公とを客体化できているためか、少し読みにくくなる箇所でもある。書き手の感情が対象（この場合は作中の主人公）に近すぎて、読み手に伝わりにくい部分を自分にはわかるからといって省略してしまっているためと考えられる。省略を味わうことが文学を読む愉しみのひとつではあるが、本作では不親切な省略が多い。とても名文とは言えないような文もある。作者が思考をうまく客体化できていない印象を受ける。

以降、後半のいもりの部分では「自分は」という表現が多く見られる。ここでは特に「自分は」と「いもりは」を交互に書くことで視点が次々と入れ替わり、読んでいて主人公といもりが重なっていく印象を受ける。冒頭ほど客観的でなく、中盤ほど主人公に近づきすぎず、三人称の小説を読んでいるような気にすらなる。

以上のように、主語を取り上げて表現効果に注目してみた。場面や状況により表現を巧みに使い分けることによって、読み手が受ける印象をコントロールしていることがわかった。短い作品（教科書掲載用に原文よりさらに短くなっている）ではあるが、表現の工夫が随所に見られ、読みごたえがある作品だと言える。主語以外の文体の特徴に注目してみてもおもしろいだろう。

## 舞姫（森鷗外）

河邊 建、小林 大希、永安 聡子、帆足 憲和



## 一 作者と作品について

森鷗外（一八六二～一九二二）は、小説家、翻訳家、陸軍軍医である。石見国の津和野町の出身で、亀井藩の典医の家に生まれた。一八八四年から八八年までドイツに留学して衛生学を学んだが、ヨーロッパの文学や哲学に大きな影響を受けた。帰国後に留学時の体験を踏まえて書いたのが「舞姫」である。

鷗外の作風は、前期の浪漫主義（「舞姫」など）から、後期の歴史小説（「阿部一族」など）や反自然主義文学（「高瀬舟」「最後の一句」など）に変化した。前期作品から後期作品までの間に十八年の作家としての断絶がある。

「舞姫」は鷗外の初めての小説である。明治三三年『国民文学』に発表した。主人公太田豊太郎は法律研究のためにベルリンに来た青年だが、鷗外の経験を素材としていると考えられている。本作品に登場するエリスは、その後、鷗外を追って渡日してきたとされ、その一部は『普請中』にて述べられている。

## 二 叙述について

今宵は夜ごとにここに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残

れるは余一人のみなれば。

「夜ごとに」とあるので、普段は毎晩誰かが部屋にやってきているが今日は珍しく一人で過ごしているということがわかる。「のみなれば」の後には、「いと静か」という言葉を補うことが出来ると考えられる。

五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴンの港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆にまかせて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、をさなき思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。

「平生の望み」とは、洋行の官命を受けることであり、それが長年の夢であったことが読み取れる。「一つとして新たならぬはなく」とあることから、五年前にセイゴンの港まで来た時の豊太郎は欧州のことを何一つ知らなかったということが読み取れる。「紀行文日ごとに幾千言をかなしけん」とあるから、日々膨大な量の新しいものに触れていたと考えられる。「当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、をさなき思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心あ

る人はいかにか見けん。」の部分から、当時認められた彼自身の思想や発言を今になって振り返ってみると、考えが浅く感じられ恥ずかしく思っていると推測される。また当時の自分が当時の良識ある人々からどのように思われていたのか気にしていることがわかる。

こたびは途に上りし時、日記ものせんとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸にて学びせし間に、一種の「ニル・アドミラリイ」の気象をや養ひたりけん、あらず、これには故あり。

「日記ものせんとて買ひし冊子も」の「も」から、五年前は毎日のように書いていた紀行文を現在全く書くことが出来ていないということが読み取れる。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世のうきふしをも知りたり、人の心の頼み難きは言ふも更なり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。

「げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず」から、昔の自分と今の自分には大きな変化があることがわかる。留学の結果、学問はまだまだ満足できていないが、それ以外の様々な事柄を学んできたことが読み取れる。

きのふの是はけふの非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せん。「筆に写して誰にか見せん」とあることから、他人に自身の内面の変化について知られたくないと考えていることがわかる。

この恨みは初め一抹の雪のごとく我が心をかすめて、瑞西の山色をも見

せず、伊太利の古蹟にも心をとどめさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るとごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を喚び起こして、幾たびとなく我が心を苦しむ。

「初め……我が心をかすめて」が「今は心の奥に凝り固まりて」に変化していることから、豊太郎が抱えている恨みの念がより強大になっ  
ていることが読み取れる。また、「かげ」という漢字が「影」でも「陰」でもない、「翳」という漢字になっ  
ている。「翳」には、「人目に隠れた暗い面、かげり」という意味がある。この文での豊太郎の人目に隠れた暗い面とは、「この恨み」のことを指している。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。

「模糊たる」とあるので、豊太郎は独逸に来て確固たる自信や気概のないまま、当時の政治経済の中心地に降り立っている様子がわかる。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来たれば包みても包み難きは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりとはげます喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなくおだやかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。

「嬉しさ」「喜ばしさ」とは、「人の神童なりなど褒められたことや「官長の善き働き手を得たりとはげま」されたことに對するものである。母の教えや官長の命令に従つて仕事をすることは、法学ではなく歴史学をまなびたいという自分の本心に反しているが、たとえ受動的・機械的な人間になつても人に喜ばれ褒められることが嬉しかったのだということがわかる。「まことの我」は本心の自分を、「きのふまでの我ならぬ我」は本心を隠して生きてきた自分を指している。したがつて、器械的に言われるがままに喜んで働いていたのは独逸に來てから三年間だけのことで、今となつてはそんな風に働いていたかつての自分を悔いていることがわかる。

これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閱し尽くす媒なりける。

「これ」は自分に勇氣が無いこと、「冤罪」は同郷の人々に妬まれること、「無量の艱難」は妬まれることによつて生まれる苦しみを指す。

この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、なにゆゑに一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

「一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか」とあることから、一瞥しただけで強く心の奥に残るほどエリスの容貌が美しかったということがわかる。

人の見るが厭はしさに、足早に行く少女のあとにつきて、寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯をあり。

エリスが足早に先を歩き、その後ろを豊太郎が付いて行つていくことから、エリスが東洋人と一緒に歩いているところを見られたくないという思い（「人の見るが厭はしき」を抱いており、そのため自然と家路に向かう足取りが早くなつていのだと考えられる。

さきの老嫗は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。

「無礼の振る舞ひ」とは、エリスたちを助けるためにやつてきた豊太郎を迎え入れず、「戸をはげしくたて切」つたことを指す。

この時をはじめとして、余と少女との交はりやうやく繁くなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。

「彼ら」は同郷人を指し、「色」は愛情の対象たる人を指す。身分が低い踊り子を誘惑するような低俗な人間だと同郷人に思われていることがわかる。

余とエリスの交際は、この時まではよそ目に見るより清白なりき。

「この時までは」とあることから、これから先は状況が変わつてくることが予想される。

我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしを怪しみ、また誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、はじめて相見し時よりあさくはあらぬに、今我が数奇を憐れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛に解けてかかりたる、そ

の美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。

「我が一身の大事」とは、公使から旅費を貰つて日本に帰るかどうか決断する日が近づいているということであり、「この行ひ」はエリスとの逢瀬を指している。また「我が教奇を憐れ」んでいるのはエリスであり、「悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる」は「脳髓」を修飾している。したがって、この一文から豊太郎が自身の今後を決める重要な選択を差し置いてしまうほどに、エリスに対しての深い愛情をもっていることが読み取れる。

幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるをも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道のみ走りし知識は、おのづから綜括的になりて、同郷の留学生などのおほかたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。

「今まで一筋の道のみ走りし知識」とは、大学でかつて学んだ知識を指す。また「高尚なるをも多きを」という部分は逆接である。「高尚なる」という言葉はプラスの意味をもっているので、それ以降に描かれている豊太郎自身のことに関しては、客観的に見るとマイナスイメージであることが推測される。

彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

「だに」から、新聞ですら読むことができない同郷の留学生たちを見下し、本来ならば自分は彼らよりも上の立場に立つことができるはずであるのにと悲嘆している。

嗚呼、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もし真なりせばいかにせまし。

「さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに」は、免官になり安定した収入を得ることができず困窮していることを指し、その上エリスが妊娠していることが真実であるならばどうしようもないと思つている豊太郎の苦悩が読み取れる。

「なに、富貴。」余は微笑しつ。

富貴になどなるものかという、豊太郎の皮肉があらわれている。

室に入りて相對して見れば、形こそ旧に比ぶるが肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。

「肥えてたくましくなりたれ」から、相沢が豊かな生活を送っているであろうことが読み取れる。また「我が失行」は、エリスにうつつをぬかして留学生としての本分を全うせず免官になったことを指すと考えられる。

またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の情性より生じたる交はりなり。

「慣習といふ一種の情性より生じたる交はり」から、たまたま出会つたというだけで付き合い始めたのであり、もし出会つたのがエリスでなければその女性と付き合い合っていたのではないかと相沢が推測していることがわかる。

されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果たして往きつきぬとも、我が中心に満足を与へんも定かならず。

「この山」は前文の「はるかなる山」、つまりエリスとの関係をきっぱり断ち、名声を取り戻して成功することを指す。けれどこの山に辿りつくための道は「重霧（＝エリス）」によって阻まれている。霧は目の前の景色をぼんやりさせ、自分の力では晴れさせることができない厄介な存在である。エリスをそのような霧にたとえることにより、エリスという存在の厄介さや、豊太郎が自分の出世を阻む邪魔な存在ととらえていることが読み取れる。

我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。

「我が弱き心」はエリスを取るか仕事を取るかを迷っていることを指し、どちらかを選ぶために必要な確固たる理由も特になけれど、友人であり信頼している相沢が言うままにエリスとの関係を断つことを約束してしまう。人に言われるがままに行動してしまう豊太郎の心や信念の弱さがここにも表れている。

さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行くあとに残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんにはうしろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。

「心細きこと」はエリスが妊娠していること、生活にも困るほどお金がないこと、そんな状況でエリスを置いてロシアへ行くことを指す。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき。

「え忘れざりき」とあることから、ロシアに滞在している間くらいはエリスを忘れようとしたが、毎日欠かさず手紙を送ってこられたことで、どれだけ忘れようとしても忘れることができなかったのだということが読み取れる。また「彼は日ごとに文を寄せ」とある。もし豊太郎がエリスの手紙に対して返事をしていざすれば、その手紙を受け取ってから返事を書くため次の手紙が届くまでに日が空くはずである。しかしここでは「日ごと（毎日）」とあるため、エリスから一方的に手紙が送られてくるだけで、豊太郎がその手紙に対して返事することはなかっただろうことが予想される。

否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。

「底」というと、豊太郎に対する愛情に限りがあり浅い、のではないかと考えられるが、それだと文章の意味が通らなくなってしまう。そのためこの文章での「底」は、豊太郎に対する愛情がどれだけ深いか今までは分からなかったが、何日も離れて暮らしたことで愛情の深さが非常に深かったことに気づいた、ということだと解釈をした。

嗚呼、余はこの文を見てはじめて我が地位を明視し得たり。

「地位」とは、エリスや生まれて来る子どもに対して負わなければいけない責任から逃れることはできないのだという状況を指す。

恥づかしきは我が鈍き心なり。

「我が鈍き心」とは、エリスからの手紙を読んだつた今まで彼女の気持ちに気づいていなかったことを指す。エリスは手紙の中で、もし豊太郎が日本に帰国するなら自分もついていこうと考えていること、そのことについて母親はすでに説得済みであること、日本への旅費をどのように捻出するかなどについて述べており、エリスの頭の中では豊太郎との将来についてのプランが完成していることがわかる。豊太郎は手紙を読んで初めてそのようなエリスの気持ちや決心に気づき、今まで気づかなかった自分を恥じていると考えられる。

余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境のみにありて、逆境にはあらず。

自分自身に関すること・他人事については、万事が都合よく運んでいる状況の中であれば冷静に決断を下すことができるが、自分の思うようにすすまない状況では追い詰められ何事も決断することができないという豊太郎の心の弱さが表れている。

我と人との関係を照らさんとする時は、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

自分自身に関することならば決断することができるが、自分と他者の双方についての決断を下すことができないことがわかり、前の一文と同じく豊太郎の心の弱さを読み取ることができる。「照らさん」「曇りたり」は「鏡」に合わせた表現となっている。

嗚呼、独逸に来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また機械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動

かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。

元々有能であることは折紙付で、その上他人から言われることに逆らわず何でも言うことを聞く豊太郎は、上司にとっては都合のよい部下である。そのため豊太郎自身が「機械的人物にはなるまい」とどれほど心に決めたとしても、上司は豊太郎の性格をうまく利用して操るので、何度上司が変わっても状況は変化することはない。

彼が一声叫びて我が項を抱きしを見て馭丁はあきれたる面もちにて、何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず。

「一声叫びて」とあることから、エリスが久しぶりに豊太郎と再会できた嬉しさでいっぱいだということが読み取れる。また「馭丁はあきれたる面もちにて、何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず」の部分から、再会に感動しているエリスに対して、他人からあきれた目で見られていると気づくことができるほどに豊太郎は冷静であることがわかり、エリスとの再会をあまり喜んでいないと考えられる。

彼は頭を垂れたり。

豊太郎との間に子どもが生まれることを楽しみにする一方で、豊太郎が自分たちを捨てて日本に帰ってしまうのではないかという不安から、顔を伏せてしまっている。

見上げたる目には涙満ちたり。

頭を垂れたまま、目だけを豊太郎に向かって上げている状態である。涙で満ちた目で豊太郎を見つめることで、「自分たちを見捨てないでほしい」と言葉では言わず、無言で自分の気持ちを必死に訴えている様



子が読み取れる。

あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらば、本国をも失ひ、名譽をひきかへさん道をも断ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。

「相沢の言を偽りなりとも言ひ難き」という部分から、豊太郎がいかに相沢を頼り心酔しているかがわかる。また、「もしこの手にしもすがらば」とあるので、今回が名誉挽回をして人生をやり直すための最後のチャンスだと考えていることが読み取れる。独逸に来てから豊太郎は仕事や信頼など様々なものを失ってきたが、もし今回のチャンスを逃せば更に日本に帰ることができなくなり、名誉挽回もできなくなる。それほど豊太郎は追い詰められた状況に置かれている。

相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

「日々の生計には窮せざりし」とあるので、生活に困らないだけの生活費を援助してもらっていたことがわかる。しかし「精神的に殺ししなり」の部分から、美しかった容貌がひどく変わるほどの精神的なショックも相沢から与えられたことを読み取ることができ、皮肉的な意味をもって相沢を「この恩人」と呼んでいると考えられる。

後に聞けば彼は相沢に逢ひし時、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえあげし一諾を知り、にはかに座より踊り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたま

ひしか。」とて、その場に倒れぬ。

「かくまでに我をば欺きたまひしか。」とある。エリスを置いて日本に帰るか、あるいはエリスと暮らし続けるかの選択について、豊太郎はエリスに対して一度も「ドイツに残るから大丈夫」などと嘘をついていない。それなのになぜエリスは豊太郎に欺かれたと言ったのだろうか。豊太郎がロシアに行っている間にエリスが送った手紙の中に、豊太郎との将来についてエリスが語っている部分がある。おそらくエリスは、豊太郎とまもなく生まれて来る子どもとの生活の計画を立てたり、子どものおしめを作ったりする中で、その計画が豊太郎と約束した事柄であるかのように思いこんでしまっていたのではないだろうか。そのため、実際には豊太郎は自分と子どもを捨てて日本に帰ってしまうと相沢から聞かされた際に、豊太郎に嘘をつかれつづけていたと感じてしまったと考えられる。

されど我が脳裡に一点の彼を憎むころ今日までも残りけり。

「一点の彼を憎むころ」とは相沢を憎む気持ちを指す。ではなぜ豊太郎は心酔していたはずの相沢を憎むようになってしまったのか。豊太郎は相沢にエリスとの関係を断つことを約束していたが、豊太郎はエリスを捨てることができず自分の口から「別れよう」とエリスに伝えることもできず苦しんでいた。そして豊太郎が意識不明になっている間に、エリスは相沢から事の真相を告げられ、ショックのあまり精神に異常を来してしまう。エリスを精神的に崩壊させた相沢本人を恨んでもいるだろうが、それ以外にも、自分の意思で、自分のタイミングでエリスに真相を伝えることができず、全て自分の知らない場所で物事がすすんでしまったことも、相沢を憎むころの中に含まれて

いると考えられる。

### 三 考察

#### (一) エリスと豊太郎が惹かれた理由

舞姫の中で、主人公である太田豊太郎は、学問のために海を渡った。しかし現地の女性と出会い、互いに惹かれあつたことで、豊太郎の運命は大きく変わっていく。今でこそ、よくあるとまでは言わないが、普通に見られる異国間の交際はなぜ起こつたのか。独逸に住むエリスは、東洋の島国から来た青年のどこに惹かれたのかを考えたい。

豊太郎が独逸で恋におちた女性がエリスである。年は十六、七歳位ではないかとある。豊太郎が日本を出発したのが二十二歳の頃、そこから三年が経ち、現在二十五歳という記述がある。今とは考え方も違うだろうが、年の差カップルである。豊太郎がエリスと出会つたのは、ある日の夕暮れであつた。豊太郎が獣苑を散策した帰りに、古寺の前で忍び泣くエリスを見たのである。その頃の豊太郎は、自らも「交際の疎き」と述べているように、周りの留学生となかなか打ち解けられずにいた。他人と活発に交流をするということが出来ずに、いわゆる仲間はずれの状態になつていたのである。ところが、そんな豊太郎が、異国の地で、若い女性に声をかけたのである。この時のことは、「我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて……」と述べられている。もちろん人の目のあるところで泣く少女に憐れみを覚えたことも大きな一因ではある。しかしそれ以上に、エリスの愁いを帯びた青い目、長い睫毛に豊太郎は惹かれたのである。この時から二人の運命は始まつた。かたやエリスは、父親をなくし、母親からはお金の為にエリスをシ

ヤウムベルヒの愛人になるように言われていた。踊り子をしているとはいへ、十代の少女にとつては、非常に辛い出来事である。元来エリスは学問については積極的な姿勢を見せている。父親が貧しかったことから、十分な教育を受けることはままならなかつた。しかし一方で、「コルポルタージュ」と呼ばれる貸本屋の小説を読むことを好んだという記述もある。おそらく父親にもエリスには好きなように学ばせてあげたいという思いがあつたのではないか。しかしながら、家庭の経済事情としてなかなかそういうわけにもいかず、断腸の思いで送り出していたのではないか。そうは言っても、踊り子という当時の最下層の職に就いていたエリス。そんなエリスを守ってくれていた最後の柱である父親を亡くしたことは、経済的にも、精神的にも十六、七歳の少女の心に大きな穴を空けてしまつたわけである。その穴を埋める存在となつたのが豊太郎である。シャウムベルヒのように、なにか弱みに付け込むということ無しに経済的な援助をしてくれた。またその後ではあるが、自分に本を貸してくれたたり、言葉を教えてくれたりした。このことから、精神的にも、それまでの父親の役割を豊太郎が担つていたのでないかと考える。

つまり、豊太郎はエリスのその外面的な美しさに本能的に惹かれ、エリスは、経済的な面で支援してくれたこと、それまでの父親の役割を豊太郎が補ってくれたことに惹かれて、二人の愛は深くなつていったのではないかと考えられる。現代でも女性は最終的に父親のような男性に惹かれるとよく言われるが今回のエリスもまさにそれではないだろうか。なお、グループでの議論の中では、エリスにとつて豊太郎はパトロンのような存在だつたのではないだろうかという意見も出た。

## (二) 揺れ動く豊太郎の心情

豊太郎の心は学問からエリス、立身出世へと行きつ戻りつしつつ、次々にその方向を変えてゆく。結果として優柔不断がエリスの人生を狂わしてしまうまでに至る訳だが、これについては当時の日本の価値観を考慮に入れたとしてもいくらかの人々から非難を受けてしまう所だろう。まずはドイツに赴いてからの豊太郎の心の動きを整理する。

- ① あだなる美観に心をば動かさじの意ありて：
- ② 歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗を噛む境に入りぬ。
- ③ 用心深き我が心の底までは徹したるか。
- ④ ついに離れ難き仲となりし：
- ⑤ さらにぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに：
- ⑥ 「なに富貴。」
- ⑦ この情念を断たんと約しき。
- ⑧ この一刹那、低徊踟躕の思ひは去りて：
- ⑨ 「承りはべり。」

国のエリートとしてドイツへ国費留学した豊太郎は初め、周囲のあらゆる誘惑に目をつむりその役割を果たす決心をする。その決心は自我への目覚め、本人のいう器械的人物からの脱却への渴望、また他の留学生との疎遠な関係によって崩れ、「獣苑」「古寺」「遺跡」等当初見向きもしまいと決めていたことよって心を慰める状況に至る。

そのような偶然エリスと出会い彼女に心を奪われる。エリスと交際を続けているうちに、豊太郎の「免官」という問題が起こってしまふ。彼の心がエリスと立身出世の間で揺れ動く最初のできごとである。

ここで豊太郎は日本に帰国するかどうかという決断を迫られるが、④にあるように既に二人は、少なくとも豊太郎にとっては、エリスは手放すことのできない存在となっていた。息子のこのような形での免官という無念の中で死んでいっただろう母を思いながら、そしてこの機を逃すと日本に帰ることができなくなるかもしれないと言う思いの中、豊太郎はエリスを選ぶ。

そして友人相沢によってその場を凌げる程度の仕事を紹介してもらうこととなるが、またエリスの妊娠という大きな問題が発生する。⑤のように豊太郎は金銭の面で悩みをかかえる事となるも、同時に大臣との面会という場をまたしても友人相沢によって設けられ、出世の機会を得る。しかし母と祖国を捨ててまで選んだエリスとの生活、⑥の台詞にあるように今さら出世など望むべくもなく、「ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け」という心持で天方伯、相沢との面会に豊太郎は臨むこととなる。

今まで様々な問題に振り回されながらもエリスとの生活を選んできた豊太郎であるが、この面会后、⑦相沢との昼食にて軽率にも「エリスと関係を断たん」と約束してしまう。ここで注意すべきことは、豊太郎自身がその約束を「軽率」であったと判断しているように、心情としてはエリスと別れるつもりはなかったであろうということだ。彼の行動だけを見るとここで彼の出世への意志が見られるようだが、ここまで自分を支えてくれた相沢という友人に対して「否とはえ対へぬが常」であっただけである。また豊太郎はこの相沢との昼食後、大臣から受けたロシアへの同行に関しても「当時のこころうつろなりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを実行」したにすぎないのである。自分の行動を「軽率」と反省しながら心はエリスへ向いていたと考えられる。

しかしこのロシアへの同行中、エリスからの手紙によって豊太郎は「我が地位」を明視することとなる。つまり彼女と子どもをこれから養っていかねければならない立場にあるということである。この時点で豊太郎はエリスと出世のどちらかを選ばざるべきなのか迷い始めることとなる。「出世」と述べたが、豊太郎の心情からするとこの表現は正確なものではないように思う。豊太郎はドイツにいる間、二回金銭面での問題を抱えた。一つ目は彼自身の免職によるもの、二つ目はエリスの妊娠である。一回目の問題は相沢による職の紹介によって免れることができた。豊太郎はこれと同じように二回目の問題も相沢の紹介した職、つまり天方伯に用いられることよって解決できるのではないかと考えたのではなからうか。しかし二回目の解決策は、生活のための資金を得ると同時に日本への帰国を迫ることになるものであるということをも、「我が近眼はただ己が尽くしたる職分のみ見き」とあるように豊太郎は気づいていなかったのだ。この時点での豊太郎の選択肢は「ロシアにおいて孤独な日本人としてひとり、エリスと自分達の子どもを養っていく。(一家で路頭に迷う可能性も十分に有る)」か「エリスを連れて(あるいは捨てて)職もほぼ確実決まっている日本に帰る」この二択であったらう。しかし後者は天方伯に「さまざまの係累」はないと相沢を介して断っている以上「エリスを連れて」ということは難しかった。「さまざまの係累」はないと言い切っていたのも、そうしなければ手にした職を逃すことにつながる可能性があったからであり、そうなれば当初の生活費の工面という目的が果たせなくなる。そして生活費の工面という目的を果たすためにはエリスとの生活を捨てなければ為らないという二重拘束に豊太郎は陥っていたのだ。

そして現実的にはどちらを取ること、どちらかを取ることとも許さ

れない状況の中で⑧、⑨にあるように豊太郎は両者に対して自分の心に誠実な行動を取る。結果として最終的に日本へ帰ることを選んだ形となっているが、これはどちらかを選び取った結果ではない。ロシアからの帰国前にこの決断をしていたとしても、豊太郎は「低徊踟蹰の思い」を振り払ってエリスを抱きしめたものではなからうか。つまり、⑧、⑨はただ偶然その順序を得ただけであり、豊太郎はその心情として両方を選択していたのではないだろうか。

石橋忍月との論争の中で鷗外はこのように述べている。「又エリスが狂を発することもあらで相語るをりもありしならば、太田は或いは帰東の念を断ちしも亦知るべからず。」エリスが発狂しなかったならば豊太郎はエリスを選んでいたかもしれないということだ。

豊太郎の行動はエリスと出世との間で揺れ動く彼の感情を表しているかのように見えるが、実際は「出世」へのこだわりはなく、豊太郎のエリスへの想いは最後まで一貫したものであったと言えるのではないだろうか。どうしようもない状況が生んだ悲劇について反省する、豊太郎の道徳性を責めることはできない。

### (三) 鷗外が「舞姫」を執筆した背景

鷗外はなぜ「舞姫」という作品を執筆したのであろうか。このことに関して、結論を端的に述べてしまえば、二つの理由が挙げられる。まず第一の理由として、「鷗外自身の自由を抑圧したものに對する反発」が挙げられる。続いて、第二の理由として、「妻登志子との離婚への伏線」といったことが挙げられる。以下でその理由を考えていきたい。

そのための前提として、「舞姫」の登場人物である太田豊太郎という人物は、森鷗外(本名 森林太郎)と同一視することが可能だとい

ことを確認しておきたい。このことに関して、今回は深く説明することとはしないが、鷗外自身も日本人初の留学生として洋行をしている点、エリスのモデルとして、エリーゼ・ヴィーゲルトという人物が浮かび上がっている点、田中実氏『舞姫』背景考』において、「舞姫」という作品において鷗外は自らの秘事を暴露したという旨の記述がある点からこの考えが妥当であることが予想される。

ではまず、二つの理由に共通する部分から述べていく。正確な日付は定かではないが、鷗外が帰朝した後の九月十八日、先に述べたエリーゼ・ヴィーゲルトが来日し、鷗外のもとを訪れている。その際、鷗外の家族が全員で彼女を追い返したという記録が残っている。そして、進行中であつた赤松登志子との縁談を急を要する事案とし、鷗外を赤松登志子と結婚させているということがそれにあたる。

ここから、第一の理由について考察していく。まず、「鷗外自身の自由を抑圧したもの」が何であるかということについてだが、これは、「官僚体制」である。先に述べた赤松登志子との結婚を推し進めた人物には、鷗外の家の人物に留まらず、西、石黒、林などといった当時の有力者なども含まれていた。そして、この結婚の背景には、次代の軍医学界指導者であるとともに、「陸軍衛生教程」の執筆者でもある、現今医学界の先導者森鷗外の「秘事（エリスとの関係）」により危うくなりかけていた立場を保全するという意図があつた。そのようにして守られた彼自身の立場を再度自ら危うくするために、鷗外は「舞姫」を発表した。これは、有力者への反発・裏切り、つまり、当代の社会体制への反抗ということになるのではないだろうか。

続いて、第二の理由について考察を行う。鷗外は「舞姫」の朗読会を機会があれば行っていた。妻登志子に対しては、一度として読んで

聞かせた形跡は残っていないという。だが、登志子は決して「舞姫」を読まなかったというわけではない。登志子自身、それ以前から「誰から聞いたかはわからないが西洋婦人既にエリスと呼んできた女性のことを気にしていた」との記述がある。そして、そのようなことを気にしている最中、「舞姫」が発表され、一読すれば、それが自分の夫と見知らぬ西洋婦人の悲恋物語であることはわかるものであつた。このことがきっかけとなり、元々上手くいってはいなかった夫婦間の不和の激化は避けられないものとなつた。しかし、鷗外がこのことを予測せずに「舞姫」を発表したとは考え難い。そのため、「舞姫」発表は、登志子と自分との間に一悶着起こし、一種離婚への伏線、ないしは予告としての発表だつたのではないかと考えることができる。

また、その登志子との離婚も、言い換えてしまえば、「官僚体制への批判」と捉えることができるだろう。もともと、登志子との結婚も赤松家との門閥のために為されたものであると推測される。その門閥関係解消のための離婚と捉えれば、先に述べた「官僚体制への批判」と考えることができる。

以上二点が「舞姫」を発表した主な背景ではないかと考えられる。また、これらの理由とは別に、「エリスへの贖罪」として書いたのではないかと考えられる。彼が独逸で愛したにも関わらず、日本にまで追ってきた彼女を突き返した鷗外。そして、その事実にも多少の想像を加え、完全に豊太郎、つまり、鷗外自身を悪役として描いた作品。さらには、「舞姫」発表後、彼に集中した非難に対し、一切の反論・発言をしなかつた鷗外の姿。これらのことから、そのような理由もあつたのではないかと考えられる。

## おわりに

石田 光



今回の教材研究は、グループによっては教育実習の準備期間中に、四回生にとっては教員採用試験の勉強の合間に行わなければならなかった。よって、教材研究には苦勞したメンバーが多かったように思う。しかし、本授業で「作者について学び、教材を客観的に解釈しながら読む」ことを訓練したからこそ、教育実習で教材を客観的に解釈できたのだと実感した。

本授業は、各グループで担当教材の教材研究を行い、解釈の仕方を授業で討論し合うものだった。十分に教材研究したつもりでも、討論すると、自分たちでは考えつかなかった解釈が展開されとても興味深かった。本授業から、同じ作品でもいろいろなとらえ方ができ、解釈の違いを楽しむことも文学作品を味わう一つの楽しみであることを学んだ。

「読書離れ」が問題となっている。この原因の一つに、「試験で点を取るための国語の学習」があるように感じる。今の子どもたちは、塾等で「試験で点を取る文章の読み方」に偏った解釈方法を学ぶ機会が多い。確かに試験で点が取れる文章の読み方の学習は必須だが、これだけでは「読み方の押しつけ」となり、国語がつまらないものとなってしまいかねない。学校教育での国語は、それに加えて「文学を自分の解釈で読み、楽しく味わう」経験も必要である。自分の解釈で文章を読み味わう経験が、「国語＝楽しいもの」となり読書離れの防止につながるのではないだろうか。「一文一文丁寧に読んで文章を解釈する。研究結果を皆で討論し、理解を深める。」という本授業での経験を活かし、子どもたちに「国語を読むことは楽しい」と伝えられる授業ができる教員になっていきたいと思う。

以上が私たちが本授業で学んだ内容である。本書が、本書を手にとっていただいた方々にも、何かしら役に立つことがあれば幸いである。最後に本書の発案者でもあり、全ての研究を監修してくださった寺田守先生に感謝の意を捧げたい。



2011 年度担当者



2012 年度担当者

# 執筆者

石田光  
市川奈央子  
井上小夜  
梶原悠平  
片岡文  
加藤修治  
河邊建  
川村亮介  
來住翔太  
岸美位  
日下部真依  
口石梨絵  
児玉萌  
小林大希  
小山明里  
笹原愛  
清水愛美  
寺田守  
田中大樹

田中麻佑子  
谷口唯  
千葉大暉  
辻友葵  
中寫一貴  
中島大輔  
中山莉麻  
永安聡子  
野田奏恵  
邊見唯  
帆足憲和  
前原陽一  
水上市織  
溝口智大  
宮河沙和  
村井隆人  
安福佳奈  
柳井光一  
山本舞

文学教材の解釈 二〇二二 電子版

編著 寺田 守

発行 二〇二二年一〇月一日 初版 発行

発行者 寺田 守

発行所 京都教育大学国語教育研究会

〒六一二―八五二二 京都市伏見区深草藤森町一

京都教育大学教育学部 寺田守研究室

電話 〇七五―六四四―八二三五

メール [mterada@kyokyo-u.ac.jp](mailto:mterada@kyokyo-u.ac.jp)